

岩手県埋文センター文化財調査報告書第11集

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書

松尾村 野駄遺跡・寄木遺跡 西根町 崩石遺跡

(財)岩手県埋蔵文化財センター
日 本 道 路 公 団

序

昭和52年10月に県民待望の東北縦貫自動車道が盛岡南インターまで開通し、本県交通網も一大飛躍をとげ、本県経済界に及ぼす影響も大きいものがあります。

日本道路公団においては、引き続き盛岡市以北についても建設を進めておる所であります。しかし、ご承知の如く、岩手県は遺跡の豊庫といわれ、数多くの遺跡が存在いたします。東北縦貫自動車道建設予定地内も例外ではなく、予定地内には数多くの遺跡が存在いたしております。これら遺跡の記録保存が急務となり昭和47年より昭和52年まで岩手県教育委員会事務局文化課によって調査、記録保存が行なわれ、一関市より岩手郡西根町の一部まで完了いたしております。

昭和53年より東北縦貫自動車道関連遺跡調査も岩手県埋蔵文化財センターに移管され、岩手郡西根町以北より秋田県境までの約43km、19遺跡を担当する事となりました。昭和53年度は西根町崩石遺跡他4遺跡の調査委託を受けて実施いたしました。

本報告書は西根町崩石遺跡・松尾村野駄遺跡・寄木遺跡の調査について収録いたしましたものがあります。西根町崩石遺跡は、南向き急斜面に立地いたしており、調査の結果遺構の存在は認められず巨岩にせきとめられた縄文土器片を採集したにとどまり、松尾村寄木遺跡は全く遺構の存在は確認されておりません。

松尾村野駄遺跡は、沢からの湧水地を中心に、沖積面・洪積面にまたがって立地し、縄文時代前期から晩期の竪穴住居址12棟、ピット・炉址等25基、平安時代竪穴住居址1棟が検出されております。高位面よりの急斜面における住居造営法・平安時代住居址のカマド構築法、床面における火山灰の堆積など多くの示唆を与えられました。遺物としては、旧石器時代のものと考えられる石器も数点出土し、土師器としては珍しい補修孔のあるものなどが出土しており、県北西地方の歴史解明の手掛りとなり得るものと考えております。

本報告書が、広く関係者において活用され、文化財保護の一助となる事を願い、当埋蔵文化財センターに対する各位のご指導を切望する次第であります。

昭和55年2月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

緒 言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道建設予定地内に所在する岩手県松尾村野駄遺跡・寄木遺跡および西根町崩石遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 発掘調査は昭和53年4月13日から9月22日まで、室内整理作業は同年11月6日から昭和54年3月31日まで行なわれた。
3. 発掘調査は各遺跡の調査要項に示した者が担当し、室内整理作業はすべて四井謙吉が担当した。
4. 発掘調査および整理にあたっては、次の方々から御教示をいただいた。
草間俊一(岩手大学教授)、芹沢長介(東北大学教授)、橘 行一(岩手大学教授)、林 謙作(北海道大学助教授)、佐藤二郎(岩手県立杜陵高校)、菊池強一(岩手県立盛岡第二高校)、鈴木克彦(青森県立郷土館)、小田野哲憲・熊谷常正(岩手県立博物館建設事務所)
5. 発掘調査および整理においては、次の諸機関の御協力をいただいた。
日本道路公団仙台建設局西根工事事務所、松尾村教育委員会、西根町教育委員会、松尾村農業協同組合
6. 調査機構 (昭和55年1月)
理事長 新里 盈 副理事長 古館尚一郎 常務理事兼所長 菅原一郎 総務課長 村木宏彰 庶務係長 岡沢成治 主事 立花多加志 及川賀子 技能員 佐藤春男
調査課長 瀬川司男 主任専門調査員 近藤宗光 上野 猛 遠藤勝博 山口了紀 高橋信雄 専門調査員 鈴木恵治 種市 進 高橋正之 四井謙吉 光井文行 小平忠孝 吉田 洋 佐藤 勝 松野恒夫 高橋文夫 三浦謙一 技師 工藤利幸 中川重紀 本沢慎輔 高橋与右エ門 高橋義介 佐々木清文
7. 発掘作業には、高橋一右門氏をはじめとする57名の方々に御協力をいただいた。
8. 本報告書の執筆にあたり、石器の石質鑑定を佐藤二郎氏に依頼した。
9. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。
I. 調査に至る経過……………瀬川司男
II. 野駄遺跡 III. 寄木遺跡 IV. 崩石遺跡……………四井謙吉
10. 挿図・図版および写真図版の作成には、次の方々に御協力をいただいた。
川村京子、武藤アサヨ、瀬川幸子、吉田律子、浅沼幸子、勝政タカ子、越場ミチエ、浅沼光子、高橋不二、佐々木啓子、菅原久美子、滝村キヨ、大木絹子、佐々木キヌ、佐藤満恵、藤島ヒロ子、村上幹子、藤原 彰、小泉修栄、熊谷 進、小笠原鉄治、武藤英俊、境田久美子
11. 遺構実測図・遺物実測図・土器拓影図の縮尺率は各ページに明記した。
12. 本文中における敬称は省略した。

本文目次

序

緒言

I. 調査に至る経過	1
II. 野駄遺跡	
1. 調査方法	4
(1) 座標軸の設定	4
(2) 粗掘り・遺構検出	4
(3) 精査方法	4
(4) 実測方法	4
(5) 写真撮影	5
(6) その他	5
2. 遺跡の立地	5
3. 基本層序	6
4. 検出遺構	10
(1) 竪穴住居址	10
A II区	10
C I区	12
C II区	13
D I区	14
F I区	16
(2) ピット	32
A II区	32
C I区	32
C II区	33
D I区	33
F I区	34
(3) 陥し穴状遺構	34
(4) 炉址	35
A II区	35
C I区	35
C II区	35
D I区	36
D II区	36
(5) 埋設土器遺構	36

5. 出土遺物	45
(1) 分類基準	45
1) 土器	45
2) 石器	46
(2) 遺構内の出土遺物	48
1) 竪穴住居址	48
2) ピット	52
3) 炉址	52
4) 埋設土器遺構	53
(3) 遺構外の出土遺物	63
1) 土器	63
① 縄文土器	63
② 弥生土器	67
③ 土師器	67
④ 須恵器	67
2) 石器	76
6. まとめ	88

III. 寄木遺跡

1. 調査方法	98
2. 遺跡の立地	98
3. 基本層序	98
4. 調査結果	99

IV. 崩石遺跡

1. 調査方法	103
2. 遺跡の立地	103
3. 基本層序	104
4. 調査結果	106
5. まとめ	107

挿図・図版目次

III. 野駄遺跡	
挿 図 土層断面図……………6	
図版 1 遺跡位置図……………3	
図版 2 グリッド配置図……………7	
図版 3 遺構配置図(折り込み図版)…8・9	
図版 4 ……………17	
a. A II - 1 住居址 (平面)	
b. A II - 1 住居址 (断面)	
図版 5 ……………18	
a. A II - 2 住居址 (平面)	
b. A II - 2 住居址炉 (断面)	
c. A II - 3 住居址炉 (断面)	
図版 6 ……………19	
a. A II - 3 住居址 (平面)	
b. A II - 2・3 住居址 (断面)	
c. A II - 3 住居址埋設土器(断面)	
図版 7 ……………20	
a. C I - 1 住居址 (平面)	
b. C I - 1・2 住居址 (断面)	
図版 8 ……………21	
a. C I - 2 住居址 (平面)	
b. C I - 1 住居址炉 (断面)	
c. C I - 1 住居址炉 (断面)	
d. C I - 2 住居址炉 (断面)	
図版 9 ……………22	
a. C I - 3 住居址 (平面)	
b. C I - 3 住居址 (断面)	
図版10……………23	
a. C I - 3 住居址 (検出状況)	
b. C I - 3 住居址カマド(断面)	
図版11……………24	
a. C II - 1 住居址 (平面)	
b. C II - 1 住居址炉 (断面)	
図版12……………25	
a. D I - 1 住居址(炭化材出土状況)	
b. D I - 1 住居址 (断面)	
図版13……………26	
a. D I - 1 住居址 (平面)	
b. D I - 1 住居址 (断面)	
c. D I - 1 住居址炉 (断面)	
図版14……………27	
a. D I - 2 住居址 (平面)	
b. D I - 2 住居址 (断面)	
c. D I - 2 住居址炉 (断面)	
d. D I - 2 住居址ピット(断面)	
図版15……………28	
a. D I - 3 住居址 (平面)	
b. D I - 3 住居址 (断面)	
図版16……………29	
a. D I - 4 住居址 (平面)	
b. D I - 4 住居址炉 (断面)	
c. D I - 2 住居址炉・D I - 4住居址 (断面)	
図版17……………30	
a. F I - 1 住居址 (平面)	
b. F I - 1 住居址炉 (断面)	
c. F I - 2 住居址炉 (断面)	

図版18	31		
a.	F I - 2 住居址 (平面)		
b.	F I - 1・2 住居址 (断面)		
図版19	37		
a.	A II - 51ピット (平面)		
b.	A II - 52ピット (平面・断面)		
c.	C I - 51ピット (平面・断面)		
d.	C I - 52ピット (平面・断面)		
e.	C I - 53ピット (平面・断面)		
図版20	38		
a.	C I - 54ピット (平面・断面)		
b.	C I - 55ピット (平面・断面)		
c.	C I - 56ピット (平面・断面)		
図版21	39		
a.	C II - 51ピット (平面・断面)		
b.	C II - 52ピット (平面・断面)		
c.	D I - 51ピット (平面・断面)		
d.	F I - 51ピット (平面・断面)		
図版22	40		
a.	F I - 52ピット (平面・断面)		
b.	F I - 53ピット (平面・断面)		
c.	F I - 54ピット (平面・断面)		
d.	F I - 55ピット (平面・断面)		
e.	F I - 56ピット (平面・断面)		
図版23	41		
a.	F I - 101陥し穴状遺構 (平面・断面)		
b.	A II - 151炉址 (平面・断面)		
c.	C I - 151炉址 (平面・断面)		
図版24	42		
a.	C II - 151炉址 (平面・断面)		
b.	D I - 151炉址 (平面・断面)		
図版25	43		
		D I - 152炉址 (平面・断面)	
図版26	44		
a.	D II - 151炉址 (平面・断面)		
b.	A II - 201埋設土器遺構 (平面・断面)		
図版27	遺構内出土土器実測図(1)	54	
図版28	遺構内出土土器実測図(2)	55	
図版29	遺構内出土土器実測図(3)	56	
図版30	遺構内出土土器拓影図(1)	57	
図版31	遺構内出土土器拓影図(2)	58	
図版32	遺構内出土土器拓影図(3)	59	
図版33	遺構内出土石器実測図(1)	60	
図版34	遺構内出土石器実測図(2)	61	
図版35	遺構内出土石器実測図(3)	62	
図版36	遺構外出土土器拓影図(1)	68	
図版37	遺構外出土土器拓影図(2)	69	
図版38	遺構外出土土器拓影図(3)	70	
図版39	遺構外出土土器拓影図(4)	71	
図版40	遺構外出土土器拓影図(5)	72	
図版41	遺構外出土土器拓影図(6)	73	
図版42	遺構外出土土器実測図(1)	74	
図版43	遺構外出土土器実測図(2)	75	
図版44	遺構外出土石器実測図(1)	80	
図版45	遺構外出土石器実測図(2)	81	
図版46	遺構外出土石器実測図(3)	82	
図版47	遺構外出土石器実測図(4)	83	
図版48	遺構外出土石器実測図(5)	84	
図版39	遺構外出土石器実測図(6)	85	
図版50	遺構外出土石器実測図(7)	86	
図版51	遺構外出土石器実測図(8)	87	
			III. 寄木遺跡

挿 図 土層柱状図……………99

IV. 崩石遺跡

挿 図 土層柱状図……………104

図版 1 遺跡位置図……………101

図版 2 遺跡周辺地形図……………102

図版 3 土層断面図……………105

図版 4 出土土器実測図(1)……………109

図版 5 出土土器実測図(2)……………110

写真図版目次

II. 野駄遺跡

- 写真図版 1116
- a. 遺跡航空写真(東から)
 - b. 遺跡航空写真(北から)
- 写真図版 2117
- a. C I 区深掘土層断面
 - b. F I 区深掘土層断面
 - c. A II - 1 住居址
- 写真図版 3118
- a. A II - 2 住居址
 - b. A II - 2 住居址炉
 - c. A II - 2 住居址炉(断面)
- 写真図版 4119
- a. A II - 3 住居址
 - b. A II - 3 住居址埋設土器
 - c. A II - 3 住居址埋設土器(断面)
- 写真図版 5120
- a. C I - 1 住居址(断面)
 - b. C I - 1・2 住居址、
C I - 54ピット
- 写真図版 6121
- a. C I - 2 住居址炉
 - b. C I - 2 住居址炉(断面)
 - c. C I - 3 住居址(断面)
- 写真図版 7122
- a. C I - 3 住居址
 - b. C I - 3 住居址カマド
- 写真図版 8123
- a. C II - 1 住居址
 - b. C II - 1 住居址炉
 - c. C II - 1 住居址炉(断面)
- 写真図版 9124
- a. D I - 1 住居址(炭化材
出土状況)
 - b. D I - 1 住居址(断面)
- 写真図版 10125
- a. D I - 1 住居址
 - b. D I - 2 住居址(断面)
- 写真図版 11126
- a. D I - 2 住居址
 - b. D I - 2 住居址炉(断面)
 - c. D I - 2 住居址(土器出土状況)
- 写真図版 12127
- a. D I - 3 住居址
 - b. D I - 3 住居址炉
 - c. D I - 3 住居址炉(断面)、
尖頭器出土状況
- 写真図版 13128
- a. D I - 4 住居址
 - b. F I - 1・2 住居址(断面)
- 写真図版 14129
- a. F I - 1 住居址
 - b. F I - 2 住居址
- 写真図版 15130
- a. F I - 1 住居址(土器出土状況)
 - b. F I - 1 住居址炉(断面)
 - c. F I - 2 住居址(土器、

	石鏃出土状況)		a. D I - 151 炉址
	d. F I - 2 住居址炉(断面)		b. D I - 152 炉址
	e. A II - 51 ピット		c. D II - 151 炉址
	f. A II - 52 ピット (断面)		d. D I - 152 炉址 (断面)
写真図版16131		e. D II - 151 炉址 (断面)
	a. A II - 52 ピット		f. A II - 201 埋設土器遺構
	b. C I - 52 ピット	写真図版21136
	c. C I - 53 ピット (断面)		a. A II - 201 埋設土器遺構(断面)
	d. C I - 53 ピット		b. A II - 201 埋設土器遺構(断面)
	e. C I - 55 ピット (断面)	写真図版22	遺構内出土土器(1).....137
	f. C I - 55 ピット	写真図版23	遺構内出土土器(2).....138
写真図版17132	写真図版24	遺構内出土土器(3).....139
	a. C I - 56 ピット	写真図版25	遺構内出土土器(4).....140
	b. C II - 51 ピット (断面)	写真図版26	遺構外出土土器(1).....141
	c. C II - 51 ピット	写真図版27	遺構外出土土器(2).....142
	d. C II - 52 ピット	写真図版28	遺構外出土土器(3).....143
	e. D I - 51 ピット	写真図版29	遺構外出土土器(4).....144
	f. F I - 53 ピット	写真図版30	遺構外出土土器(5).....145
写真図版18133	写真図版31	遺構外出土土器(6).....146
	a. F I - 54 ピット	写真図版32	遺構外出土石器(1).....147
	b. F I - 56 ピット (断面)	写真図版33	遺構外出土石器(2).....148
	c. F I - 56 ピット	写真図版34	遺構外出土石器(3).....149
	d. F I - 101 陥し穴状遺構(断面)	写真図版35	遺構外出土石器(4).....150
	e. F I - 101 陥し穴状遺構	写真図版36	遺構外出土石器(5).....151
写真図版19134		
	a. A II - 151 炉址	IV. 崩石遺跡	
	b. A II - 151 炉址 (断面)	写真図版 1	遺跡全景 (完掘状況) ...154
	c. C I - 151 炉址	写真図版 2	出土土器(1).....155
	d. C I - 151 炉址 (断面)	写真図版 3	出土土器(2).....156
	e. C II - 151 炉址		
	f. C II - 151 炉址 (断面)		
写真図版20135		

I. 調査における経過

岩手県における東北縦貫自動車道関連遺跡調査は、昭和47年に岩手県教育委員会事務局社会教育課によって開始され、昭和48年岩手県教育委員会事務局文化課に移管され継続された。

東北縦貫自動車道建設計画は岩手県内は大きく4つに分けられ、四次区間宮城県境——安代インターで、五次区間安代インター・秋田県境、七次区間一戸インター・青森県境、八次区間一戸インター・安代インターとなっている。これらのうち、四次区間宮城県境・盛岡南インターは52年10月に開通している。現在四次区間の西根インターまでの工事が進められている。

この西根インターまでの四次区間は県教育委員会文化課によって関連遺跡の調査が行なわれ、現在報告書作成のための整理作業に入っている。

昭和53年度よりの関連遺跡調査は、分布調査による遺跡の確認及び事業主体者との調整は県教育委員会文化課が担当し、調査については、岩手県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて行なっている。

西根インター以西の分布調査は、昭和49年から、2km巾・500m巾で県教育委員会文化課が行ない、昭和50年路線決定と共に、更に路線内分布調査を行ない、遺跡を確定した。その結果20遺跡を数えたが、1ヶ所小規模の館址があり、これについては路線変更を求めた。その結果、路線変更され、19遺跡となった。

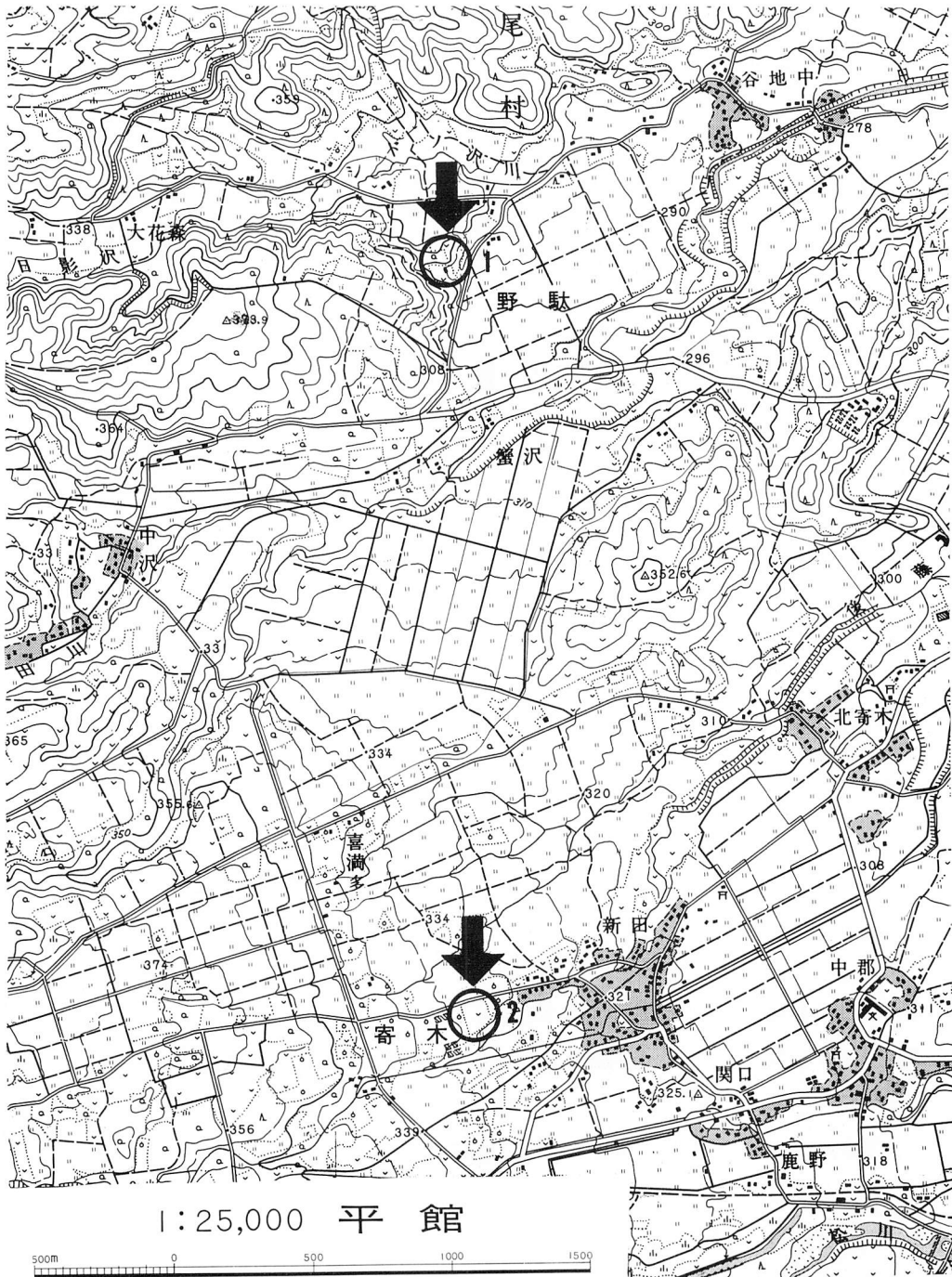
昭和51年に遺跡の確定と共に、西根インター以西の遺跡調査について、日本道路公団と岩手県教育委員会との間で協議され、基本的に用地買収の終了する53年4月より開始し、調査主体は(財)岩手県埋蔵文化財センターがこれに当る事とした。調査は積雪等の関係により昭和53年4月から松尾村野駄遺跡、長者屋敷遺跡から開始した。長者屋敷遺跡は、分布調査時において、山林のため、確認できなかった本線部分、分布調査後に計画されたパーキングエリア分に遺跡範囲が延び、この取扱いについて、三者協議を重ねた。

三者協議は、数回もたれたが、結論を見い出すまでいたらないうちに、53年度調査区域の調査は遺構が少なく、調査期間が短縮される見通しとなった。そのため期間内における遺跡範囲の拡張を先ず行なった。更に長者屋敷遺跡担当班の移動先である安代町の用地買収が遅れ、調査不能となった事、パーキングエリア分用地が未買収である事から最終的には53年度は本線部分の調査を行ない、パーキングエリア分については、昭和54年度調査を行なう事で協議がまとまった。

尚、53年度の日本道路公団関係遺跡調査は、西根町崩石遺跡、松尾村寄木遺跡、野駄遺跡、長者屋敷遺跡、安代町荒屋II遺跡の5遺跡である。

II. 野 駄^の 遺 跡

1. 遺跡所在地 岩手郡松尾村大字野駄第2地割字前森392
2. 調査担当者 主任専門調査員 金沢光孝、専門調査員 四井謙吉
専門調査員 佐藤 勝
3. 調査期間 昭和53年4月13日～7月13日
4. 調査対象面積 5,400m²
5. 発掘面積 5,400m²
6. 遺跡記号 ND78



1. 野駄遺跡 2. 寄木遺跡

図版1 遺跡位置図

建設省国土地理院承認
(承認番号) 昭54、東複、第84号

1. 調査方法

(1) 座標軸の設定

調査対象区内の自動車道中心杭STA106+20を座標原点とし、この点とSTA106+40を結ぶ線およびこれに直交する線を基準線とした。対象区全体を30mごとに大区画し、これらに対して南北方向には北からA・B・C・D・E・F・Gのアルファベットをふり、東西方向には西からI・IIのローマ数字を付した。地区名は両者の組合わせによって、A I 区・B II 区……と表わした。30mの大区画を南北方向および東西方向にそれぞれ10等分し、3m×3mのグリッドを設定した。これらのグリッドには、北からa～jのアルファベットをふり、西からは0～9のアラビア数字を付した。グリッド名は、以上のアルファベット・数字の組合せによって、A I c 3・B II g 6……と表わした。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査区内における遺構の分布を把握するために、2グリッドを1単位として市松模様状に粗掘りを行なった。層位ごとに遺構の有無を確認しつつ、最終検出面の黄褐色土層上面まで掘り下げた。遺構が検出された場合は、その周辺を全面発掘しその平面プランの確認に努めた。

旧石器と考えられる石器が出土した地点については、時間的制約からスコップを使用してその包含層と思われる黄褐色土層を掘り下げた。しかし結局石器の明確な出土層位を究明することはできなかった。

(3) 精査方法

検出された遺構には、その種別に関係なく大区画単位内で、C I - 1・C I - 2……と通し番号の名称を与えた。これらの遺構は、整理作業の段階で種別に編成しなおし、大区画単位で、住居址は1～、ピット類は51～、陥し穴状遺構は101～、炉址は151～、埋設土器遺構は201～と一連の番号をつけた。住居址は四分法、ピット類は二分法を原則として、移植ベラおよび竹ベラを使用して遺構精査を行なった。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を行なった。しかし住居址やピット類の中で埋土が単層であるものについては、その性状をField Cardに記載しただけで土層断面図の作成を省略した。遺構内の埋土中の遺物は出土レベルを記入の上取りあげた。また遺構外の出土遺物については、グリッド単位ごとに層位を記入の上取りあげた。

(4) 実測方法

遺構の集中しているC I・D I区については、6m単位の遣り方を設定し実測を行なった。その他の地区の遺構については、グリッドの基準杭にトランシットを据え基準線を起こす簡易

的な遣り方実測を行なった。実測図は20分の1の縮尺を基本とし、炉やカマドなどはその状況に応じて10分の1とした。遺構のレベル計測は50cm間隔で行なったが、状況に応じて計測の間隔を細かくした。実測者を作業員の中から養成し、2人一組で遺構の平面・断面実測にあたらせた。調査員は主にその点検にあたった。

(5) 写真撮影

6×7cm判カメラ1台と35cm判カメラ2台を1セットとして使用した。撮影は当初四井・佐藤が行なったが、後半には長者屋敷遺跡の協力員小泉修栄の応援をうけた。撮影にあたっては当埋文センター作成の「撮影カード」を使用し、写真整理の際の資料とした。

(6) その他

調査を行なうにあたって、調査員の任務分担は次のようにした。金沢は、主に調査全体の進行状況の把握と対外交渉を担当した。野外作業に関する指示・点検は四井、佐藤が行なった。

遺跡からの情報収集にあたっては、当センターが作成したField Cardを使用した。

調査の進行にしたがって、作業員を粗掘り・遺構検出・精査・写真・実測の作業内容別に割りふった。しかし実測班以外は組織化するまでには至らなかった。

2. 遺跡の立地

野駄遺跡は、国鉄花輪線岩手松尾駅より南西約2km、松尾村役場の西2.8kmのところに位置する。遺跡の現状は森林・畑地・水田となっている。

遺跡は標高約300mの高位段丘とそれをとりまく形で分布する標高約290mの古期沖積面の上に乗っている。これらの面の西側一帯には丘陵地が続き、開析谷で隔てられた東側には低位段丘面の分布がみられる。遺跡の主体部の南側には小規模な湧泉の形成がみられる。

周辺の遺跡としては、長者屋敷遺跡・大花森遺跡・水切場遺跡（鈴木、1958）・谷地中遺跡などがある。

3. 基本層序

遺跡主体部の深掘り地点での堆積は次のようになっている。

I層 10YR 7/4・褐色土層。砂質シルトの表土層であり、最近の耕作や草木根によって攪乱されている。

II層 10YR 2/5・黒色土層。砂質のクロボク土であるが、不連続でこの層を欠くところがある。この層の下部またはIII層の上部のところどころに灰白色を呈する粉塵状のパミスがみられる。これと同じパミスが平安時代の竪穴住居址をおおっている。

III層 10YR 7/4・暗褐色土層。火山灰起源のシルト層であり、クラックが細かくはいる。上述の平安時代の竪穴住居址はこの層を切り込んで構築されている。

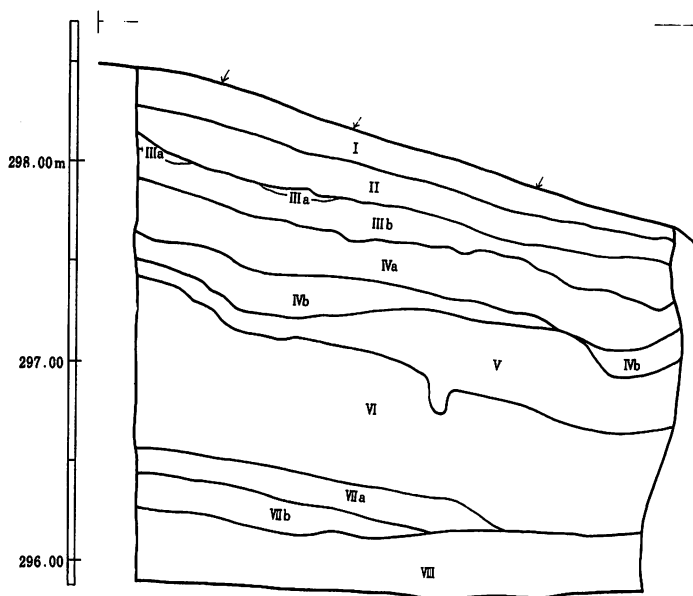
IV層 10YR 2/5・黒色土層。シルト質のやや粘性をもつクロボク土である。クラックが細かくはいる。縄文時代早期～晩期の遺物を包含する層である。

V層 10YR 5/6・黄褐色土層。火山灰起源のシルト層で粘土化が進んでおり、クラックが上部に少しはいるだけである。

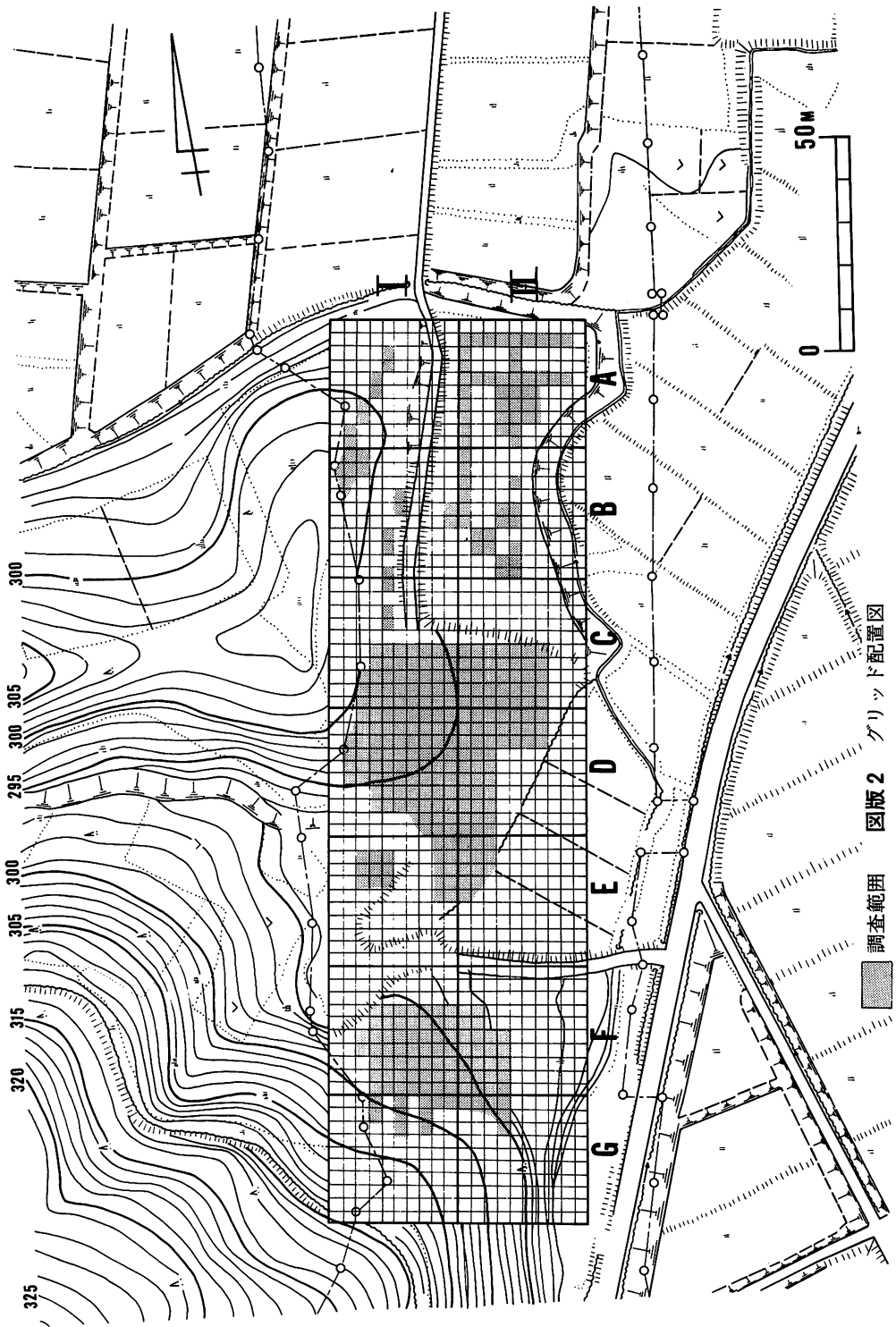
VI層 10YR 7/4・にぶい黄褐色土層。細粒火山灰起源の粘土層でほとんどクラックがはいらない。

VII層 10YR 6/6・明黄褐色土層。粗粒火山灰起源の粘土層でスコリアを多く含み、クラックが全くはいらない。

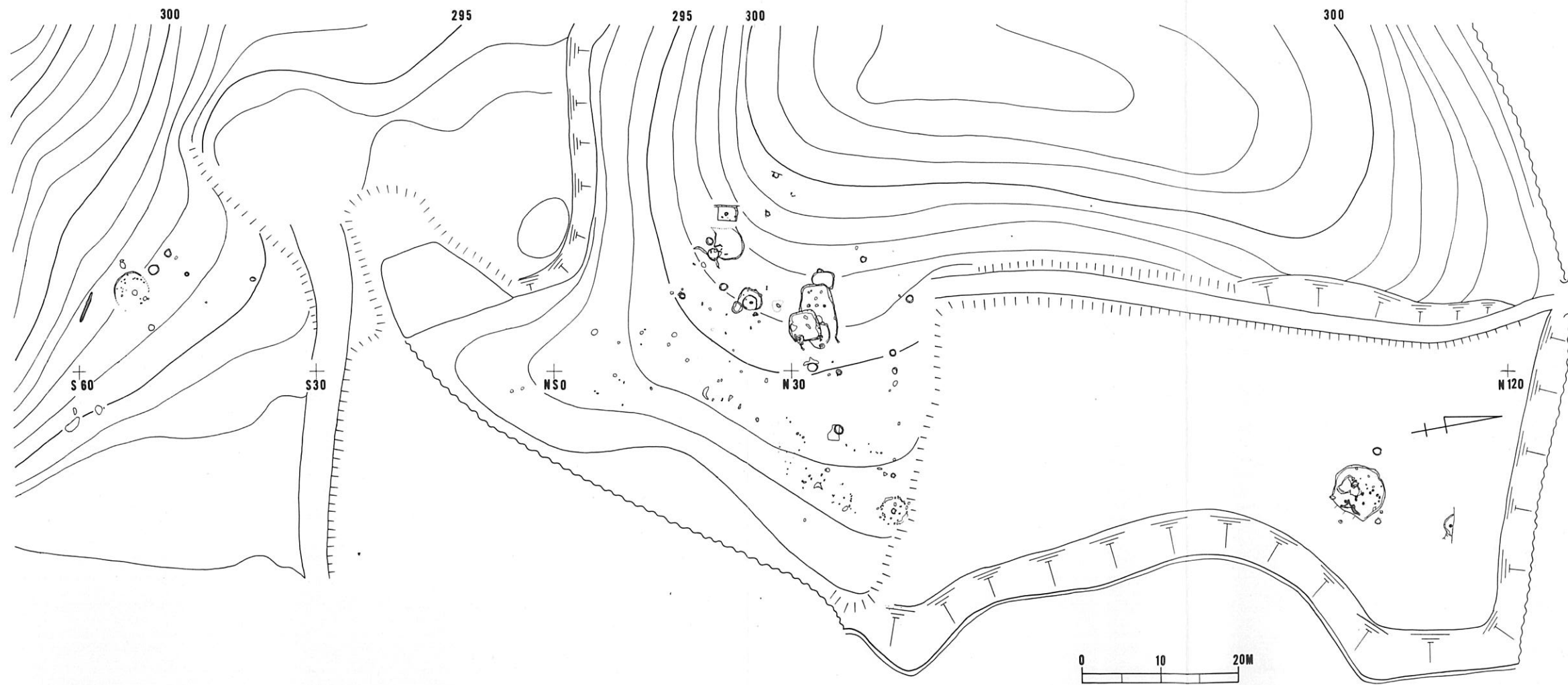
VIII層 10YR 5/6・黄褐色土層。細粒火山灰起源の粘土層でクラックが全くはいらない。VI層以下の土層は、かなり粘土化が進みクラックがほとんどはならず古い火山灰の様相を呈している。



挿図 土層断面図



調査範囲 グリッド配置図 図版 2



図版 3 遺構配置図

4. 検出遺構

(1) 竪穴住居址

A II 区

A II-1 住居址 (図版4・写真図版2-c)

北側古期沖積面の北東端に位置する。調査範囲の関係により最終的に精査できたのは全体の約2分の1ほどである。したがって規模・形状の詳細は不明であるが、精査できた部分より推定すると径3.9m±の円形を呈する住居址と考えられる。埋土は炭化物を微量に含む暗褐色土・黒褐色土によって構成されている。床面はほぼ平坦である。検出された柱穴はP₁(径28cm±・深さ10cm±)だけであり、全体の柱穴配置は不明である。壁高は南壁で27cm±、西壁で30cm±を計る。

調査の最終段階でテスト・ピットを設定した際に、P₁より約1.5m北方の床面相当面に径30cm±の現地性の焼土がみられた。位置的に住居址のほぼ中央部にあたるところから、この焼土は当住居址に伴う地床炉と考えられる。しかし調査期限切れのため、その精査および実測はできなかった。

床面からの出土遺物はなく、埋土の上層から縄文時代後期に属すると考えられる土器片が数点得られただけである。

A II-2 住居址 (図版5-a・b、6-b・写真図版3)

北側古期沖積面の北東端に位置し、A II-3 住居址の上に構築されている。壁および柱穴は確認できなかったが、炉とともに炭化材・焼土が検出されたため住居址と認定したものである。検出段階では前述のように柱穴は確認されなかったが、C II-1 住居址の柱穴配置との関連から、A II-3 住居址の床面上に検出された柱穴の中で次のものが当住居址の柱穴を構成するものと考えられる。P₁(径15cm±・深さ15cm±)・P₂(径30cm±・深さ30cm±)・P₃(径14cm±・深さ14cm±)・P₄(径15cm±・深さ13cm±)・P₅(径20cm±・深さ10cm±)・P₆(径16cm±・深さ17cm±)・P₇(径20cm±・深さ16cm±)・P₈(径15cm±・深さ19cm±)・P₉(径14cm±・深さ19cm±)・P₁₀(径12cm±・深さ19cm±)・P₁₁(径14cm±・深さ13cm±)・P₁₂(径16cm±・深さ25cm±)・P₁₃(径12cm±・深さ15cm±)・P₁₄(径18cm±・深さ7cm±)・P₁₅(径20cm±・深さ10cm±)・P₁₆(径18cm±・深さ10cm±)・P₁₇(径24cm±・深さ17cm±)・P₁₈(径30cm±・深さ24cm±)・P₁₉(径24cm±・深さ20cm±)・P₂₀(径18cm±・深さ15cm±)・P₂₁(径10cm±・深さ10cm±)・

P₂₂ (径20cm±・深さ10cm±)・P₂₃ (径30cm±・深さ16cm±)・P₂₄ (径20cm±・深さ9cm±)・
P₂₅ (径24cm±・深さ12cm±)・P₂₆ (径8cm±・深さ10cm±)・P₂₇ (径22cm±・深さ12cm±)・
P₂₈ (径12cm±・深さ6cm±)・P₂₉ (径24cm±・深さ14cm±)・P₃₀ (径25cm±・深さ16cm±)の
30個である。これらの柱穴は2列の環状配置を示す。P₁～P₁₉を結び径5.7m±を計るものと
P₂₀～P₃₀を結び径4.8m±を計るものとの2列である。以上の柱穴配置の状況は、当住居址の建
て替えを示すものではないかと考えられる。

炉は径95cm±×75cm±の楕円形状を呈する石囲炉であり、粒径15cm±～25cm±の扁平な安山
岩類の垂角礫を横位に埋置して作られている。北西の炉縁の一部の構成礫が欠如している。炉
は良く焼成を受けており、焼土の層厚が5cm±を計る。

遺物として床面相当部分から縄文時代晩期に属すると考えられる土器や磨石が出土した。

A II - 3 住居址 (図版5-c、6・写真図版4)

北側古期沖積面の北東端に位置し、層的にA II - 2住居址の下位にある。東壁が斜面下方
にあたって消失しているが、残存部分から推定すると径7.0m±の円形を呈する住居址と考えら
れる。埋土は焼土粒や炭化物を少量含む暗褐色土・黒褐色土などによって構成されている。床
面はほぼ平坦であり堅くしまっている。柱穴は、P₁ (径30cm±・深さ25cm±)・P₂ (径30cm±・
深さ35cm±)・P₃ (径30cm±・深さ41cm±)・P₄ (径20cm±・深さ70cm±)・P₅ (径28cm±・
深さ32cm±)・P₆ (径25cm±・深さ48cm±)・P₇ (径30cm±・深さ32cm±)・P₈ (径35cm±・
深さ31cm±)・P₉ (径28cm±・深さ44cm±)・P₁₀ (径30cm±・深さ57cm±)・P₁₁ (径30cm±・
深さ51cm±)・P₁₂ (径20cm±・深さ5cm±)・P₁₃ (径20cm±・深さ10cm±)・P₁₄ (径20cm±・
深さ10cm±)・P₁₅ (径20cm±・深さ15cm±)・P₁₆ (径28cm±・深さ27cm±)・P₁₇ (径40cm±・
深さ23cm±)・P₁₈ (径40cm±・深さ20cm±)・P₁₉ (径20cm±・深さ14cm±)の19個である。こ
れらのうち主柱穴を構成すると思われるものは、P₁・P₃・P₄・P₆・P₉・P₁₀・P₁₁の7個である。
壁高は北壁で40cm±、南壁で17cm±、西壁で54cm±を計る。

炉は径50cm±・厚さ10cm±の焼土をもつ地床炉で住居址の中央部に位置する。

北壁際の床面に埋設土器が検出された。土器は縄文時代後期に属すると考えられる粗製の深
鉢で、床面より25cm±の深さに直立に埋設されている。土器内は炭化物を含まない黄褐色土と
黒褐色土で充填されている。P₁₁の近くの床面には径130cm×70cm±・深さ21cm±の楕円形状の大
きなピット (P₂₀) がある。ピットの埋土は焼土粒や炭化物をやや多量に含む黒褐色土によって
構成されていた。

出土遺物は極めて少なく、前述の土器のほかには床面直上の埋土から土器片が数点得られただ
けである。

C I 区

C I - 1 住居址 (図版 7、8 - b・c・写真図版 5)

北側古期沖積面の中央部西側に位置する。当住居址はC I - 54ピットを切り、C I - 2 住居址およびC I - 3 住居址により切られている。東壁が斜面下方にあたって消失しているが、残存部分から推定すると東西に長軸をもつ8.0m±×4.5m±の長方形を呈する住居址と考えられる。埋土は焼土粒や炭化物を含む黒褐色土・暗褐色土などによって構成されている。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。柱穴はP₁(径40cm±・深さ44cm±)・P₂(径20cm±・深さ18cm±)・P₃(径30cm±・深さ30cm±)・P₄(径35cm±・深さ47cm±)・P₅(径35cm±・深さ41cm±)・P₆(径30cm±・深さ29cm±)・P₇(径20cm±・深さ15cm±)・P₈(径16cm±・深さ11cm±)の8個である。これらのうちP₁・P₃・P₄・P₅は主柱穴を、P₆・P₇・P₈は壁柱穴を構成するものと思われる。壁高は北壁で35cm±、南壁で32cm±、西壁で56cm±を計る。

炉は地床炉の形態を示すものであり、住居址の長軸線上に3基検出された。これらの中で東端の炉が最も良く焼成を受けている。

遺物として床面から縄文時代前期に属すると考えられる土器片数点と石匙1点が出土した。また埋土中からは床面のものと同時期の土器片とスクレイパーが出土した。

C I - 2 住居址 (図版 7 - b、8 - a・d・写真図版 5 - b、6 - a・b)

C I - 1 住居址とほぼ同じ位置にある。当住居址はC I - 1 住居址を切り、C I - 3 住居址により切られている。南壁および東壁の一部が消失しているが、残存部分から推定すると3.2m±×2.5m±の隅丸形状を呈するものと考えられる。埋土は炭化物を少量含む黒褐色土・暗褐色土によって構成されている。床面はほぼ平坦で炉の周辺が特に堅くしまっている。柱穴は検出されなかった。壁高は北壁で12cm±、東壁で5cm±、南壁で5cm±、西壁で25cm±を計る。

炉は石囲炉で住居址の中央部よりやや東壁寄りに位置する。安山岩類の亜角礫～亜円礫を床面下5～10cmの深さに横位に埋置して、径50cm±の円形状につくられている。炉は良く焼成を受けている。

遺物として床面から縄文時代中期に属すると考えられる一括土器が出土した。また埋土中からは一括土器と同時期の土器片が1点出土しただけである。

C I - 3 住居址 (図版 9、10・写真図版 6 - c、7 - a・b)

C I - 1 住居址とほぼ同じ位置にある。当住居址はC I - 1 住居址およびC I - 2 住居址を切っており、3.8m±×3.7m±の不整な方形を呈するものである。埋土は炭化物を少量含む暗褐色土・黒褐色土と、これらをおおう灰白色で粉塵状のパミスなどによって構成されている。このパミスの層はレンズ状の堆積を示し、層厚6cm±で細粒部(4cm±)と粗粒部(2cm±)と

にふるい分けられている。床面は焼土粒や炭化物が少量混入している暗褐色土を住居址の掘り方部分に敷いて造成されているが、ほぼ平坦で堅くしまっている。柱穴と考えられるピットはP₁（径40cm±・深さ20cm±）だけである。壁高は北壁で35cm±、東壁で18cm±、南壁で42cm±、西壁で45cm±を計る。

カマドは東壁の南東隅寄りに設けられている。煙出し部の一部が欠如しているが、全体として遺存状態は良好である。袖部および燃焼部の側壁・天井部には粒径20cm±～50cm±の安山岩類の垂角礫が使用されているが、煙道部は垂角礫が天井部にのみ使われているだけである。いずれの部位も礫と礫の間は粘土質シルトで充填されている。燃焼部の天井部に径15cm±の円形を呈する「釜受け」があり、この周縁の一部には縄文時代の遺物である石皿片が使用されている。カマド内の埋土は基本的に2層に大別される。上位は灰白色のパミスがブロック状に混入している黒褐色土によって、また下位は焼土粒や炭化物を多量に含む黒色土によって構成されている。なお「釜受け」の真下の部分にだけ他の土を含まない純粋な灰白色のパミスがみられた。燃焼部と煙道部との境界部分には、20cm±の段差がみられるが、それから煙道部先端まではゆるやかに上昇している。カマドの全長は残存部分から推定すると180cm±を計るものと思われる。

カマド付近に検出されたP₂（径40cm±・深さ30cm±）・P₃（径70cm±・深さ25cm±）の2個のピットは、埋土および土器の出土状態からみて貯蔵穴と考えられる。このうちP₃は、埋土の上部が叩きしめられて床面として利用されていることからみて、P₂より先行する貯蔵穴と考えられる。

遺物として床面上から・ロクロ成形土師器の坏・長胴甕・小型甕が出土した。また埋土中から縄文時代の遺物である剣状の磨製石器が出土した。

C II 区

C II - 1 住居址（図版11・写真図版2）

北側古期沖積面の中央部東側に位置する。壁が確認できず規模・形状の詳細を知ることができないが、柱穴と思われる小ピット群（径10cm±～20cm±・深さ10cm±～30cm±）の配列から推定すると径3.7m±の円形を呈する住居址と考えられる。埋土の状況は不明である。床面はほぼ平坦であり堅くしまっている。

炉は直立埋設土器を伴う石囲炉で住居址のほぼ中央部に位置している。石囲部分は、粒径15cm±の安山岩類の垂角礫を横位に埋置して径65cm±の円形状に作られている。東側炉縁の構成礫の一部が欠如しているが、この部分には礫の抜き取り痕がみられる。埋設土器は石囲の真中

に位置しており、縄文時代晩期に属すると考えられる浅鉢である。炉はあまり焼成を受けていず、埋設土器の東側部分に現地性の焼土が少し認められるだけである。

出土遺物は前述の埋設土器以外にない。

D I 区

D I - 1 住居址 (図版12、13・写真図版9、10-a)

北側古期沖積面中央部西側に位置する。東壁が斜面の下方にあたって消失しているが、残存部分から推定すると3.1m±×2.8m±の不整な形状を呈する住居址と考えられる。埋土は焼土粒や炭化材を含む黒色土・黒褐色土によって構成されている。床面はほぼ平坦であり、やや堅くしまっている。柱穴はP₁(径22cm±・深さ23cm±)・P₂(径18cm±・深さ10cm±)・P₃(径12cm±・深さ18cm±)・P₄(径20cm±・深さ27cm±)・P₅(径25cm±・深さ42cm±)・P₆(径20cm±・深さ38cm±)・P₇(径25cm±・深さ41cm±)の7個である。壁高は北壁で15cm±、南壁で20cm±、西壁で35cm±を計る。

炉は径45cm±×25cm±の楕円形を呈する地床炉で、住居址の中央部よりやや東側に位置する。炉の部分には少量の現地性の焼土が形成されているだけである。

住居址の南東隅に径150cm±の円形状のピット(P₈)がある。このピットは、住居址内に検出されたものと一連の炭化材が出土していることや埋土が住居址のものと同一であることからみて、当住居址に伴うものと考えられる。またP₅・P₆・P₇を結び幅8cm±・深さ5cm±を計る周溝が、壁より50cm±内側の床面上に検出された。この周溝と壁との位置関係が住居址の重複関係を意味するものか否かは不明である。

遺物としては埋土中から時期の識別不能な縄文土器細片数点と磨石1点が出土しただけである。

なお遺構検出の際に住居址の東側に現地性の焼土を発見したが、これは層位的にみて当住居址が廃棄された後に形成されたものと考えられる。

D I - 2 住居址 (図版14、16-c・写真図版10-b、11)

南西の段丘崖の下部に位置し、D I - 4 住居址を切っている。西壁が埋土と識別不能で把握できなかったことや南壁が斜面下方にあたって消失しているために、規模・形状を正確に知ることができない。しかし検出部分から推定すると5.0m±×4.0m±の不整な楕円形を呈する住居址と考えられる。埋土は炭化物を微量に含む褐色土・暗褐色などによって構成されている。床面はほぼ平坦で炉の周辺が特に堅くしまっている。柱穴は検出されなかった。壁高は北壁で39cm±、東壁で14cm±を計る。

炉は複式炉の系統を引く形態を示すもので、住居址の南東壁際に位置する。石囲部は粒径10cm±～20cm±の安山岩類の垂角礫が縦位に埋置されており、部分的に構成礫が二重になっているところもある。前庭部は、径150cm±・深さ10cm±の円形を呈し皿状の断面形を示すものであり、住居址の壁外にやや張り出している。また前庭部の南西部分に、この部位の構成礫と思われる粒径10cm±の垂角礫が1個みられる。石囲部は良く焼成を受けているが、前庭部にはその埋土中に焼土粒や炭化物が含まれているものの焼成を受けた痕跡は認められない。

炉の60cm西方にある径100cm±×80cm±・深さ25cm±を計る円形のピット(P₁)は、その埋土の性状や検出状況からみて当住居址に伴うものと考えられる。

遺物として床面直上から縄文時代中期に属するものと思われる深鉢や小型鉢の土器片が数点出土した。

D I - 3 住居址 (図版15・写真図版12)

南西の段丘崖中腹に位置する。埋土と壁の境界が判然としない部分もあるが、検出状況から推定すると径3.0m±の円形を呈する住居址と考えられる。埋土は炭化物を微量に含む暗褐色土で構成されているが、単層であるためその性状をFieldCardに記載しただけで土層断面図は作成しなかった。床面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。柱穴は検出されなかった。

炉は径30cm±を呈する円形の石囲炉で住居址のほぼ中央部に位置する。炉の構成礫は粒径10cm±～20cm±の安山岩類の垂角礫～垂円礫で横位に埋置されている。炉は全体によく焼成を受けている。

遺物として床面直上から縄文時代中期に属すると考えられる土器片と石器(スクレイパー・磨石)が出土した。

D I - 4 住居址 (図版16・写真図版13-a)

D I - 2 住居址と近接した位置にあり、同住居址により切られている。斜面下方にあたっている壁が消失しているため規模・形状の詳細は不明であるが、残存部分から推定すると一辺が4.0m前後の隅丸形状を呈する住居址と考えられる。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色土・褐色土によって構成されている。床面は堅くしまっており、南東に向ってゆるやかな傾斜を示す。柱穴は検出されなかった。壁高は北壁で7cm±、西壁で25cm±を計る。

炉は径35cm±の規模をもつ地床炉で西壁寄りに位置する。炉の使用面はよく焼成を受け堅くしまっている。

遺物として炉の使用面上から縄文時代前期に属すると考えられる深鉢の破片が出土した。

F I 区

F I - 1 住居址 (図版17-a・b、18-b・写真図版13-b、14-a、15-a・b)

南側古期沖積面に位置し、F I - 2 住居址の上に構築されている。A II - 2 住居址と同じように壁および柱穴は確認できなかったが、炉とともに炭化材・焼土が検出されたため住居址と認定したものである。検出段階では柱穴は確認できなかったが、C II - 1 住居址の柱穴配置との関連から、F I - 2 住居址の床面上に検出された柱穴の中で次のものが当住居址の柱穴を構成するものと考えられる。P₁ (径20cm±・深さ24cm±)・P₂ (径20cm±・深さ27cm±)・P₃ (径30cm±・深さ26cm±)・P₄ (径20cm±・深さ34cm±)・P₅ (径15cm±・深さ12cm±)・P₆ (径20cm±・深さ34cm±)・P₇ (径15cm±・深さ13cm±)・P₈ (径15cm±・深さ11cm±)・P₉ (径15cm±・深さ11cm±)・P₁₀ (径10cm±・深さ13cm±)・P₁₁ (径15cm±・深さ17cm±)の11個である。これらの柱穴は弧状の配置を示す。

炉は径40cm±の円形を呈する石囲炉で、粒径10cm±～20cm±の亜角礫を縦位に埋置してつくられている。炉は良く焼成を受けている。

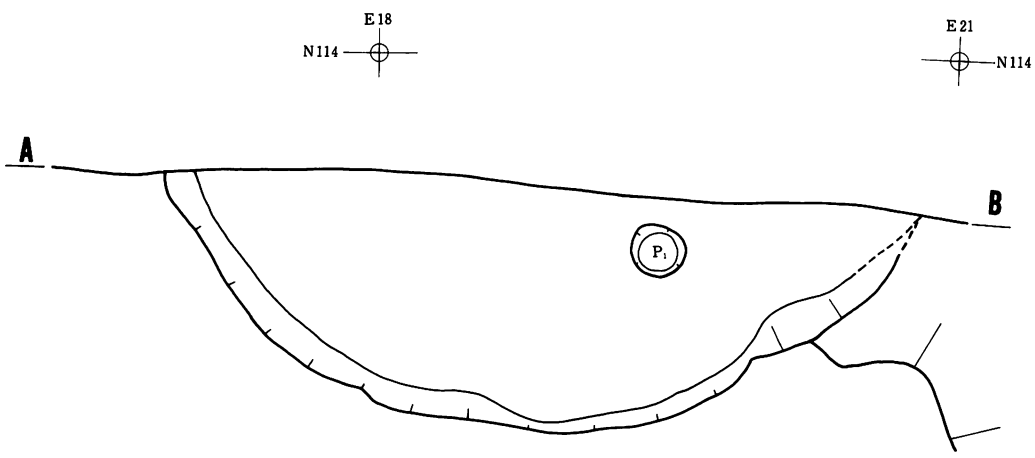
遺物として床面相当部分から縄文時代晩期に属すると思われる台付鉢の完形品が2点出土した。

F I - 2 住居址 (図版17-c、18-a・b・写真図版13-b、14-b、15-c・d)

南側古期沖積面に位置し、層的にF I - 1 住居址の下位にある。斜面下方にあたっている壁が消失しているため規模・形状の詳細は不明であるが、残存部分から推定すると径4.4m±の円形を呈する住居址と考えられる。埋土は炭化物を含む黒褐色土・暗褐色土によって構成されている。床面は堅くしまっており、北側に向ってゆるやかな傾斜を示す。柱穴はP₁ (径15cm±・深さ10cm±)・P₂ (径20cm±・深さ17cm±)・P₃ (径10cm±・深さ11cm±)・P₄ (径10cm±・深さ9cm±)・P₅ (径10cm±・深さ16cm±)で構成されている。壁高は東壁で20cm±、南壁で21cm±を計る。

炉は径60cm±の円形を呈する地床炉で、住居址の中央部よりやや西壁寄りに位置している。

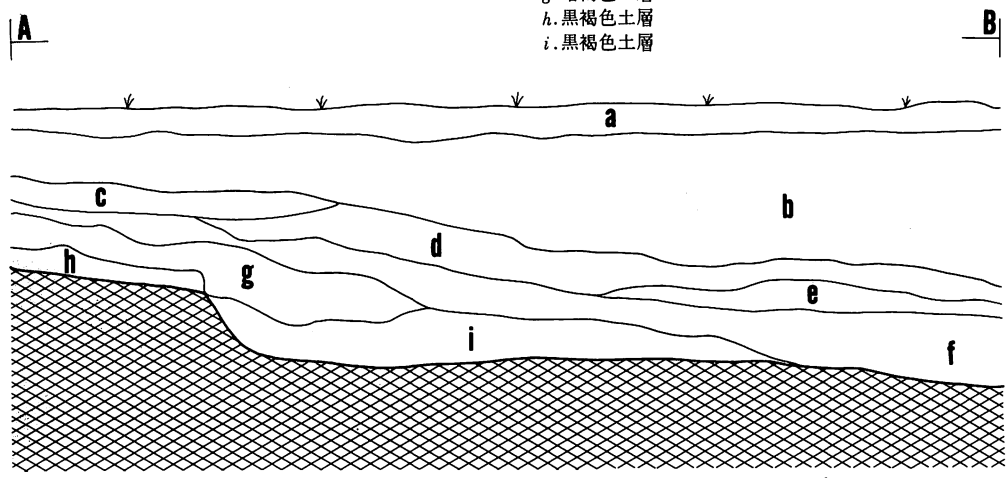
遺物として炉の使用面上から縄文時代後期に属すると考えられる深鉢の破片1点と石鏃1点が出土しただけである。



a. A II-1 住居址

b. A II-1 住居址(断面)

- a. 暗褐色土層
- b. 褐色土層 (盛土)
- c. 暗褐色土層
- d. 黑褐色土層
- e. 黑褐色土層
- f. 黑褐色土層
- g. 暗褐色土層
- h. 黑褐色土層
- i. 黑褐色土層

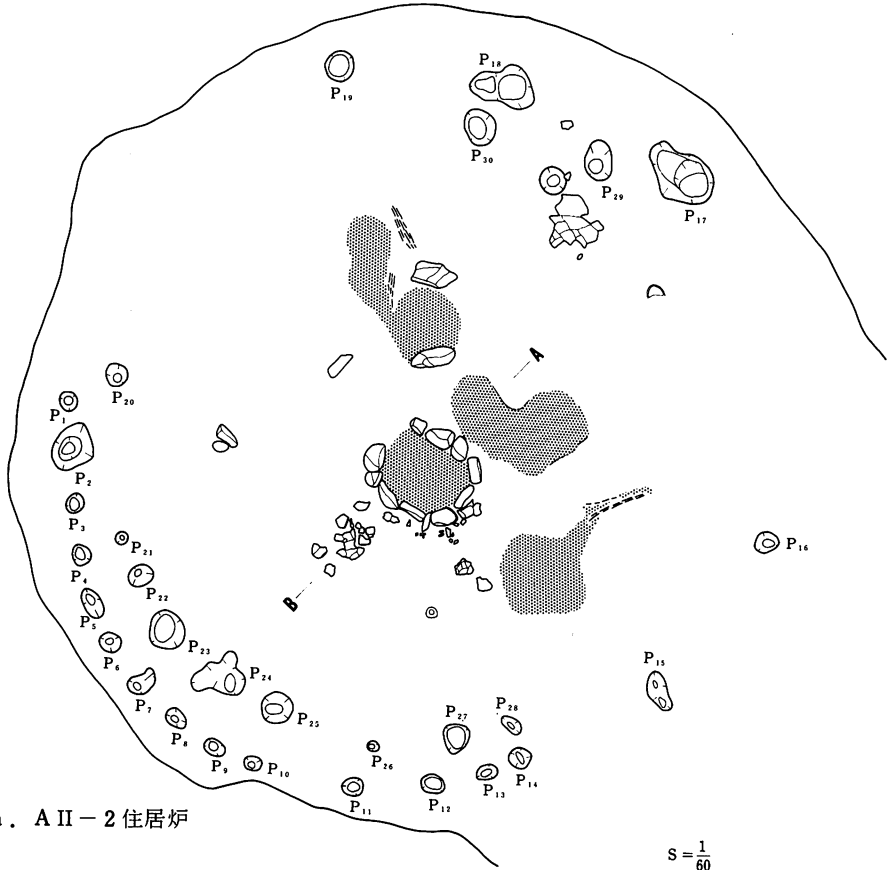


S = $\frac{1}{40}$

图版 4

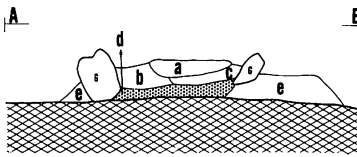
E 12
N105

E 15
N105



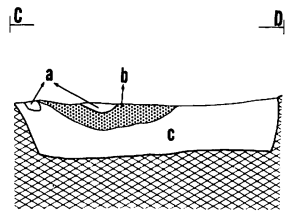
a. A II-2 住居炉

S = $\frac{1}{60}$



b. A II-2 住居址炉(断面)

- a. 暗褐色土層 (含 烧土、炭化物)
- b. 黑褐色土層 (含 烧土)
- c. 極暗赤褐色土層 (含 烧土)
- d. 赤褐色土層 (烧土)
- e. 黑褐色土層

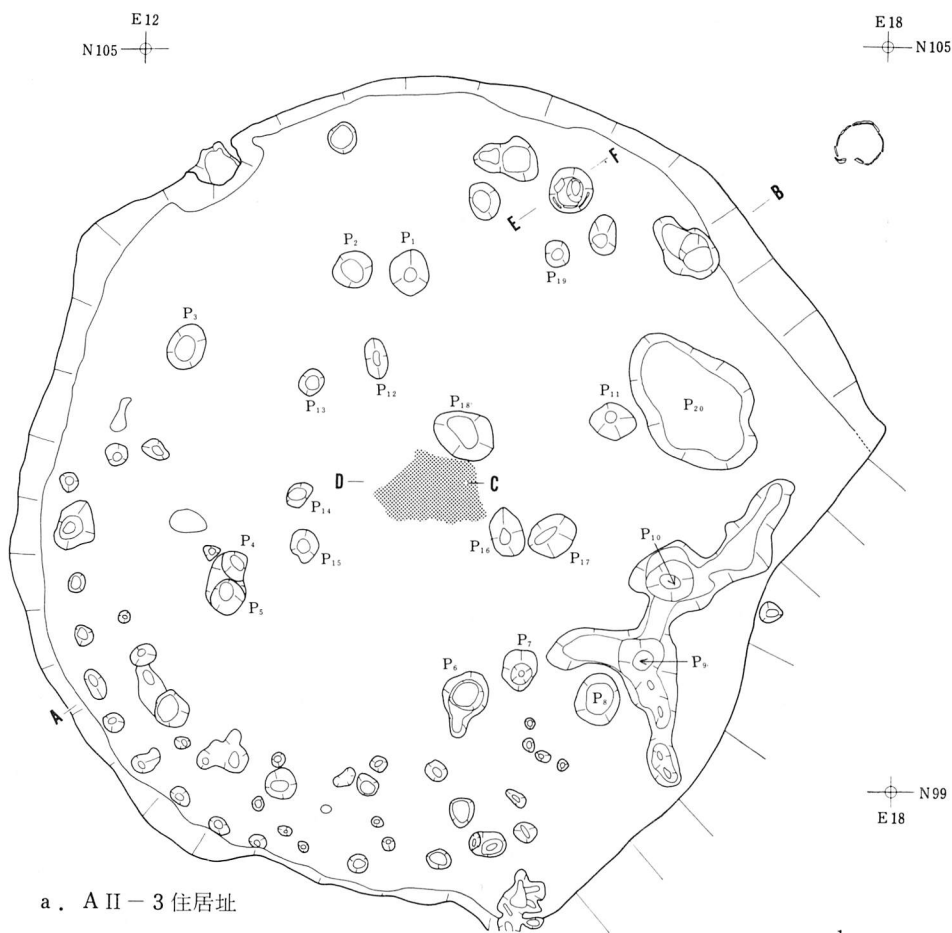


c. A II-3 住居址炉(断面)

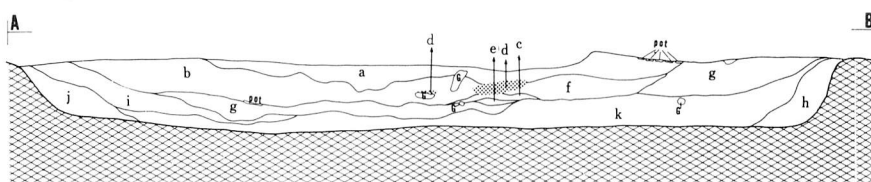
- a. 黑色土層
- b. 暗赤褐色土層 (烧土)
- c. 褐色土層

S = $\frac{1}{30}$

图版 5



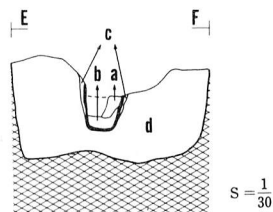
a. A II-3 住居址



b. A II-2-3 住居址(断面)

- a. 黑褐色土層 (含 炭化物、土器片)
- b. 極暗褐色土層 (含 燒土、炭化物)
- c. 暗赤褐色土層 (含 燒土、炭化物)
- d. 暗褐色土層 (含 燒土)
- e. 黑色土層
- f. 黃褐色土層

- g. 黑色土層 (含 炭化物)
- h. 黑色土層
- i. 黑褐色土層
- j. 黑色土層 (含 炭化物)
- k. 黃橙色土層



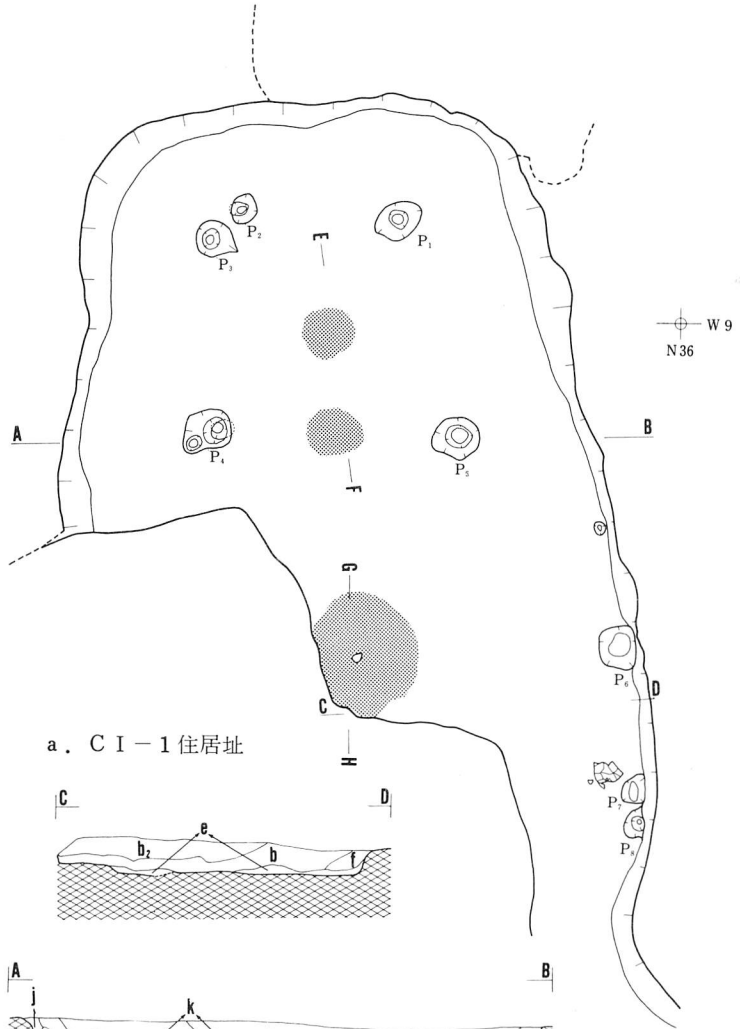
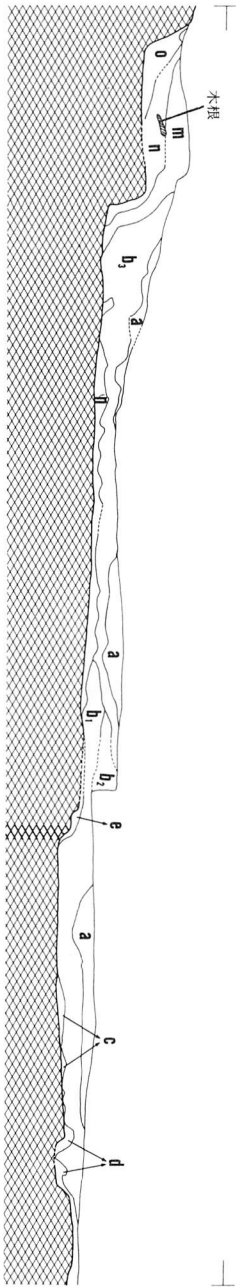
c. A II-3 住居址埋設土器(断面)

- a. 黃褐色土層
- b. 黑褐色土層
- c. 黑褐色土層
- d. にぶい黃褐色土層

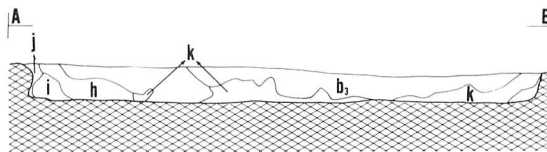
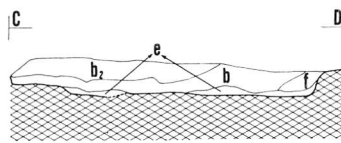
図版 6

N 30
W 12

N 36
W 12



a. C I - 1 住居址

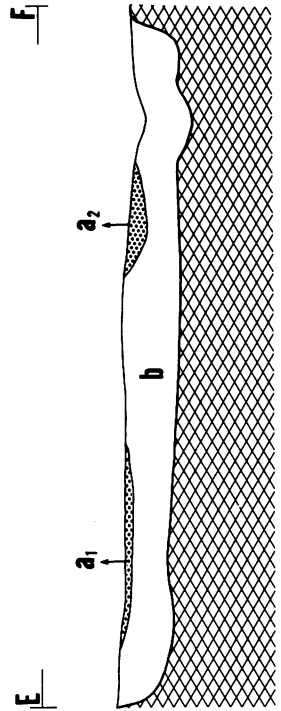
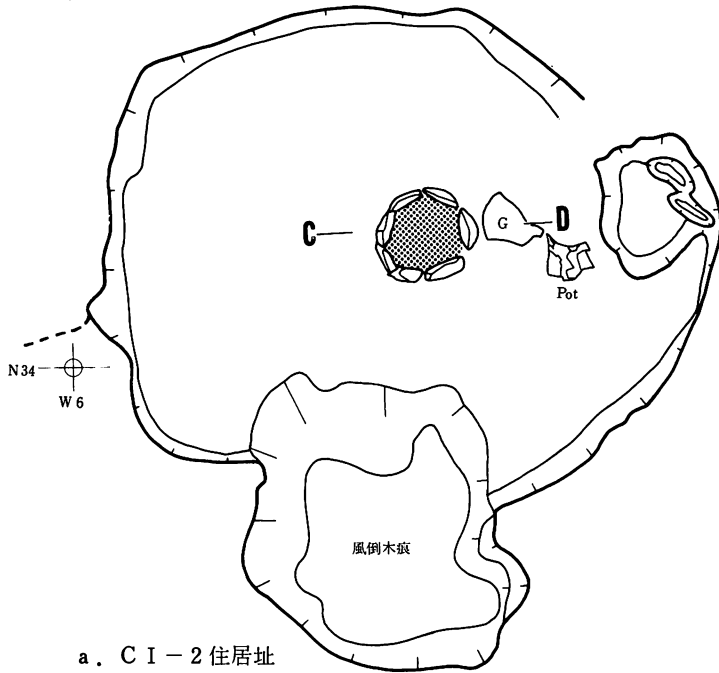
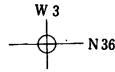
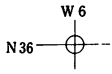


b. C I - 1 · 2 住居址 (断面)

- | | |
|------------------------|------------------|
| a. 黑褐色土層 (含 炭化物) | h. 暗褐色土層 (含 炭化物) |
| b ₁ . 黑褐色土層 | i. 黑褐色土層 |
| b ₂ . 黑褐色土層 | j. 暗褐色土層 |
| b ₃ . 黑褐色土層 | k. 暗褐色土層 (含 炭化物) |
| c. 黑褐色土層 (含 燒土) | l. 褐色土層 |
| d. 暗褐色土層 (含 炭化物) | m. 黑褐色土層 (含 燒土) |
| e. 褐色土層 | n. 暗褐色土層 |
| f. 黑褐色土層 | o. 極暗褐色土層 |
| g. 黑褐色土層 (含 炭化物) | |

S = $\frac{1}{60}$

圖版 7

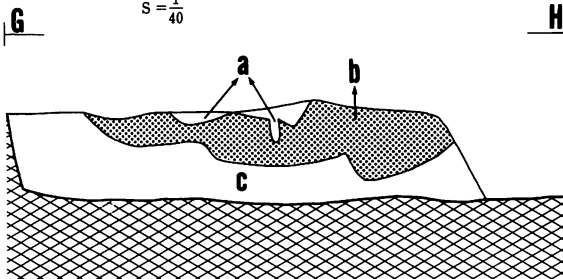


a. CI-2 住居址

b. CI-1 住居址炉(断面)

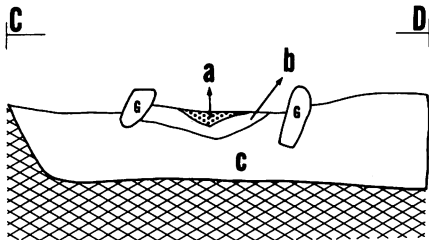
$s = \frac{1}{40}$

- a₁. 赤褐色土層 (烧土)
- a₂. 赤褐色土層 (烧土)
- b. 黄褐色土層



c. CI-1 住居址炉(断面)

- a. 褐色土層
- b. 赤褐色土層 (烧土)
- c. 黄褐色土層

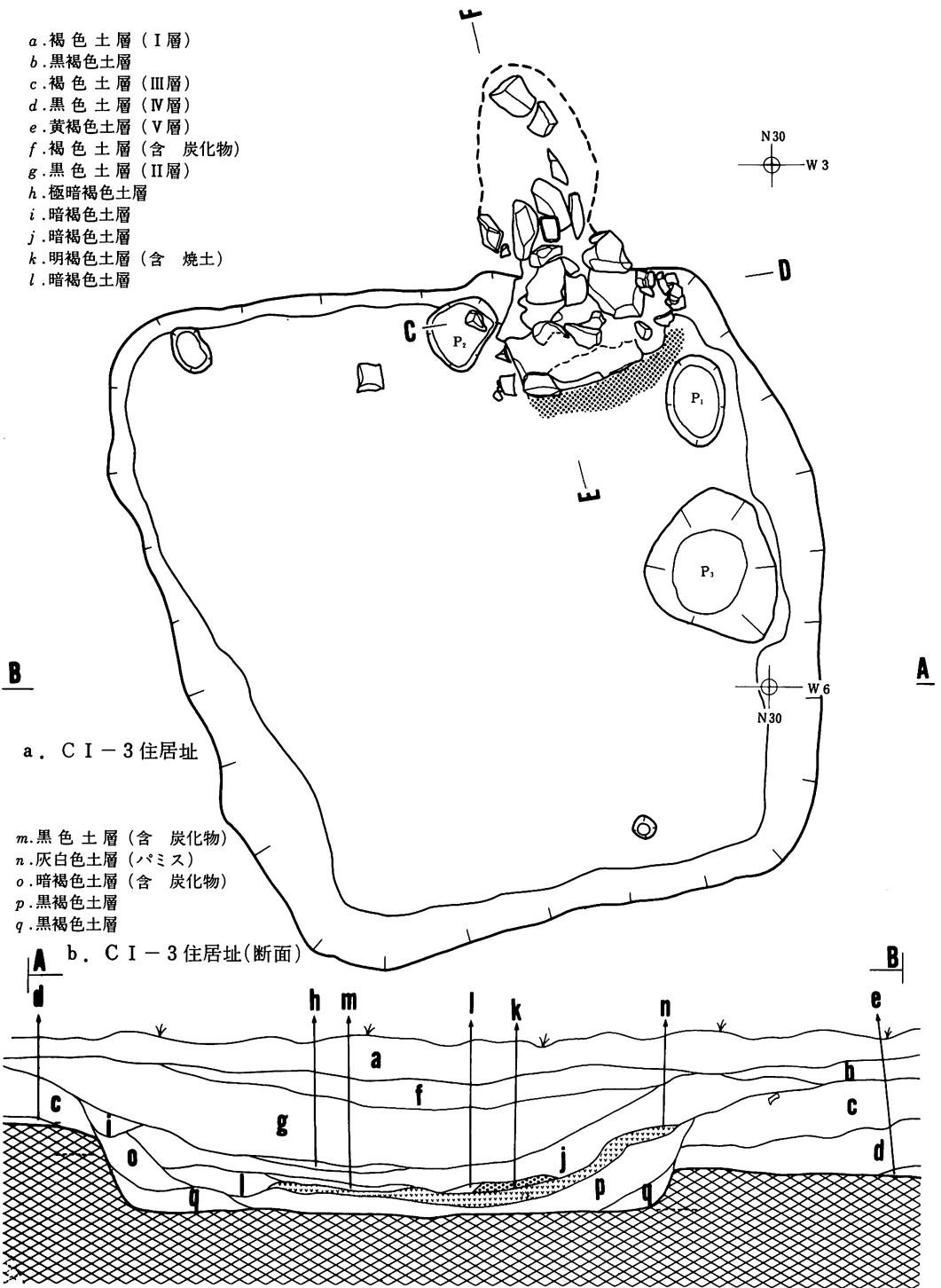


d. CI-2 住居址炉(断面)

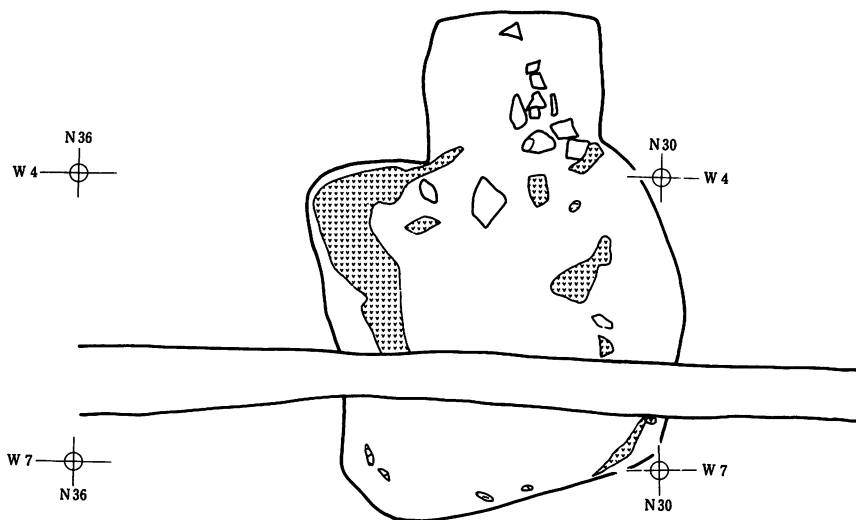
- a. 赤褐色土層 (烧土)
- b. 暗褐色土層
- c. 黄褐色土層

$s = \frac{1}{20}$

- a. 褐色土層 (I層)
- b. 黒褐色土層
- c. 褐色土層 (III層)
- d. 黒色土層 (IV層)
- e. 黄褐色土層 (V層)
- f. 褐色土層 (含炭化物)
- g. 黒色土層 (II層)
- h. 極暗褐色土層
- i. 暗褐色土層
- j. 暗褐色土層
- k. 明褐色土層 (含焼土)
- l. 暗褐色土層



図版 9

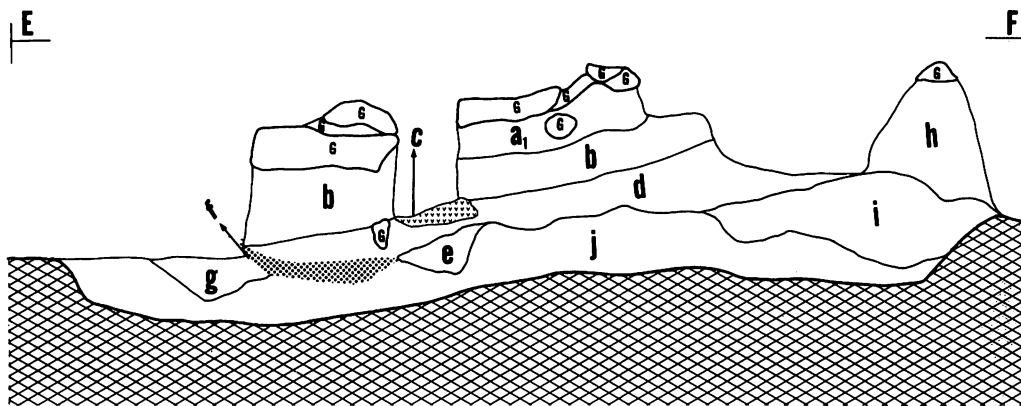
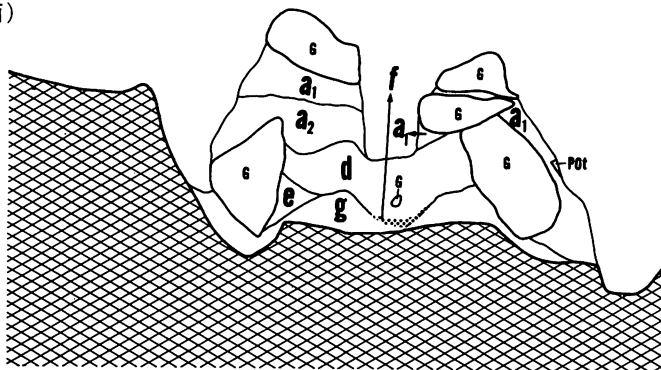


a. CI-3 住居址(検出状況)

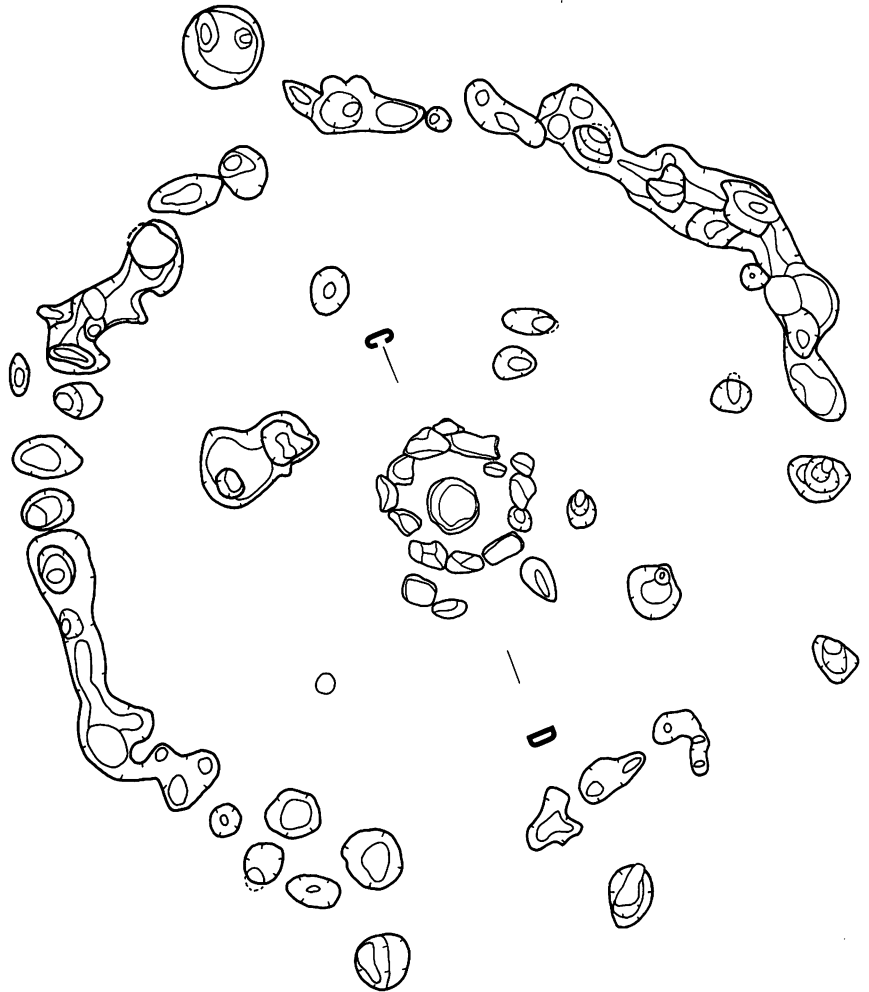
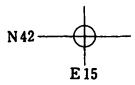
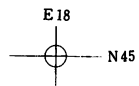
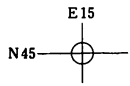
$s = \frac{1}{80}$

b. CI-3 住居址カマド(断面)

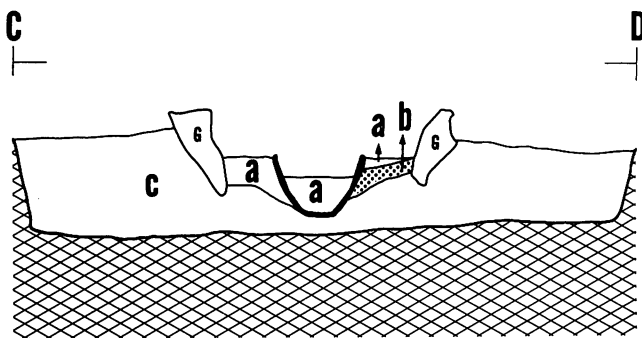
- a₁. 橙色土層
- a₂. 橙色土層 (含 黒褐色土)
- b. 黒色土層
- c. 灰白色土層 (ノミミス)
- d. 暗褐色土層 (含 焼土)
- e. 黒褐色土層 (含 炭化物)
- f. 赤褐色土層 (焼土)
- g. 黒色土層 (含 炭化物)
- h. 褐色土層 (III層)
- i. 黒色土層 (IV層)
- j. 黄褐色土層 (V層)



$s = \frac{1}{20}$



a. C II-1 住居址

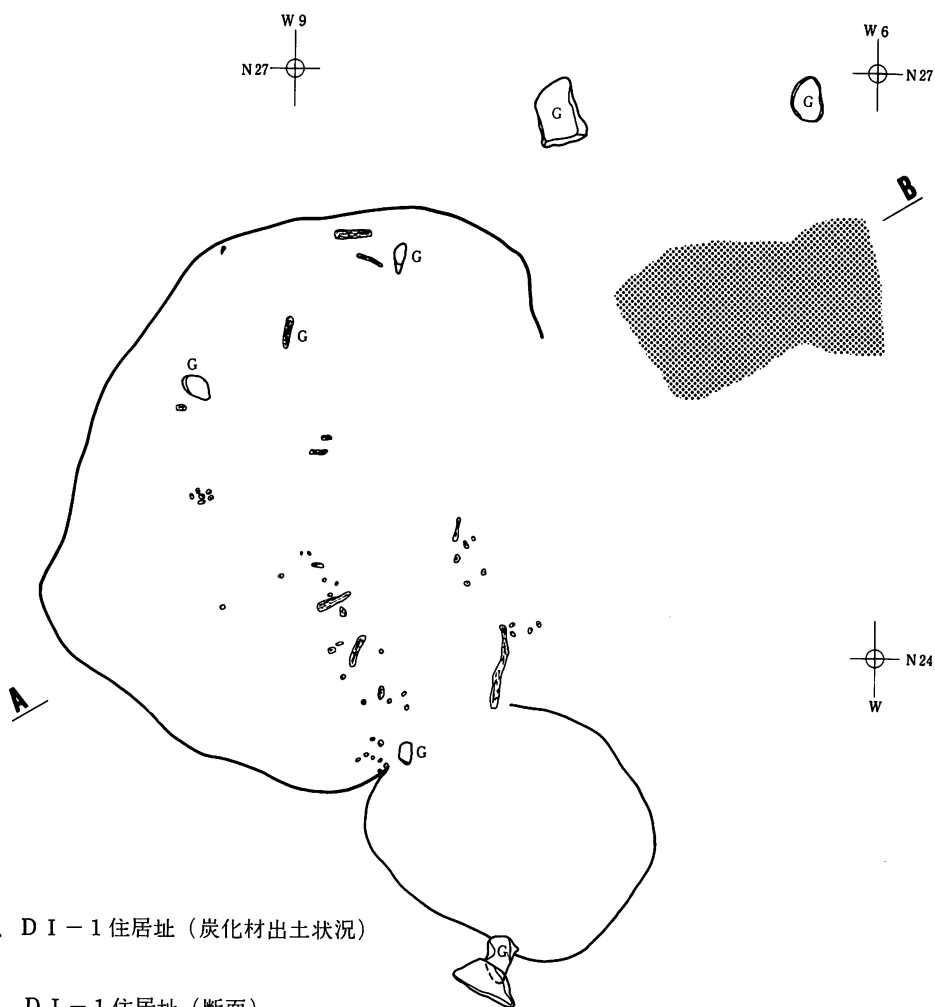


b. C II-1 住居址炉(断面)

- a. 黑褐色土層(含 烧土、炭化物)
- b. 暗褐色土層(烧土)
- c. 褐色土層

图版11

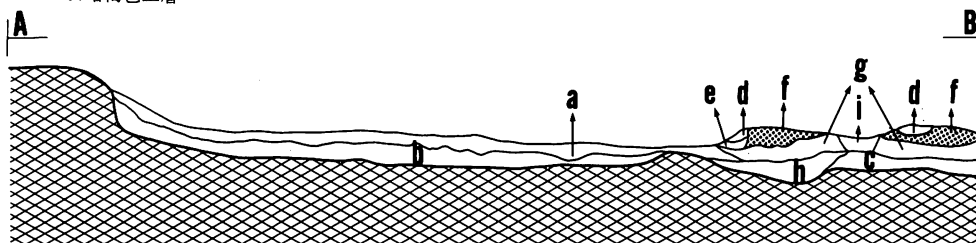
$S = \frac{1}{40}$



a. D I - 1 住居址 (炭化材出土状况)

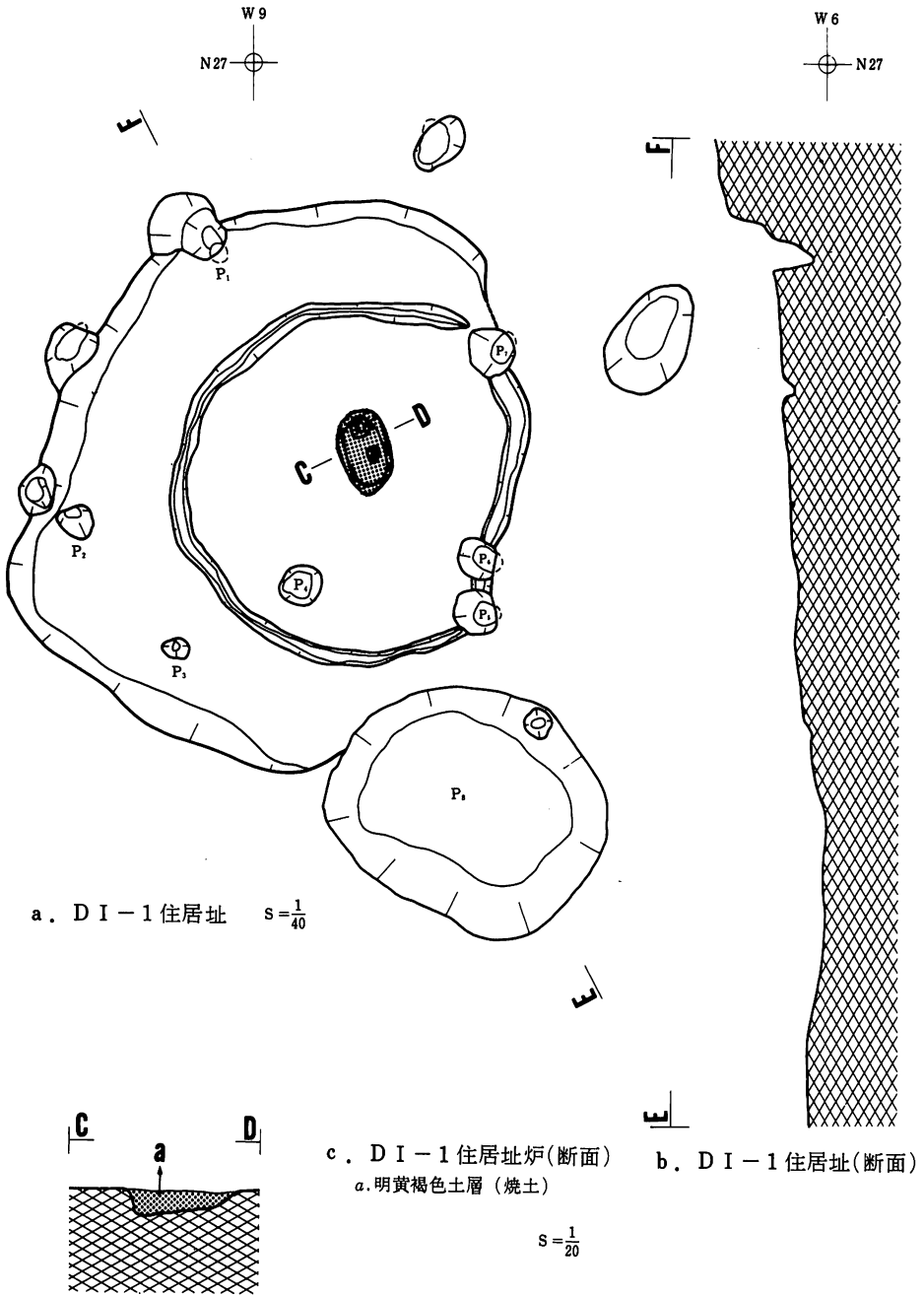
b. D I - 1 住居址 (断面)

- a. 黑色土層 (含 炭化物)
- b. 黑褐色土層 (含 炭化物)
- c. 黑色土層
- d. 褐色土層
- e. 黑色土層 (含 烧土)
- f. 赤褐色土層 (烧土)
- g. 明赤褐色土層 (含 烧土)
- h. 暗褐色土層 (含 烧土)
- i. 暗褐色土層

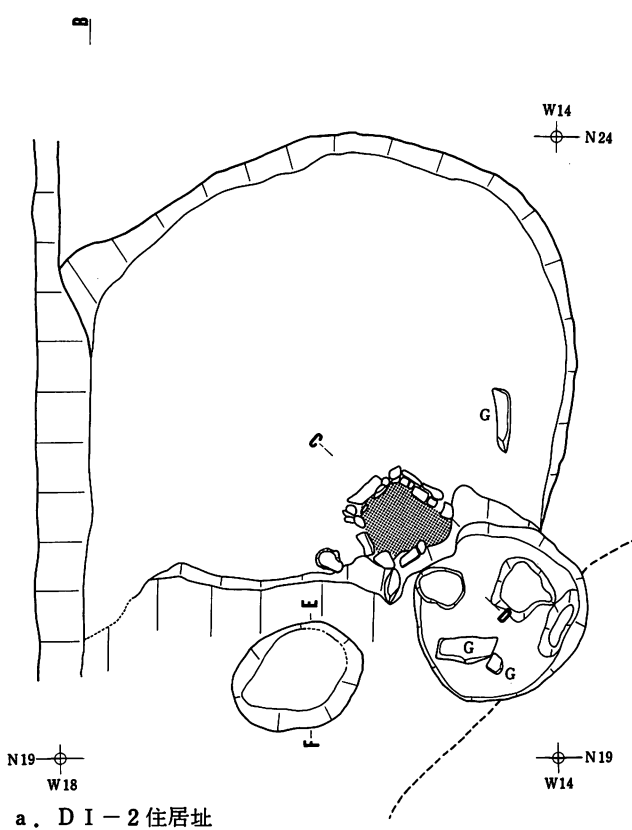


图版12

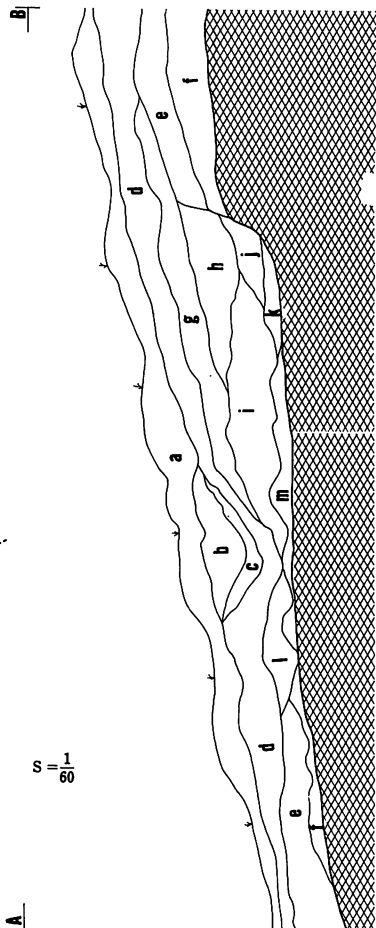
S = $\frac{1}{40}$



图版13



a. D I-2 住居址

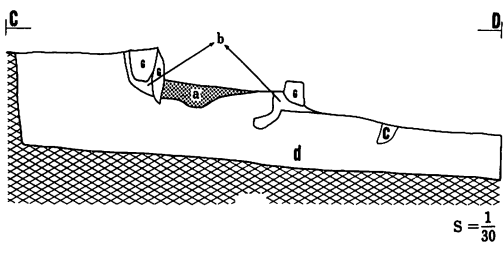


b. D I-2 住居址 (断面)

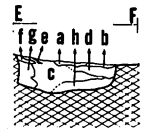
d. D I-2 住居址ピット(断面)

- c. D I-2 住居址炉(断面)
- | | | |
|---------------|----------------|--------------------|
| a. 暗赤色土層 (焼土) | a. 褐色土層 (I層) | h. 褐色土層 |
| b. 暗褐色土層 | b. 黒色土層 | i. 暗褐色土層 (含炭化物) |
| c. 暗褐色土層 | c. 暗褐色土層 | j. 黄褐色土層 (含焼土、炭化物) |
| d. 暗褐色土層 | d. 褐色土層 (III層) | k. 暗褐色土層 (含炭化物) |
| | e. 黒色土層 | l. 褐色土層 |
| | f. 黄褐色土層 (IV層) | m. 明黄褐色土層 |
| | g. 褐色土層 | |

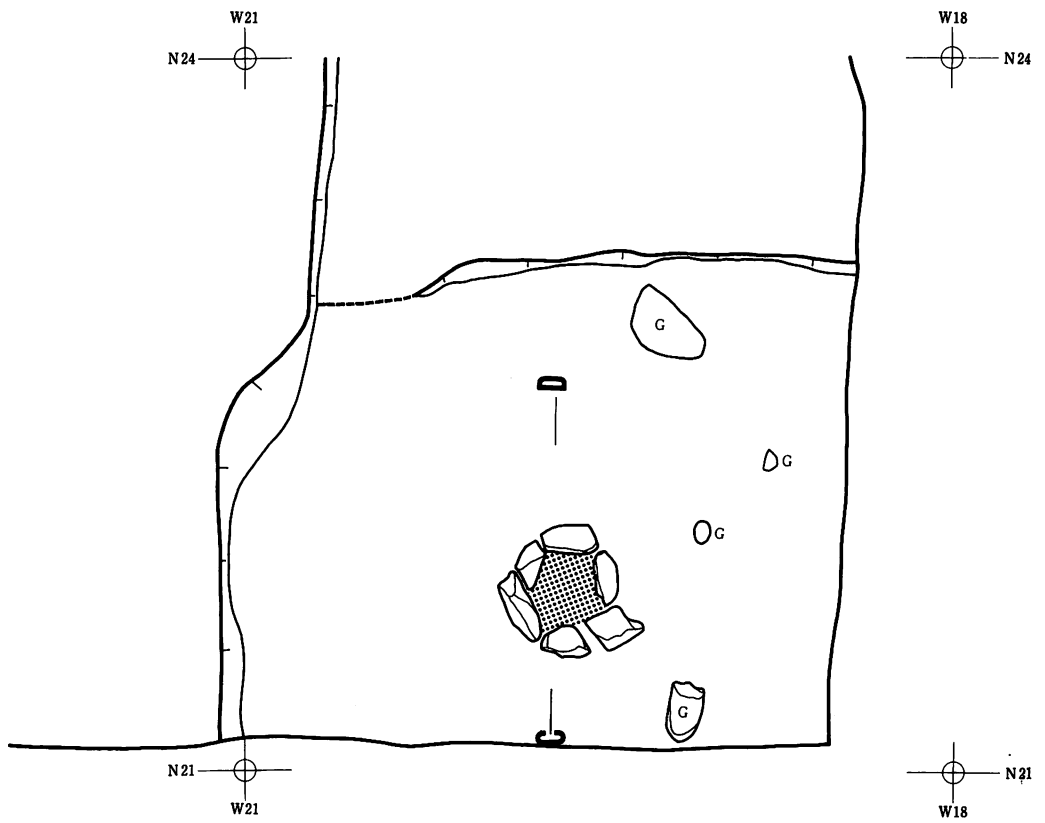
- d. D I-2 住居址ピット(断面)
- a. 暗褐色土層
 - b. 黒褐色土層
 - c. 黒褐色土層
 - d. 暗褐色土層
 - e. 暗褐色土層
 - f. 黄褐色土層
 - g. 暗褐色土層
 - h. 暗褐色土層



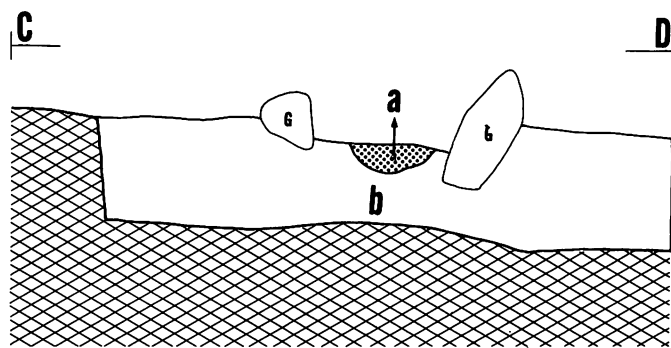
S = 1/30



S = 1/60

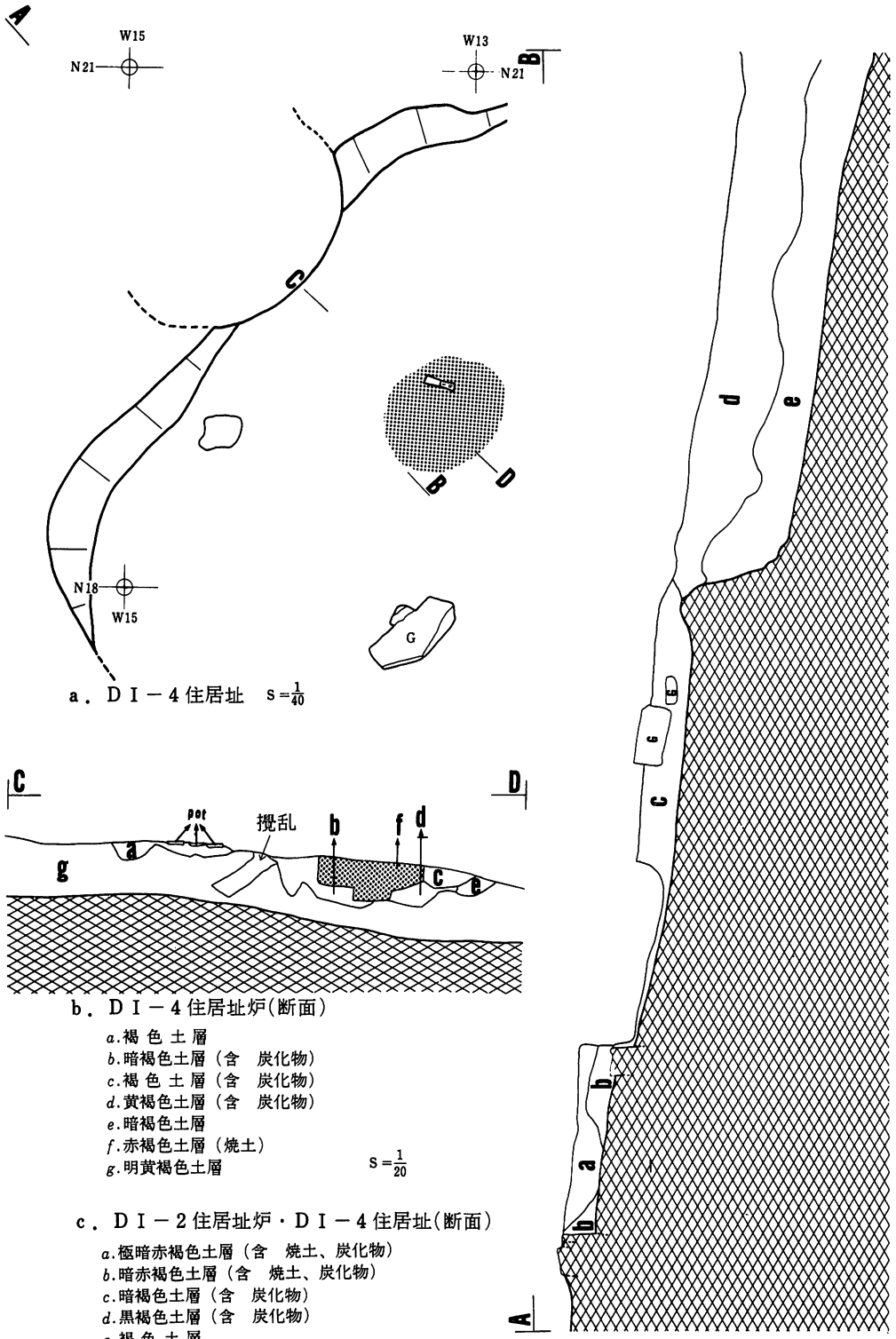


a. D I - 3 住居址 $s = \frac{1}{40}$



b. D I - 3 住居址炉(断面) $s = \frac{1}{20}$
 a. 明黄褐色土層(烧土)
 b. 赤褐色土層

图版15



a. D I - 4 住居址 $s = \frac{1}{40}$

b. D I - 4 住居址炉(断面)

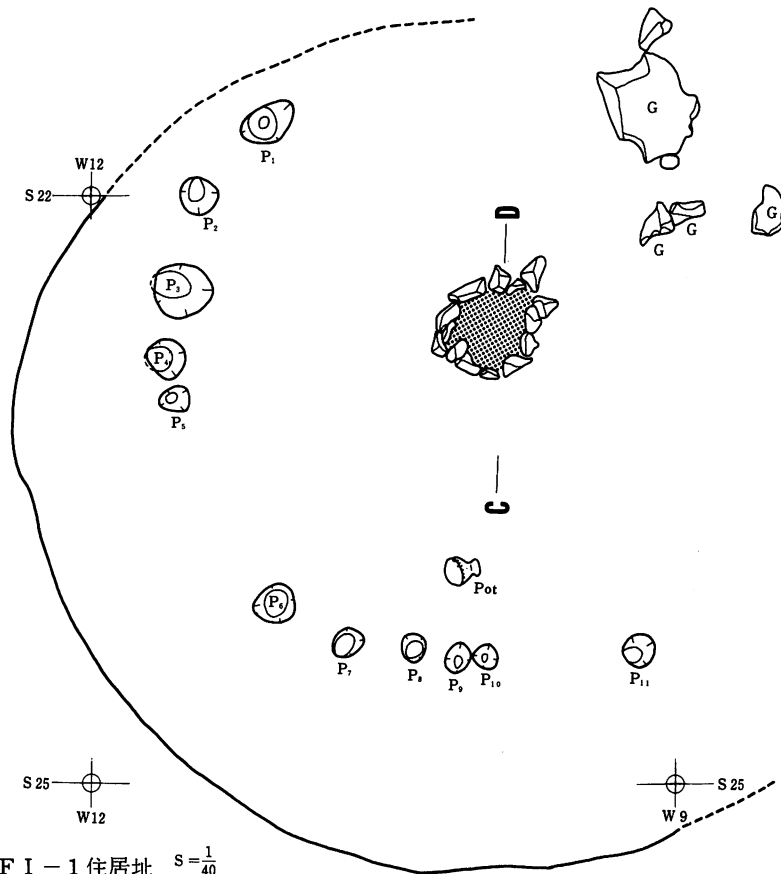
- a. 褐色土層
- b. 暗褐色土層 (含 炭化物)
- c. 褐色土層 (含 炭化物)
- d. 黄褐色土層 (含 炭化物)
- e. 暗褐色土層
- f. 赤褐色土層 (烧土)
- g. 明黄褐色土層

$S = \frac{1}{20}$

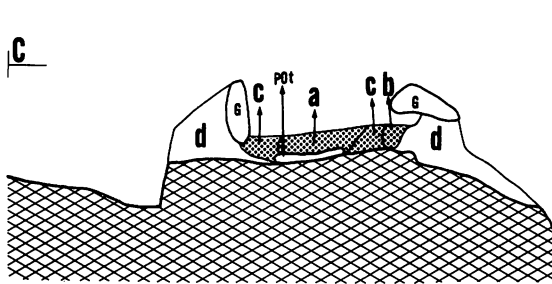
c. D I - 2 住居址炉 · D I - 4 住居址(断面)

- a. 極暗赤褐色土層 (含 烧土、炭化物)
- b. 暗赤褐色土層 (含 烧土、炭化物)
- c. 暗褐色土層 (含 炭化物)
- d. 黑褐色土層 (含 炭化物)
- e. 褐色土層

图版16

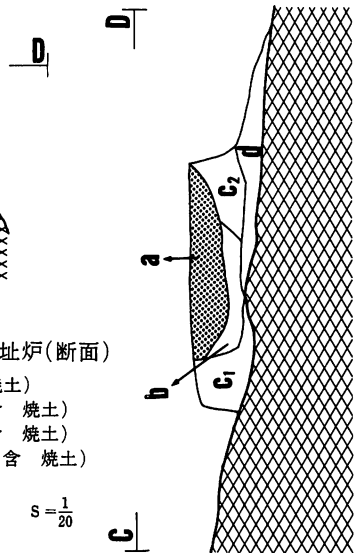


a. FI-1 住居址 $S = \frac{1}{40}$



b. FI-1 住居址炉(断面)

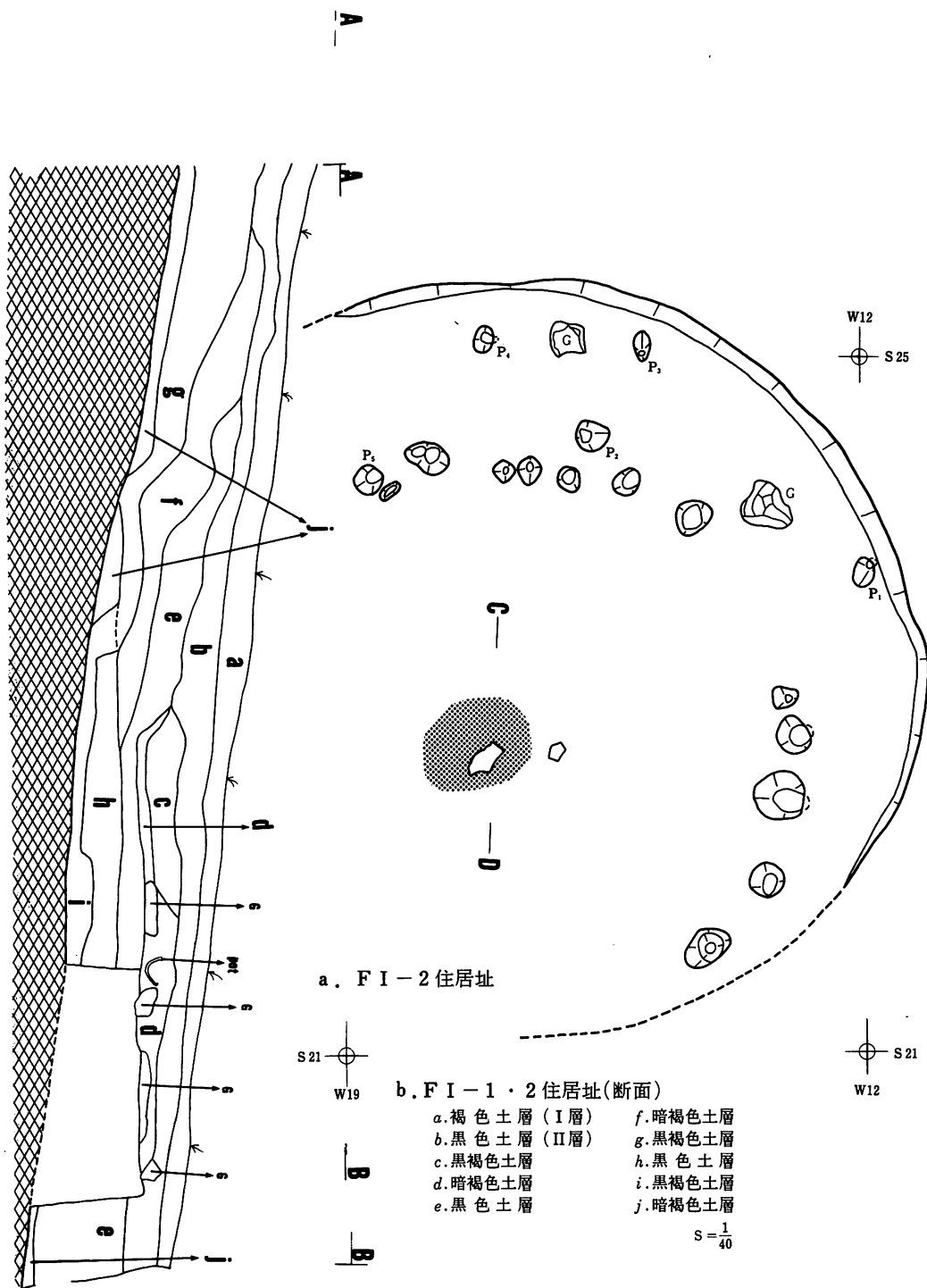
- a. 暗褐色土層(燒土)
- b. 赤褐色土層(燒土)
- c. 暗褐色土層(燒土)
- d. 極暗褐色土層(含炭化物)



c. FI-2 住居址炉(断面)

- a. 赤褐色土層(燒土)
- b. 暗褐色土層(含燒土)
- c1. 黑褐色土層(含燒土)
- c2. 極暗褐色土層(含燒土)
- d. 暗褐色土層

$S = \frac{1}{20}$



图版18

(2) ピット

A II 区

A II-51ピット (図版19-a・写真図版15-e)

北側古期沖積面の北東端、A II-3 住居址の西方に位置する。開口部径105cm±・底部径90cm±・深さ15cm±を計り、断面形が皿状を呈するピットである。埋土は黒褐色土によって構成されているが、単層であるため FieldCard にその性状を記載しただけで土層断面図は作成しなかった。出土遺物はない。

A II-52ピット (図版19-b・写真図版15-f、16-a)

北側古期沖積面の北東端、A II-3 住居址の東方に位置する。開口部径85cm±×70cm±・底部径90cm±・深さ60cm±を計り、断面形がフラスコ状を呈するピットである。埋土は焼土粒や炭化物を微量に含む暗褐色土・黒褐色土などによって構成されている。遺物として埋土の中間部分より縄文時代晩期に属すると思われる粗製の小型浅鉢の完形品が1点出土した。

C I 区

C I-51ピット (図版19-c)

北側古期沖積面の中央部北西に位置する。開口部径90cm±・底部径65cm±・深さ80cm±を計り、断面形が円筒状を呈するピットである。埋土は黒褐色土・褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

C I-52ピット (図版19-d・写真図版16-b)

北側古期沖積面の中央部北西に位置する。開口部径80cm±・底部径60cm±・深さ40cm±を計り、断面形が円筒状を呈するピットである。埋土は黒褐色土・褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

C I-53ピット (図版19-e・写真図版16-c・d)

北側古期沖積面の中央部北西に位置する。開口部径80cm±・底部径50cm±・深さ50cm±を計り、断面形がビーカー状を呈するピットである。埋土は黒褐色土・褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

C I-54ピット (図版20-a)

北側古期沖積面の中央部西側に位置する。C I-1 住居址によって東壁が切られ、西壁の一部が風倒木痕によって破壊されている。したがって規模・形状の詳細は不明であるが、残存部

分から推定すると、開口部長280cm±×200cm±・底部長240cm±×180cm±・深さ47cm±を計り平面形が長方形を呈するピットと考えられる。埋土は焼土粒や炭化物を少量含む暗褐色土・黒褐色土によって構成されている。遺物として埋土の上部から縄文時代前期に属すると考えられる深鉢の破片が1点出土した。

C I-55ピット (図版20-b・写真図版16-e・f)

北側古期沖積面の中央部に位置する。開口部径110cm±・底部径100cm±・深さ30cm±を計り、断面形がフラスコ状を呈するピットである。埋土は暗褐色土・黄褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

C I-56ピット (図版20-c・写真図版17-a)

北側古期沖積面の中央部、C I-2住居址の東方に位置する。開口部径70cm±・底部径40cm±・深さ60cm±を計り、断面形が漏斗状を呈するピットである。埋土は黒色土・黄褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

C II区

C II-51ピット (図版21-a・写真図版17-b・c)

北側古期沖積面の中央部、C I-52ピットと近接した位置にある。開口部径80cm±×55cm±・底部径50cm±・深さ65cm±を計り、断面形が円筒状を呈するピットである。埋土は黄褐色土がブロック状に混入する黒色土によって構成されている。出土遺物はない。

C II-52ピット (図版21-b・写真図版17-d)

北側古期沖積面の中央部北東に位置する。開口部径120cm±×100cm±・底部径110cm±×90cm±・深さ20cm±を計り、断面形が皿状を呈するピットである。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色土・にぶい黄褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

D I区

D I-51ピット (図版21-c・写真図版17-e)

北側古期沖積面の中央部南側に位置する。開口部径100cm±×90cm±・底部径90cm±・深さ40cm±を計り、断面形がピーカー状を呈するピットである。埋土は炭化物を少量含む暗褐色土・黒褐色土・褐色土によって構成されている。遺物として埋土の最上部から縄文時代中期～後期に属すると考えられる粗製の深鉢の破片が1点出土した。

F I 区

F I-51ピット (図版21-d)

南側古期沖積面に位置する。開口部径70cm±×50cm±・底部径65cm±×45cm±・深さ30cm±を計り、断面形がビーカー状を呈するピットである。埋土は黒褐色土・褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

F I-52ピット (図版22-a)

南側古期沖積面に位置する。開口部径60cm±・底部径40cm±・深さ30cm±を計り、断面形がビーカー状を呈するピットである。埋土は黒褐色土・褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

F I-53ピット (図版22-b・写真図版17-f)

南側古期沖積面に位置する。開口部径110cm±×90cm±・底部径80cm±×65cm±・深さ75cm±を計り、断面形が円筒状を呈するピットである。埋土は黒色土・黒褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

F I-54ピット (図版22-c・写真図版18-a)

南側古期沖積面に位置する。開口部径130cm±×120cm±・底部径120cm±×110cm±・深さ10cm±を計り、断面形が皿状を呈するピットである。埋土は黒褐色土・褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

F I-55ピット (図版22-d)

南側古期沖積面に位置する。開口部径45cm±・底部径40cm±・深さ30cm±を計り、断面形がビーカー状を呈するピットである。埋土は黒褐色土・黄褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

F I-56ピット (図版22-e・写真図版18-b・c)

南側古期沖積面に位置する。大小二つのピットからなるが、埋土の断面観察では切り合い関係がみられないため一つのピットとして登録した。小さなピットは、開口部径40cm±・底部径25cm±・深さ10cm±を計り断面形が皿状を呈する。大きなピットは、開口部径80cm±・底部径60cm±・深さ70cm±を計り断面形が円筒状を呈する。この大きなピットの底部には径15cm±・深さ10cm±の柱穴状の小ピットがみられる。埋土は黒色土・黒褐色土によって構成されている。出土遺物はない。

(3) 陥し穴状遺構

F I -101 陥し穴状遺構 (図版23-a・写真図版18-d・e)

丘陵崖線寄りの南側古期沖積面(標高約297m)に位置する。長軸は斜面に対してやや平行なN-67°-Wの方向を示す。開口部径400cm±×40cm±・底部径380cm±×20cm±・深さ130cm±を計る。横断面形は、開口部と底部との中間部分がくびれをもち「Y」字状または漏斗状を呈する。底部はほぼ平坦であり、東側末端部が奥に挟りこまれている。埋土は黄褐色土・黒褐色土によって構成されている。当遺構は検出状況や土層断面の観察結果からみて、IV層上面より掘りこんで作られ廃棄後最終的に埋土の最上部を占める黄褐色土(V層起源の火山灰土)によって閉塞されたものと考えられる。出土遺物はない。

(4) 炉 址

A II 区

A II -151 炉址 (図版23-b・写真図版19-a・b)

北側古期沖積面の北東端、A II -3 住居址の南東側に検出された土器埋設炉である。土器は直立に埋設されており、埋設部分の掘りこみは皿状を呈する。

炉は全体に良く焼成を受けており、埋設土器内部やその周辺には現地性の焼土が認められる。土器は縄文時代中期～後期に属すると考えられる粗製の深鉢で、口縁部～体部上半部が欠如している。その他の出土遺物はない。

C I 区

C I -151 炉址 (図版23-c・写真図版19-c・d)

南西の段丘崖上方に検出された石囲炉である。北側炉縁の構成礫が欠如しているが、残存部分から推定すると45cm±×40cm±の不整な方形を呈するものと考えられる。構成礫は粒径25cm±の安山岩類の垂角礫で横位に埋置されている。炉は良く焼成を受けている。出土遺物はない。

C II 区

C II -151 炉址 (図版24-a・写真図版19-e・f)

北側古期沖積面の東側に検出された石囲炉である。粒径20cm±～40cm±の安山岩類の垂角礫を横位に埋置して、50cm±×45cm±の長方形状につくられている。長軸方向の炉縁には板状の

大きな垂角礫を使用している点特徴的である。炉は良く焼成を受けている。炉の埋土上部から縄文時代前期～中期に属すると考えられる土器が1点出土した。

D I 区

D I - 151 炉址 (図版24 - b ・ 写真図版20 - a)

C I - 151 炉址の南側の同じ面上に検出された石囲炉である。南側の構成礫は攪乱により消失しているが、残存部分から推定すると径50cm±の円形を呈すものと考えられる。構成礫は粒径25cm±の安山岩類の垂角礫で、横位に埋置されている。炉は良く焼成を受けている。炉の西側周辺には炭化物が少量散在している。出土遺物はない。

D I - 152 炉址 (図版25 ・ 写真図版20 - b ・ d)

北側古期沖積面の南西に検出された石囲炉である。径60cm±の円形を呈し、粒径20cm±～30cm±の安山岩類の垂角礫～垂円礫が横位に埋置されている。北側炉縁の一部は構成礫が二重になっており、また南側炉縁の構成礫の一部が欠如している。炉は良く焼成を受けている。炉の周辺にはかきだされたと考えられる黒色土混りの焼土がみられる。炉内の焼土から縄文土器の細片が1点出土した。

D II 区

D II - 151 炉址 (図版26 - a ・ 写真図版20 - c ・ e)

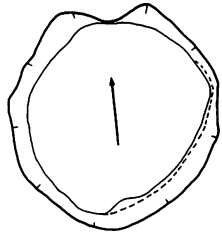
北側古期沖積面の南東に検出された石囲炉である。径80cm±・深さ15cm±の皿状の掘りこみに粒径25cm±の安山岩類の扁平な垂角礫を敷きつめ、この上に粒径15cm±～20cm±の垂角礫を縦位または斜位に埋置して石囲部分が構築されている。石囲いは径35cm±の円形状の平面形をもつ。炉はあまり焼成を受けていず炉内には焼土がほとんどみられないが、炉の周辺には現地性の焼土が少量認められる。出土遺物はない。

(5) 埋設土器遺構

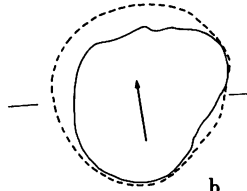
A II - 201 埋設土器遺構 (図版26 - b ・ 写真図版20 - f、21 - a ・ b)

北側古期沖積面の北東端、A II - 3 住居址の北東壁寄りに検出された。土器は検出面より25cm±の深さに直立に埋設されており、土器内は炭化物を微量に含む黒褐色土・褐色土・暗褐色土で充填されている。埋設土器は縄文時代晩期に属すると考えられる粗製の深鉢でほぼ完形で

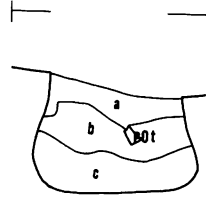
ある。その他の出土遺物はない。



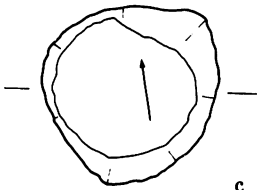
a. A II-51ピット



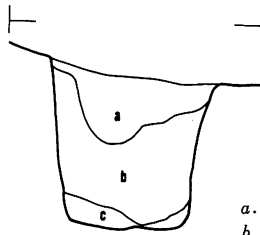
b. A II-52ピット



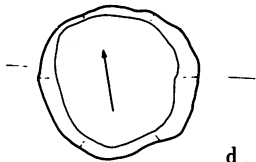
a. 暗褐色土層
b. 黒褐色土層
c. 黒褐色土層



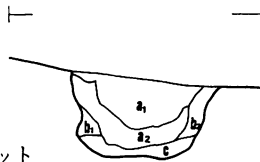
c. C I-51ピット



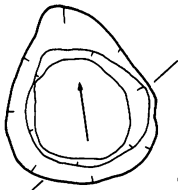
a. 黒褐色土層
b. 黒褐色土層
c. 褐色土層



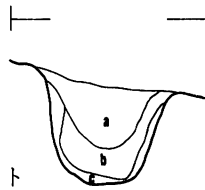
d. C I-52ピット



a₁. 赤黒色土層
a₂. 赤黒色土層
b₁. 明褐色土層
b₂. 黒褐色土層
c. 褐色土層

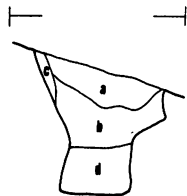
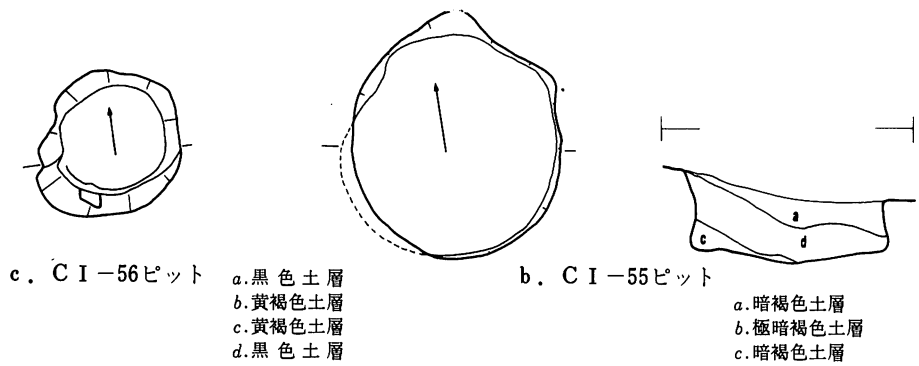
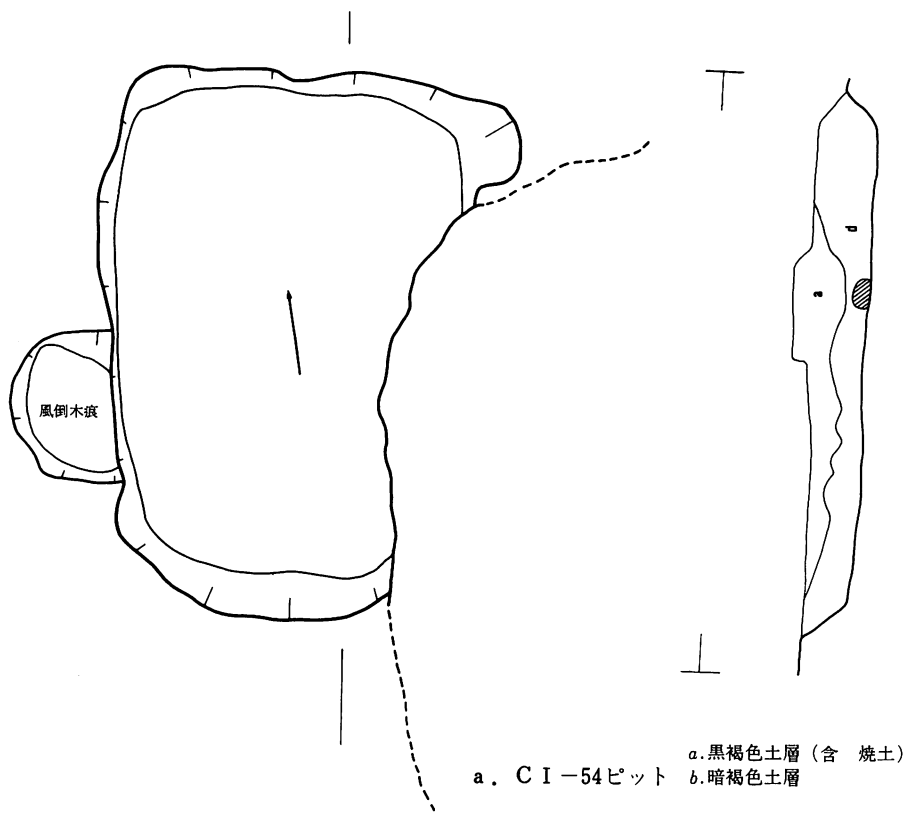


e. C I-53ピット

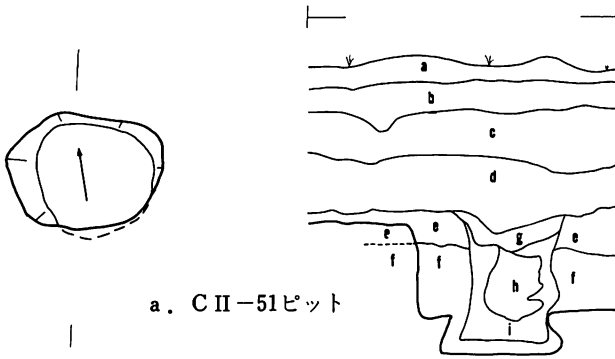


a. 黒色土層
b. 黒褐色土層
c. 暗褐色土層

s = $\frac{1}{40}$

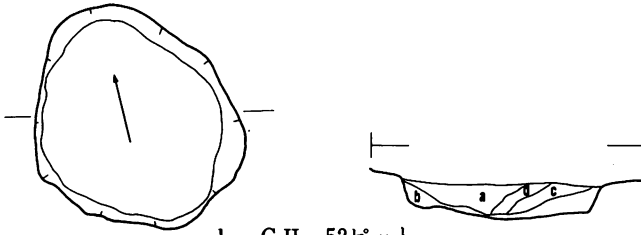


S = $\frac{1}{40}$



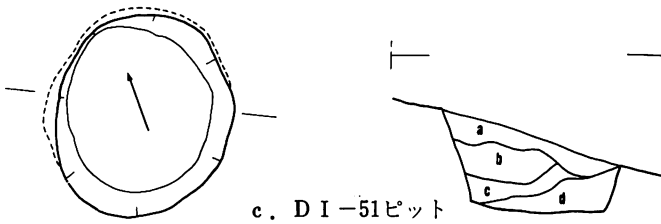
a. C II-51ピット

- a. 褐色土層 (I層)
- b. 黒色土層 (II層)
- c. 褐色土層 (III層)
- d. 黒色土層 (IV層)
- e. 黄褐色土層 (V層)
- f. にぶい黄褐色土層 (VI層)
- g. 黒色土層
- h. 黒色土層
- i. 黒色土層



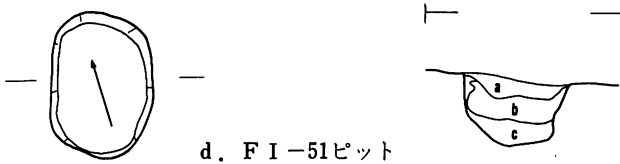
b. C II-52ピット

- a. 黒色土層
- b. 黒褐色土層 (含炭化物)
- c. 黒褐色土層
- d. 黄褐色土層



c. D I-51ピット

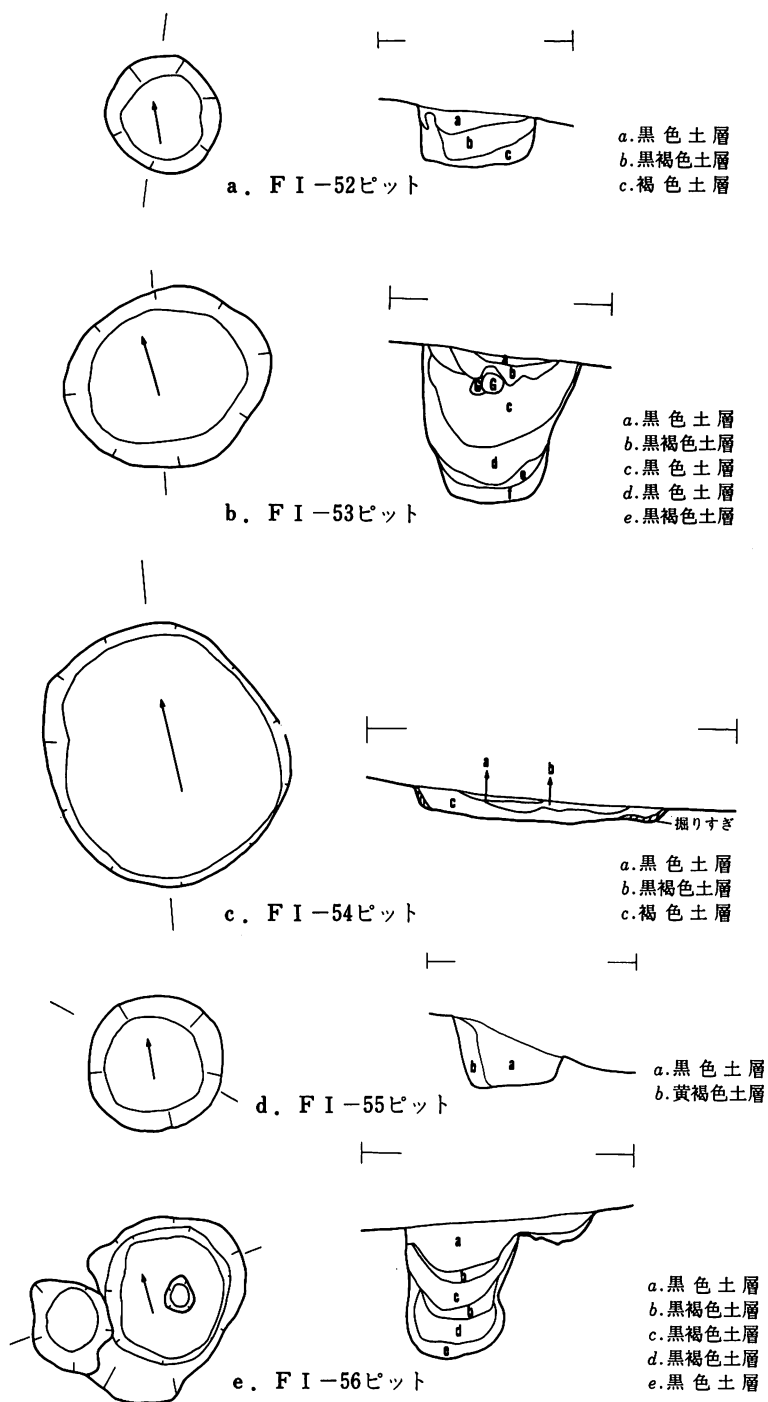
- a. 暗褐色土層 (含縄文土器片)
- b. 黒褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 褐色土層



d. F I-51ピット

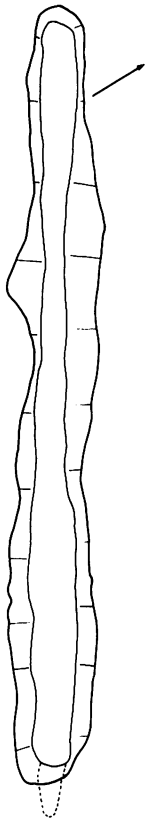
- a. 黒色土層
- b. 黒褐色土層
- c. 明褐色土層

$$S = \frac{1}{40}$$

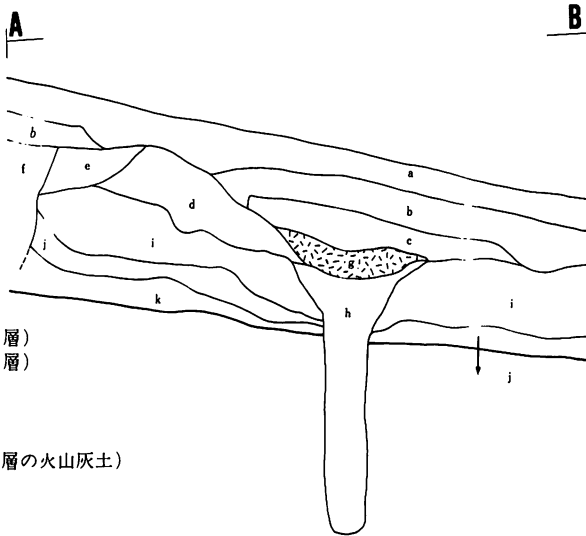


S = $\frac{1}{40}$

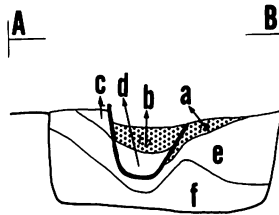
図版22



- a. 褐色土層 (I層)
- b. 黑色土層 (II層)
- c. 明褐色土層
- d. 黑色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 黄褐色土層 (V層の火山灰土)
- g. 暗褐色土層
- h. 黑色土層
- i. 黑褐色土層
- j. 暗褐色土層 (含炭化物)
- k. 黑色土層

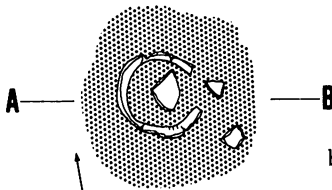


a. FI-101 陥し穴状遺構 $S = \frac{1}{4C}$



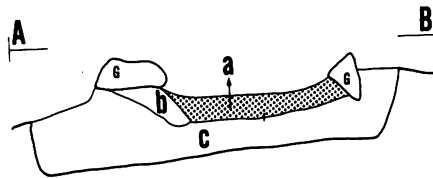
b. AII-151 炉址

- a. 黄褐色土層 (焼土)
- b. 暗赤褐色土層 (焼土)
- c. 赤褐色土層
- d. 暗赤褐色土層
- e. 黑色土層
- f. 褐色土層



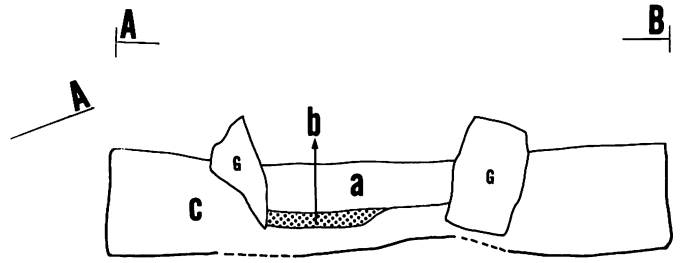
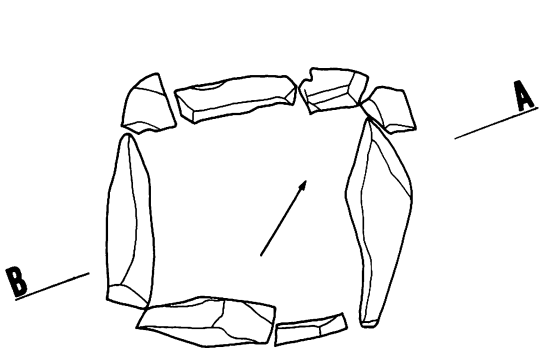
c. CI-151 炉址

$S = \frac{1}{20}$



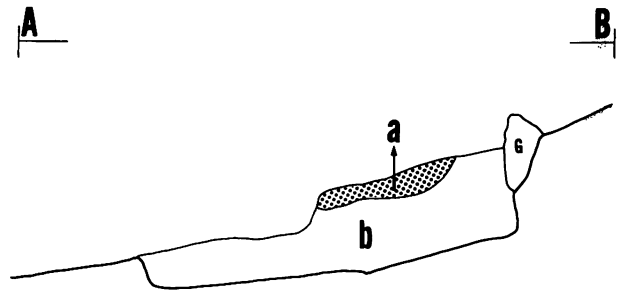
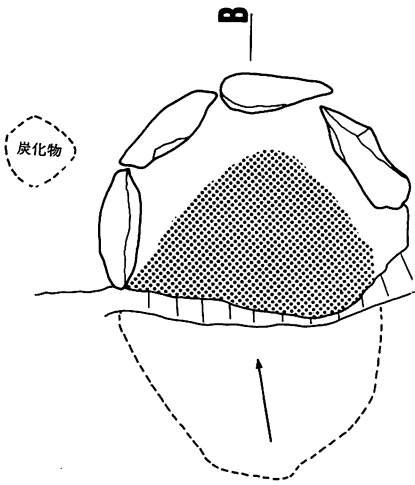
- a. 赤褐色土層 (焼土)
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層

図版23



a. C II-151 炉址

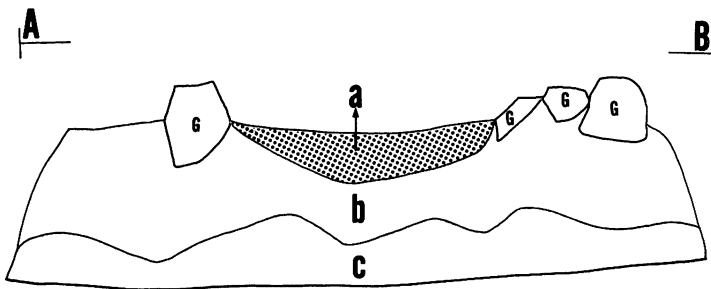
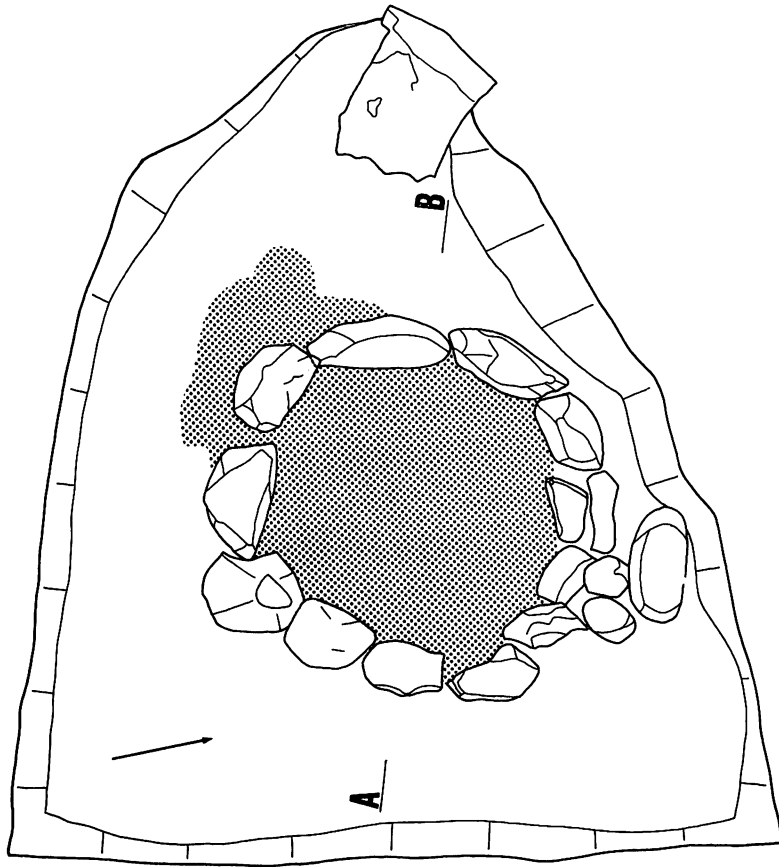
- a. 赤褐色土层 (含 炭化物)
- b. 赤褐色土层 (烧土)
- c. 褐色土层



b. D I-151 炉址

- a. 赤褐色土层 (烧土)
- b. 褐色土层

$$s = \frac{1}{20}$$

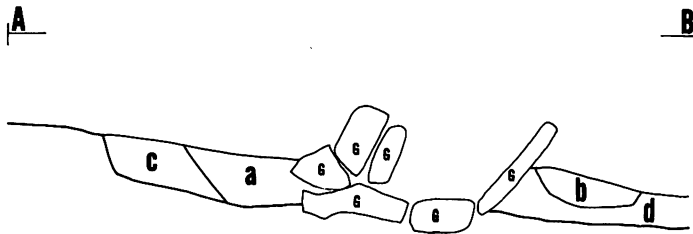
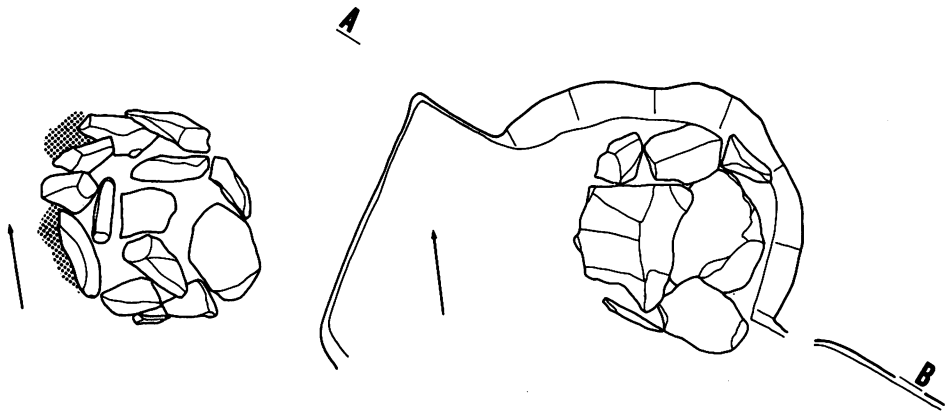


D I - 152 炉址

- a. 明赤褐色土层 (烧土)
- b. 黑色土层 (IV层)
- c. 黄褐色土层 (V层)

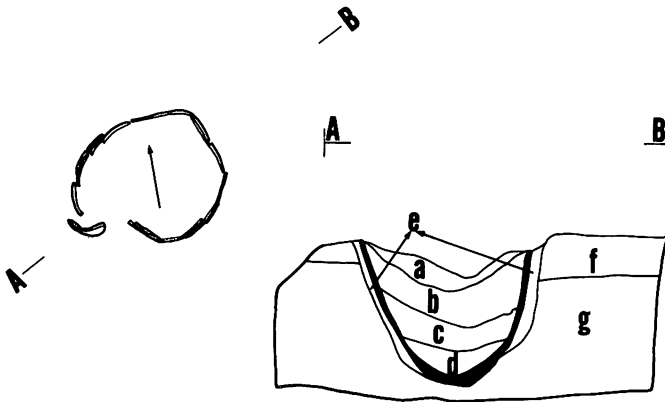
S = $\frac{1}{20}$

图版25



a. D II-151 炉址

- a. 褐色土層 (含 粗粒礫)
- b. 黑褐色土層
- c. 黄褐色土層 (含 粗粒礫)
- d. 黄褐色土層 (含 炭化物)



b. A II-201 埋設土器遺構

- a. 黑褐色土層 (含 炭化物)
- b. 黄褐色土層
- c. 黄褐色土層
- d. 黄褐色土層 (含 炭化物)
- e. 暗褐色土層 (含 炭化物)
- f. 黄褐色土層
- g. にぶい黄褐色土層

S = $\frac{1}{20}$

5. 出土遺物

(1) 分類基準

1) 土器

野駄遺跡の遺構内外から出土した土器を一括して下記の基準で分類した。

① 縄文土器 時期別に分け、第Ⅰ群～Ⅵ群とした。

第Ⅰ群土器

縄文時代早期中葉に位置づけられる土器群である。

A類 無文のもの

B類 文様をもつもの

第Ⅱ群土器

縄文時代早期末葉に位置づけられ、底部の形態が乳頭状突起をもつ丸底と考えられる土器群である。

A類 器表面にのみ地文をもつもの

B類 器表裏面に地文をもつもの

第Ⅲ群土器

縄文時代前期に位置づけられる土器群である。

A類 前期前葉のもの

B類 前期中葉～末葉のもの

第Ⅳ群土器

縄文時代中期に位置づけられる土器群である。

A類 中期前葉のもの

B類 中期中葉のもの

C類 中期後葉のもの

D類 中期末葉のもの

第Ⅴ群土器

縄文時代後期に位置づけられる土器群である。

A類 後期前葉のもの

B類 後期中葉～末葉のもの

第Ⅵ群土器

縄文時代晩期に位置づけられる土器群である。

A類 晩期中葉のもの

B類 晩期後葉のもの

② 弥生土器

③ 土師器

A類 坏

B類 甕

④ 須恵器

2) 石 器

土器と同様に遺構内外から出土した石器を一括して、その形態および製作技法により下記の基準で分類した。

第Ⅰ群 「旧石器」的要素をもつ石器

出土状態、形態、製作技法からみて「旧石器」ではないかと考えられる石器群である。

第Ⅱ群 石 槍

基部と尖頭部からなる槍先形の打製石器で、最大長 5 cm・最大厚 2 cm以上の石器である。

A類 基部がほぼ平坦なもの

B類 基部が凸状のもの

第Ⅲ群 石 鏃

基部と尖頭部からなる打製石器で、最大長 5 cm未満・最大厚0.5mm以下の石器である。

A類 基部が平坦なもの

B類 基部が凸状のもの

C類 基部が凹状のもの

第Ⅳ群 石 匙

石匙、石匕と呼称され、つまみ部と身幅な刃部からなる石器である。つまみ部は両面のノッチ加工により作り出されており、刃部は基本的に片面加工である。

A類 石器の長軸方向につまみ部をもつもの

B類 石器の長軸方向に対して左側につまみ部をもつもの

C類 石器の長軸方向に対して直角方向につまみ部をもつもの

第Ⅴ群 石 錐

基部と尖頭状の錐部からなる打製石器である。

第Ⅵ群 筒状石器

筥状石器、石筥と呼称され、筥形を呈する打製石器で原則として片面加工されている石器である。

A類 刃部の縦断面形がほぼ平坦なもの

B類 刃部の縦断面形が凸状のもの

C類 刃部の縦断面形が凹状のもの

第VII群 ピエス・エスキーユ

ピエス・エスキーユ、楔形石器と呼称され、平面形がほぼ四辺形を呈し、その両面に上下両端から走る細長い剥離痕がみられる石器である。

第VIII群 スクレイパー

剥片を素材とし、その一端に嘴状の刃部をもつ石器である。

A類 石器の長軸に直交する縁辺に主要刃部が形成されているもの

B類 石器の長軸に平行する縁辺に主要刃部が形成されているもの

C類 石器の全周縁に刃部が形成されているもの

第IX群 不定形石器

第I～VIII群に該当しない不定形な剥片石器で、その縁辺の一部に刃部加工がなされているものである。

第X群 石 斧

形態が斧状のもので、両面加工されている石器である。

A類 打製石斧

B類 磨製石斧

第XI群 半円状扁平打製石器

扁平な自然礫を素材として、その周縁が半円状～隅丸長方形に打ち欠かされている石器である。

A類 一部の周縁に敲打痕のないもの

B類 全周縁に敲打痕のあるもの

第XII群 凹 石

自然礫の一部に数個の小さな凹みをもつ石器である。

第XIII群 磨 石

自然礫の一部に磨面をもつ石器である。

A類 平面形が棒状の自然礫を素材とするもの

B類 平面形が球状の自然礫を素材とするもの

第XIV群 石 皿

自然礫の中央部を凹めた皿状の石器である。

第 XV 群 剣状磨製石器

剣状の形態を示す磨製石器である。

(2) 遺構内の出土遺物

1) 竪穴住居址

A II - 1 住居址 (図版30-20~24、33-63)

床面上の出土遺物はなく埋土中から土器片と石器が出土した。20は横位の羽状縄文を地文とするものである。胎土に粗粒の砂をやや多く含んでいるが、焼成は良好で堅い器面となっている。口縁部内面には縦位のミガキが施されている。また口縁部には外面から穿孔した補修孔がみられる。21は20と同じ器形の体部片と考えられるものである。22は口唇部に縦位の羽状縄文が施されており、その下は横位のナデによって調整されている。23は沈線と磨消縄文によって入組文状に施文された浅鉢の体部片である。内面はナデにより調整されている。24は磨消縄文手法による文様構成がなされている浅鉢の体部片である。内面は入念なミガキが施されている。色調はいずれも黄橙色を示す。20~23は第V群土器B類(以下「VB」のように表記する)、24はVI Bに属する土器と考えられる。石器は第VIII群A類(以下土器と同じように「VIII A」の如く表記する)に属するスクレイパー(63)である。背面は全面加工されているが、腹面は一部の周辺加工がなされているだけである。末端部に押圧剥離が施され、刃部が形成されている。石質は珪質頁岩である。

A II - 2 住居址 (図版27-1・2・4、30-25~39、33-65~68・写真図版22-1~3)

床面上の出土遺物は、炉の周辺から多く出土した。土器はほぼ完形の2点以外は破片である。1は坏状の浅鉢である。口唇部に4個の突起を設け、さらにその間に2個ずつの小突起を配している。口縁部外面には2条の平行沈線が巡らされている。また口唇部上面・内面にも沈線が施されている。底部は外面に沈線が円形に巡らされ、台状に作り出されている。内外面とも入念なミガキが施され、光沢のある器面となっている。2ヶ所に補修孔がみられる。焼成は良好であり、色調は橙色を呈する。口径15.2cm・底径5.6cm・器高5.0cmを計る。2は小型の浅鉢である。内外面の口縁部~体部は横位のナデ調整で、外面の体部~底部にかけてはミガキが加えられている。胎土には細粒の砂が少量含まれている。焼成は良好であり、色調はにぶい黄橙色を呈する。口径8.4cm・底径5.0cm・器高4.1cmを計る。土器片は、浅鉢・壺・皿・注口土器のものである。浅鉢には、雲形文のもの(26・27)や平行沈線文のもの(25・28・29)がある。

注口土器はX字文のもの(30・31)である。これらの土器片は色調が橙色～暗褐色を示す。いずれの土器もVI Aに属するものと考えられる。石器としてVIII Bのスクレイパー2点(65・66)とX III Bの磨石2点(67・68)が出土した。スクレイパーはいずれも半両面の周辺加工であるが、65は66に比べて細かい押圧剝離が施されている。石質は珪質頁岩である。67の磨石は全面が研磨されて球状を呈する。68は二面に凹みをもち、凹石とも考えられるものである。しかしこれらの凹みの部分にも研磨が及んでいることからみて、最終的には磨石として使用されたものと思われる。石質は輝石安山岩である。

埋土中の遺物は土器だけであり、主に埋土の上部から出土した。4は埋土最上部から出土した一括土器の深鉢である。口縁部が外反し、屈曲した頸部と最大径となる肩部をもつ。体部から底部にかけては直線的である。外面体部にスズ状の付着物がみられる。焼成はやや良好であり、色調はにぶい黄褐色を呈する。口径28.0cm・底径9.3cm・器高41.4cmを計る。その他の土器は、深鉢・浅鉢・壺・注口土器の破片である。浅鉢には工字文のもの(34・35)と雲形文のもの(38)とがある。壺(37)は数条の平行沈線と刻み目が施された隆起線をもつものである。注口土器には、刻目文だけのもの(39)とX字文のもの(36)とがある。これらの土器片は色調が橙色～暗褐色を示す。36・38・39はVI A、34・35・37はVI Bに属する土器と考えられる。

A II - 3 住居址 (図版27-5、31-40~45、33-64・写真図版22-4)

床面上から土器と石器が出土した。土器は北壁寄りから出土したほぼ完形の埋設土器以外は破片である。埋設土器(5)は、円筒形状の粗製の深鉢であり口縁部が内湾みである。体部から底部にかけては直線的である。地文として横位の羽状縄文が施されているが、器表面が磨滅して地文が不明瞭な部分もみられる。胎土に粗粒の砂をやや多く含みザラザラした器面となっている。焼成はやや良好で、色調は橙色を呈する。口径26.0cm・底径8.0cm・器高31.3cmを計る。土器片は深鉢のものである。口縁部に沿って一条～数条の磨消縄文帯をもつもの(40~43)と弧状沈線による入組状の磨消縄文をもつもの(44・45)とがある。これらの色調は橙色～黄橙色を示す。以上の土器はV Bに属するものと考えられる。石器はVIII Aのスクレイパー(64)である。背面は全面加工されているが、腹面は周辺加工されているだけである。先端部に押圧剝離が加えられ刃部が作り出されている。石質は珪質頁岩である。

C I - 1 住居址 (図版31-46~55、34-69~74・写真図版22-5~10)

床面上の出土遺物は土器片と石器である。土器片は深鉢の破片で、口縁部文様帯をもつもの(46~48)と地文だけのもの(49~52)とに分けられる。46は横位と斜位の燃糸圧痕によって口縁部文様帯が構成されている。48は縦位と斜位の燃糸圧痕によって幾何学的な文様帯が構成されている。地文だけのものには、斜縄文が施されているもの(49)と羽状縄文が施されているもの(50~52)とがある。49は頸部の地文の上に横位の燃糸圧痕が加えられている点で特異

である。いずれの土器片も胎土に繊維をやや多く含んでいる。色調はにぶい黄橙色～褐色を示す。これらのものはⅢBに属する土器と考えられる。石器としてⅣBの石匙1点(69)とⅧAのスクレイパー1点(70)が出土した。69はバルブをつまみ部として加工し、側縁に刃部を作り出している。背面は全面加工されているが、腹面は一側縁の周辺加工がなされているだけであり第一次剝離面が残されている。全体として粗い剝離調整の石匙である。石質は珪質頁岩である。70は片面周辺加工のものであり、先端部に刃部が作り出されている。石質は凝灰質珪質泥岩である。

埋土中からは土器片と石器が出土した。土器片は深鉢の破片であり、斜縄文を地文とする(53～55)。床面上出土の土器片と同じように胎土に繊維を含む。石器はⅧAのスクレイパー2点(71・72)とⅧBのスクレイパー2点(73・74)である。74は背面を全面加工している。以上のスクレイパーは、刃部の剝離調整が全体的に入念である。石質はいずれも珪質頁岩である。

C I - 2 住居址 (図版27-3・写真図版24-1)

炉の東側の床面上から深鉢の一括土器(3)が出土した。口縁部に扇状突起をもち隆起線文によって加飾された土器である。隆起線文上に縄圧痕と割りばし状の工具による刻み目が施されている。また隆起線文間の地の部分には同じ工具による横位方向の刺突がみられる。体部には地文として斜縄文が施されており、この部分の外面にススが付着している。口縁部の一部と体部下半部および底部が欠如している。色調はにぶい黄橙色を呈し、口径21.4cmを計る。この土器はⅣBに属するものと考えられる。

なお埋土中からは遺物が出土しなかった。

C I - 3 住居址 (図版28-6～10、34-75・写真図版23)

カマド周辺の床面上および貯蔵穴と考えられるピットからロクロ成形の坏(7・8)、小型甕(10)、長胴甕(6・9)が出土した。坏はいずれも内面をヘラミガキ後黒色処理したもので、再調整が施されていない回転糸切底である。8は体部中央部に墨書がみられるが、字体は判読できない。焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。7は口径13.8cm・底径4.6cm・器高5.3cm、8は底径5.6cmを計る。小型甕は外面口唇部に一条の沈線をもつ回転糸切底のものである。頸部に補修孔が2ヶ所みられる点の特異である。焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。口径14.9cm・底径5.9cm・器高15.0cmを計る。長胴甕は完形に近いものと破片の計2点である。どちらも外反する口縁部と直立する口唇部をもち、体部外面に縦位のヘラケズリが施されているものである。焼成は良好で浅黄橙色を呈する。9は口径23.0cm・底径9.2cm・器高34.3cmを計る。

埋土中からは縄文土器細片数点とXVの剣状磨製石器が1点(75)出土した。この石器は縄文時代の遺物と考えられるもので、両面に擦痕がみられるとともに先端部に刃こぼれ状の欠損が観察される。石質はチャートである。

C II - 1 住居址 (図版28-11・写真図版24-2)

出土した遺物は、石囲炉内の埋設土器である浅鉢1点(11)だけである。この土器は底部～口縁部までは直線的で、それから口唇部にかけては内弯する形態を示す。口唇部に大小の突起をもち、口縁部には平行状線文と刻目状の刺突文が施されている。体部の地文は羽状縄文であるが、磨滅している部分もある。全体の色調は橙色を示すが、二次焼成を受けたため赤褐色に変色した部分が口縁部～体部上半部の内外面にみられる。口径18.6cm・底径5.4cm・器高14.7cmを計る。この土器はVI Aに属するものと考えられる。

D I - 1 住居址 (図版35-77)

埋土中から時期の識別不能な縄文土器細片数点とX III Aの磨石1点(77)が出土した。この石器は棒状の自然礫の一稜面を磨っているものである。石質は輝石安山岩である。

D I - 2 住居址 (図版29-12～14、32-56・57、35-78・79)

炉の北側の床面直上から土器片数点と石器2点が出土した。土器は深鉢(56・57)と小型鉢(12・13・14)である。56は沈線による縦位の楕円形縄文区画文が施され口縁部が内弯する。12は56と同様な楕円形縄文区画文のものである。13・14・57は地文だけのものである。色調はいずれも橙色を示す。小型鉢の底径は4.4cm～5.4cmを計る。これらの土器はIV C～IV Dに属するものと考えられる。石器はX IIの凹石(78)とX III Aの磨石(79)である。78は両面に凹みをもつ。79は棒状の自然礫を素材とし、一稜面に研磨面をもつ。研磨面の両側には敲打痕がみられる。石質はいずれも輝石安山岩である。

D I - 3 住居址 (図版32-58、34-76)

炉周辺の床面上から土器片1点(58)と石器1点(76)が出土しただけである。58は口縁部が内弯する小型鉢の破片であり、沈線による縄文区画文をもつ。色調は赤褐色を呈する。IV C～IV Dに属する土器と考えられる。76はVIII Bに属するスクレイパーであり、主として背面の片面加工がなされている。刃部には入念な押圧剝離が施されている。石質は凝灰質硬質頁岩である。

D I - 4 住居址 (図版32-59)

地床炉の使用面上から小型鉢の破片(59)が出土しただけである。胎土に繊維を少量含み、口唇部上面に指頭圧痕をもつものである。III Bに属する土器と考えられる。

F I - 1 住居址 (図版29-15・16・写真図版24-3・4)

炉周辺の床面相当面から台付浅鉢の完形品が2点(15・16)出土した。15は口唇部に1個の突起をもち上面に刻み目が施されている。文様は雲形文と沈線によって構成されている。また体部や台最下部外面には斜縄文が施されている。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。口径14.0cm・底径6.7cm・器高13.1cmを計る。16は15と同様に口唇部に1個の突起をもち上面に刻み目があり、口縁部には3条の沈線と刻み目が施されている。また体部には地文として斜縄文が施さ

れている。口縁部の沈線などに赤色顔料状の付着物がみられる。焼成はやや良好で暗赤褐色を呈する。口径13.6cm・底径6.7cm・器高13.9cmを計る。

F I - 2 住居址 (図版32-60、35-80・写真図版24-5)

地床炉の使用面上から土器片1点(60)と石鏃1点(80)が出土した。60は口縁部が外反する深鉢の破片で、波状口縁を呈するものである。文様は磨消帯繩文風に施文されているようにみられるが、詳細は不明である。焼成は良好で橙色を呈す。V Bに属する土器と考えられる。80はⅢ Bの石鏃で、基部が両面から抉りこまれて柄が作り出されている。尖頭部の先端が欠如している。石質はメノウである。

2) ピット

A II - 52ピット (図版29-17・写真図版25-1)

埋土の中位から完形の小型鉢が1点(17)出土した。口縁部がややくびれ、この部分に横位のナデ調整が施されている。また体部上半部にふくらみをもち、これから底部にかけてはゆるやかな曲線状の断面形を示す。体部には斜繩文が施されている。焼成はやや良好で浅黄橙色を呈する。口径9.0cm・底径4.5cm・器高7.9cmを計る。VI Aに属する土器と考えられる。

C II - 52ピット (図版35-81)

埋土の上位からIV Bの石匙が1点(81)出土した。石器の長軸方向に対してやや左方向につまみ部をもつものである。背面は全面加工されており入念な押圧剥離が施されている。腹面には第一次剥離面が残されている。石質は珪質頁岩である。

D I - 51ピット (図版32-61)

埋土の最上部から粗製の深鉢の破片が1点(61)出土した。口縁部～頸部は横位のナデが施されており無文である。体部には方向の異なる斜繩文が施されており、ススが多く付着している。焼成はやや良好で暗褐色を呈する。IV C～V Aに属する土器と考えられる。

3) 炉 址

A II - 151炉址 (図版29-18・写真図版25-2)

炉として埋設使用された粗製の深鉢(18)である。口縁部～体部上半部が欠如している。地文は斜繩文である。二次焼成を受けたため、内外面の基調色が橙色から赤褐色に変化している。底径7.2cmを計る。IV C～V Aに属する土器と考えられる。

C II - 151炉址 (図版32-62)

炉内の埋土上部から深鉢の口縁部片が1点(62)出土した。胎土に繊維をやや多く含むもの

で、口縁の形態は平縁である。地文は斜縄文である。焼成はやや不良で暗褐色を呈する。ⅢB～ⅣAに属する土器と考えられる。

D I - 152 炉址

炉内の焼土から無文の縄文土器細片が1点出土した。径約1cmの大きさのもので、器形等の識別は不能である。焼成は良好で橙色を呈する。

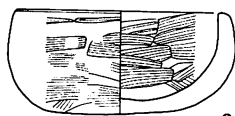
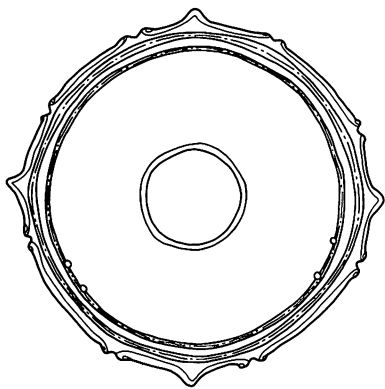
4) 埋設土器遺構

A II - 201 埋設土器遺構 (図版29-19・写真図版25-3)

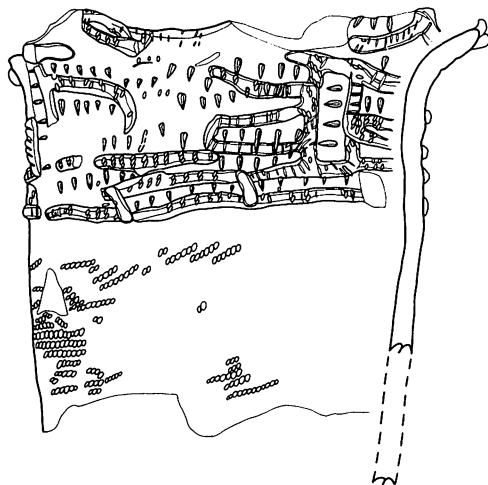
ほぼ完形の粗製の深鉢(19)である。口縁部は内湾ぎみに立ちあがる。地文は斜縄文であるが、器表面が剥落して地文が不明瞭な部分もある。内面体部から底部にかけては、ケズリの後横位および縦位のナデ調整が施されている。また内面には輪積みの痕跡が観察される。焼成はやや良好である。色調は浅黄橙色を基調とするが、口縁部～体部上半部は暗褐色を呈する。内外面の各部位のところどころにススの付着がみられる。口径39.0cm・底径10.2cm・器高40.5cmを計る。Ⅵに属する土器と考えられる。



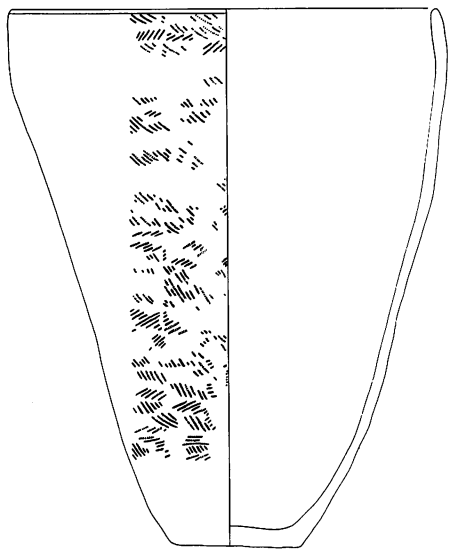
1 (A II - 2 住居址)



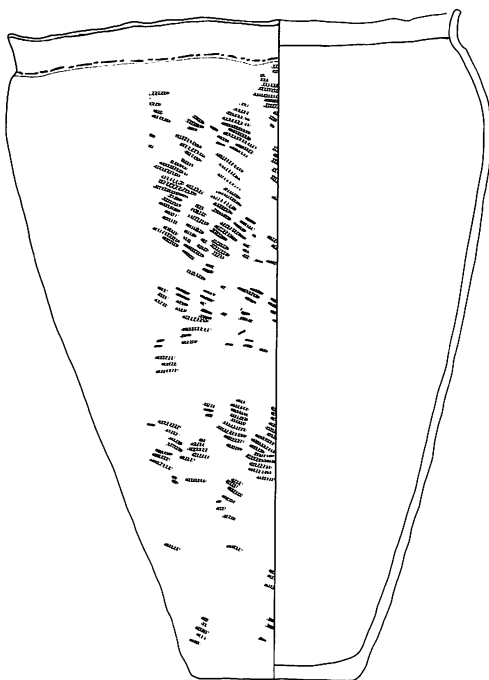
2 (A II - 2 住居址)



3 (C I - 2 住居址)



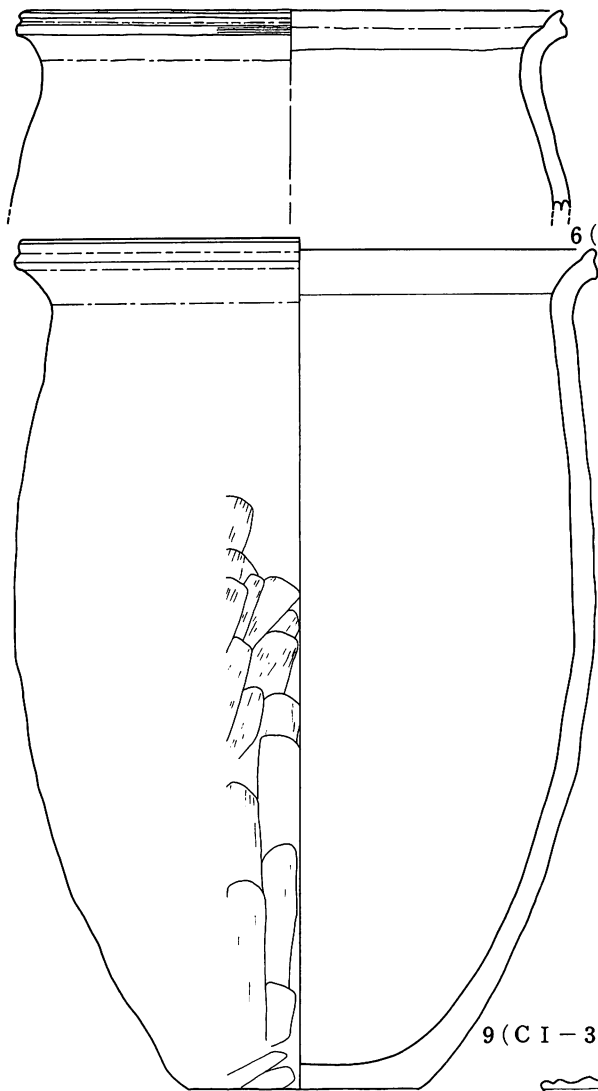
5 (A II - 3 住居址)



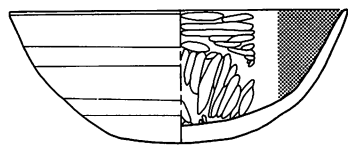
4 (A II - 2 住居址)

1~3 : S = $\frac{1}{3}$ 4·5 : S = $\frac{1}{5}$

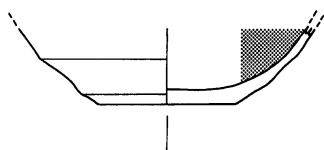
图版27 遺構内出土土器実測図(1)



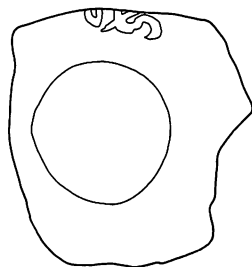
6 (C I - 3 住居址)



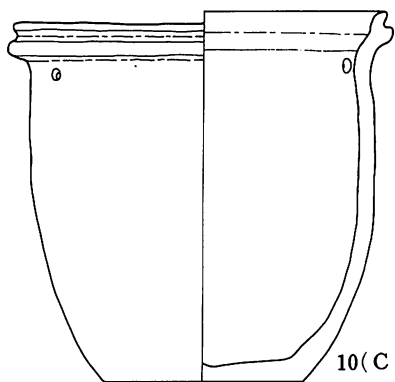
7 (C I - 3 住居址)



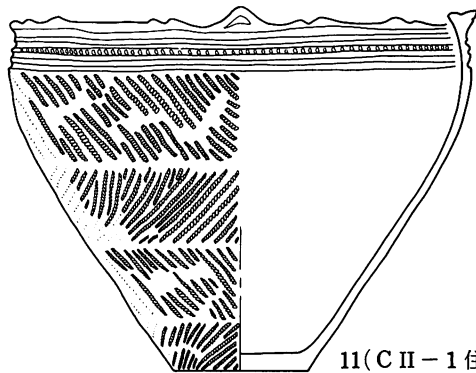
8 (C I - 3 住居址)



9 (C I - 3 住居址)



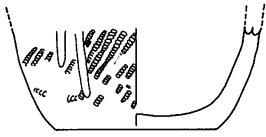
10 (C I - 3 住居址)



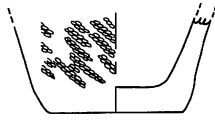
11 (C II - 1 住居址)

图版28 遺構内出土土器実測図(2)

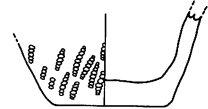
$s = \frac{1}{3}$



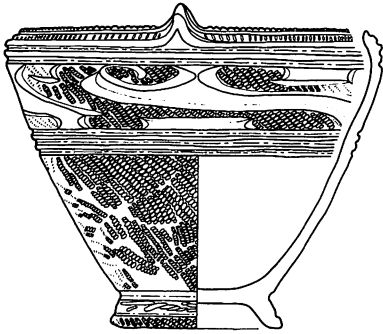
12(D I - 2 住居址)



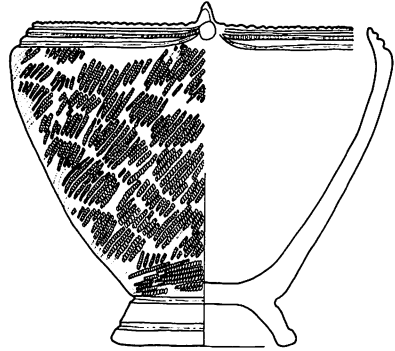
13(D I - 2 住居址)



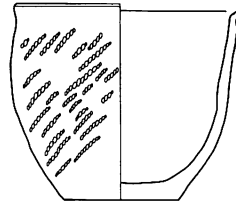
14(D I - 2 住居址)



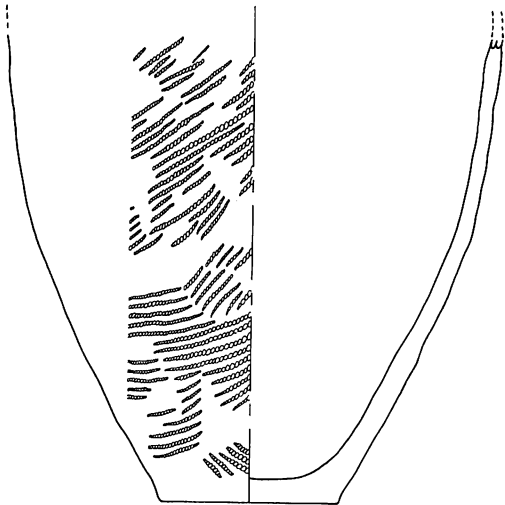
15(F I - 1 住居址)



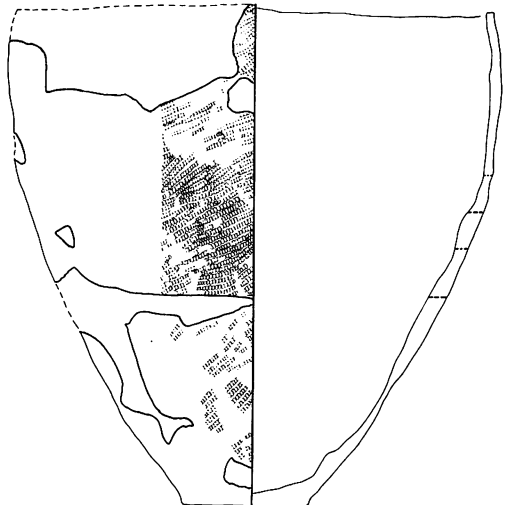
16(F I - 1 住居址)



17(A II - 52ピット)



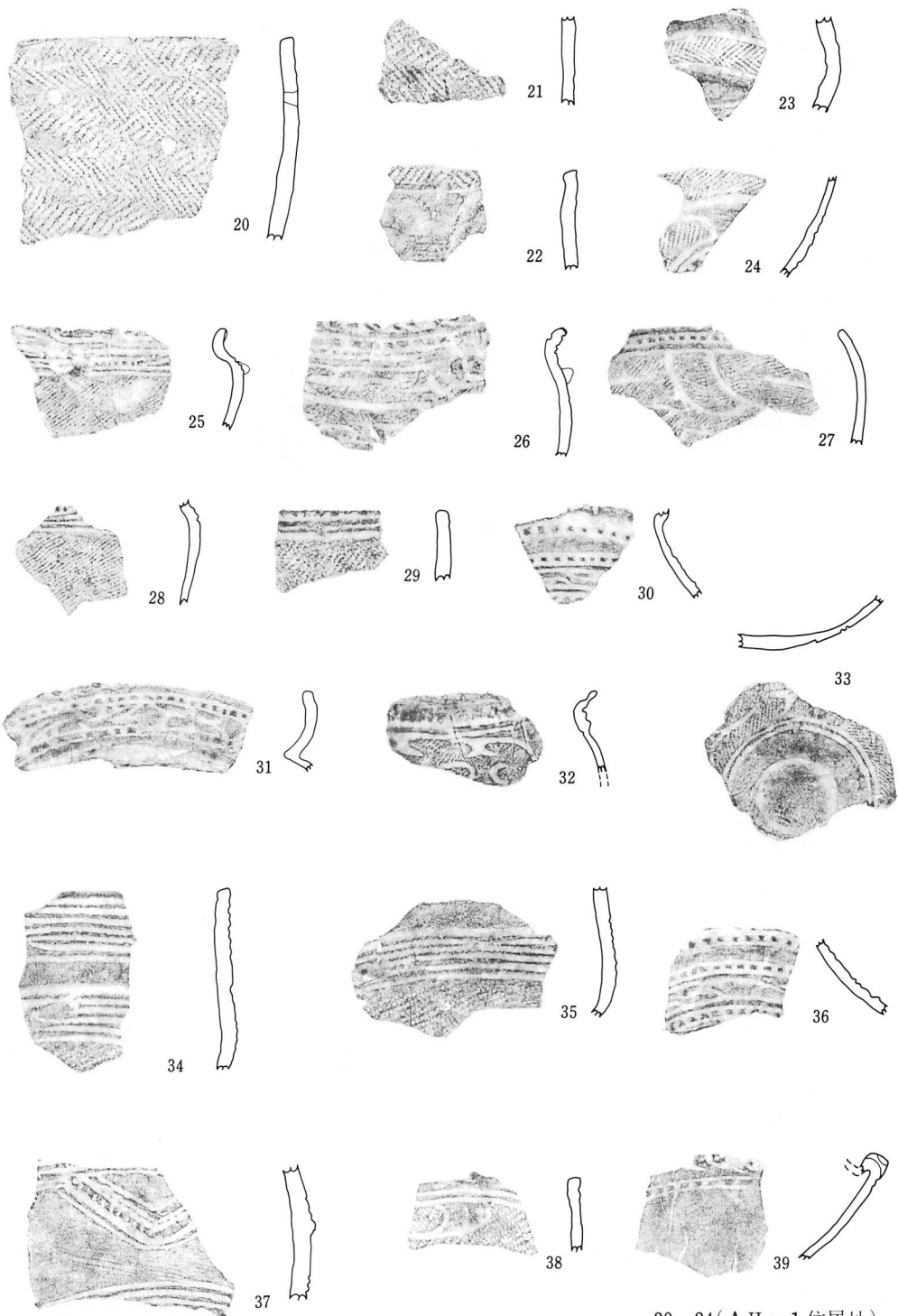
18(A II - 151 炉址)



19(A II - 201 埋設土器遺構)

12~18 : S = $\frac{1}{3}$
19 : S = $\frac{1}{6}$

図版29 遺構内出土土器実測図(3)

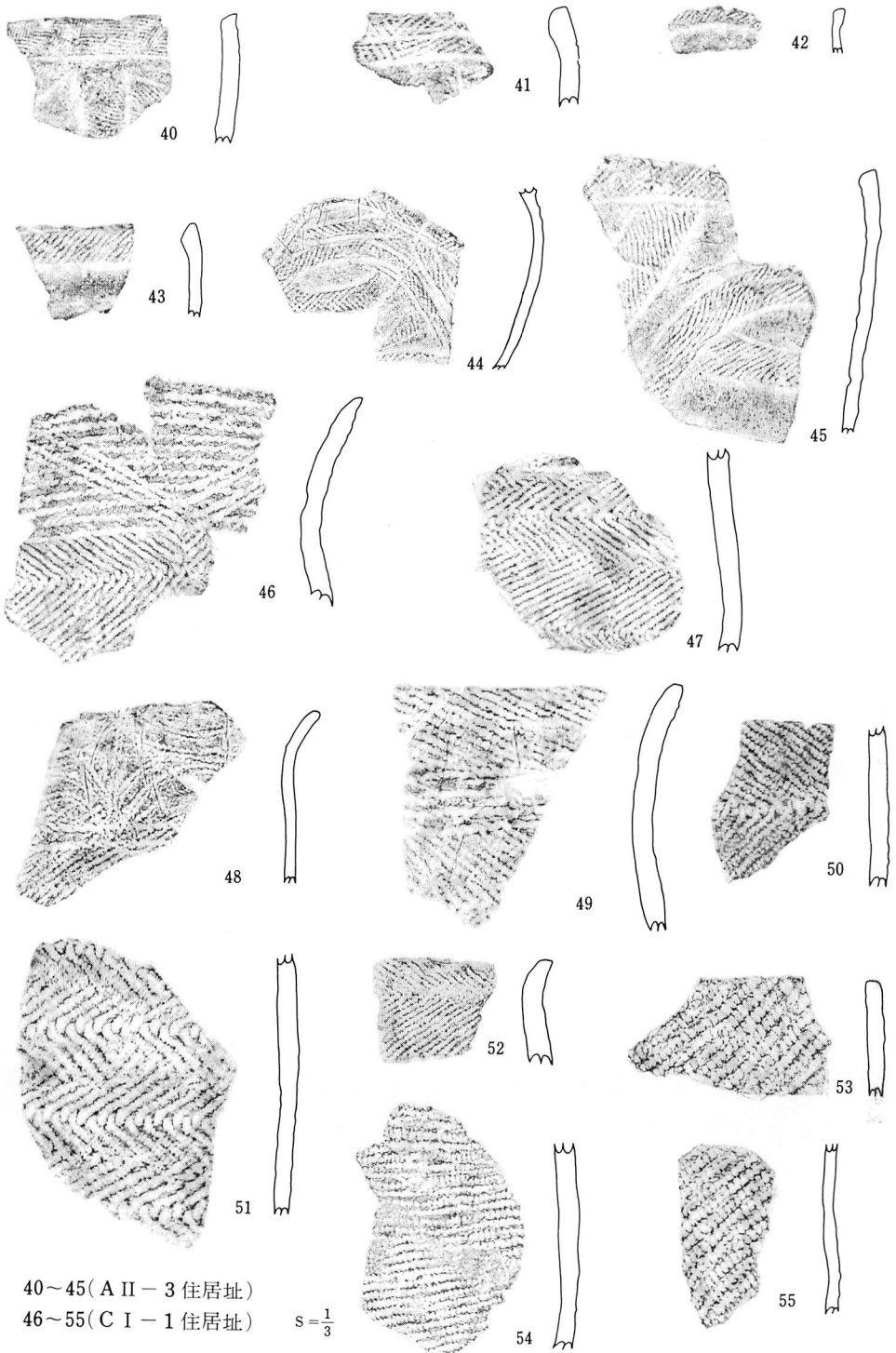


20~24 (A II - 1 住居址)

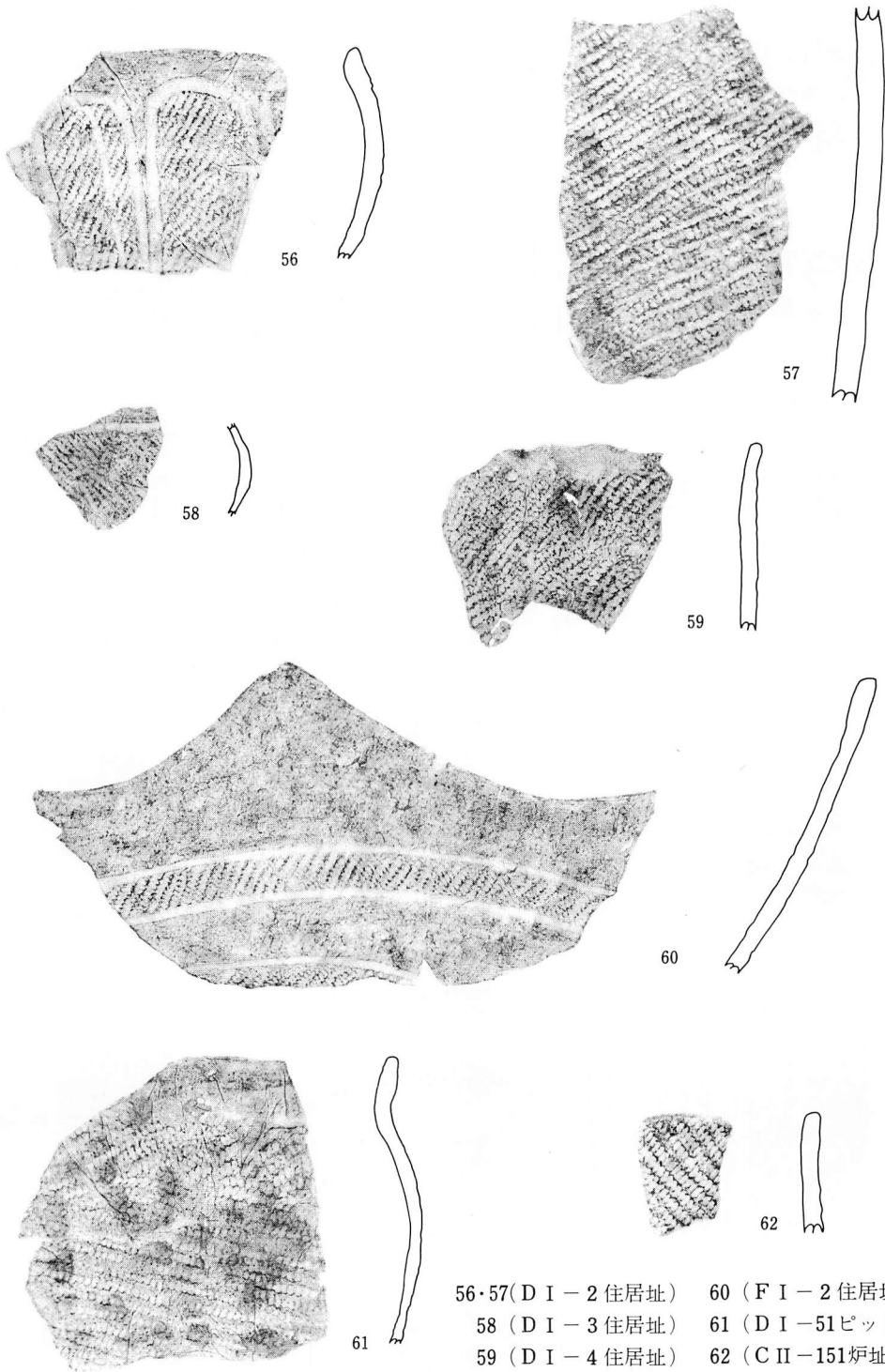
25~39 (A II - 2 住居址)

$s = \frac{1}{3}$

图版30 遺構内出土土器拓影图(1)



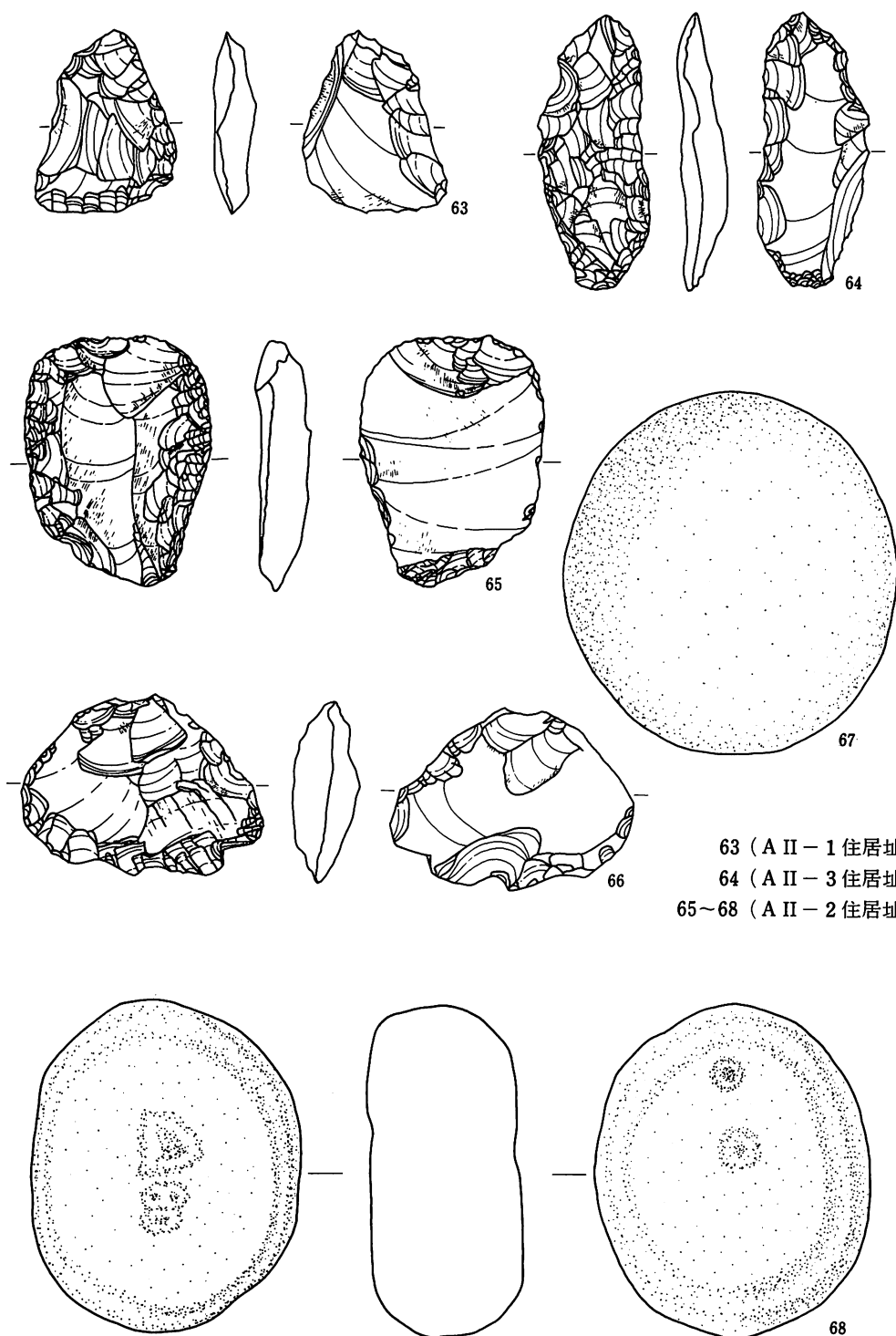
图版31 遺構内出土土器拓影图(2)



56・57(D I - 2 住居址) 60 (F I - 2 住居址)
 58 (D I - 3 住居址) 61 (D I - 51ピット)
 59 (D I - 4 住居址) 62 (C II - 151炉址)

$s = \frac{1}{3}$

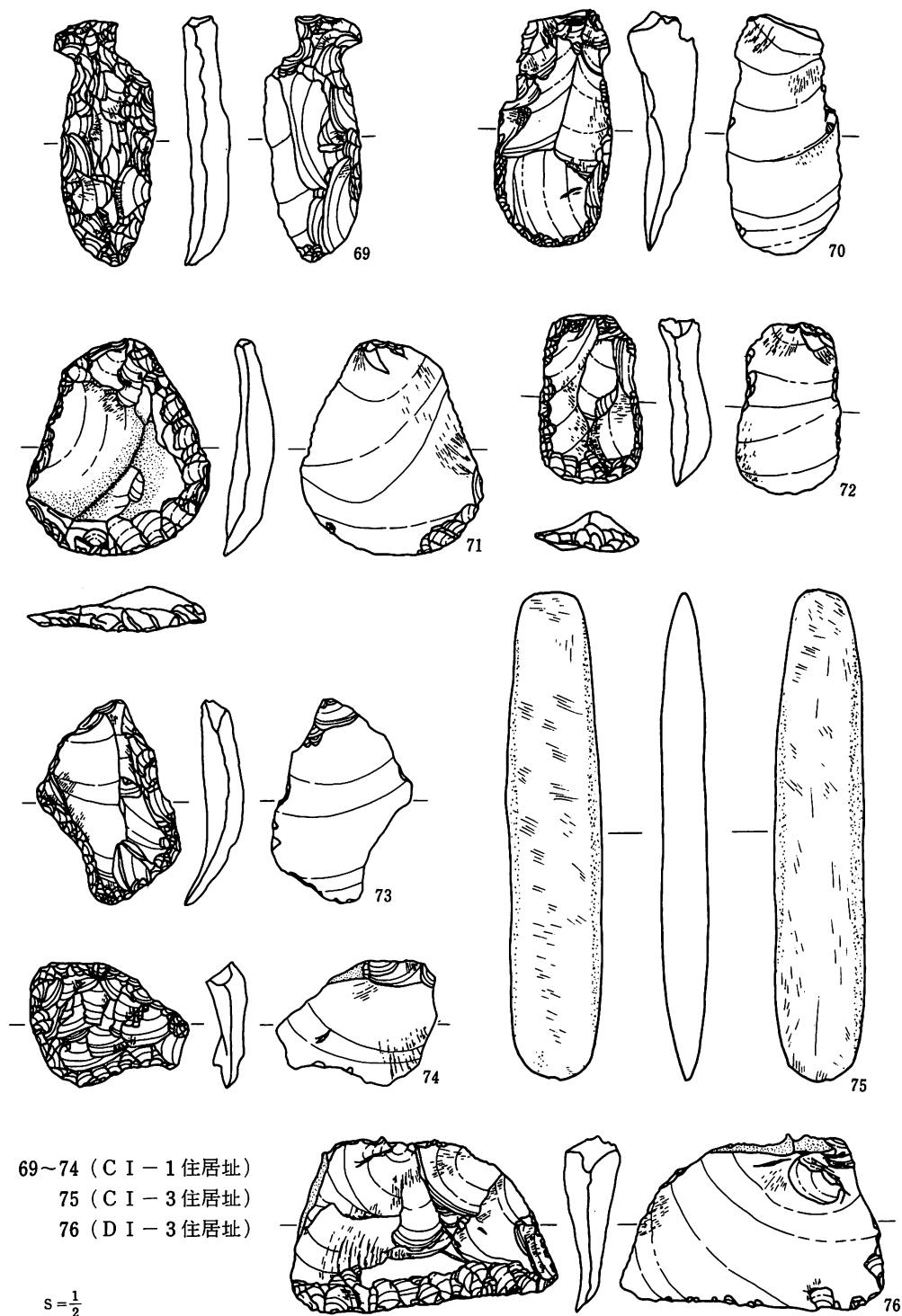
図版32 遺構内出土土器拓影図(3)



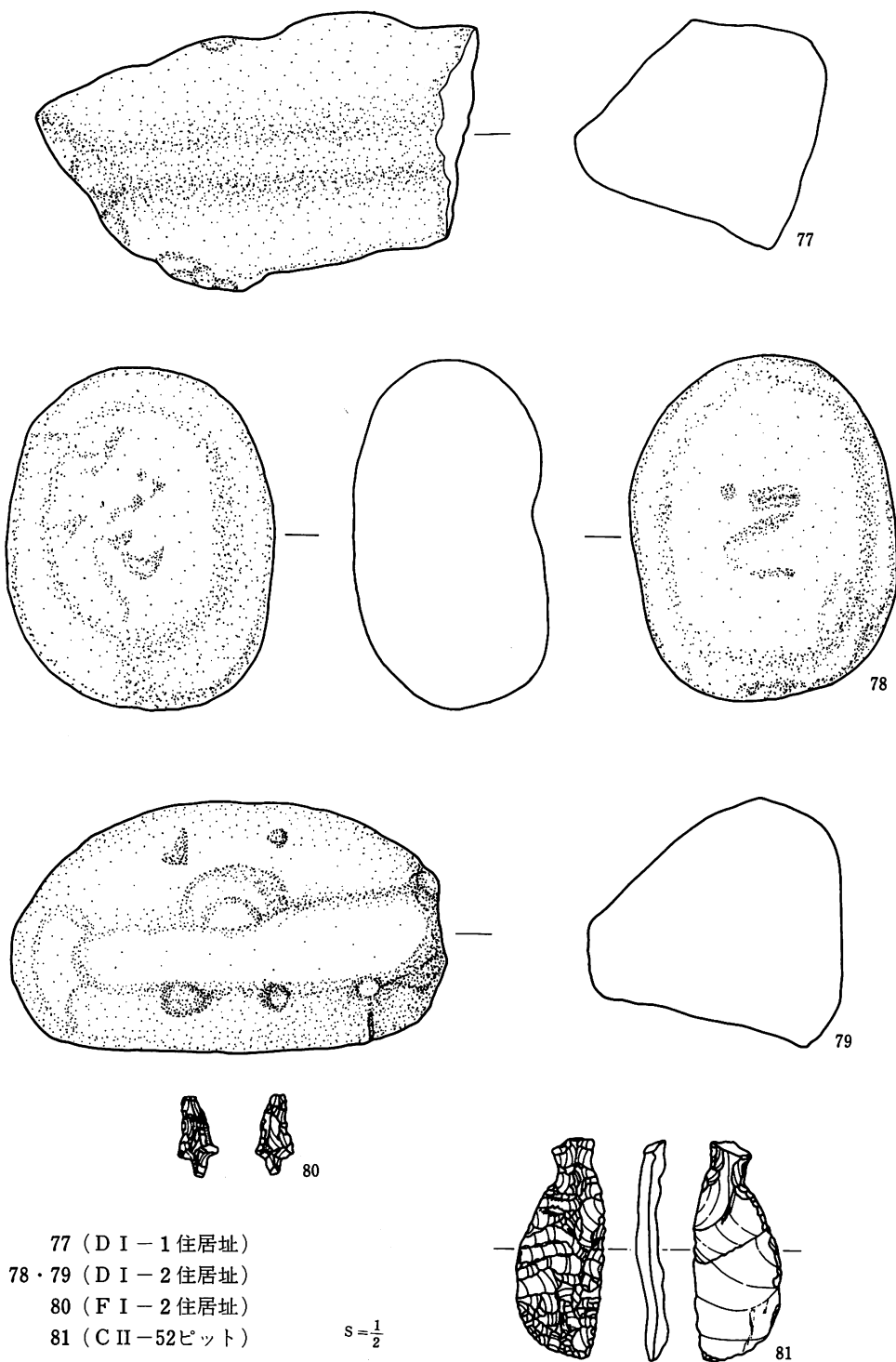
63 (A II - 1 住居址)
 64 (A II - 3 住居址)
 65~68 (A II - 2 住居址)

图版33 遺構内出土石器実測図(1)

s = 1/2



图版34 遺構内出土石器実測図(2)



77 (D I - 1 住居址)
 78・79 (D I - 2 住居址)
 80 (F I - 2 住居址)
 81 (C II - 52ピット)

S = $\frac{1}{2}$

図版35 遺構内出土石器実測図(3)

(3) 遺構外の出土遺物

野駄遺跡の遺構外の各層から遺物が出土しているが、ここでは主にⅣ層から出土したものについて記述したいと思う。それは次のような理由によるものである。Ⅳ層出土の遺物が、

- ・量的に全体の約60%を占めること
- ・Ⅰ～Ⅲ層出土遺物に含まれる要素（時代・時期・型式・形態 etc.）をほとんど包括していること
- ・Ⅰ～Ⅲ層出土遺物にはみられなかった面状の出土状態を示したこと

またⅣ層を構成する黒色土層が、

- ・検出された遺構の埋土と土性・色調などの点においてよく似た性状を示すこと
- ・Ⅰ～Ⅲ層とは異なり、ほとんど攪乱を受けていないこと

などによるものである。

以下に出土した土器および石器について、先に示した分類基準の順序に従って述べる。

1) 土 器

① 縄文土器

第Ⅰ群土器

A類（図版42-73・写真図版29-7）

砲弾状を呈する無文の尖底部破片であり、外面に縦位のミガキが入念に施されている。内面には横位のナデ調整がみられる。胎土に細粒の砂が少量含まれている。焼成は良好で色調は明褐色を呈す。

B類（図版36-1～3・写真図版26-1～3）

1は貝殻腹縁文が縦位に施された体部破片である。施文後部分的にナデられて文様が消されている。また内面にも縦位のナデ調整がみられる。胎土に粗粒の砂が少量含まれている。色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈す。2は弧状に施文された貝殻腹縁文をもつ口縁部破片であり、口唇部上面に刻み目が施されている。内面には横位のミガキがみられる。胎土に金雲母が微量に含まれている。焼成は良好であり、色調は外面が暗褐色で内面が褐色を呈す。3はヘラ状工具によって施文された縦位の細隆起線文をもつ口縁部破片である。細隆起線間の条の幅は6mm±を計る。内面にはナデ調整がみられる。胎土に金雲母が微量に含まれている。焼成は良好で色調はにぶい黄橙色を呈する。

第Ⅱ群土器

A類 いずれも胎土に繊維を含み器表面にのみ斜縄文が施されているものである。口縁は平縁である。口唇部上面の状況により次のように細分できる。

a. 口唇部上面に圧痕等をもたないもの（図版36-4～8・写真図版26-4～6）

口縁部の断面は、直立するもの（4・5・7）、外反するもの（6）、オーバー・ハンク状につまみ出されているもの（8）とに分けられる。色調は褐色～暗褐色を示す。

b. 口唇部上面に圧痕等をもつもの（図版36-9～11・写真図版26-7・8）

指頭圧痕のあるもの（9・11）とくし状工具による刺突痕をもつもの（10）とがある。色調は黄橙色～暗褐色を示す。

B類（図版37-12～17・写真図版26-9・10）

器表裏面に縄文が施された平縁口縁のものである。胎土にはA類と同じように繊維が含まれている。口唇部上面に縄圧痕が施されている。12は斜縄文、13は撚糸文を地文としている。

第Ⅲ群土器

A類 いずれの土器も胎土に繊維を含むものであるが、口縁部文様帯の有無によって次のように細分できる。

a. 口縁部文様帯をもたないもの（図版38-18～24・写真図版27-1～3）

18～22は斜縄文を地文とする平縁口縁の破片である。色調は褐色～暗褐色を示す。23は撚糸文が施されている平縁口縁の破片で、色調は橙色を呈する。24は口縁部の地文の上に縄圧痕が横走しているものである。色調は黄橙色を呈する。

b. 口縁部文様帯をもつもの（図版38-25～31、42-74・写真図版27-4～7、29-8）

25・26・29・30は、文様帯の地を素文にしその上に綾絡文が施文されている。27・28・74は地文の羽状縄文の上に綾絡文が施文されている。31は頸部に隆帯をもち、口唇部上面に刻み目が施されているものである。隆帯には指頭圧痕状の刺突文がみられる。色調はいずれもにぶい黄橙色を示す。

B類 A類と同じように胎土に繊維が含まれており、口縁部文様帯の有無により次のように細分できる。

a. 口縁部文様帯をもたないもの（図版39-32～38）

撚糸文が回転方向を変えられて施文されているもの（32）と羽状縄文が施文されているもの（33～38）がある。羽状縄文には結束のあるものとないものとがみられる。色調はいずれも暗褐色を示す。

b. 口縁部文様帯をもつもの（図版39-39～45・写真図版27-8～11）

いずれも撚糸圧痕文が縦位・横位・斜位に施されて口縁部文様帯が構成されている。頸部と体部は平行沈線によって形成された隆帯によって分けられており、隆帯上には円形状の刺突文

がみられる。体部の地文は斜縄文である。42は波状口縁であるが、その他のものは平縁である。焼成は良好であり、色調は褐色～にぶい黄橙色を呈する。

第IV群土器

A類（図版40-46・47・写真図版28-1・2）

46は波状口縁をなし、口唇部に指頭圧痕が施された貼付をもつものである。焼成は良好で暗褐色を呈する。47は平縁の複合口縁をもち、隆起線で区画された中に平行な3条の縄圧痕が施されているものである。色調は橙色を呈する。

B類 遺構外からは出土しなかった。

C類 文様構成により次のように細分できる。

a. 粘土紐貼付による渦巻文で構成されているもの（図版40-48～51・写真図版28-3～

6）

隆起線が縄文区画文をとり囲むように巡らされている。焼成は良好で、色調が橙色～暗赤褐色を示す。

b. 沈線によって文様が構成されているもの（図版40-52、42-75・76・写真図版28-6・7、30-1）

52・75・76は楕円形縄文区画文が縦位に展開されており、区画文間には磨消手法が用いられている。地文は斜縄文である。75は平縁口縁のものであり、体部中央部にくびれをもつ。文様は沈線で施文された楕円形縄文区画文と渦巻文との組合せによって構成されており、地文は斜縄文である。内面の口縁部～体部に横位のミガキが入念に施されている。口縁部に補修孔が1個みられる。焼成は良好でにぶい褐色を呈する。底径9.4cm・器高22.8cmを計る。

D類（図版59-53～57・写真図版28-8～10）

口縁の外反する深鉢の破片であり、磨消手法による曲線的な縄文区画文が施されているもの（53～55）と隆起線に沿って円形の刺突文が施されているもの（56・57）とがある。焼成は良好である。色調は外面がにぶい黄橙色～褐色を示すが、53のように黒褐色を呈するものもある。また内面はにぶい黄褐色～褐色を示す。

第V群土器

A類 文様構成により次のように細分できる。

a. 地文に網目状撚糸文が施されているもの（図版42-77・78・写真図版30-2・3）

77は口縁部が直立し口縁部文様帯をもつものである。文様帯は、上下に対をなすボタン状の貼付とそれを結ぶ平行および弧状の沈線によって構成されている。内外面とも入念なミガキが施されており、光沢のある器面となっている。焼成は良好で橙色を呈する。口径27.0cmを計る。

78は地文のみのもので、口縁部外面に横位のナデが施されている。また内面の口縁部にはミガ

キ、その下位の体部にはケズリが施されている。外面体部上半部にススが多く付着しその部分は黒色を呈するが、その他はにぶい黄橙色である。器高36.2cmを計る。なおこれらの土器はD区IV層上面の同一地点に出土した一括土器である。

b. くし歯文状の文様をもつもの（図版41-62、43-79・写真図版30-4）

79は口縁部が内湾ぎみに立ちあがる浅鉢である。外面はミガキ調整後細い棒状工具によってくし歯文状に施文されている。内面はケズリ調整後ミガキが加えられている。胎土に細礫が少量含まれている。焼成は良好で暗褐色を呈する。口径13.9cm・底径4.6cm・器高11.0cmを計る。

B類 文様構成により次のように細分できる。

a. 磨消手法による平行縄文帯をもつもの（図版40-58・写真図版29-1）

58は上下の縄文帯に弧状の沈線が一段置きに向きを変えられて施されている。

b. 羽状縄文によって特徴づけられるもの（図版40-59・60、41-61・63・写真図版29-2・3）

c. 入組状の磨消縄文をもつもの（図版41-65・写真図版29-4）

F I - 2 住居址と近接した地点から出土したもので、波状口縁をなす深鉢の破片である。当住居址出土のもの（図版32-60）と同じ型式に属する土器と考えられる。

d. 口唇部に突起をもつもの（図版41-64）

口縁部は複合口縁状に肥厚し、撚糸圧痕文が施文されている。この下位の頸部にかけては無文となっている。口唇部上面には斜縄文が施されている。内外面にススの付着がみられる。色調はにぶい黄橙色を呈する。

e. その他（図版41-66・67）

沈線によって弧状あるいは羽状に施文されたものである。「香炉形土器」の破片のように思われる。

第VI群土器

本群に属する土器のIV層からの出土量は少なく、完形品2点と破片10数点だけである。いずれもA類に含まれるものである（図版41-68~72、43-80~82・写真図版29-5・6、31-1・2）。

82は北東段丘崖上のC I h 3 グリッドから出土した深鉢の完形品である。この土器は斜面に対して平行な横位の状態で出土したものである。A II - 2 住居址の埋土最上部から出土したものの（図版27-4）とほぼ同じ器形で、頸部一体部にかけて大きく肩が張る特徴をもつ。体部の地文は斜縄文であるが、部分的に横位に縄文が施されているため羽状を呈するところもある。外面上半部には全面に渡ってススが付着している。また内面にも部分的にススの付着がみられる。焼成はやや良好である。色調は外面が灰黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈す。口径23.8cm・

底径9.4cm・器高39.8cmを計る。81は82の中に「入れ子」状にはいついた小型の壺である。口縁部および体部上半部に平行沈線が施されており、体部の地文は斜縄文となっている。頸部の内外面および底部外面には入念なミガキがみられる。焼成は良好で暗褐色を呈する。口径7.1cm・底径5.8cm・器高13.0を計る。

土器片は、深鉢のもの（70～72）と浅鉢のもの（68・69・80）とがある。70～72は口唇部に指によるつまみ出しをもち、頸部に数条の平行沈線が施されている。68・80は口唇部に刻み目が施され、口縁部文様帯が平行沈線文と渦巻文によって構成されている。69は平行沈線文の間に刻み目が施されているものである。

② 弥生土器

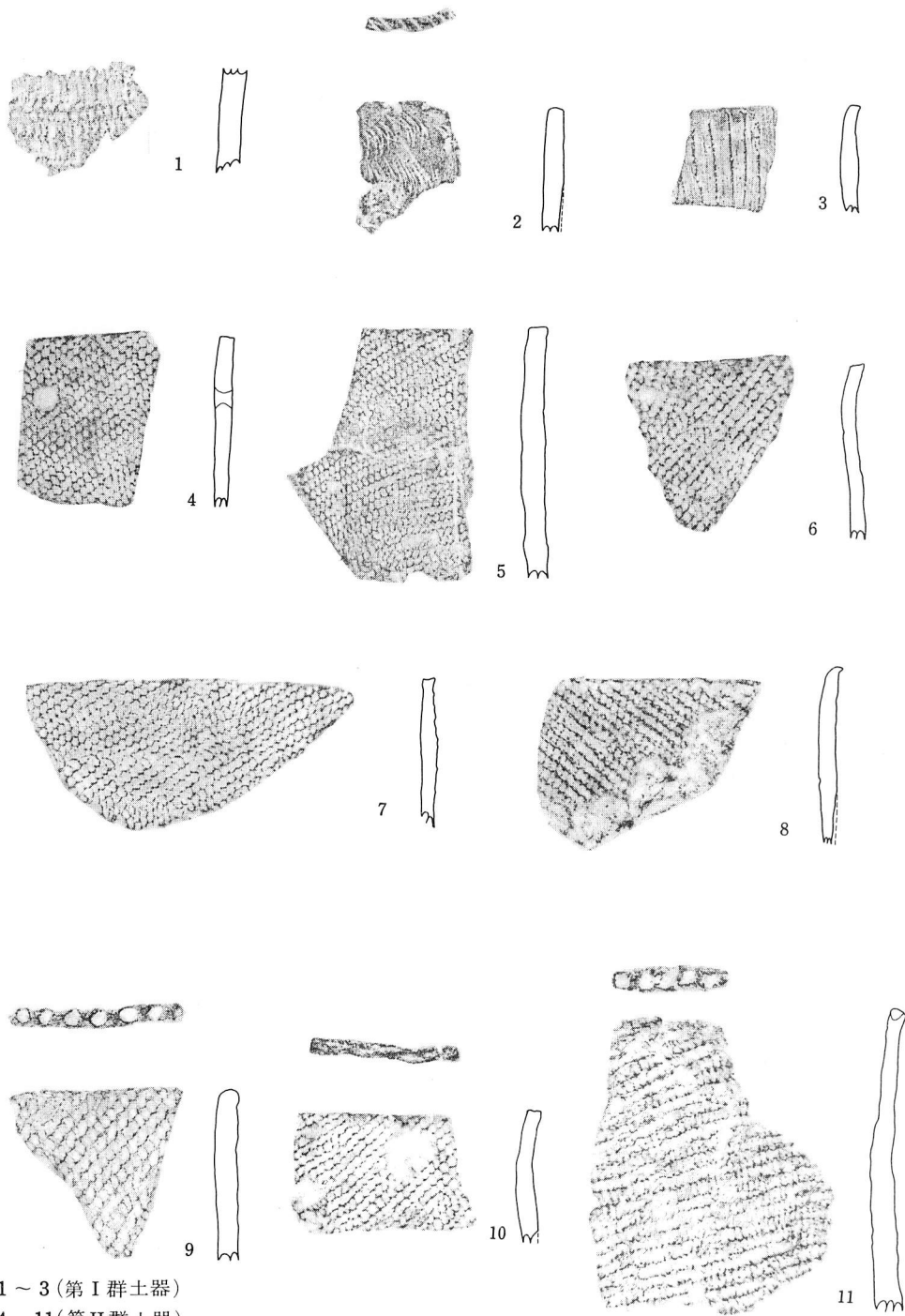
北東段丘崖上にあるC I h 5グリッドから破片が1点出土した（図版43-83・写真図版31-3）。口唇部に突起をもち口縁部が外反する甕形の土器である。文様帯は口縁部および体部上半部にあり、頸部は無文帯となっている。口縁部の内外面には平行沈線が数条巡り、その間に鋸歯状文が施されている。また体部上半部の縄文帯は平行沈線によって形成されており、この縄文帯を分割するかのよう斜めに沈線が走っている。外面の平行沈線間および口唇部上面には斜縄文が施されている。外面の口縁部～体部までススが付着しているが、内面は口縁部だけである。焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

③ 土師器

IV層からは全く出土しなかったが、C I - 3住居址の北方約9mの位置にあるC II f OグリッドのII層からロクロ成形の坏の破片（口縁部片）が1点出土した。この坏は内面の黒色処理がなされていず、全体の色調が橙色を呈する。

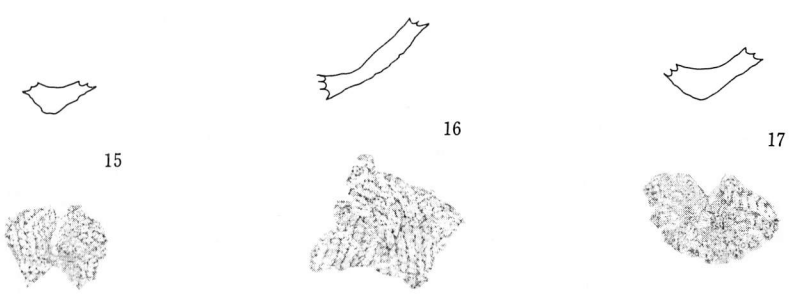
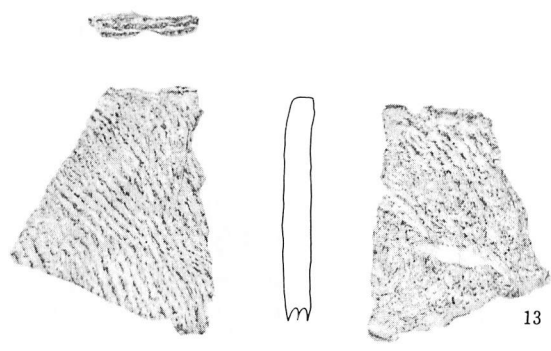
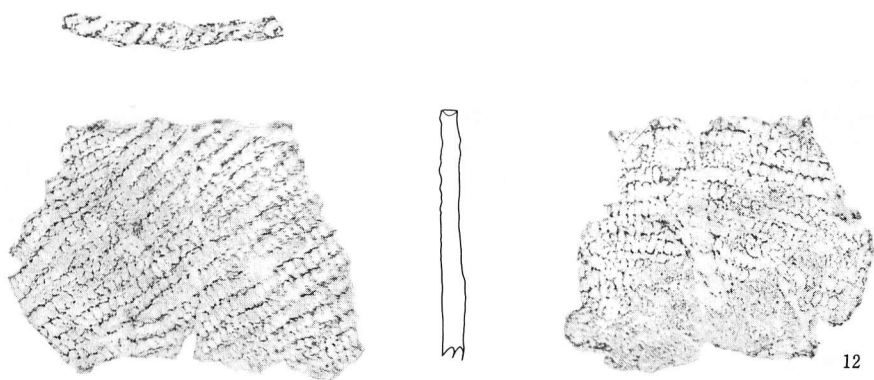
④ 須恵器

D I b 9グリッドのII層から壺の体部片と考えられる細片が1点出土しただけである。



S = $\frac{1}{3}$

图版36 遺構外出土土器拓影图(1)

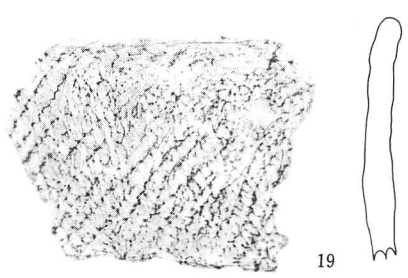


12~17(第II群土器)
 $s = \frac{1}{3}$

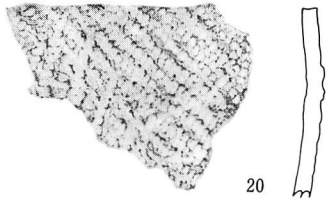
图版37 遺構外出土土器拓影图(2)



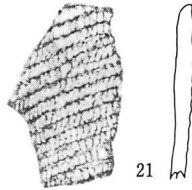
18



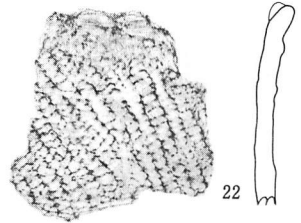
19



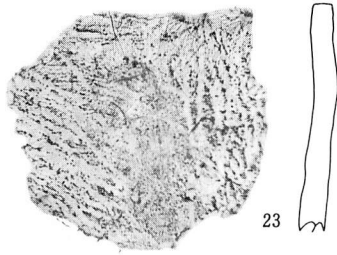
20



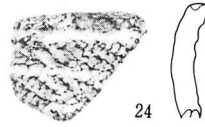
21



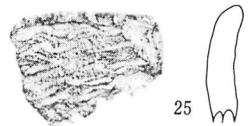
22



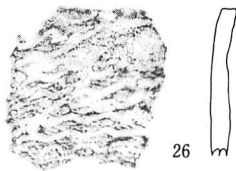
23



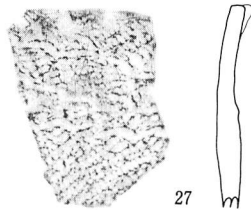
24



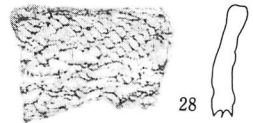
25



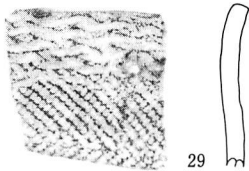
26



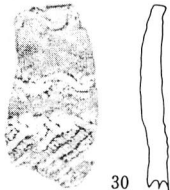
27



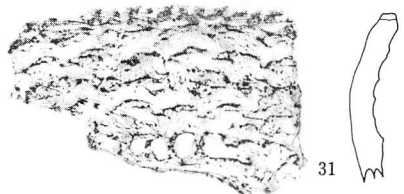
28



29



30

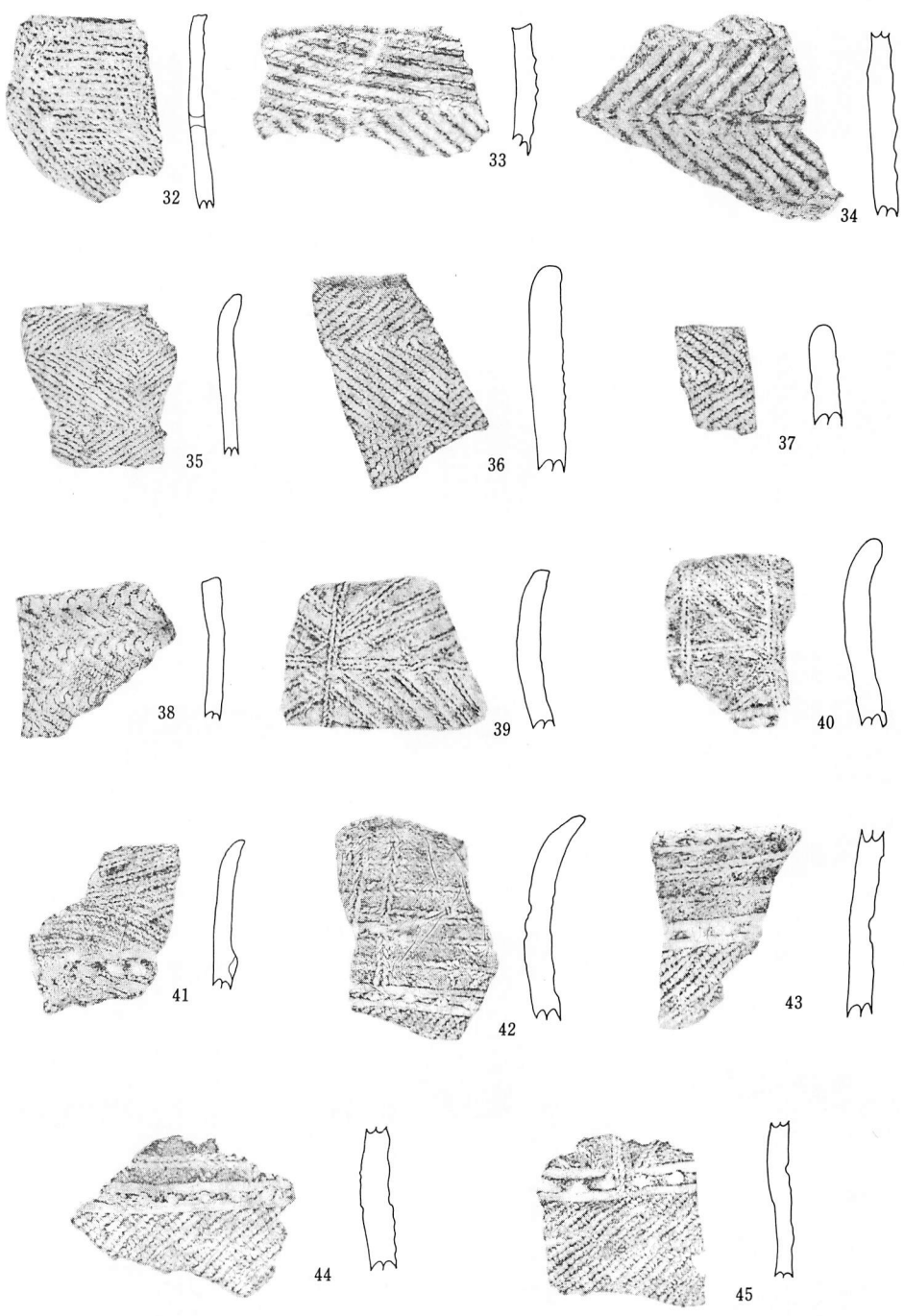


31

18~31(第Ⅲ群土器)

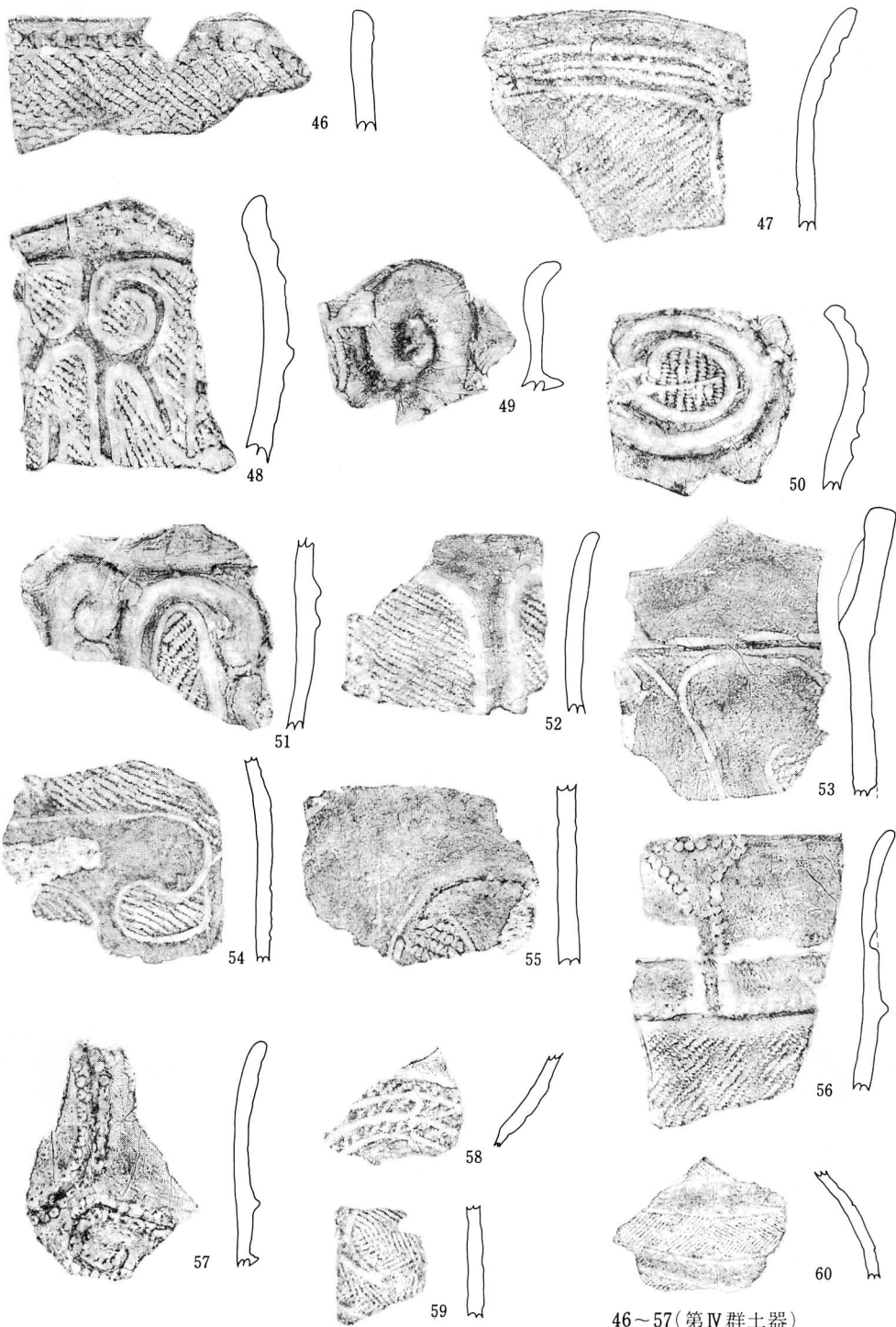
图版38 遺構外出土土器拓影图(3)

$s = \frac{1}{3}$



32~45(第Ⅲ群土器) $s = \frac{1}{3}$

图版39 遺構外出土土器拓影图(4)

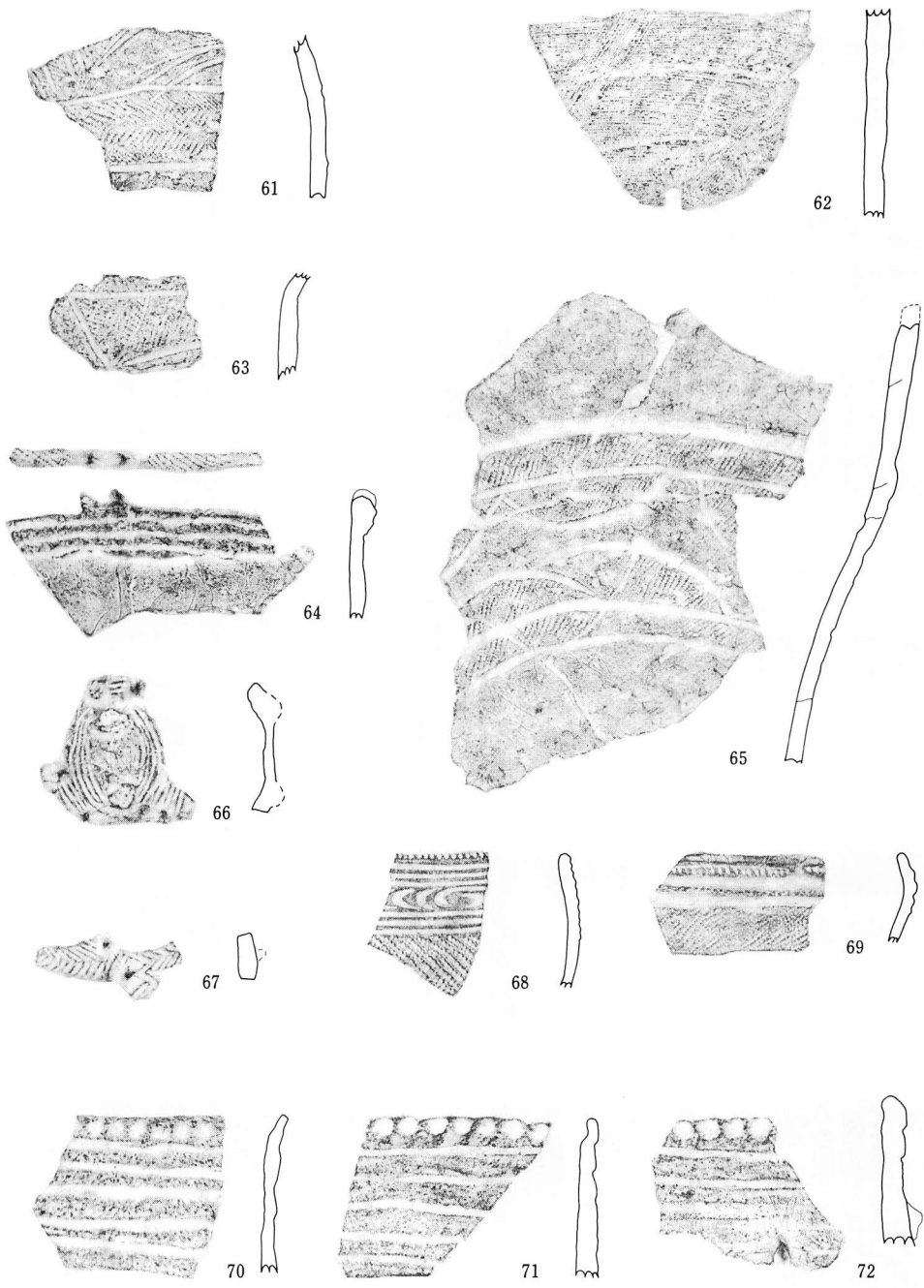


46~57(第IV群土器)

58~60(第V群土器)

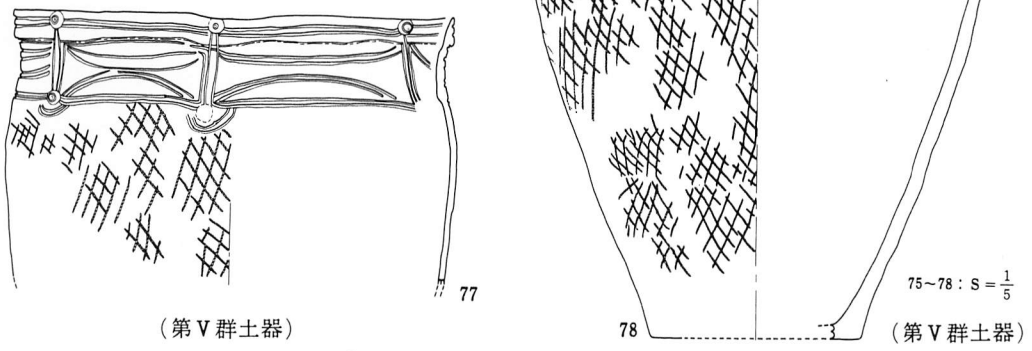
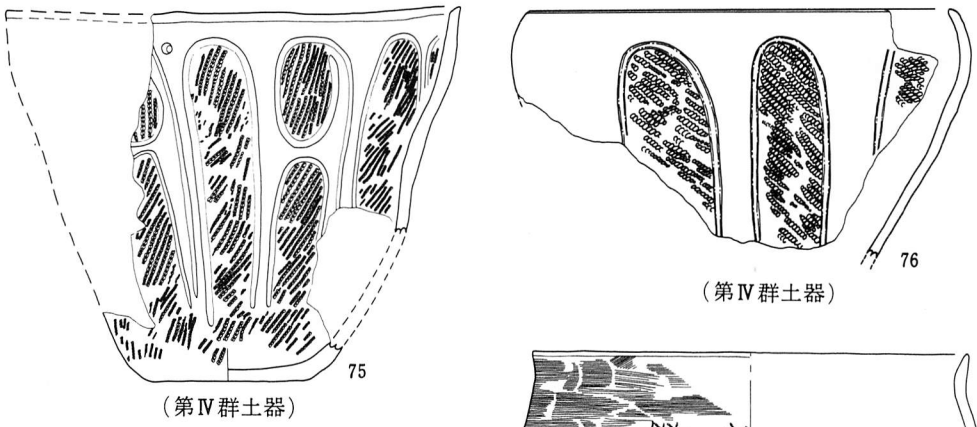
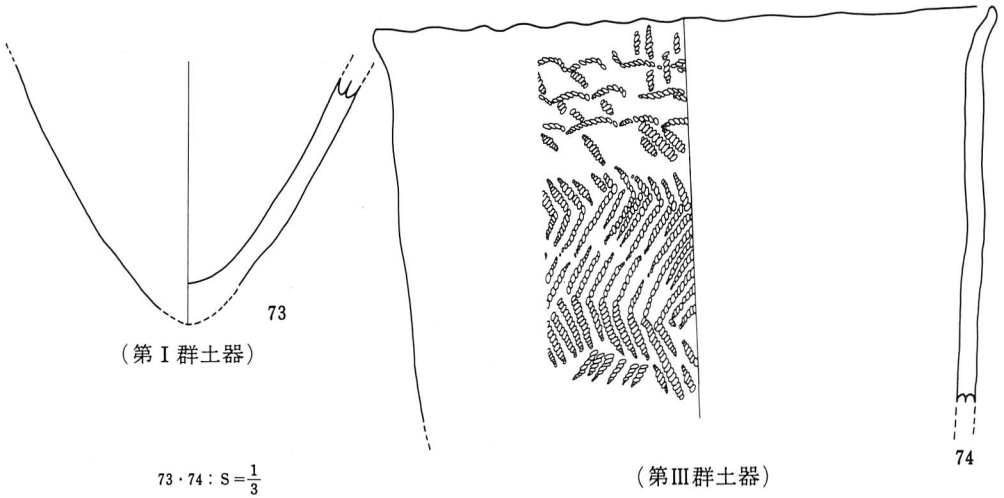
$s = \frac{1}{3}$

图版40 遺構外出土土器拓影图(5)

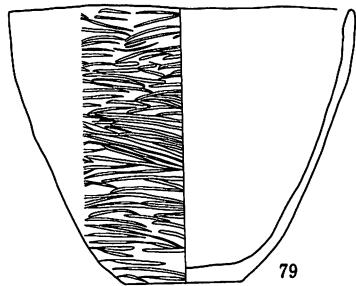


61~67(第V群土器)
 68~72(第VI群土器) $s = \frac{1}{3}$

图版41 遺構外出土土器拓影图(6)

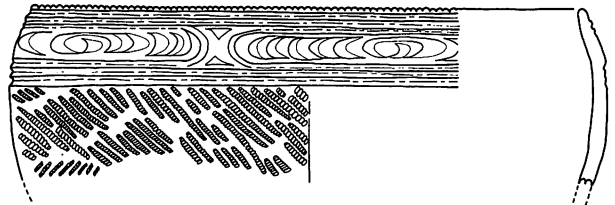


图版42 遺構外出土土器実測図(1)



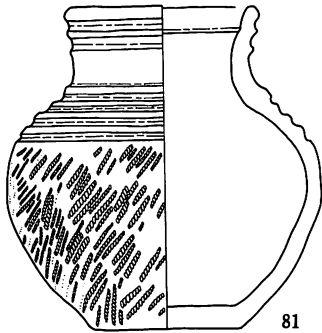
(第V群土器)

79



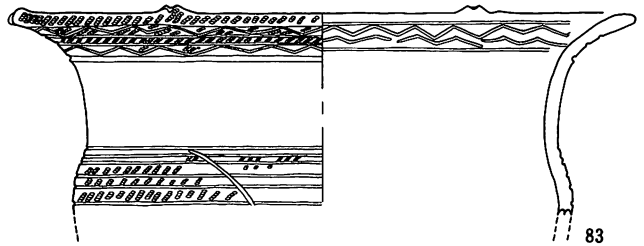
(第VI群土器)

80



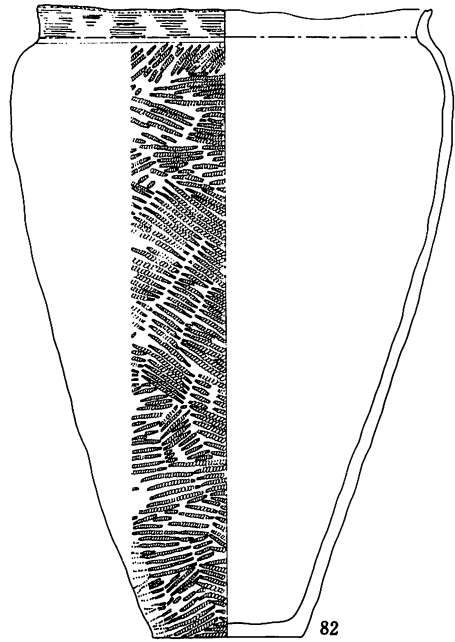
(第VI群土器)

81



(弥生土器)

83



(第VI群土器)

82

79~81·83 : S = $\frac{1}{3}$
82 : S = $\frac{1}{5}$

図版43 遺構外出土土器実測図(2)

2) 石 器

第I群 「旧石器」的要素をもつ石器 (図版44-1~5・写真図版32)

この群に属する石器で遺構の埋土から出土ものについてもここで一緒に扱い記述することにする。

1はD I-3住居址の最終精査で炉を断ち割った際に、炉西方の床面下の黄褐色土層(V層)中から出土した石器である。両面加工の柳葉形尖頭器と考えられるもので、両面とも大きな剥離によって成形された後、側端部および先端部に細かい調整が施されている。最大幅はほぼ中央部にあり、横断面形が凸レンズ状を呈する。基部には素材となった縦長剥片の打面が残っている。2はD I-3住居址と近接した位置にあるD I-4住居址の北壁寄りの埋土中から出土した石器である。両面加工の木葉形尖頭器と考えられるもので、両面とも大きな剥離によって成形されており側縁部から基部にかけて細かい調整剥離が加えられている。1より幅広で最大幅がほぼ中央部にあり、横断面形が凸レンズ状を呈する。尖頭部を折断し、その折断面を打面として彫刻刀面を作り出している。3はA II-3住居址の埋土最下部から出土した石器である。調整石核を素材とする彫刻刀形石器と考えられるものである。先端部に調整剥離を加え、その調整された面を打面として縦方向に槌状剥離を施して彫刻刀面を作り出している。4は北側古期沖積面南東に位置するD IIjOグリッドのIV層下位から出土した石器である。縦長剥片を素材とする彫刻刀形石器と考えられるものである。素材の剥片を折断し、その折断面を打面として斜め方向に小さな槌状剥離を施して腹面に彫刻刀面を作り出している。5は1の出土地点を中心にしてC I~D I区のV層を掘り下げた際の土捨場の土から後日採取した石器である。黄褐色火山灰土が石器のフィッシャーなどを充填し固化しており、洗浄しても剥落しない。背面にはほぼ平行する2条の稜線をもち石刃と考えられる石器である。背面には腹面の加撃方向とは逆方向の剥離痕がみられる。腹面の右側縁下半部に微細な剥離調整が施されている。頭部に打面を残し、中間部より折断されている。

石質は1・2が硬質頁石、3が珪質頁岩、4が凝灰質硬質頁岩、5が凝灰質珪質頁岩である。

第II群 石槍

A類 (図版45-6・写真図版33-1)

側縁部が直線状を呈するものである。石質は硬質頁岩である。

B類 (図版45-7~9・写真図版33-2~4)

7は両面加工されており、側縁部に細かい調整剥離が施されている。8・9も両面加工されているが、調整剥離が粗い。石質は硬質泥岩である。

第III群 石鏃

A類 (図版45-10~14・写真図版33-5~7)

いずれも尖頭部から基部までの両側縁が直線的であり、調整剥離が入念である。石質は石質凝灰岩である。

B類 (図版45-15・16・写真図版33-8・9)

15は基部の作り出しがあり、両面加工されている。16は基部が少しふくらみを持ち、両面に第一次剥離面が残されている。石質は15が中粒凝灰質硬質頁岩、16が硬質頁岩である。

C類 (図版45-17~20・写真図版33-10)

17は両面加工されており基部の凹みが深い。その他のものは、基部の凹みが浅く両面に第一次剥離面が残されている。石質は珪質頁岩である。

第IV群 石匙

A類 刃部の先端の形状により次のように細分できる。

a. 尖頭状のもの (図版46-21~23・写真図版33-21・22)

いずれも腹面に第一次剥離面を大きく残し、側縁の一部が周辺加工されているだけである。石質は珪質頁岩である。

b. ゆるやかな凸状のもの (図版46-24・25・写真図版33-13・14)

24は背面が全面加工されている。25は両面に第一次剥離面が残されている。石質は珪質頁岩である。

B類 刃部の平面形により次のように細分できる。

a. 三角形状のもの (図版46-26~28・写真図版33-15)

いずれも打面方向につまみ部が作り出されている。26は両面に第一次剥離面が残されている。27・28は背面が全面加工されている。石質は珪質頁岩である。

b. 台形状のもの (図版46-29~32・写真図版33-16)

いずれも両面に第一次剥離面が大きく残されており、背面の側縁にやや粗い剥離調整が加えられているだけである。31のみ打面方向につまみ部が作り出されている。石質は珪質頁岩である。

c. 楕円形状のもの (図版46-33・写真図版33-17)

打面方向につまみ部が作り出されている。石質は珪質頁岩である。

C類 (図版46-34・写真図版33-18)

打面方向につまみ部が作り出されており、両面に第一次剥離面が残されている。石質は珪質頁岩である。

第V群 石錐 (図版47-35・36・写真図版34-1・2)

2点とも錐部の横断面形が菱形を呈する。36は錐部の先端が欠如している。石質はフリントである。

第VI群 筥状石器

A類 (図版47-37-42・写真図版34-3-5)

いずれも腹面に大きく第一次剝離面を残し、側縁部に粗い剝離が施されている。最大長が7～8cmのもの(37-40)と5cm(41・42)のものに分けられる。石質はシルト質硬質泥岩である。

B類 (図版47-43・44・写真図版33-6)

43は両面加工されているが、44は腹面に第一次剝離面や自然面(礫面)を残す半両面加工である。石質はシルト質硬質泥岩である。

C類 (図版48-45-47・写真図版34-7)

45・46は両面加工されているが、47は腹面に自然面を残す半両面加工である。石質はシルト質硬質泥岩である。

第VII群 ピエス・エスキーユ (図版48-48・49・写真図版34-8・9)

台形状の平面形をもち、両面とも上下からの剝離面によっておおわれている。またこの剝離面の周辺に調整剝離が施されているため、打面・バルブが残っていない。石質は凝灰質珪質泥岩である。

第VIII群 スクレイパー

A類 (図版48-50・51・写真図版34-10・11)

50は刃部に入念な調整剝離が施されている。51は縦長剝片を素材とし、粗い調整剝離が背面に加えられている。石質は珪質頁岩である。

B類 (図版48-53・写真図版34-13)

打面の反対方向に刃部が形成されている。石質は珪質頁岩である。

C類 (図版48-52・写真図版34-12)

背面の全周縁に入念な調整剝離が施されている。石質は珪質頁岩である。

第IX群 不定形石器 (図版49-54-58・写真図版34-14-18)

刃部の形状には平坦なもの(54・55)、凸状のもの(56・57)、凹状のもの(58)がある。石質は珪質頁岩である。

第X群 石斧

A類 (図版49-59・写真図版35-1)

両面加工されており、刃部には特に入念な調整剝離が施されている。石質は珪質頁岩である。

B類 製作技法により次のように細分できる。

a. 擦切痕のないもの (図版49-60・61・写真図版35-2・3)

60は体部の横断面形が楕円形状を呈するもので、頭部が欠損している。61は小型の石斧で刃

部が破損している。石質は粗粒硬砂岩である。

b. 擦切痕のあるもの（図版49-62・写真図版35-4）

体部側縁に擦切痕があり、両面の刃部には縦方向の線状痕がみられる。頭部が欠損している。石質は凝灰岩である。

第 XI 群 半円状扁平打製石器

A 類（図版50-63・写真図版35-5）

平面形が五角形を呈し、頭部の2辺に敲打痕がみられないものである。研磨痕は全くない。石質は輝石安山岩である。

B 類（図版50-64～66・写真図版35-6）

いずれも平面形が半円状を呈し、その周縁の一部に研磨痕がみとめられるものである。66以外のものは、両面の全周縁に敲打痕がみられる。石質は輝石安山岩である。

第 XII 群 凹石（図版51-67・写真図版36-1）

自然礫の両面に凹みを持ち、一部に研磨痕がみられるものである。礫は平面形が球状を呈する拳大の輝石安山岩である。

第 XIII 群 磨石

A 類（図版51-68・写真図版36-3）

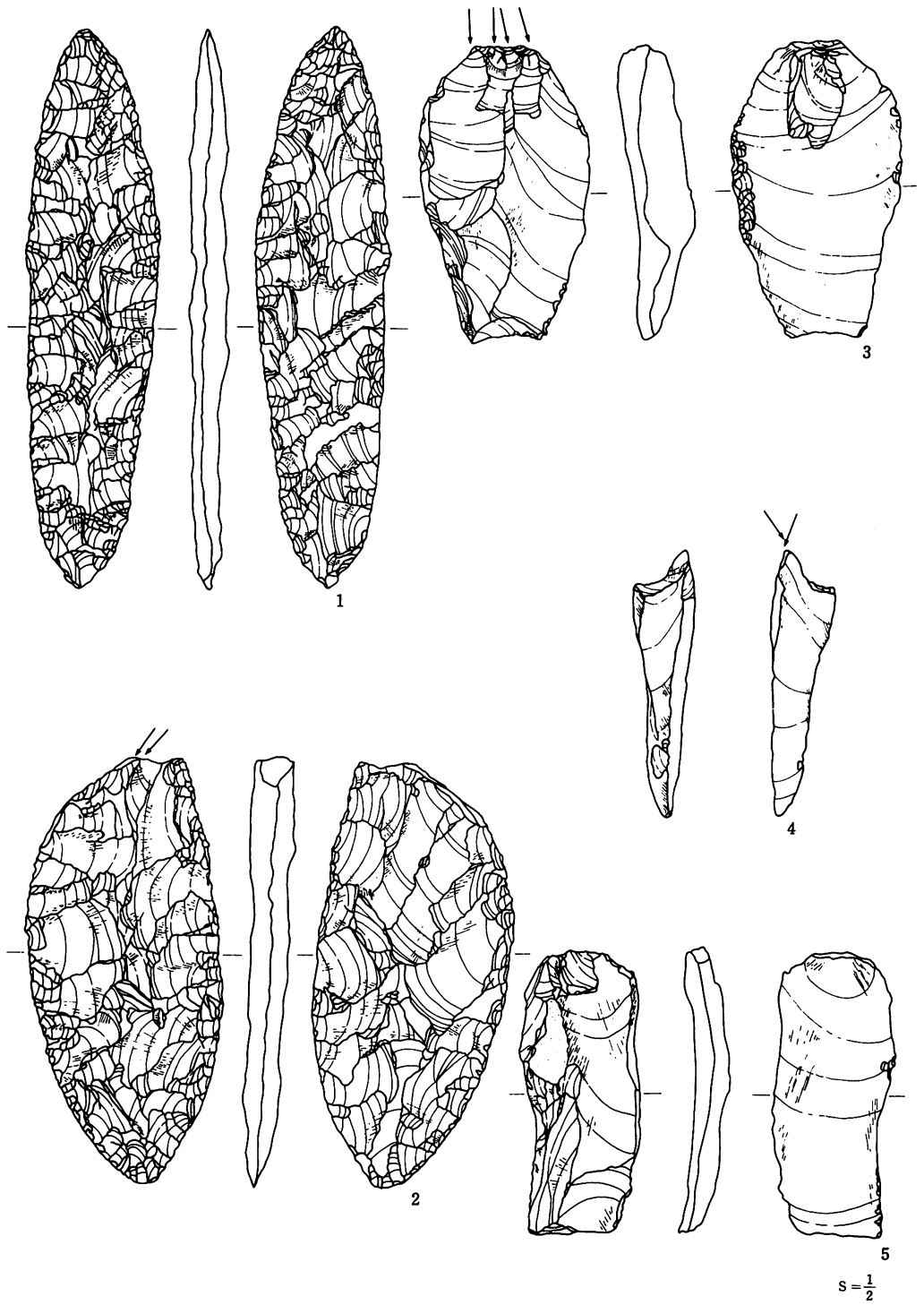
棒状の自然礫の一稜面を磨っているもので、一部に敲打痕がみられる。石質は輝石安山岩である。

B 類（図版51-69・写真図版36-2）

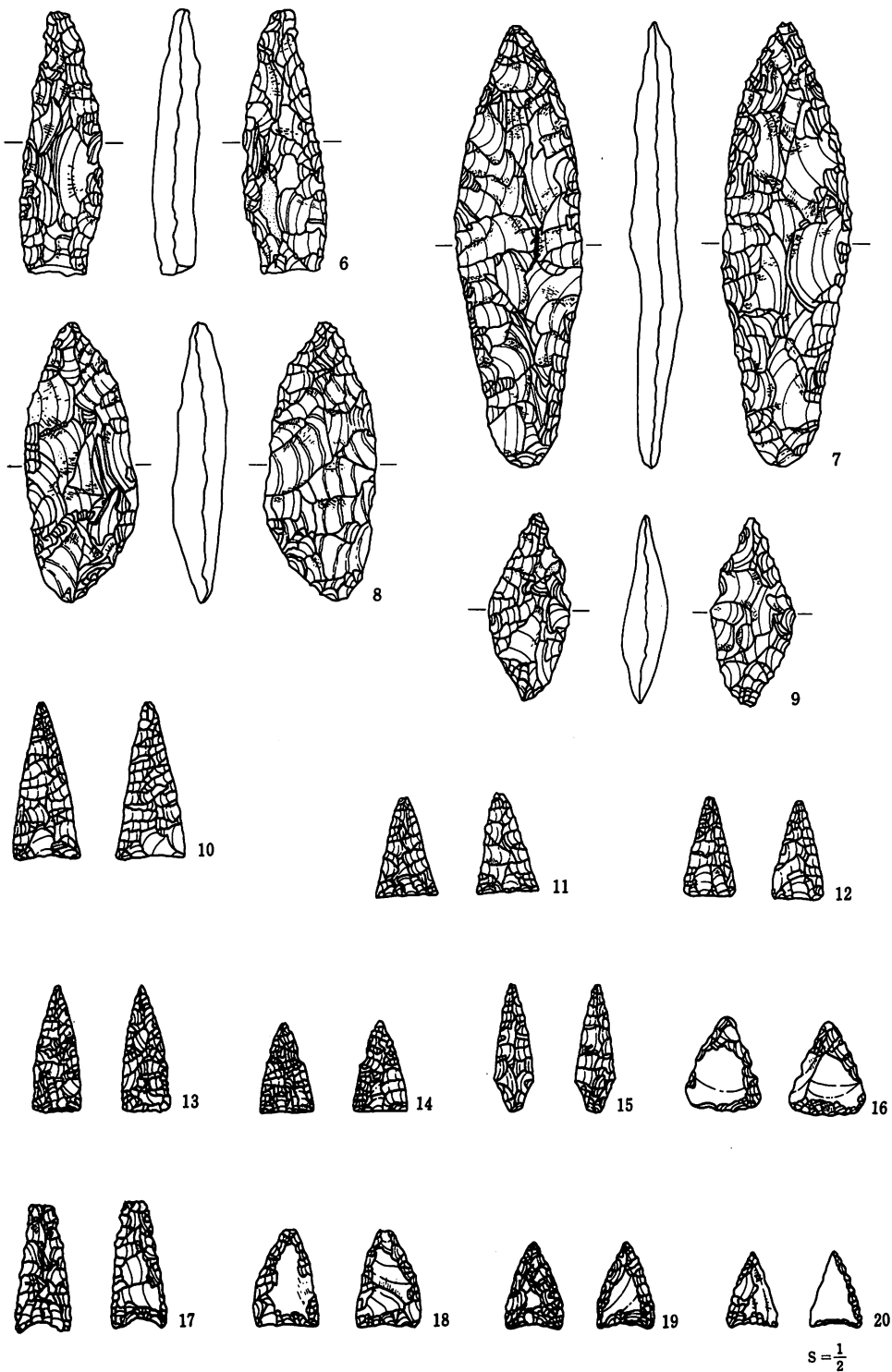
球状の自然礫の全面が研磨されているものである。石質は輝石安山岩である。

第 XIV 群 石皿（図版51-70・写真図版36-4）

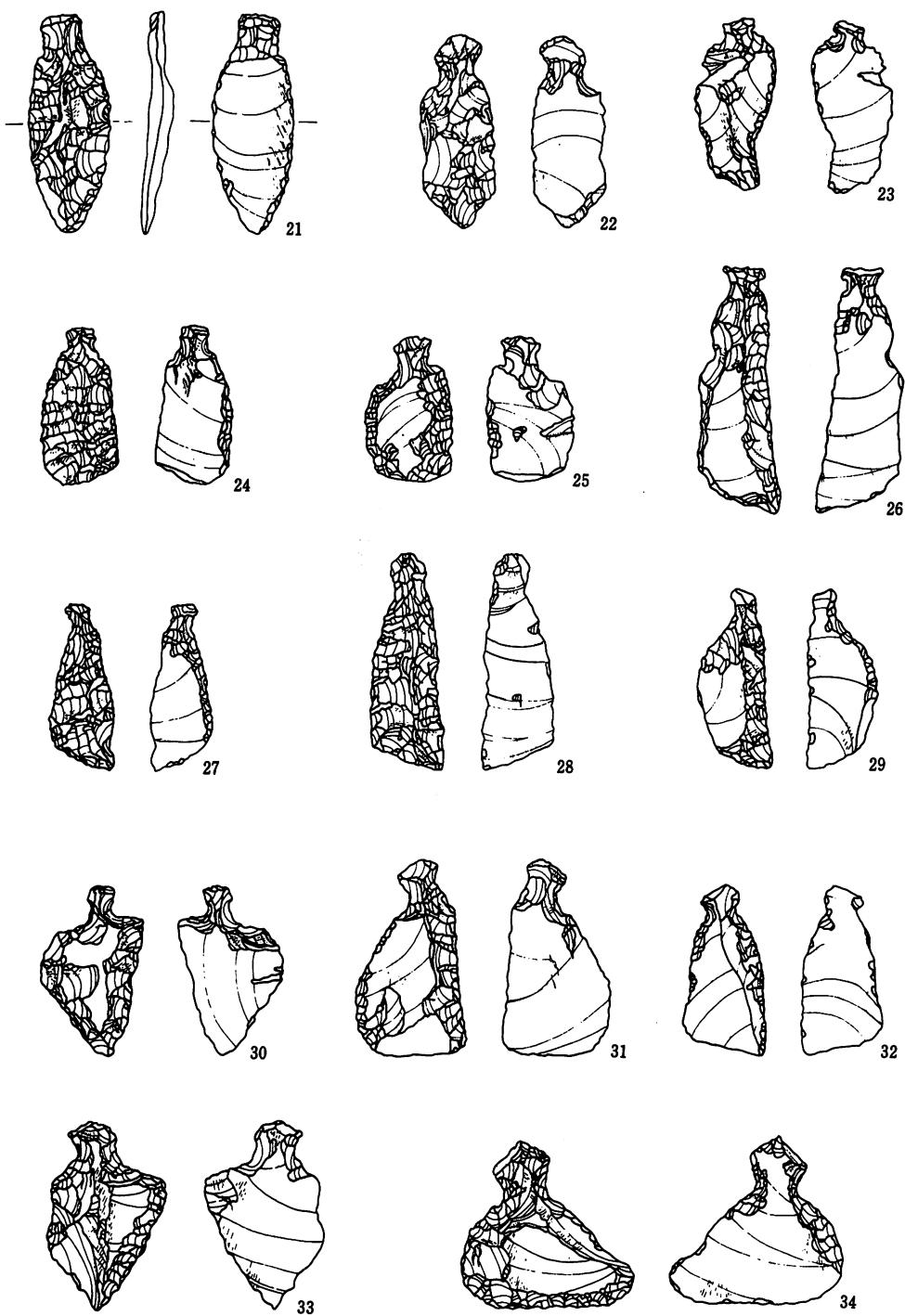
自然礫の片面が使用されており、その中央部が臼状に深く凹んでいる。石質は輝石安山岩である。



図版44 遺構外出土石器実測図(1) 「旧石器」の要素をもつ石器

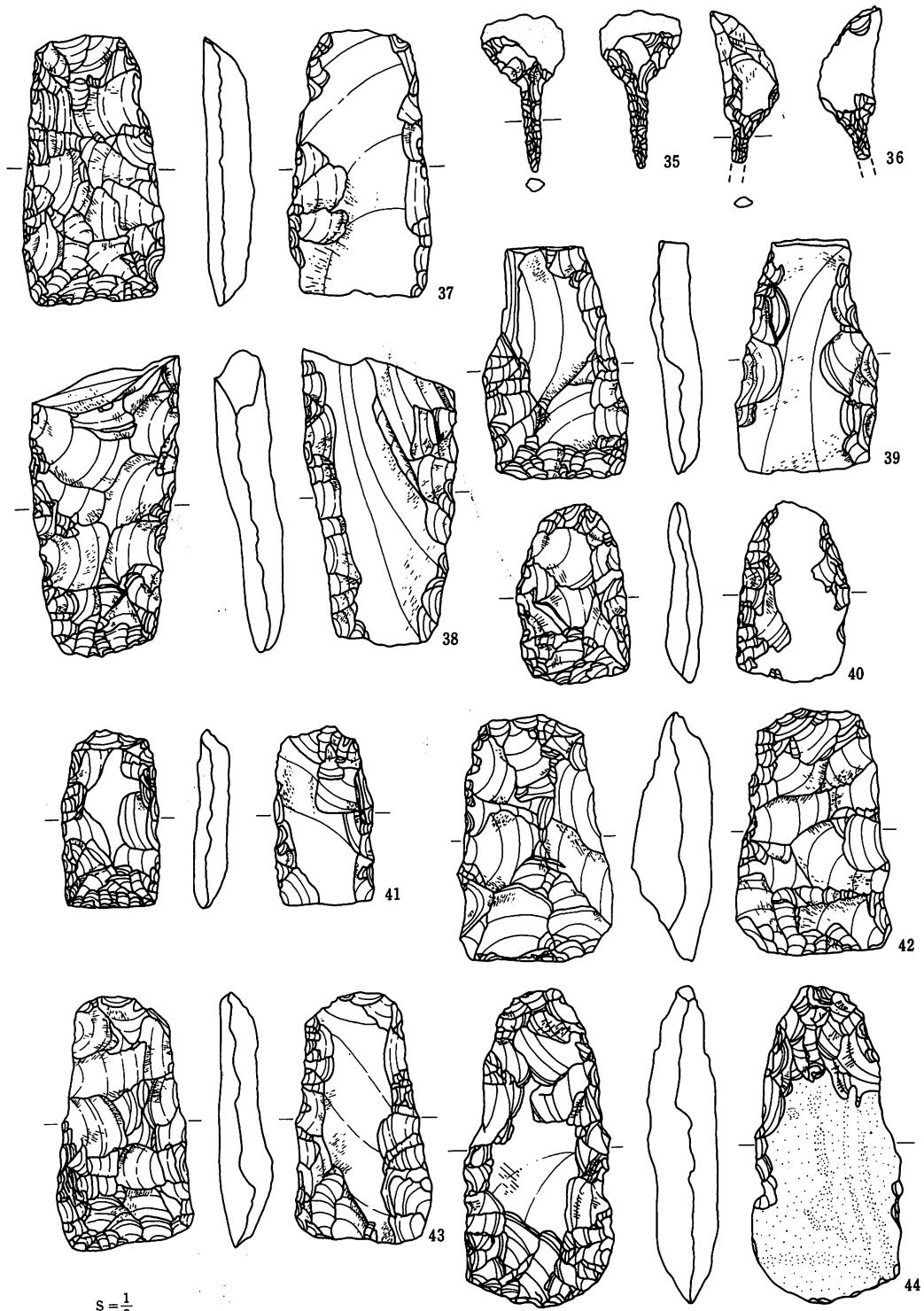


图版45 遺構外出土石器実測図(2) 石槍、石鏃

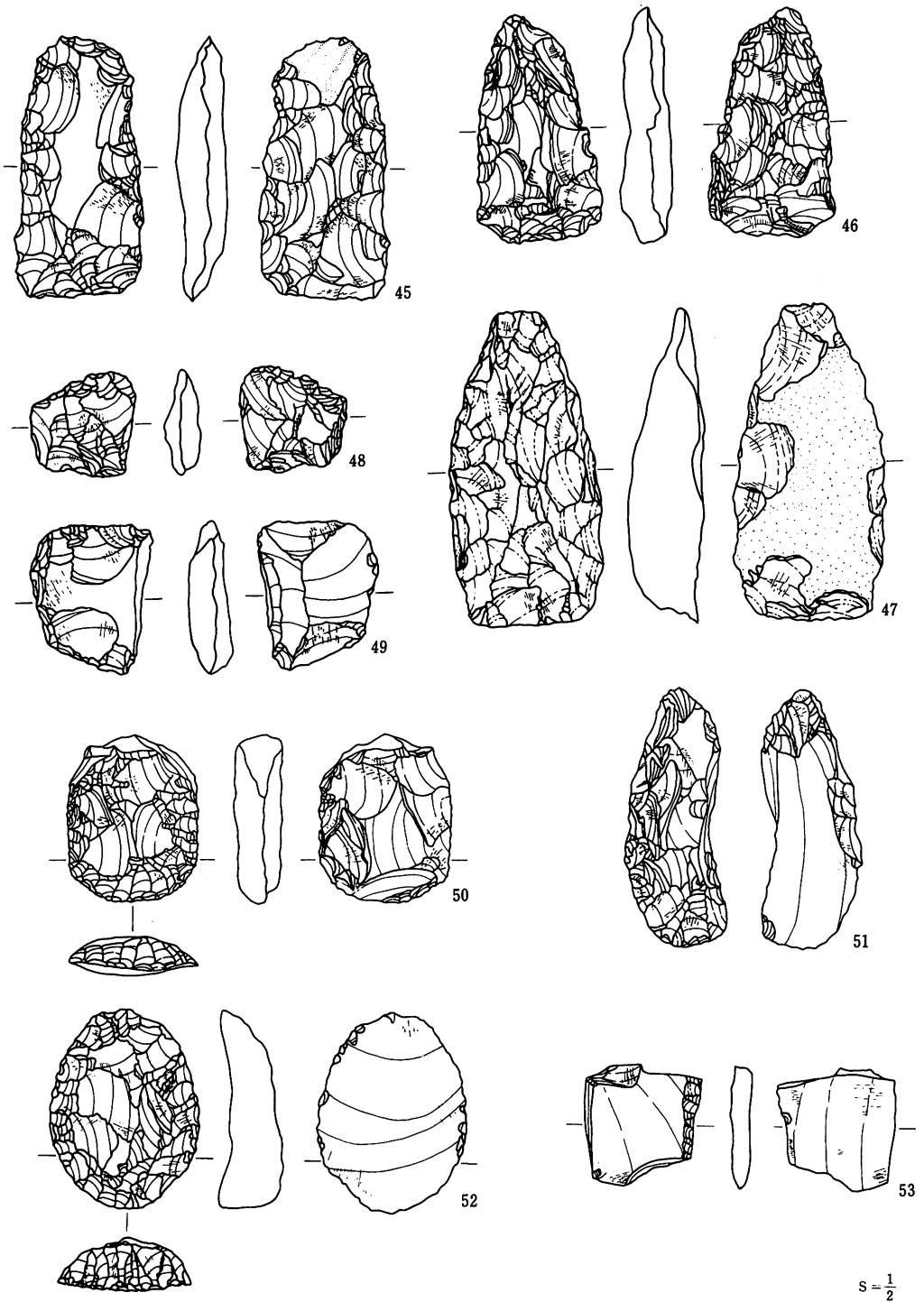


s = $\frac{1}{2}$

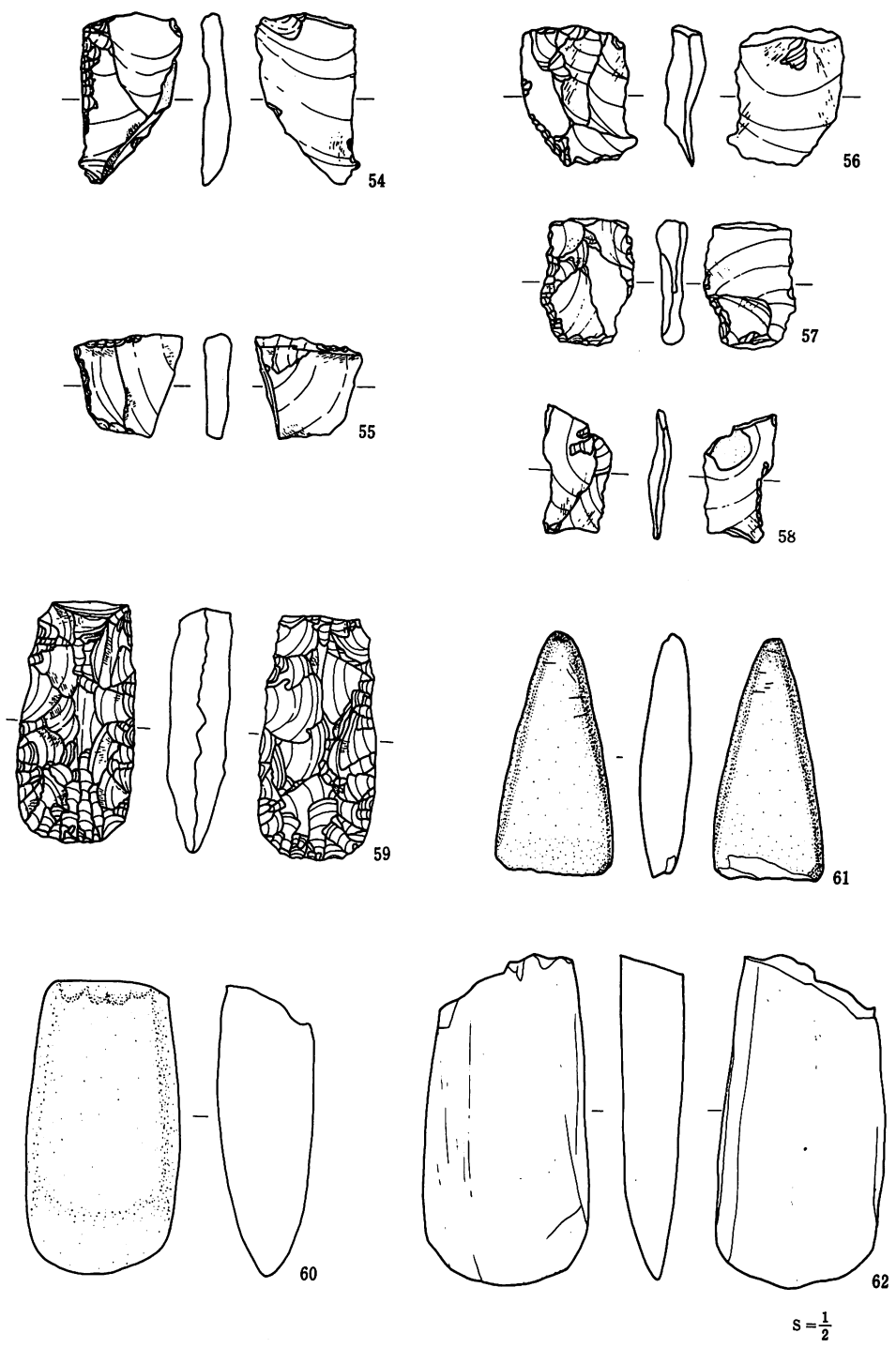
图版46 遺構外出土石器実測図(3) 石匙



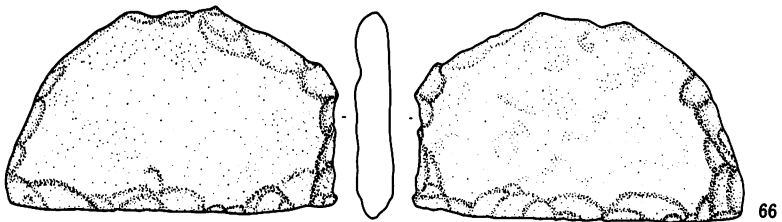
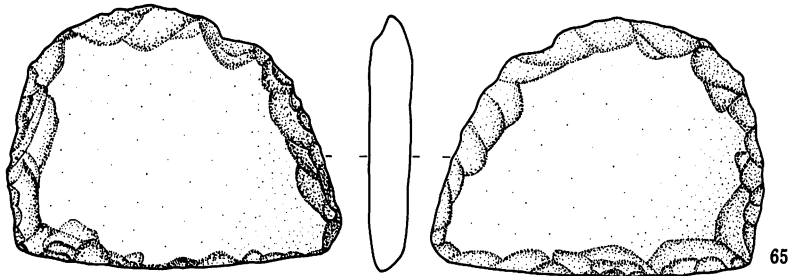
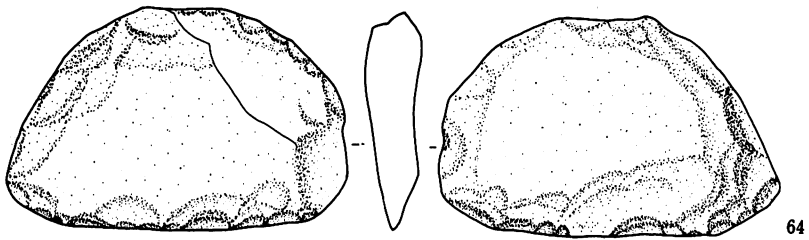
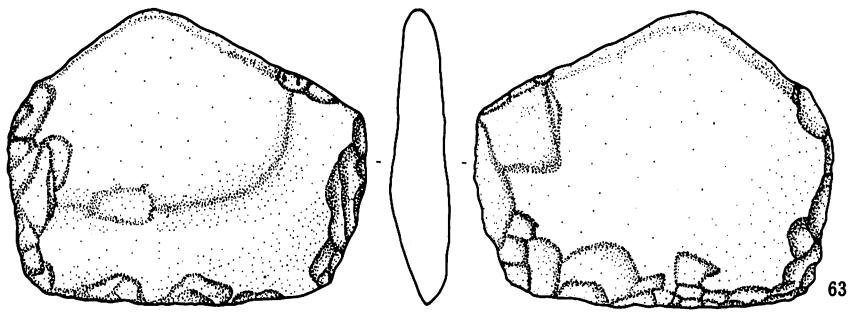
图版47 遺構外出土石器実測図(4) 石錘、籠状石器



図版48 遺構外出土石器実測図(5) 筥状石器、ピエス・エスキュー、スクレイパー

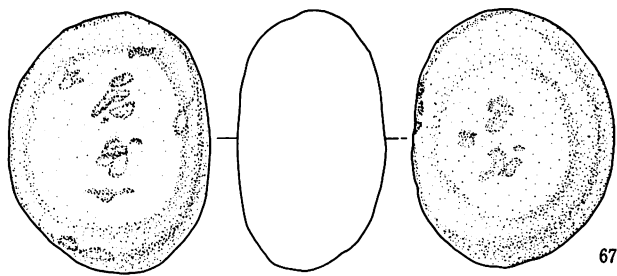


图版49 遺構外出土石器実測図(6) 不定形石器、石斧

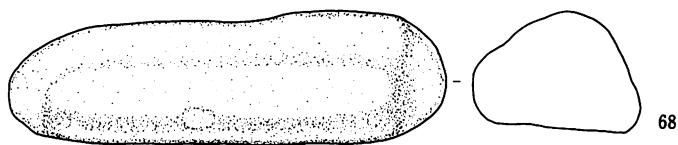


$s = \frac{1}{3}$

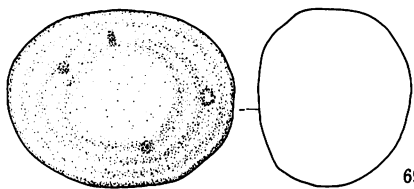
图版50 遺構外出土石器実測図(7) 半円状扁平打製石器



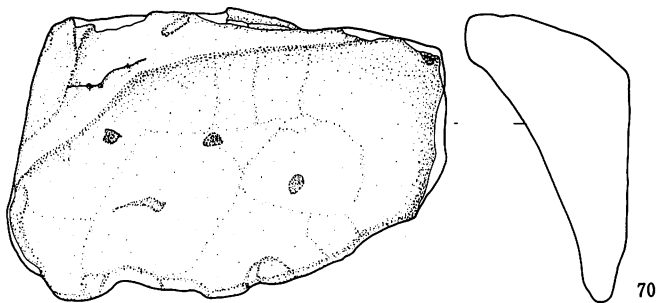
67



68



69



70

$s = \frac{1}{3}$

图版51 遺構外出土石器実測図(8) 凹石、磨石、石皿

6. ま と め

野駄遺跡の発掘調査の結果、検出された遺構および出土した遺物はこれまでに述べたとおりである。以下にこれらに関する問題点について若干の考察を加えてまとめたい。

(1) 遺 構

1) 竪穴住居址

当遺跡で検出された住居址は合計13棟である。これを時代別にみると、縄文時代のもの12棟、平安時代のもの1棟である。

①縄文時代

●時期と占地 住居址を時期別に分けると次のようになる。縄文時代前期末葉のもの（C I - 1・D I - 1・D I - 4住居址）、中期中葉のもの（C I - 2住居址）、中期後葉～末葉のもの（D I - 2・D I - 3住居址）、後期末葉のもの（A II - 1・A II - 3・F I - 2住居址）、晚期中葉のもの（A II - 2・C II - 1・F I - 1住居址）となる。D I - 1住居址は時期の決定ができるような出土遺物はなかったが、その形状や炉の形態および床面直上から出土した炭化材のC-14年代（後述）からみて上述の時期に位置づけられるものと考えられる。これらの住居址は段丘崖下部の急斜面から古期沖積面の緩斜面に分布しているが、時期によってややその占地状態が異なるようである。前期末葉・中期中葉のものは北側古期沖積面の中央部～西南部に、中期後葉～末葉のものは段丘崖下部にある。また後期末葉・晚期中葉のものは南・北古期沖積面の崖線寄りにある。占地の点でさらに注目されることは、時代および時期の異なる住居址がほぼ同一位置に構築されていることである（A II - 2・A II - 3住居址、C I - 1・C I - 2・C I - 3住居址、F I - 1・F I - 2住居址）。特にA II - 2・F I - 1住居址はその炉が下位にあるA II - 3・F I - 2住居址の炉の真上に作られている点で際立っている。

●規模および形状 ほとんどの住居址は長軸の長さが3～4mの規模のものであるが、A II - 2・C I - 1住居址は7～8mと他のものに比べて大型である。この中でもC I - 1住居址は地床炉が3基長軸に沿って配置されていることなどからみて、長者屋敷遺跡で検出された同時期の住居址と同じように「大型住居系列」⁽¹⁾に属するものと考えられる。住居址の形状は斜面下方にあたっている壁が消失しているものが多いため正確には把握できないが、残存部分や検出状況から推定すると、当遺跡では次のような時期的傾向をもつようである。形状は、長方形・不整な方形（前期末葉）→方形（中期中葉）→不整な円形・楕円形（中期後葉～末葉）

→円形（後期末葉）→円形（晚期中葉）を示し、中期中葉を境にして大きく変化するようである。

●柱穴配置 柱穴配置の全容が明らかになった住居址は3棟である。柱穴配置には、七角形の配置を示すもの（A II - 3住居址）と円形の配置を示すもの（A II - 2・C II - 1住居址）がある。これらのほかに一部の柱穴配置が判明した住居址は3棟（C I - 1・D I - 1・F I - 1住居址）である。当遺跡において晩期に位置づけられるA II - 2・C II - 1・F I - 1住居址は、柱穴である小ピットが環状または弧状に配置されている。これらの住居址は、同じ晩期の住居址で雫石町桜沼遺跡（上野、1975）などの報告例のように礫が「環状列石」状に配置されているものとは別形態のものと考えられる。

●炉の形態 住居址に伴う炉は時期的に次のような形態変化を示す。地床炉（前期末葉）→石囲炉（中期中葉・中期後葉～末葉）→複式炉（中期後葉～末葉）→地床炉（後期末葉）→石囲炉・直立埋設土器を伴う石囲炉（晚期中葉）の如く変化している。

●炭化材のC-14年代 住居址の埋土中および床面上から出土した炭化材のC-14年代の測定を社団法人日本アイソトープ協会に依頼した。その測定結果は下記のとおりである。

A II - 2住居址（床面上の炭化材）	……………2600±85 years B.P.	N-3341
D I - 1住居址（埋土中の炭化材）	……………4840±80 years B.P.	N-3343
D I - 2住居址（床面上の炭化材）	……………4360±75 years B.P.	N-3342
F I - 1住居址（床面上の炭化材）	……………2880±65 years B.P.	N-3344

②平安時代

この時代に属するものはC I - 3住居址だけである。この住居址は、北側古期沖積面の中央部に位置し、ほぼ同一位置にある縄文時代のC I - 1・C I - 2住居址を切りこんで構築されている。住居址の埋土中にレンズ状の堆積を示す灰白色で粉塵状を呈するパミスがみられた。当遺跡と近接した位置にある長者屋敷遺跡の同時代の住居址群の埋土にもこのパミスがみられた。しかしいずれも埋土中にパミスがブロック状に混入しているものばかりで、レンズ状の堆積を示すものはない。また両遺跡のこれらの住居址に伴う土師器を比較してみると次のようになる。長者屋敷遺跡ではロクロ成形の坏とロクロ不使用の粗いヘラケズリ調整の甕が共伴しているが、当遺跡においてはこのような粗製の甕はみられず共伴するのはロクロ成形の甕だけである。したがって以上に述べたパミスの堆積状態と出土遺物との関連からみて、C I - 3住居址は長者屋敷遺跡の住居址群よりも時期的に先行するものと考えられる。

当遺跡および長者屋敷遺跡で発見された灰白色のパミスは、これまで暫定的に「粉状パミス」⁽²⁾と呼称されてきたものと類似するものであり、その後二名によって「C Y - 78 pumice」（高橋、1978）・「松尾火山灰」（瀬川、1978）と仮称された。今まで「粉状パミス」として一括され

てきたものに、水沢一北上地域の「胆沢火山灰」(高橋、1978)、盛岡市周辺の「盛岡火山灰」(高橋、1978)がある。これらは、噴出起源・降下年代・分布などの点において二戸市周辺にみられる十和田 a 降下火山灰(大池、1972)との関連性が問題にされてきた。ところが最近町田 洋によって、これらの火山灰がその火山ガラスの屈折率より同一起源のものと考えられるため、いずれも十和田 a 降下火山灰に属する可能性があるとの指摘がなされた⁹⁾。もし町田が指摘するようにどれも十和田 a 降下火山灰であるならば、今後この火山灰と関連性をもつ時期の考古資料を比較検討する上での鍵層となりうるであろう。また考古資料の比較検討の成果によって、逆にこの火山灰の降下年代も次第に明らかにされていくものと思われる。

2) ピット

当遺跡で検出されたピットは合計17基である。開口部径・底部径・深さが100cm前後の小規模なピットで、断面形がフラスコ状・ピーカー状・円筒状等を呈するものである。いずれも古期沖積面上に作られており、縄文時代の住居址群と近接した位置にある。出土遺物がないため時期決定ができないものが大半である。しかし遺物が出土したものやこれらと同じような形態を示す他遺跡の例⁴⁾などから推定して、縄文時代中期末葉～後期～晩期に位置づけられるピットと考えられる。また占地や埋土などの状況から、「貯蔵」の機能を果たしたものと思われる。

3) 陥し穴状遺構

F I - 101陥し穴状遺構と対をなすもう1基の陥し穴状遺構が存在するのではないかとの作業仮説から、丘陵の崖線部分の遺構検出を行なったが発見することはできなかった。当遺構は形態的に長者屋敷遺跡で検出されたものとほぼ同じであり、丘陵に棲息し遺跡内の湧泉の水を求めて往来する動物を捕獲するために仕掛けられた「陥し穴」と考えられる。時期は出土遺物がないため決定できないが、縄文時代中期末葉に属する土器片を包含するIV層(黒色土層)の上面から掘りこまれているという層的事実より、中期末葉以降に位置づけられるものと思われる。先に遺構の事実記載の中でふれたように、当遺構の最上部は火山灰起源の黄褐色土によって閉塞されている。このような例は都南村湯沢遺跡(三浦ほか、1978)の報告例の中にみられる。

4) 炉 址

壁や柱穴のほかに床面と思われる一定のかたさと広がりをもつ面が検出されなかった炉址をこの種別の中に入れた。しかし何らかの簡単な上屋があった可能性も考えられるため「屋外炉」の名称は使用しなかった⁶⁾。この中に属する炉は合計6基で、形態上石囲炉(C I - 151・C II - 151・D I - 151・D I - 152・D II - 151炉址)と土器埋設炉(A II - 151炉址)とに分けられる。石囲炉の形状には、長方形のものや円形のものがある。時期決定が可能な炉はA II - 151炉址である。この炉は使用されている土器の時期から、縄文時代中期後葉～後期前葉に位置づ

けられるものと考えられる。

5) 埋設土器遺構

今回の調査で1基検出された。埋設土器の時期（縄文時代晩期）およびその検出位置からみて、同じ晩期に属するAⅡ-2住居址と密接な関連性をもった遺構と考えられる。

(2) 遺物

1) 土器

①**縄文土器** 当遺跡は東北地方北半の円筒式土器と同南半の大木式土器の分布上の関係を解明する目的で調査が行なわれた水切場遺跡（鈴木、1958）と近接した位置にある。そこで円筒系土器と大木系土器との競合関係を、当遺跡から出土した前期～中期に位置づけられる土器群の中でみていくと次のようになる。前期は円筒下層a式からd式に比定される円筒系土器（第Ⅲ群土器A・B類）だけで構成されている。しかし中期は円筒上層c式に比定される土器（第Ⅳ群土器B類）以外は大木系土器（第Ⅳ群土器A・C・D類）によって占められている。以上のような円筒系土器と大木系土器の競合関係は、長者屋敷遺跡の資料が分析されればさらに一層明らかになるであろう。

②**弥生土器** 遺構外から甕形土器の破片が1点出土した。出土地点は段丘崖上に位置する。器形および文様構成からみて田舎館式に比定される土器と考えられる。この土器と類似するものとして岩手県内では二戸市斗米沢尻出土のものがある⁶⁾。また県外の例では青森県川内町楯ノ木平出土のもの⁷⁾や同三厩村宇鉄Ⅱ遺跡出土のもの⁸⁾がある。

③**土師器** 当遺跡から出土した土師器はいずれもロクロ成形の坏と甕である。これらの土師器は、住居址の埋土中にみられるパミスの堆積状態や土器の共伴関係などから、長者屋敷遺跡出土のそれより時期的に先行するものと考えられる。

2) 石器

ほとんどが遺構外から出土した石器であるため、土器型式との共伴関係が不明なものが多くを占める。当遺跡出土石器の特徴として、一次加工あるいは二次加工後折断されているものが多いことがあげられる。

第Ⅰ群の「旧石器」的要素をもつ石器としたものは、形態や製作技法などからみて旧石器ではないかと考えられる石器である。しかしこれらは、層位的に大きな疑問がもたれるような出土状態を示している。したがって今後予定されている当遺跡および周辺の遺跡の調査成果をもつて、この群に属する石器が「旧石器」であるか否かの最終的な判断を行ないたいと思う⁹⁾。

註

- (1) 長者屋敷遺跡の調査担当者の一人である高橋文夫によって暫定的に提唱された用語であるが（高橋、1979）、用語自体およびその定義について現在再検討中である。
- (2) 1972年、高橋信雄が北上市相去町成沢遺跡において、土師器を伴う住居址から発見された灰白色で粉塵状の降下火山灰を暫定的に呼称したものである。
- (3) 1976年6月30日、岩手県民会館4階第2会議室における講演。
- (4) 1979年度に調査された安代町荒屋Ⅰ遺跡・有矢野遺跡から同じような形態をもつピット群が検出され、これらの中より縄文時代中期末葉～晩期に至る土器が出土した。
- (5) 野駄遺跡の現地説明会資料（四井ほか、1978）の中で「屋外炉」として扱っていたものに対して、草間俊一より現地において「この種の炉址には何らかの上屋があったと考えられるのではないか」との御教示をいただいた。これらの炉址は、壁や柱穴などが検出されなかっただけで、住居址に伴うものと規模・形態・構築方法などの点で比較してみても大きな相違はみられない。以上の状況からして、草間氏の指摘するような可能性も考えられるため、筆者は「屋外炉」の名称を使用しなかった。
- (6) 小岩末治、1961 所収。
- (7) 鈴木克彦、1978 所収。
- (8) 岩本義雄ほか、1979 所収。
- (9) 1979年7月31日、東北大学文学部考古学研究室において芹沢長介氏より次のような御教示をいただいた。石器は形態や製作技法だけではその属する時代・時期を決定することができないものが多い。石器の時代・時期を判定するには、出土層位や土器との共伴関係の把握が必要である。特に「旧石器」として位置づけるためには、何よりもその石器の出土層位が判断の鍵となる。野駄遺跡から出土した石器は、縄文時代の遺構の埋土とか捨て土の火山灰土中から出土したのものがあるなど層位的に問題があるばかりでなく、形態および製作技法上からみても疑わしい点がある。したがってこれらの石器が「旧石器」であるか否かは今後の調査事例をまって再検討した方がよいであろう、との御教示であった。
なお以上の記述内容に誤りがあれば、すべて筆者の責任である。

参考・引用文献

- 戸 沢 充 則 1965 「尖頭器文化」 『日本の考古学Ⅰ』
- 鈴 木 孝 志 1968 「北上川中流流域の無土器文化——北上市周辺の遺跡——」 『北上市史第1巻原始・古代(1)』
- 小野寺信吾 ほか 1968 『和賀仙人遺跡第1次調査略報』
- 稲 田 孝 司 1969 「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」 『考古学研究第15巻第3号』
- 芹 沢 長 介 1972 『石器時代の日本』
- 芹 沢 長 介 1974 『最古の狩人たち』 古代史発掘1
- 小野寺信吾・菊池 強一 1975 『大台野遺跡』
- 麻生 優・加藤 晋平・藤本 強編 1975 『日本の旧石器文化第1巻』
- 麻生 優・加藤 晋平・藤本 強編 1975 『日本の旧石器文化第2巻』
- 麻生 優・加藤 晋平・藤本 強編 1976 『日本の旧石器文化第5巻』
- 石器文化談話会編 1978 『座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 三宅 徹也 ほか 1979 『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 鈴 木 孝 志 1958 「岩手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報」 『上代文化第28輯』
- 佐藤 達夫 ほか 1958 「青森県上北郡早稲田貝塚」 『考古学雑誌第43巻第2号』
- 清 水 潤 三 1959 『亀ヶ岡遺跡——青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究——』
- 山 内 清 男 1964 『縄文式土器Ⅰ』 日本原始美術1
- 林 謙 作 1965 「縄文文化の発展と地域性——東北——」 『日本の考古学Ⅱ』
- 草間 俊一 ほか 1967 『盛岡市一本松熊の沢遺跡』
- 草間 俊一 ほか 1971 『貝鳥貝塚』
- 市川 金丸 ほか 1973 『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』
- 草間 俊一 ほか 1974 『岩手県大槌町吉里吉里崎山弁天遺跡』
- 村 越 潔 1974 『円筒土器文化』
- 上 野 猛 1975 『桜沼遺跡調査概報』
- 村 越 潔 1976 「円筒土器に伴う特殊な石器」 『東北考古学の諸問題』
- 岡 村 道 雄 1976 「ピエス・エスキーユについて」 『東北考古学の諸問題』
- 三浦 謙一 ほか 1977 『都南村湯沢遺跡』
- 高橋 与右エ門 1978 『二戸市沢内B遺跡』
- 鈴木 克彦 ほか 1978 『熊沢遺跡』
- 四井 謙吉 ほか 1978 『野駄遺跡現地説明会資料』

- 高橋 文夫 1979 「遺跡の概略」 『岩手県松尾村長者屋敷遺跡現地説明会資料』
- 小林 達雄 1979 『縄文土器Ⅰ』 日本の原始美術 1
- 佐原 真 1979 『縄文土器Ⅱ』 日本の原始美術 2
- 小岩 末治 1961 「弥生式文化の展開」 『岩手県史 第1巻』
- 武田 良夫 1978 「岩手県における弥生式土器について——盛岡地方を主として——」
『考古風土記第3号』
- 鈴木 克彦 1978 「青森県の弥生時代土器集成Ⅰ」 『考古風土記第3号』
- 岩本 義雄 ほか 1979 『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 草間 俊一 1965 『岩手県福岡町堀野遺跡』
- 高橋 信雄 1976 『保土沢遺跡発掘調査報告書』
- 関 豊 1978 『二戸市中曽根遺跡発掘調査報告書』
- 大池 昭二 1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」 『第四紀研究第11巻4号』
- 中川 久夫 1972 「青森県の第四系」 『青森県の地質』
- 大池 昭二 1974 「十和田火山は生きている」 『国土と教育No.26』
- 町田 洋 1977 『火山灰は語る』
- 高橋 文夫 1978 「長者屋敷遺跡——速報——C Y-78pumice について」
- 瀬川 司男 1978 「縄文期以後の火山灰と遺跡——岩手県を中心に——」 『どるめん19号』
- 矢嶋 仁吉 1956 『集落地理学』
- 小林 達雄 1973 「多摩ニュータウンの先住者——主として縄文時代のセトルメント・システムについて——」 『月刊文化財1月号』

Ⅲ. 寄木遺跡

1. 遺跡所在地 岩手郡松尾村大字寄木字中堰
2. 調査担当者 主任専門調査員 金沢光孝、専門調査員 四井謙吉
3. 調査協力員 小泉修栄
4. 調査期間 昭和53年8月28日～9月22日
5. 調査対象面積 6,069m²
6. 発掘面積 3,400m²
7. 遺跡記号 YK78

1. 調査方法

調査対象範囲内にある自動車道の中心杭STA 79+20とSTA 79+40を選び、この2点を結ぶ線およびこれに直交する線を座標軸として設定し、STA 79+20を座標原点とした。全体を30m単位に大区画し、それをさらに3m×3mのグリッドに小区画した。地区名・グリッド名は、野駄遺跡と同様に大区画と小区画に付したアルファベット・ローマ数字・アラビア数字の組合せによって表わした。

当初調査対象区域に6m間隔にトレンチを縦横に入れ、遺構検出面の把握と土層観察を行なった。その後遺構検出面までの土層を短時間で除去するためにユンボを1台導入した。土層除去後は、作業員を投入して遺構の有無を確認した。この一連の作業はほぼ大区画ごとに行なわれたが、この過程で遺構がないことが判明した区画については土捨場にあてた。なお作業進行中は、特に重機と人との接触事故のないように安全管理に努めた。

調査員の任務分担は次のようにした。金沢は、調査の進行状況の掌握・安全管理・対外交渉等を担当し、四井は主に野外作業の指示・点検にあたった。協力員の小泉は、グリッド設定・写真撮影等を行なった。

2. 遺跡の立地

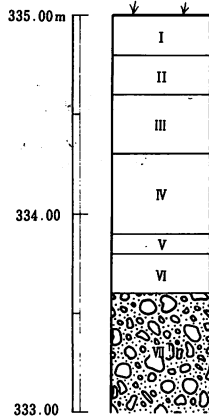
寄木遺跡は、野駄遺跡の南方約2.5km、崩石遺跡の北西約2.0kmの位置にある。遺跡の載る地形面は松川左岸にある低位段丘面である。この面は丘陵および高・中位段丘面を取り巻く形で広く分布しており、遺跡付近で標高約230mを計る。遺跡の北側および南側には小規模な開析谷がみられる。遺跡の現状は、畑地・果樹園・水田となっている。

周辺の遺跡としては、上述のものほかに中沢遺跡（縄文時代中期・晩期）、笹畑遺跡などがある。

3. 基本層序

遺跡内の深掘り地点での堆積は次のようになっている。

I層 10Y R 8/2・黒褐色土層。シルトで構成され、層厚20cm±の表土層となっている。草木



挿図 土層柱状図

根や最近の耕作などによる攪乱がみられる。

II層 Y R ⅞・褐色土層。層厚20cm±のシルト層であまり攪乱を受けていない。

III層 10 Y R ⅞・黒色土層。層厚30cm±のシルト層で、ところどころに褐色シルトがマダラ状に混入している。野駝遺跡のIV層の性状とよく似ている。

IV層 10 Y R ⅞・黄褐色土層。層厚40cm±の砂質シルト層である。

V層 7.5 Y R ⅞・にぶい褐色土層。層厚10cm±の砂質シルト層であり、埋没土壌と考えられるものである。

VI層 10 Y R ⅞・黄褐色土層。層厚20cm±の砂層である。

VII層 砂礫層。褐色の砂と粒径30cm±の安山岩類の垂円礫～円礫によって構成されている。

4. 調査結果

調査対象区域の約2分の1を粗掘りしたが、遺構は全く検出されなかった。しかしC I区の西側から、遺物として縄文土器（縄文時代晩期）と土師器（ロクロ未使用）の破片が数点出土したため、この地区を中心としてさらに粗掘り区域を広げた。その結果、現代の鶏舎跡が確認されただけで、精査の対象となるような遺構は全く検出されなかった。したがって残された未調査部分についても現場の状況からみて、遺構が存在しないものと考えられるためこの段階で調査を打ち切った。

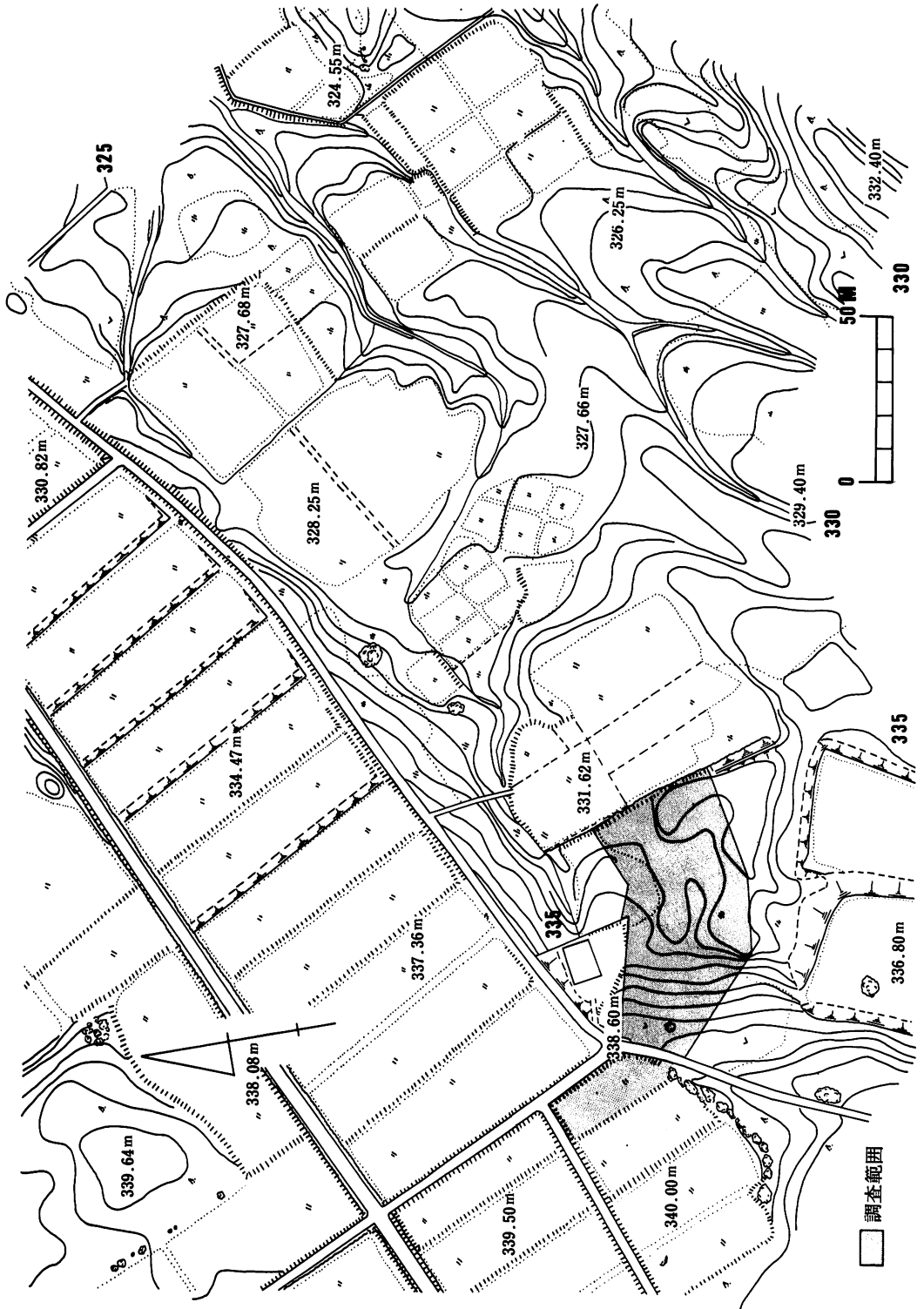
VI. 崩^{くずれ}石^{いし}遺跡

1. 遺跡所在地 岩手郡西根町平笠
2. 調査担当者 主任専門調査員 金沢光孝、専門調査員 四井謙吉
3. 調査協力員 小泉修栄
4. 調査期間 昭和53年7月10～8月4日
5. 調査対象面積 2,000m²
6. 発掘面積 2,000m²
7. 遺跡記号 K I 78



図版1 遺跡位置図

建設省国土地理院承認
 (承認番号) 昭54、東複、第84号



図版 2 遺跡周辺地形図

1. 調査方法

調査対象範囲は、自動車道の岩手山サービスエリア建設予定地の西側部分である。座標軸の設定にあたって、サービスエリア内の測量杭を2点選び、両者を結ぶ線及びこれに直交する線を基準線とした。北側にある杭を座標原点として、30m単位に大区画し、南北方向にA～Eとアルファベットを付し、東西方向にはI・IIとローマ数字を付した。大区画をさらに10等分し3m×3mのグリッドを設定した。これらには、それぞれの方向にa～jのアルファベットと0～9のアラビア数字を与えた。地区名およびグリッド名は、野駄遺跡と同様に大区画・小区画に付したアルファベットと数字の組合せによって表わした。

4～5グリッドを1単位として粗掘りを行なった。BI～BII区はほぼ平坦で遺構検出面までの土層が薄いため、予定日数よりも早く粗掘り・遺構検出を完了した。しかしCI～CII区は、傾斜地で土層が厚くしかも泥流堆積物中の安山岩類の巨岩塊が多量に露出しているため、予想外に日数を費した。粗掘り・遺構検出中に出土した遺物は、グリッド名と層位を記録した後取りあげた。また調査開始当初、土層観察のため座標軸に沿って十字にセクション・ベルトを設定したが、土層断面図を作成後これを除去した。

調査員の任務分担は次のように行なった。金沢は調査作業計画の立案およびその点検・対外交渉等を担当し、四井は主に野外作業の指示およびその点検にあたった。協力員の小泉は、グリッド設定・実測・写真撮影を行なった。なお野外作業と並行して、現場において遺物の洗浄・注記を行なった。この作業には女子作業員1名をあてた。

2. 遺跡の立地

崩石遺跡は、花輪線大更駅の西方約4.6km、岩手山（標高2,041m）の北東麓の末端部にある。遺跡の北方約0.5kmには、八幡平の大深岳山麓に源を発する松川が流れている。この川は、玉山村下田地点で北上川に合流するもので、全長約31.4kmに及ぶ。また約5km南方には特別天然記念物に指定されている焼走熔岩流がある。これは、1719年（享保4）に岩手山の中腹に生じた小火口から噴出流下した熔岩流である。延長約2,800m、末端部の最大幅約1,050mを計る。

遺跡は岩手火山に噴出起源をもつと考えられる泥流⁽¹⁾の堆積面上に載っており、標高約240mである。この面の東側崖線沿いには、豊富な水量をもつ湧泉の形成がみられる。遺跡の現状は、畑地・水田となっており、地表のところどころに泥流堆積物中の安山岩類の巨岩塊が露出して

いる。

周辺の遺跡としては、蝦夷館跡・沼利遺跡・依立遺跡などがある。また当遺跡の約300m東方にはキャンプ地として分布地図⁽²⁾に登録されている崩石遺跡がある。

3. 基本層序

遺跡内の深掘り地点での堆積は次のようになっている。柱状図として示したものは、調査区の中央部に位置するC I区の平坦部と斜面部のものである。

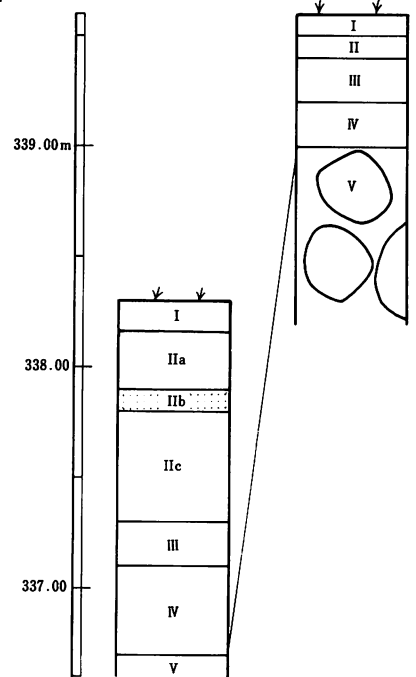
I層 10Y R¹/₂・黒色土層。砂質シルトの表土層であり、最近の耕作や草木根によって攪乱されている。

II層 10Y R²/₂・黒褐色土層。砂質シルト層で細粒・粗粒のスコリアが少量含まれている。斜面部では次のように細分される。II aは下位のところどころにII bにみられるパミスがブロック状に混入している。II bは灰白色(2.5Y²/₂)または淡黄色(2.5Y³/₂)を呈するパミスの層である。細粒と粗粒のものが入り混じりふるいわけがみられないことや黒褐色土が含まれていることから考えて、このパミスは二次堆積物と思われる。II cは平坦部のものとほぼ同じ性状を示し、II a・II bより砂の混入量が少ない。

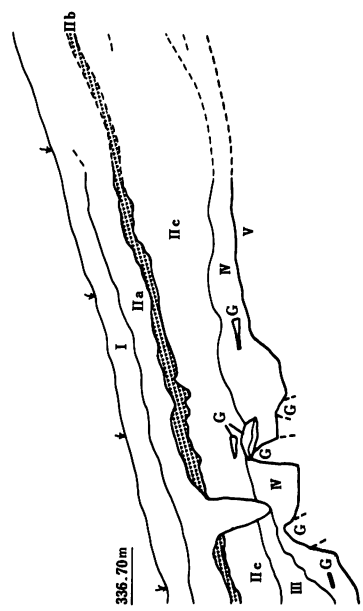
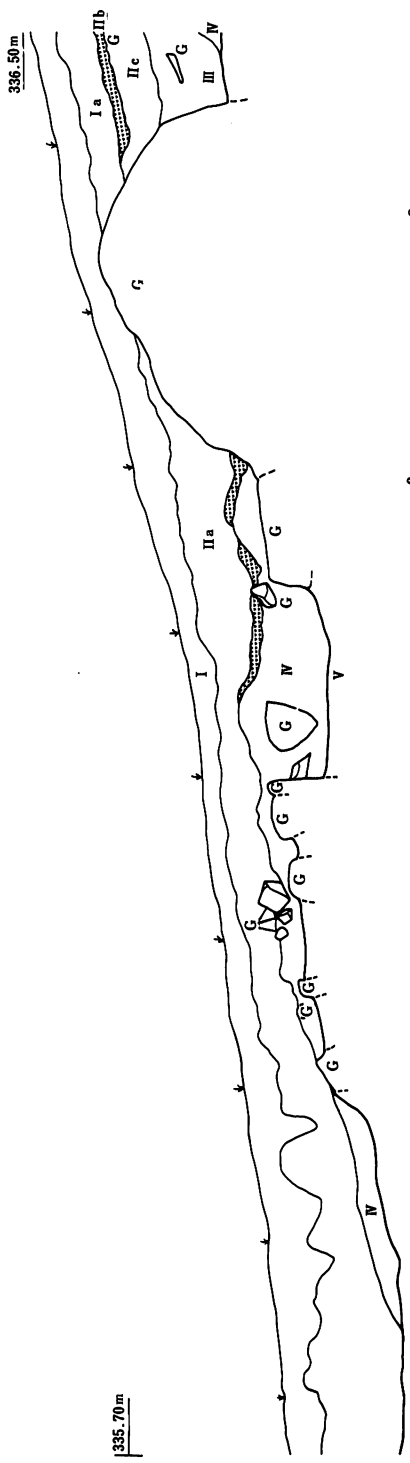
III層 10Y R³/₂・暗褐色土層。シルト層で粗粒のスコリアが少量含まれている。

IV層 10Y R¹/₂・黒色土層。シルト層で細粒のスコリアが少量含まれている。II・III層のものに比べて粘性のあるシルトである。この層の上部に遺物が包含されている。

V層 10Y R⁴/₂・褐色土層。泥流堆積物層であり、粒径10cm±~200cm±の安山岩類の巨岩塊が含まれている。上部には縦横に発達するクラックがみられる。



挿図 土層柱状図



图版 3 土层断面图

4. 調査結果

遺跡の調査対象範囲全域を発掘したが、安山岩類の巨岩塊が折り重なったような状態で層理面上に露出ただけで、遺構は全く検出されなかった。しかし遺物として、巨岩塊に流失をせきとめられたと思われるような状態で縄文土器が出土した。ほとんどのものが細片であるが、部分的に接合・復元できたものもある。金沢の観察によれば、接合・復元できた土器は岩塊と岩塊の間の奥深くから出土したものである。これらの土器について以下に記述する。

出土土器（図版4、5・写真図版2、3）

1は口唇部に突起をもつ壺形を呈する土器である。しかしこの土器は、体部下半部にある単孔の周囲に注口部分の接合に使用したと思われるピッチがみられることから、機能的には注口土器と考えられる。孔は径10cm±の大きさで外面から穿たれている。口縁部～体部に帯縄文をもち、その間に入組状の弧線帯がある文様構成である。底部は上げ底を呈し入念なミガキが施されている。また内面の口縁部～体部上半部には横位のミガキが加えられている。焼成は良好で、器面の色調は内外面ともにぶい赤褐色を示す。口径11.7cm・底径8.8cm（推定）・器高23.7cm・頸頭径8.2cmを計る。岩手県内でこの土器と類似するものとしては、二戸市牛間館遺跡出土の例がある⁽³⁾。

2は波状口縁の深鉢の破片である。波状口縁の頂部～頸部にかけて刺突文をもつ隆起線が弧状に施されている。これ以外の口縁部は無文であり、体部の地文は無節の斜縄文である。口縁部内面には横位のナデ調整がみられる。胎土に細礫が少量含まれているが、焼成は良好である。色調は内外面ともにぶい褐色を呈す。外面の体部にススが付着している。

3は口縁が平縁で内弯する小型の深鉢である。口縁部～体部には単節の斜縄文が地文として施されているだけである。内面調整として横位のナデが口縁部～体部上半部にみられる。器表面がところどころ剥落しており、胎土に含まれている細礫が露出している。焼成はやや良好で、内外面とも明赤褐色の色調を示す。口径13.4cm・底径7.6cm（推定）・器高13.4cm（推定）を計る。

4は口縁が平縁で外反する深鉢である。口縁部～体部には単節の斜縄文が地文として施されているが、頸部は横位のミガキによって磨消されて無文となっている。内面は口縁部に横位のミガキ、体部には斜位のナデが施されている。3と同じように器表面のところどころが剥落している。また胎土・焼成・色調の点においても3とよく似た状況を示している。口径22.1cm・底径7.5cm・器高19.7cmを計る。

5は口縁部が外反する浅鉢である。体部には3条の平行する帯縄文が施され、無文部分とは

沈線によって区切られている。帯縄文の地文は横位に施文された羽状縄文である。外面の無文部分および内面全体に入念なミガキがなされている。胎土には細粒の砂が少量含まれている。焼成は良好で、色調が灰白色を呈する。底径7.1cmを計る。

6は小型の浅鉢である。文様・内外面の調整技法・胎土は5とほぼ同じである。色調はにぶい橙色を呈す。内外面のところどころにススの付着がみられる。底径5.4cmを計る。

7は波状口縁の小型土器である。口縁部～体部の地文は単節の斜縄文であり、口縁部には地文の上に縄圧痕が2条施されている。外面体部下半部～底部および内面全体に入念なミガキがなされている。胎土には細粒の砂が微量に含まれている。焼成は良好で、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。口径8.0cm・底径4.6cm・器高8.6cmを計る。

8は浅鉢と考えられるもので、沈線による工字文と横位の縄文が施されている。胎土には細粒の砂が微量に含まれている。焼成は良好であり、外面の色調はにぶい黄橙色である。内面はミガキ調整後黒色処理されている。底径9.1cmを計る。

9は台付鉢の底部と考えられるものである。内外面とも粗いケズリが施されている。胎土には細粒の砂が含まれている。焼成は良好で器面がややかたい。色調はにぶい橙色を示す。底径10.5cmを計る。

5. ま と め

今回の調査では、「崩石」の地名の如く安山岩類の巨岩塊が露出ただけで、遺構は全く検出されなかった。しかしこの巨岩塊の間から縄文時代後期～晩期に位置づけられる縄文土器が出土した。これらの土器は、出土地点および出土状態からみて、西側の調査対象区域外の土器片が散布する平坦部から流下したものと考えられる。この部分にキャンプ地などの当時の人々の生活および活動の場が想定される。したがって当遺跡の性格の解明は今後の課題である。

追記

1979年度の松尾村長者屋敷遺跡の第2次発掘調査において、丘陵南側崖線斜面部に位置する遺物包含層から安山岩類の巨岩塊群が検出されるとともに縄文時代の遺物出土した。これらの遺物の中で縄文時代後期～晩期に至る土器が、巨岩塊の間から完形あるいは復元可能な状態で出土した。さらにまた磨製石斧と精製土器、石皿と磨石がセットで出土した。

当遺跡の調査担当者の一人である高橋文夫は、これらの遺物とその出土状態や土器に精製土器が多いことなどからみて、廃棄後に斜面を流下し巨岩塊の間に陥入したものではなく、当時の人間がその場所に廃棄したかあるいは意図的に埋納したものではないかとの解釈をフィール

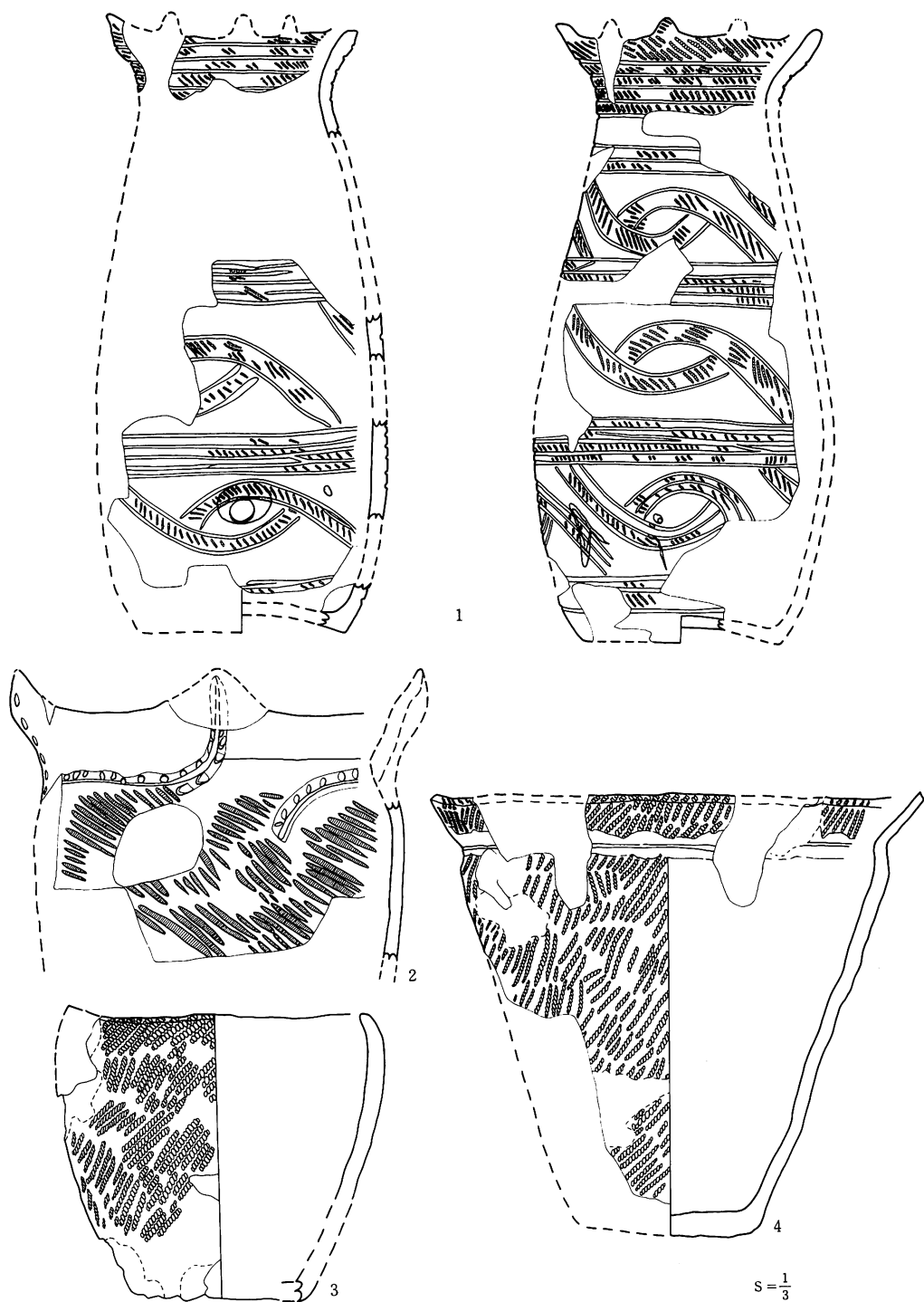
ドにおいて行なった。崩石遺跡の出土遺物も長者屋敷遺跡の事実と照合してみると、高橋の指摘するように偶然に巨岩塊の間に陥入したものではなく、人為的にその場所に廃棄あるいは埋納された可能性が強いように思われる。今後このような事例が追加されることを期待したい。

註

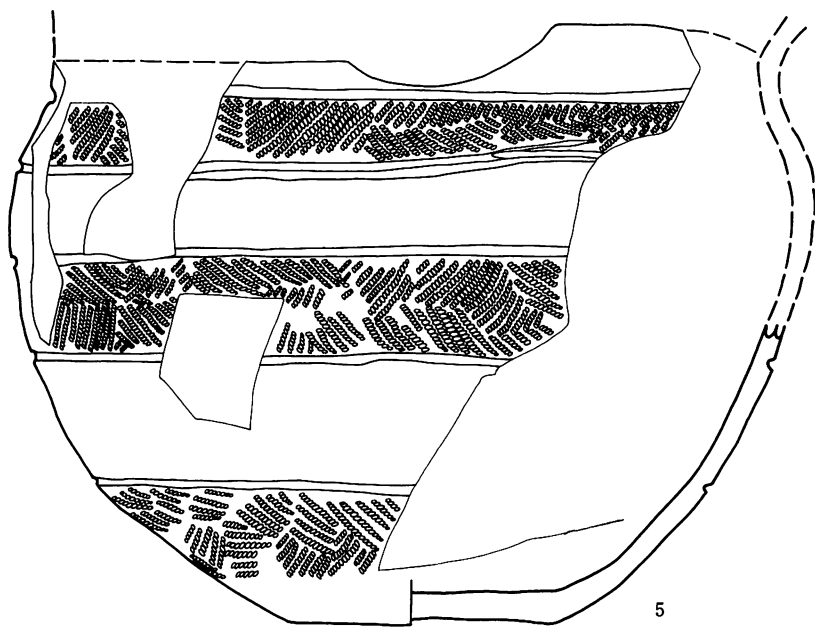
- (1) 橘 行一氏は、崩石遺跡の泥流を五百森泥流に属するものとされている。この五百森泥流は、岩手火山に起源をもつ火山噴出物が三ッ森山を越えて玉山村や西根町一帯に広く四散し流れたと考えられる泥流である。氏はこの泥流の時期を狐森出土土器との関連から縄文時代早期後半～前期前半に位置づけられている（橘、1978）。また松尾村寄木地区一帯にみられる泥流については、その噴出起源・時期において五百森泥流とは異なる点から松尾泥流として区別されている（橘、1973）。
- (2) 岩手県教育委員会 1974 『埋蔵文化財地図』
- (3) 山内清男、1964・佐原 真、1979 所収。

参考・引用文献

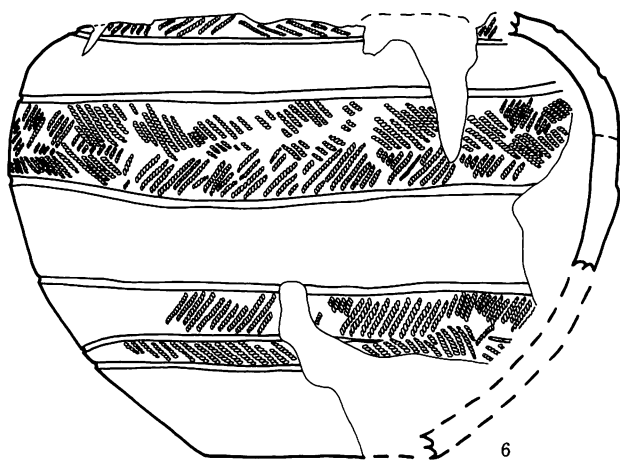
- 橘 行一 1973 「東八幡平、柏台東部の丘陵地の火山泥流」 『岩手大学教育学部研究年報 33巻』
- 橘 行一 1978 「〈岩手森〉・〈五百森〉の多くの流れ山を生じた岩手火山の縄文期の噴火活動と泥流」 『岩手大学教育学部研究年報38巻』
- 山内清男 1964 『縄文式土器 1』 日本原始美術 1
- 佐原 真 1979 『縄文土器II』 日本の原始美術 2



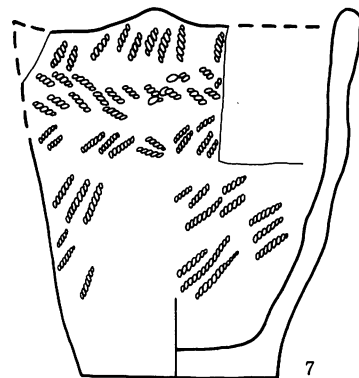
图版 4 出土土器实测图(1)



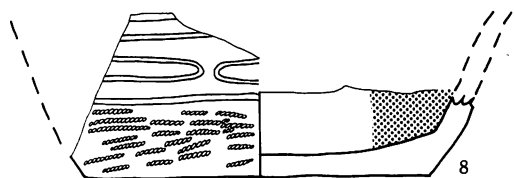
5



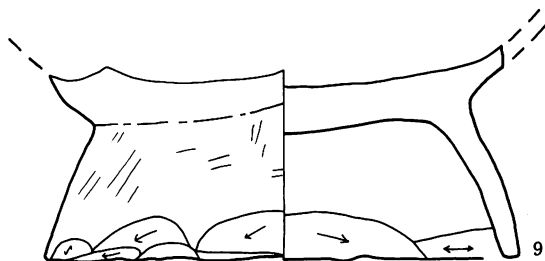
6



7



8



9

图版 5 出土土器实测图(2)

$s = \frac{1}{2}$

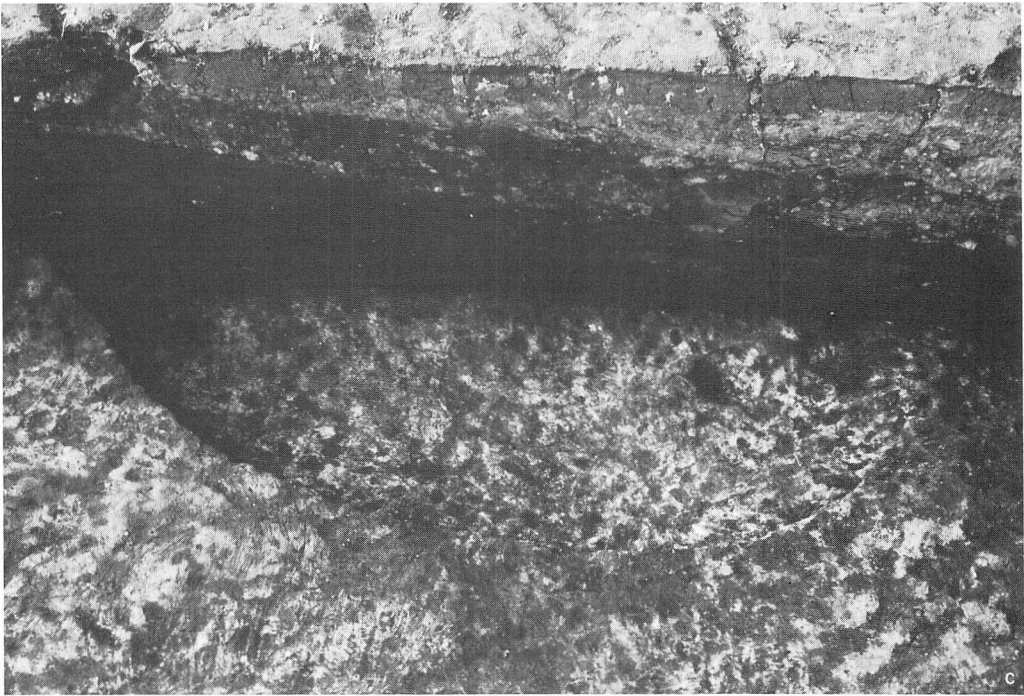
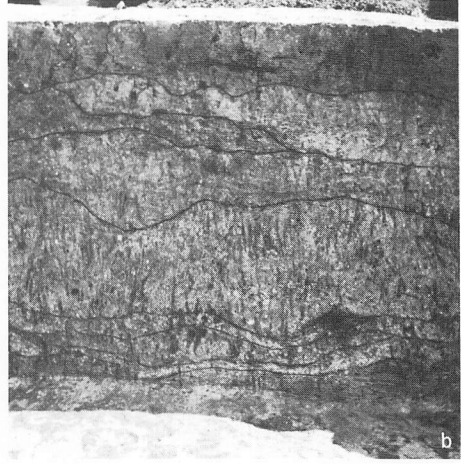
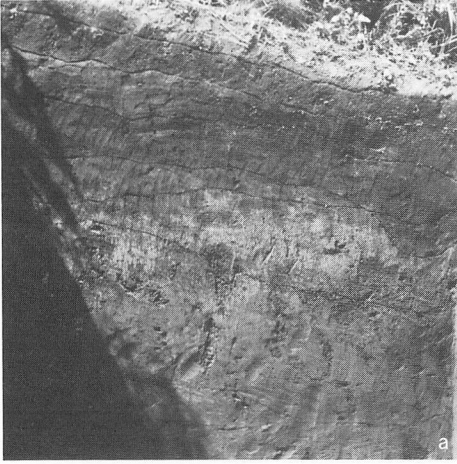
写真図版

野 馱 遺 跡



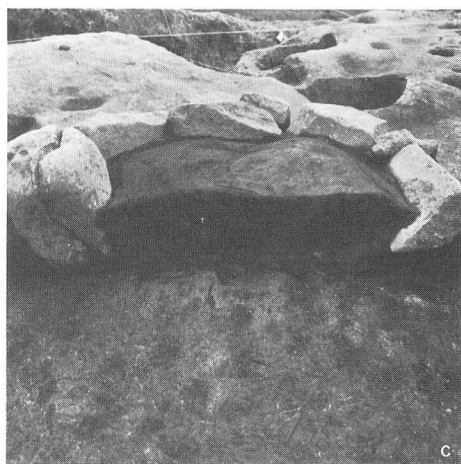
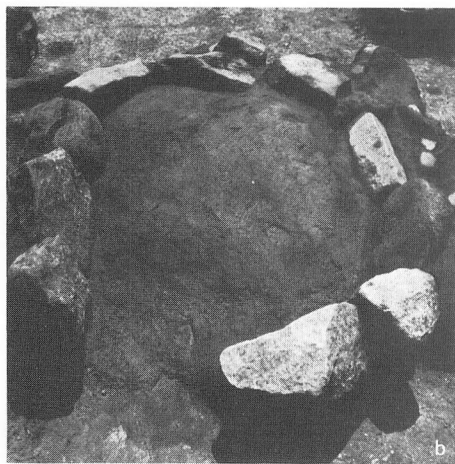
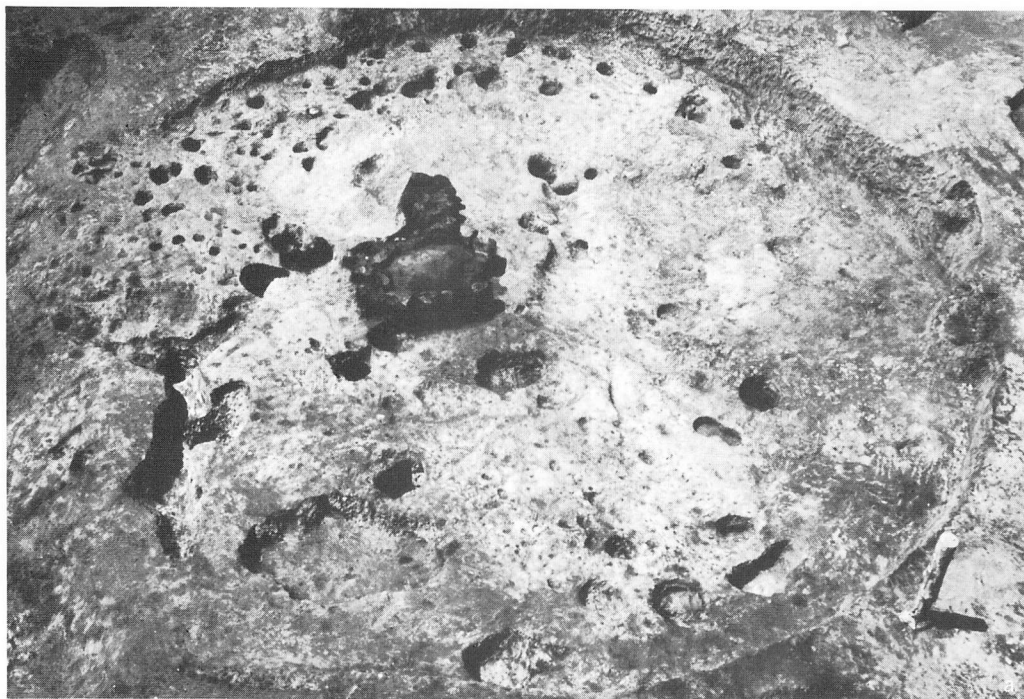
遺跡航空写真(a. 東から、 b. 北から)

写真図版 1



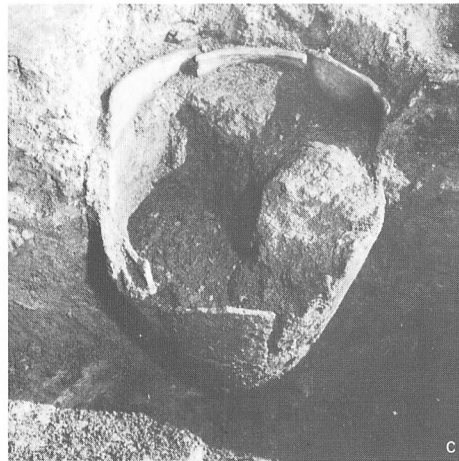
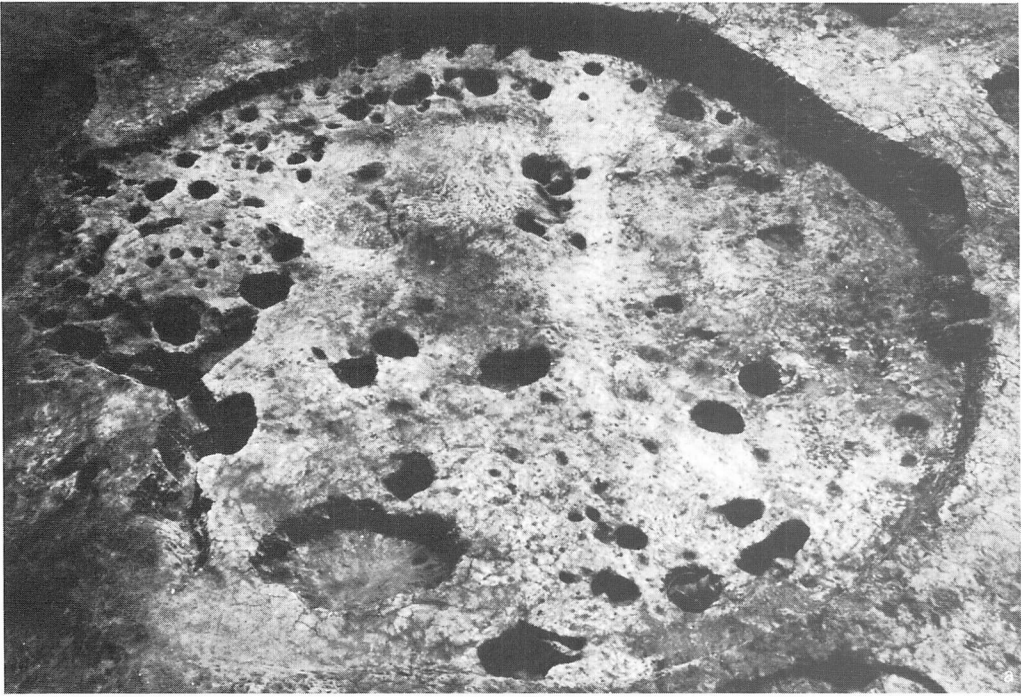
a. C I 区深掘土层断面 b. F I 区深掘土层断面 c. A II - I 住居址

写真图版 2

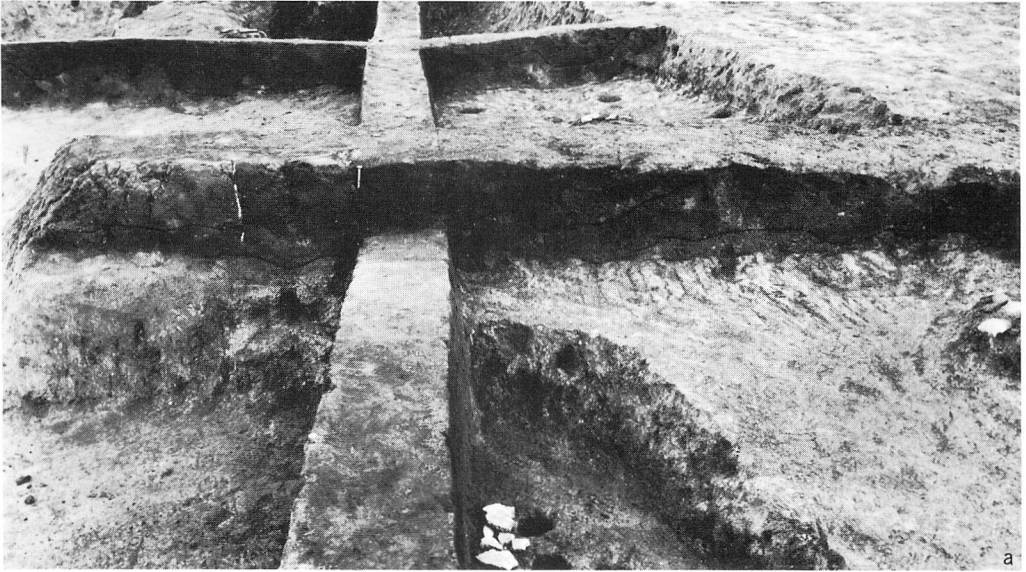


a. A II - 2 住居址 b. A II - 2 住居址炉 c. A II - 2 住居址炉(断面)

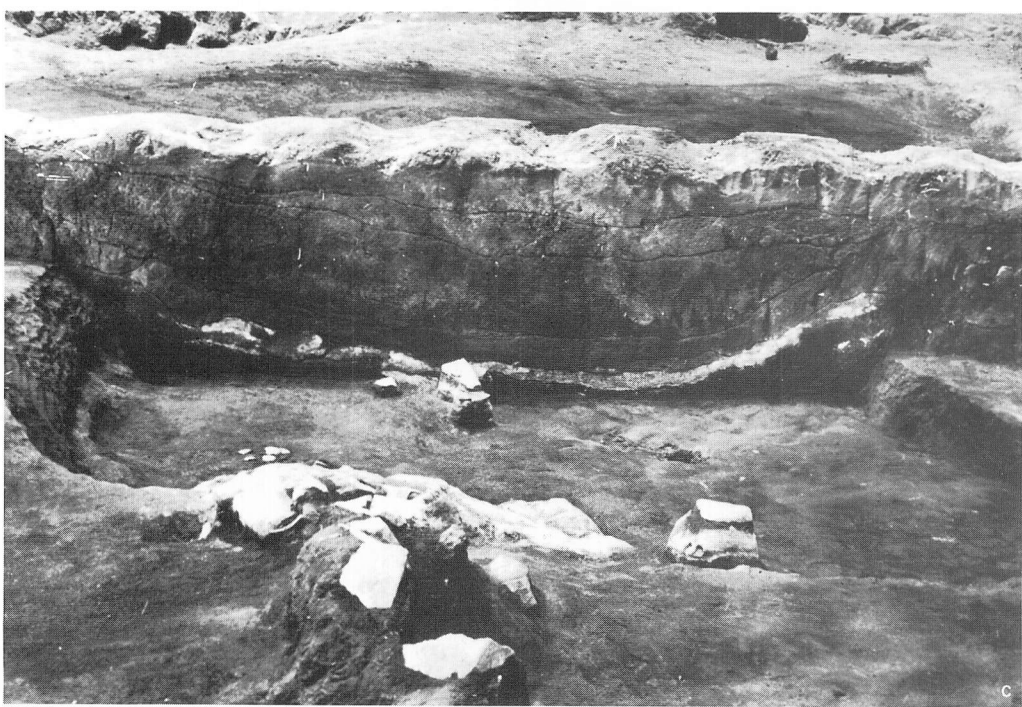
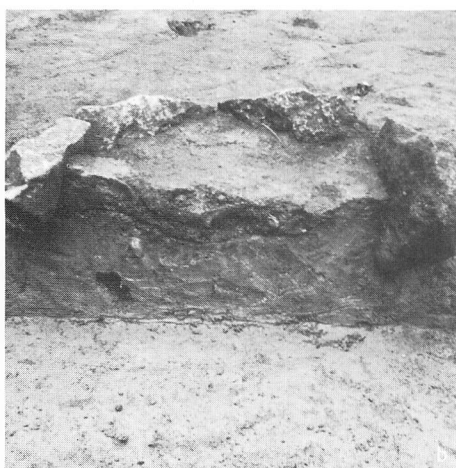
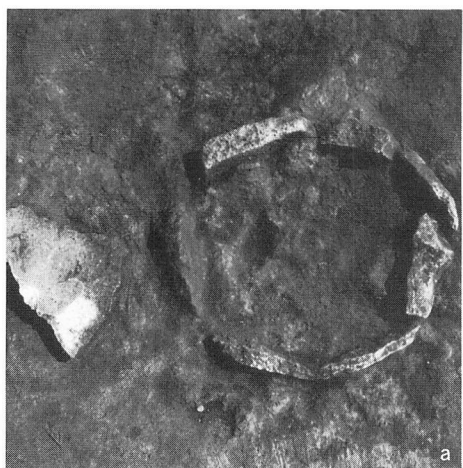
写真図版 3



a. A II - 3 住居址 b. A II - 3 住居址埋設土器 c. A II - 3 住居址埋設土器(断面)
写真図版 4

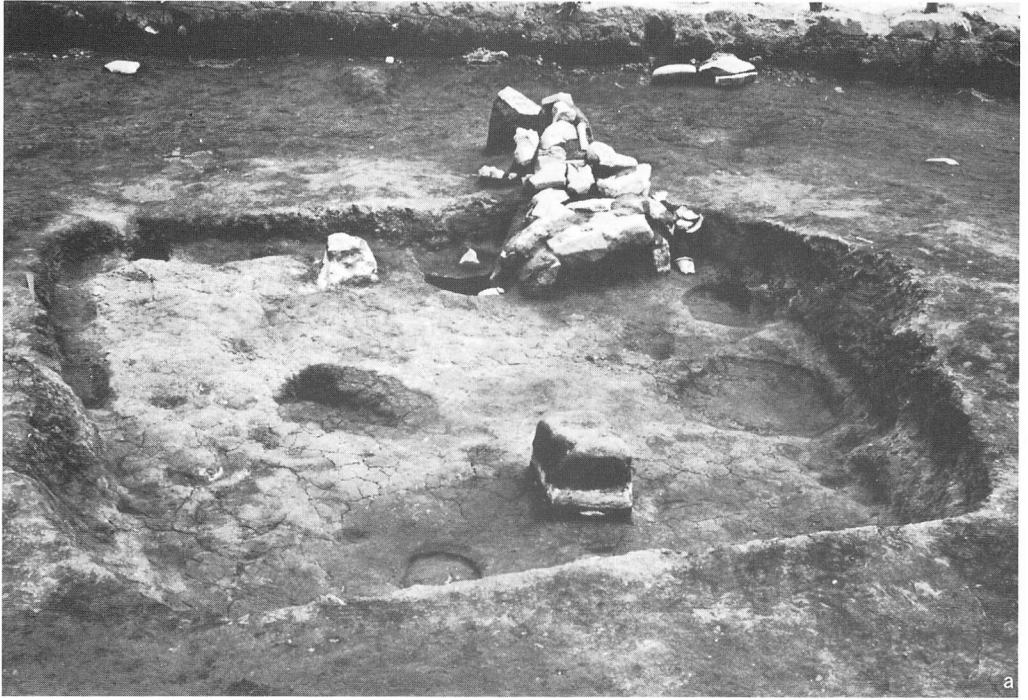


a. CI-1住居址(断面) b. CI-1・2住居址、CI-54ピット
写真図版 5



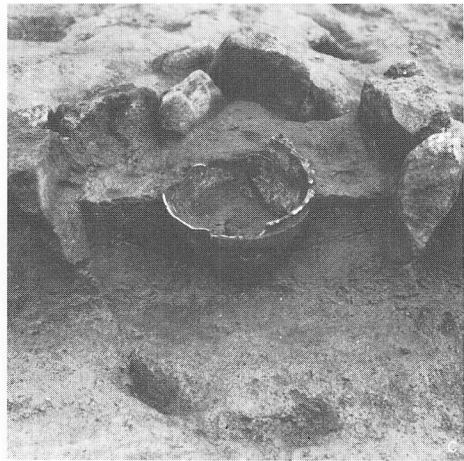
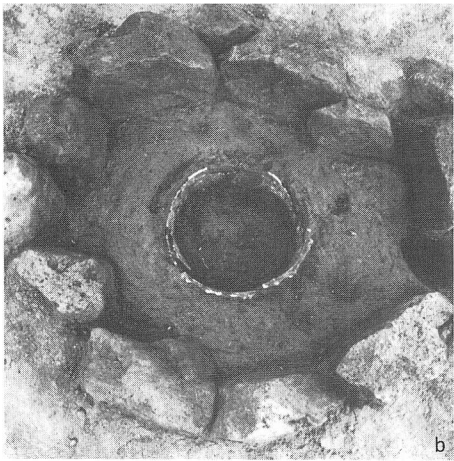
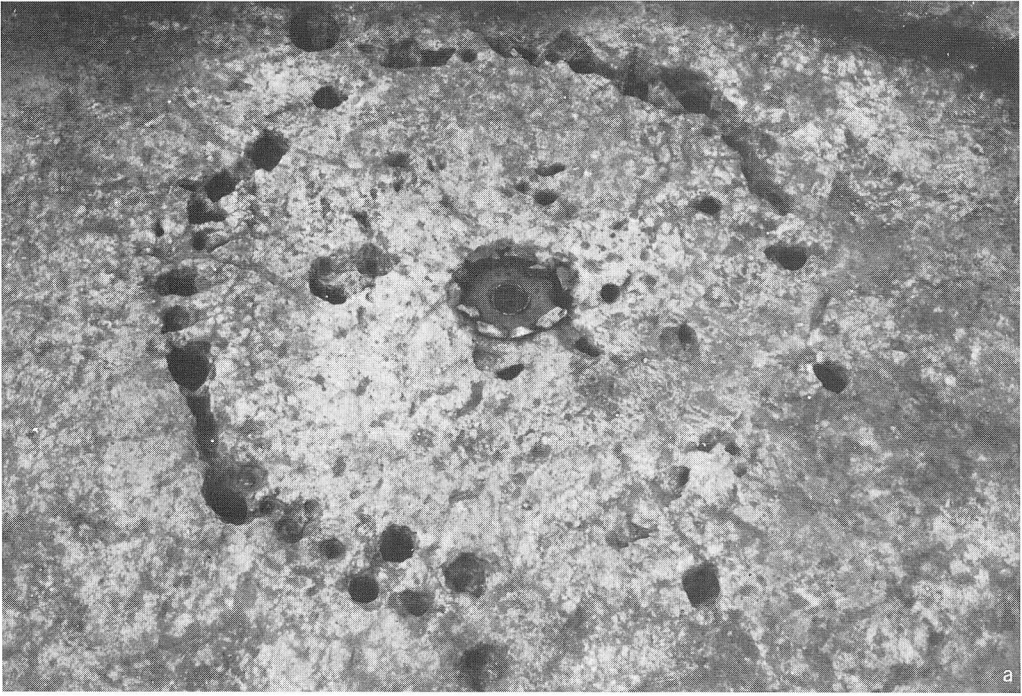
a. C I - 2 住居址炉 b. C I - 2 住居址炉(断面) c. C I - 3 住居址(断面)

写真图版 6



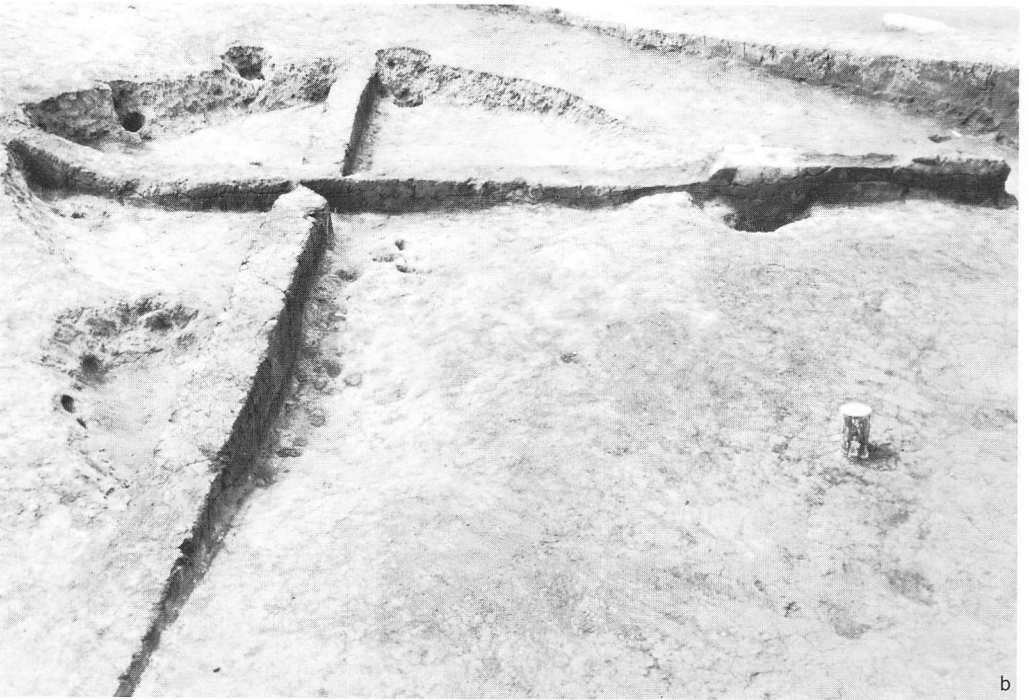
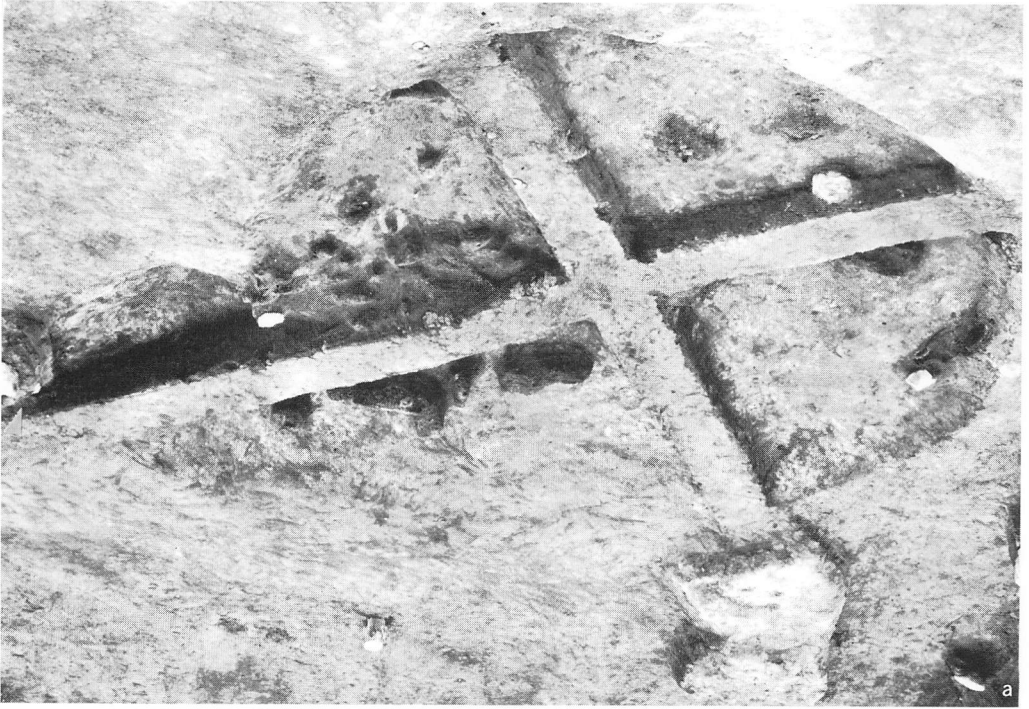
a. CI-3住居址 b. CI-3住居址カマド

写真図版7



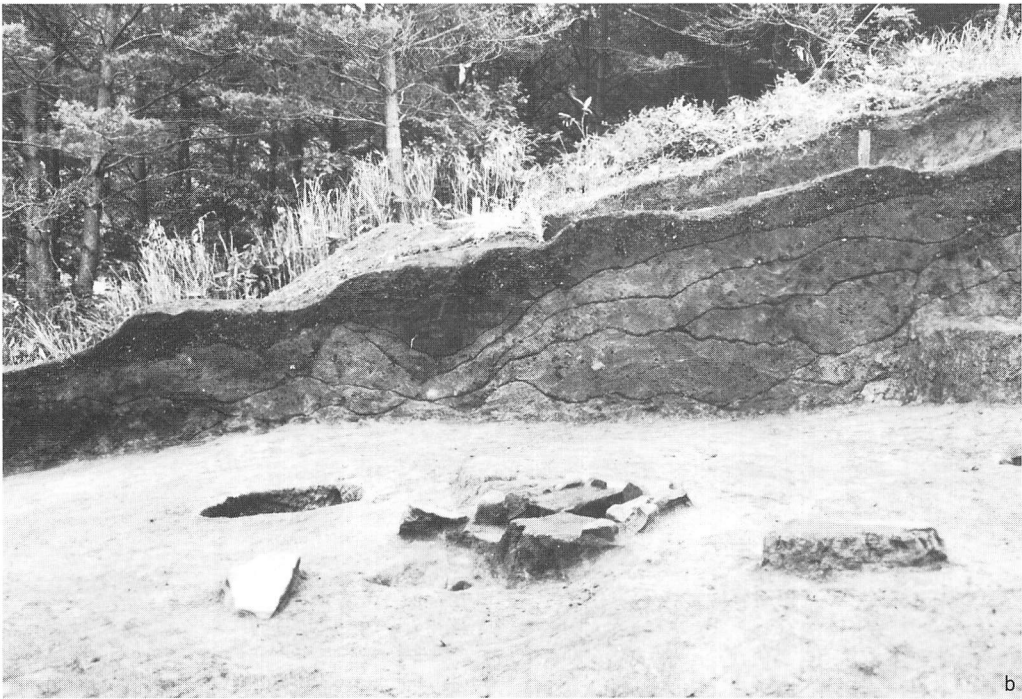
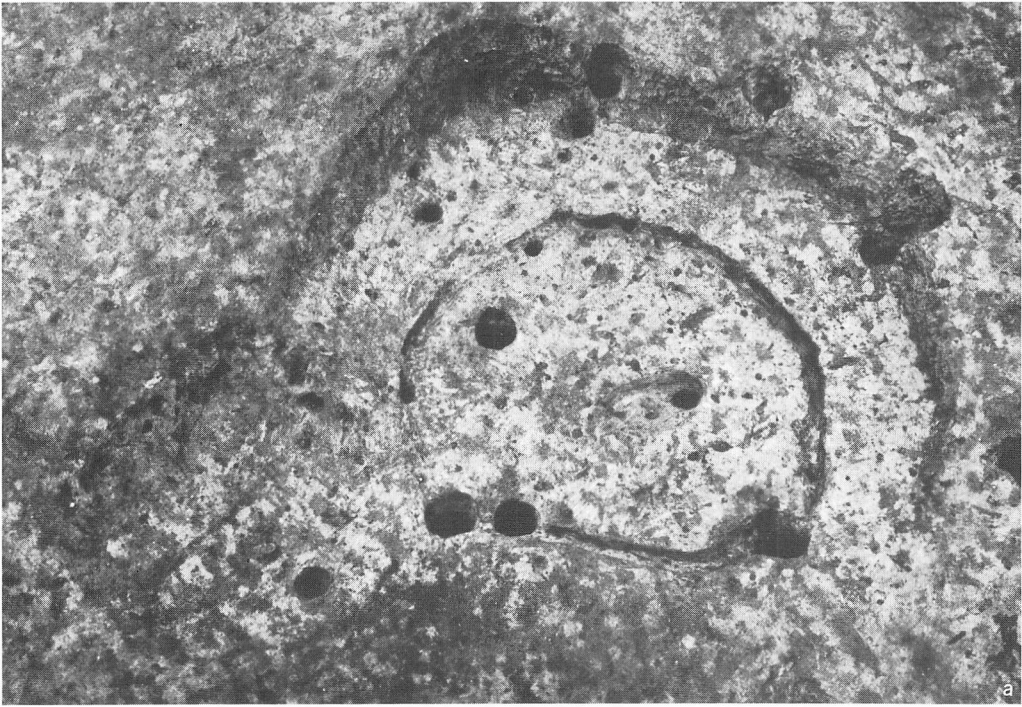
a. C II - I 住居址 b. C II - I 住居址炉 c. C II - I 住居址炉(断面)

写真图版 8



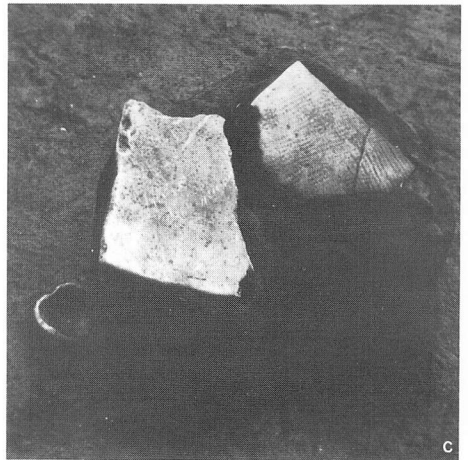
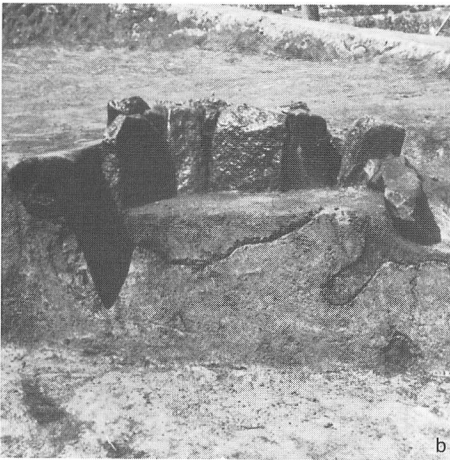
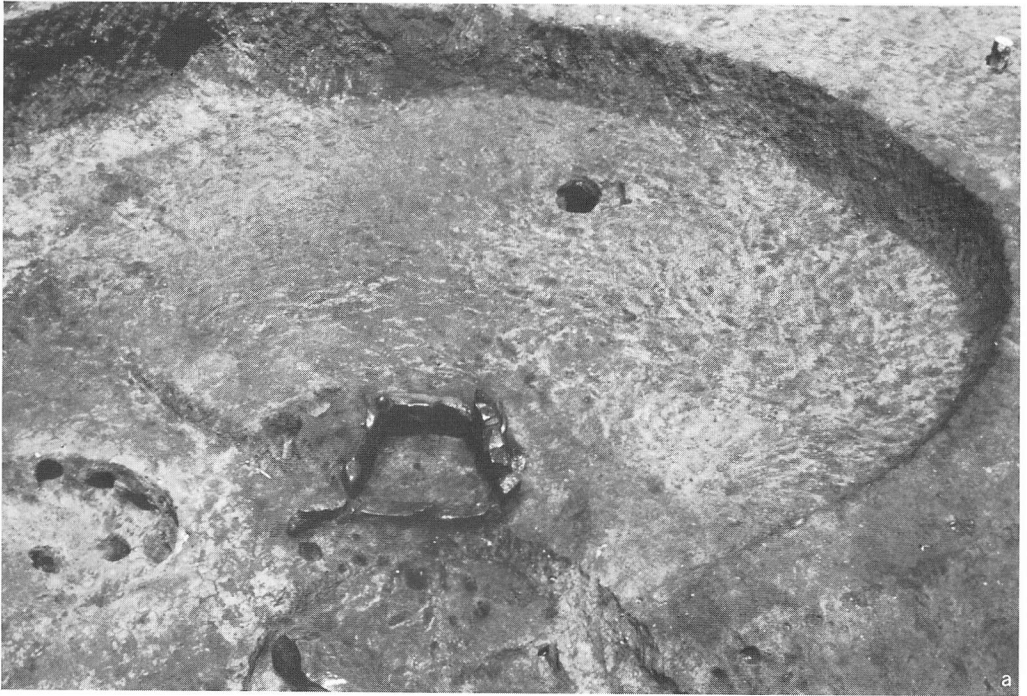
a. D I - I 住居址(炭化材出土状況) b. D I - I 住居址(断面)

写真図版 9



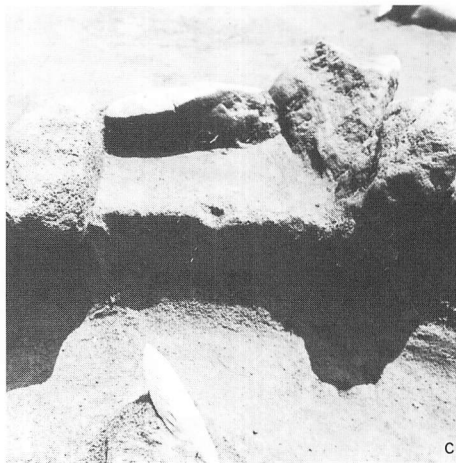
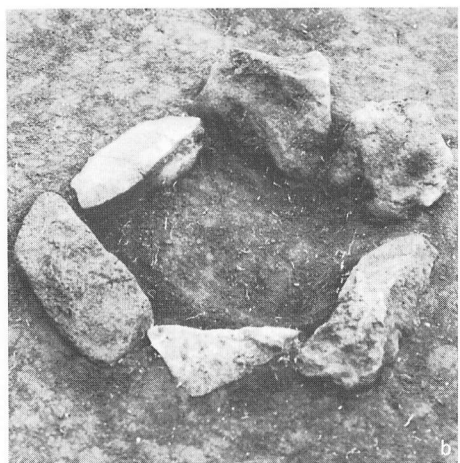
a. D I - 1 住居址 b. D I - 2 住居址(断面)

写真図版10



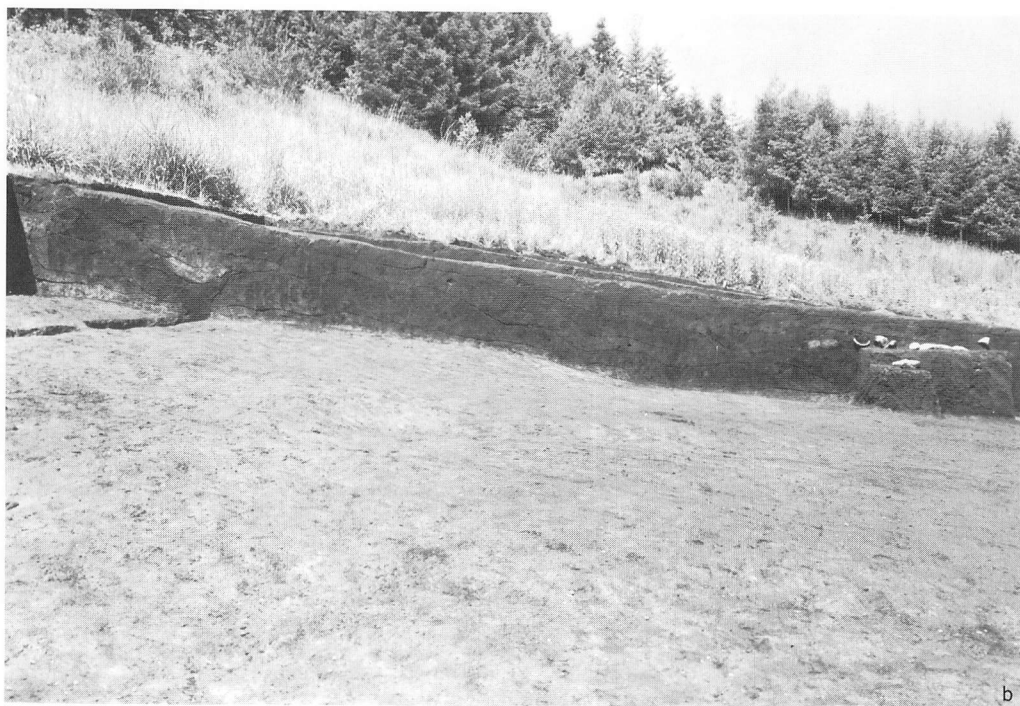
a. D I - 2 住居址 b. D I - 2 住居址炉(断面) c. D I - 2 住居址(土器出土状况)

写真图版 11



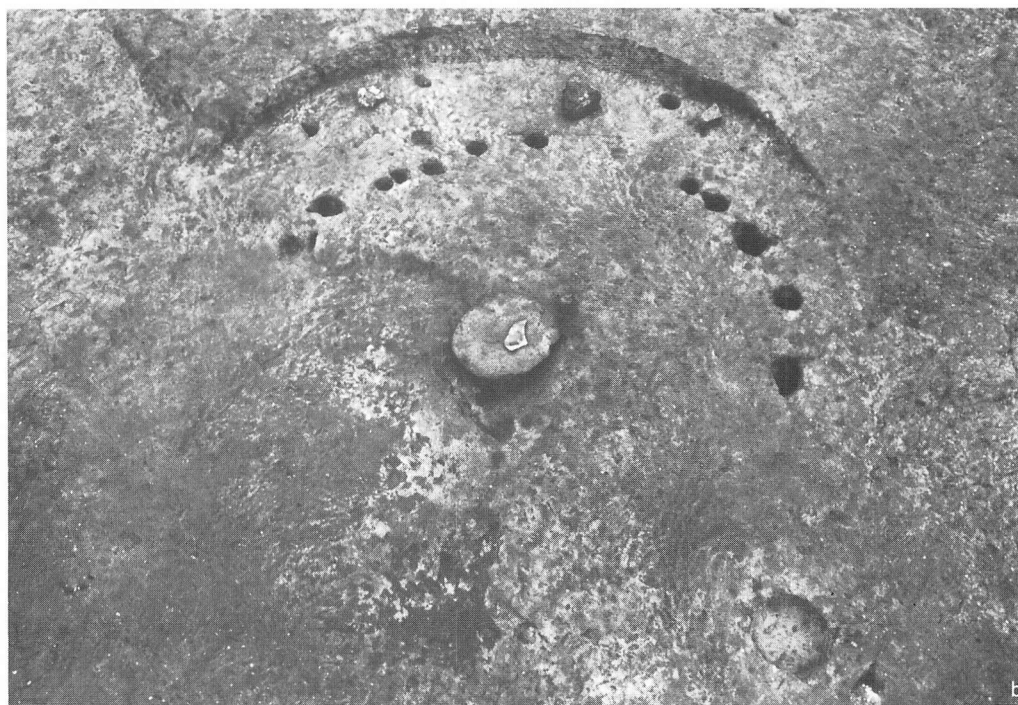
a. D I - 3 住居址 b. D I - 3 住居址炉 c. D I - 3 住居址炉(断面)、尖頭器出土狀況

写真図版12



a. DI-4 住居址 b. FI-1・2 住居址(断面)

写真図版13

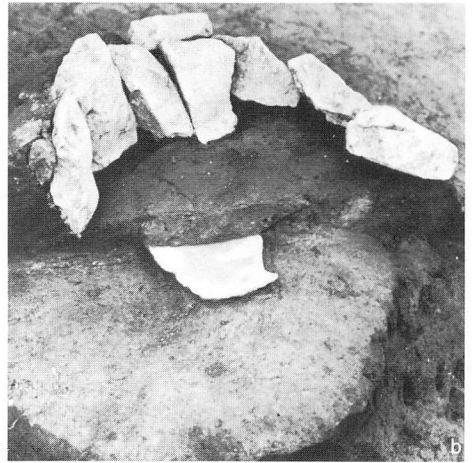


a. FI-1 住居址 b. FI-2 住居址

写真图版14



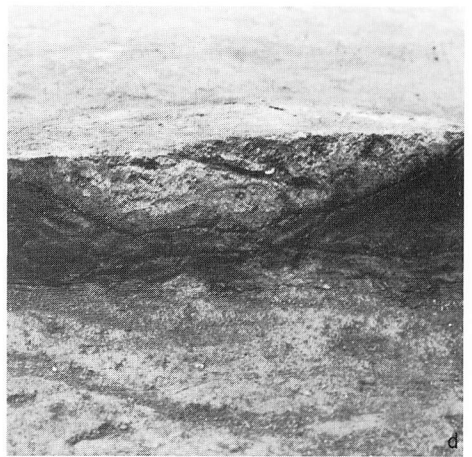
a



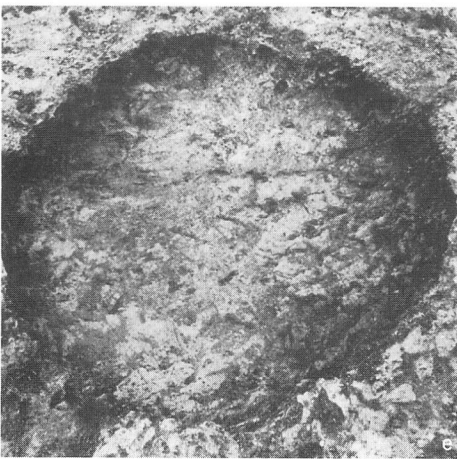
b



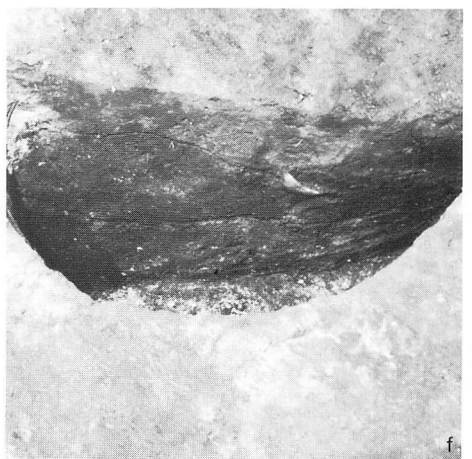
c



d



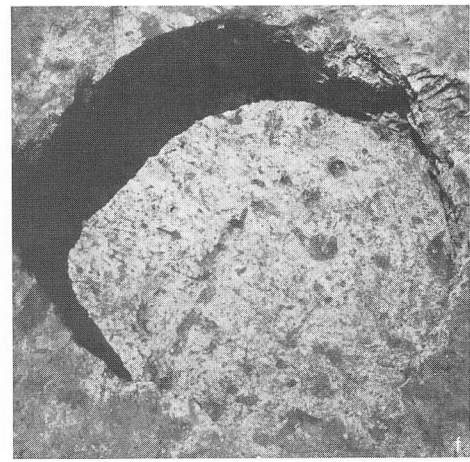
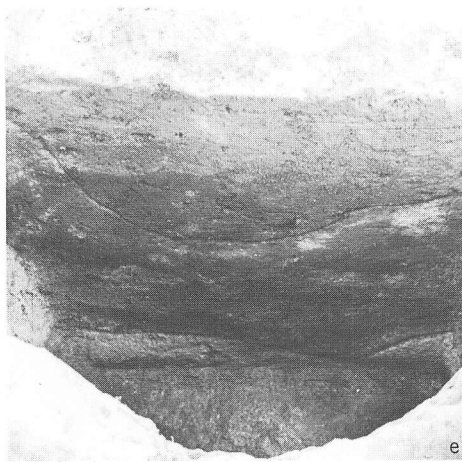
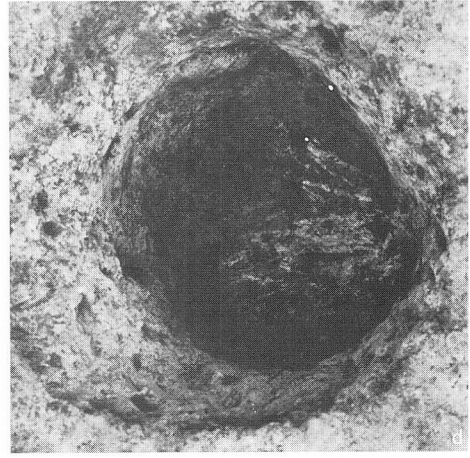
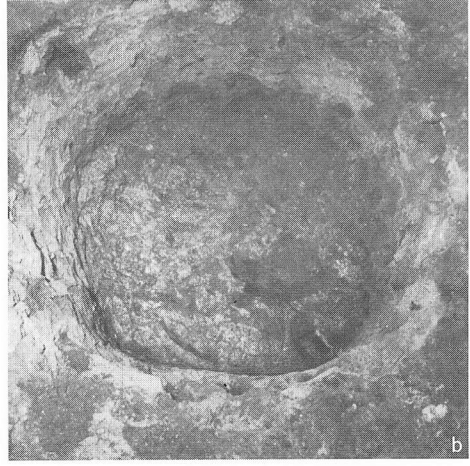
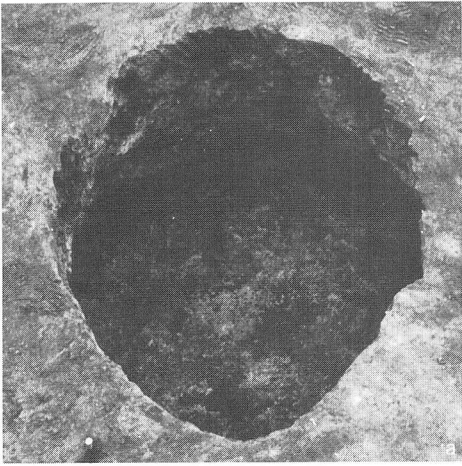
e



f

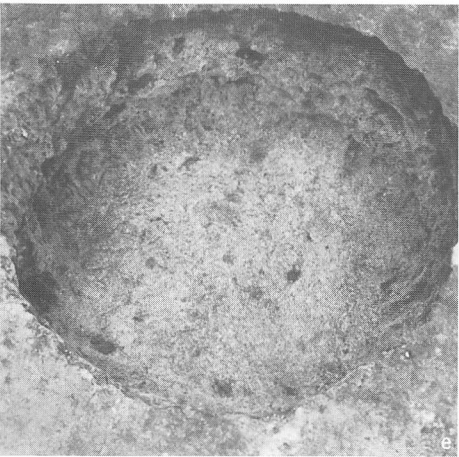
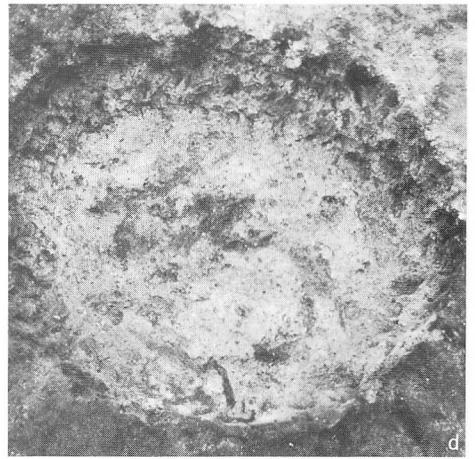
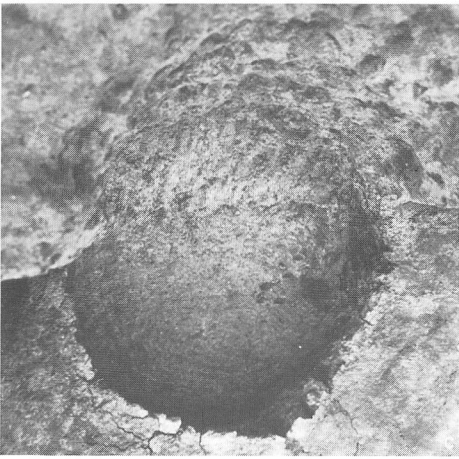
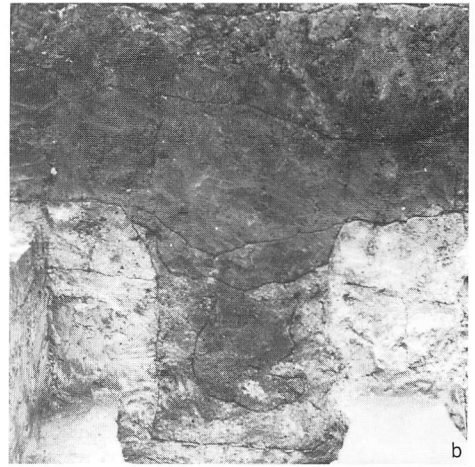
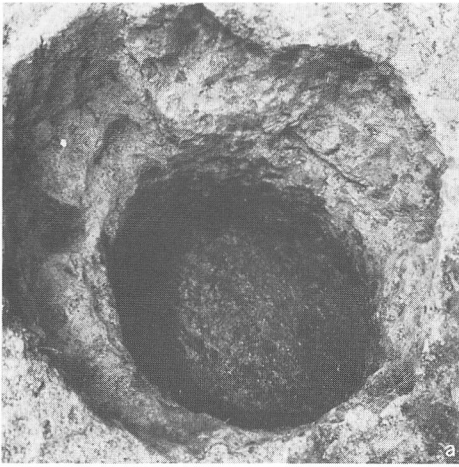
a. F I - 1 住居 址(土器出土状況) b. F I - 1 住居址炉(断面) c. F I - 2 住居址(土器、石鏃出土状況)
d. F I - 2 住居址炉(断面) e. A II - 51ピット f. A II - 52ピット(断面)

写真図版15



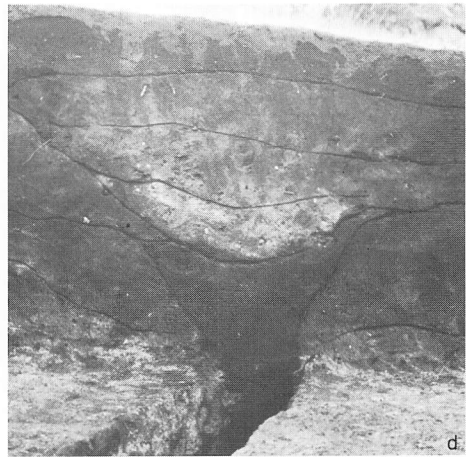
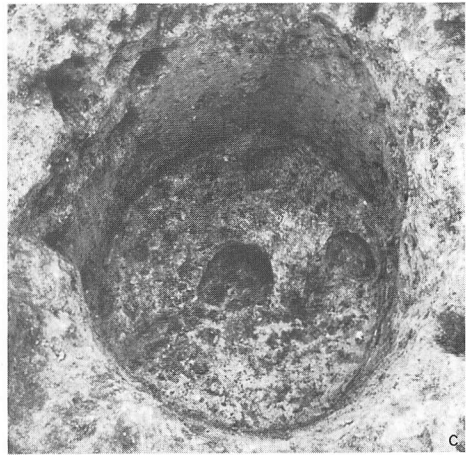
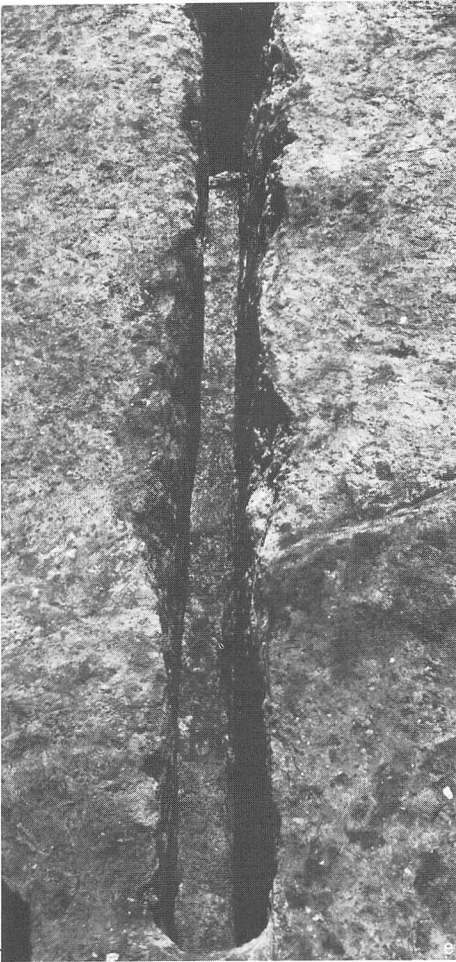
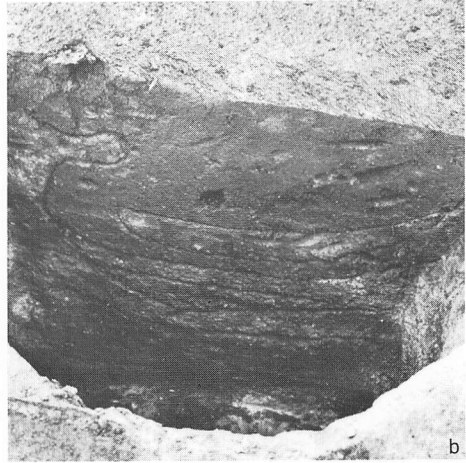
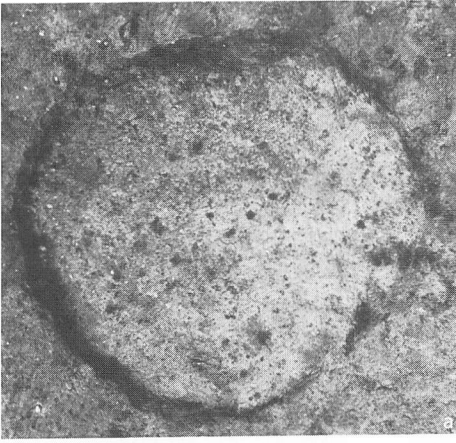
a. A II-52ピット b. C I-52ピット c. C I-53ピット(断面)
 d. C I-53ピット e. C I-55ピット(断面) f. C I-55ピット

写真図版16



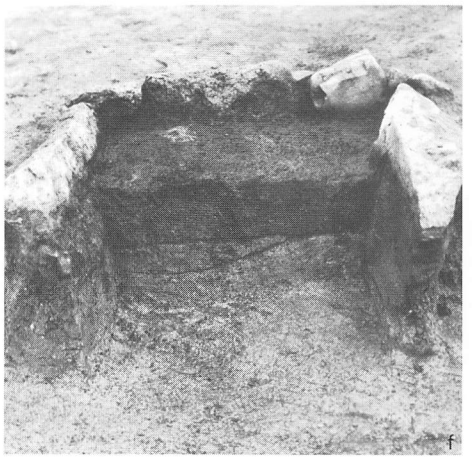
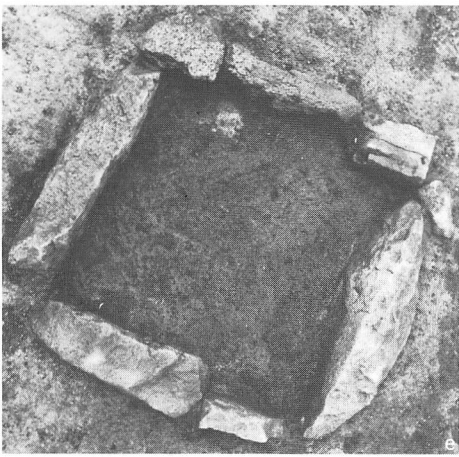
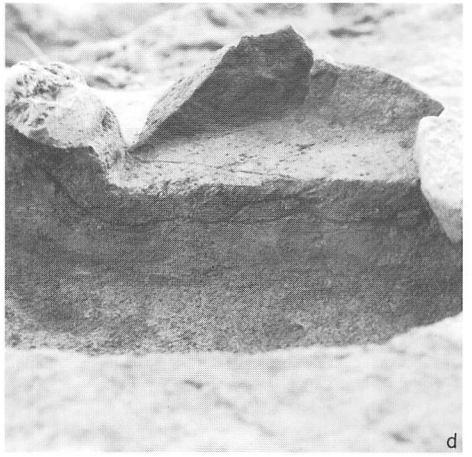
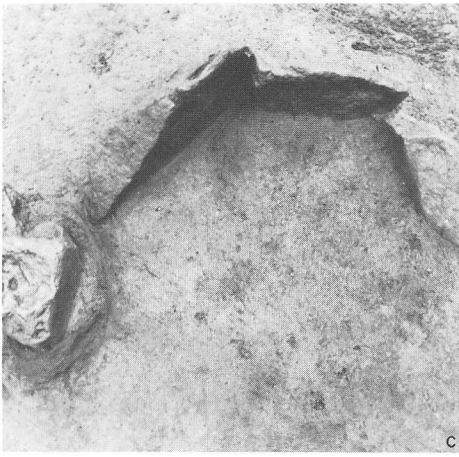
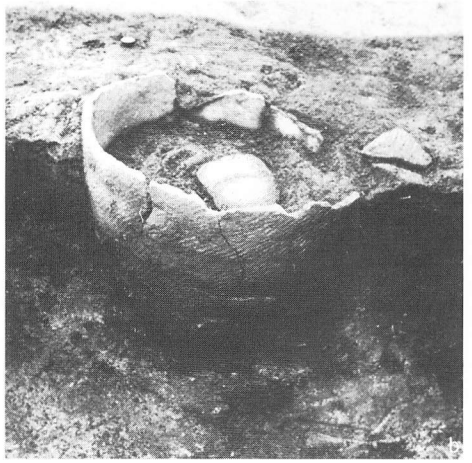
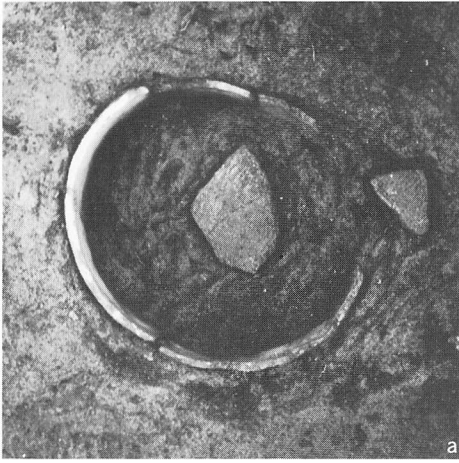
a. CI-56ピット b. CII-51ピット(断面) c. CII-51ピット
d. CII-52ピット e. DI-51ピット f. FI-53ピット

写真図版17



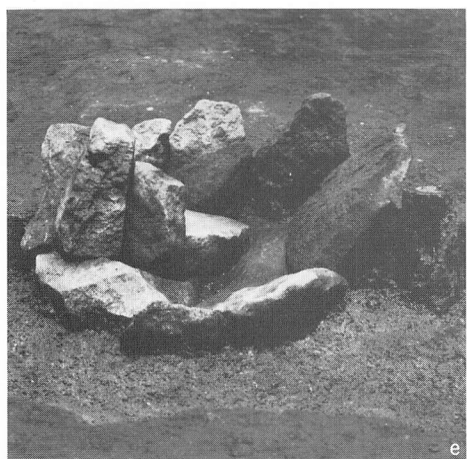
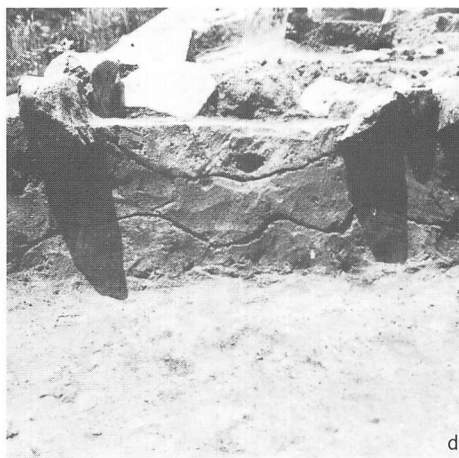
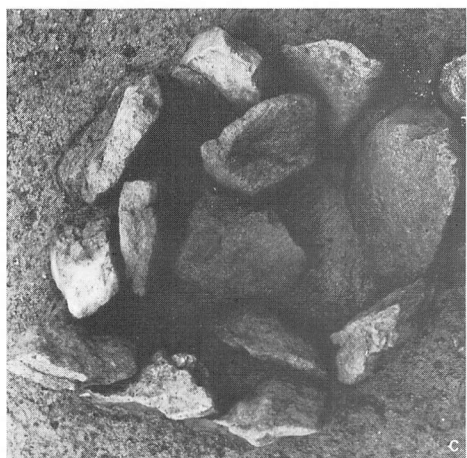
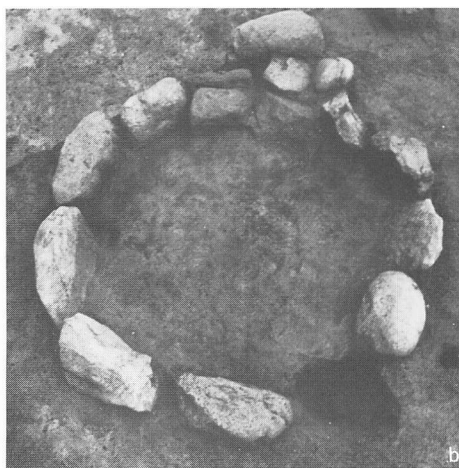
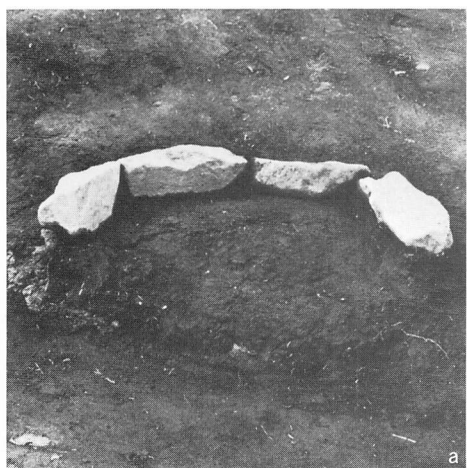
a. FI-54ピット b. FI-56ピット(断面) c. FI-56ピット
d. FI-101陥し穴状遺構(断面) e. FI-101陥し穴状遺構

写真図版18



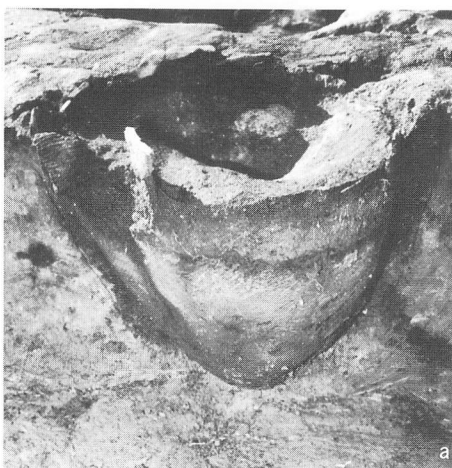
a. A II-151 炉址 b. A II-151 炉址(断面) c. C I-151 炉址 d. C I-151 炉址(断面)
 e. C II-151 炉址 f. C II-151 炉址(断面)

写真图版19

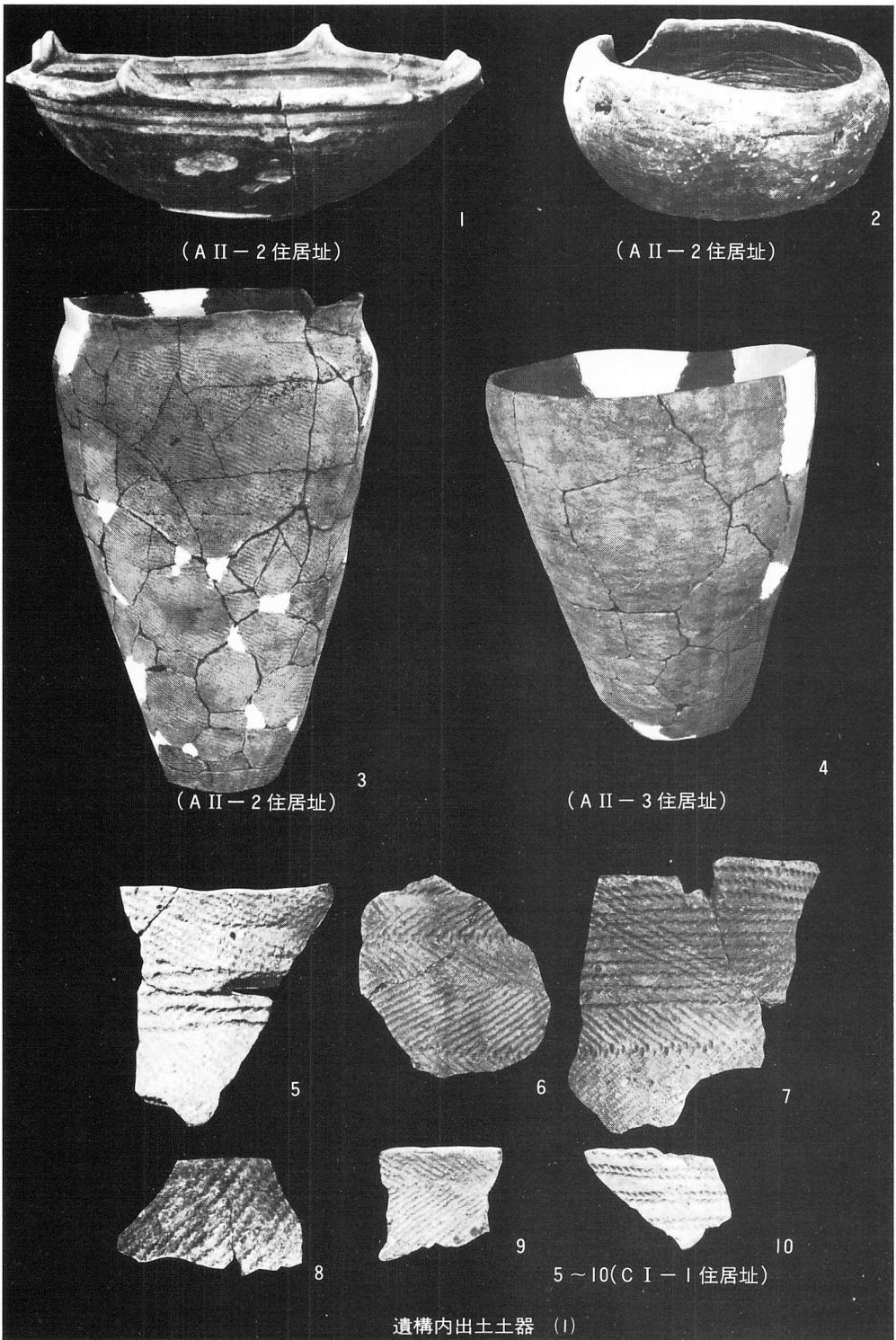


a. D I-151 炉址 b. D I-152 炉址 c. D II-151 炉址 d. D I-152 炉址(断面)
 e. D II-151 炉址(断面) f. A II-201 埋設土器遺構

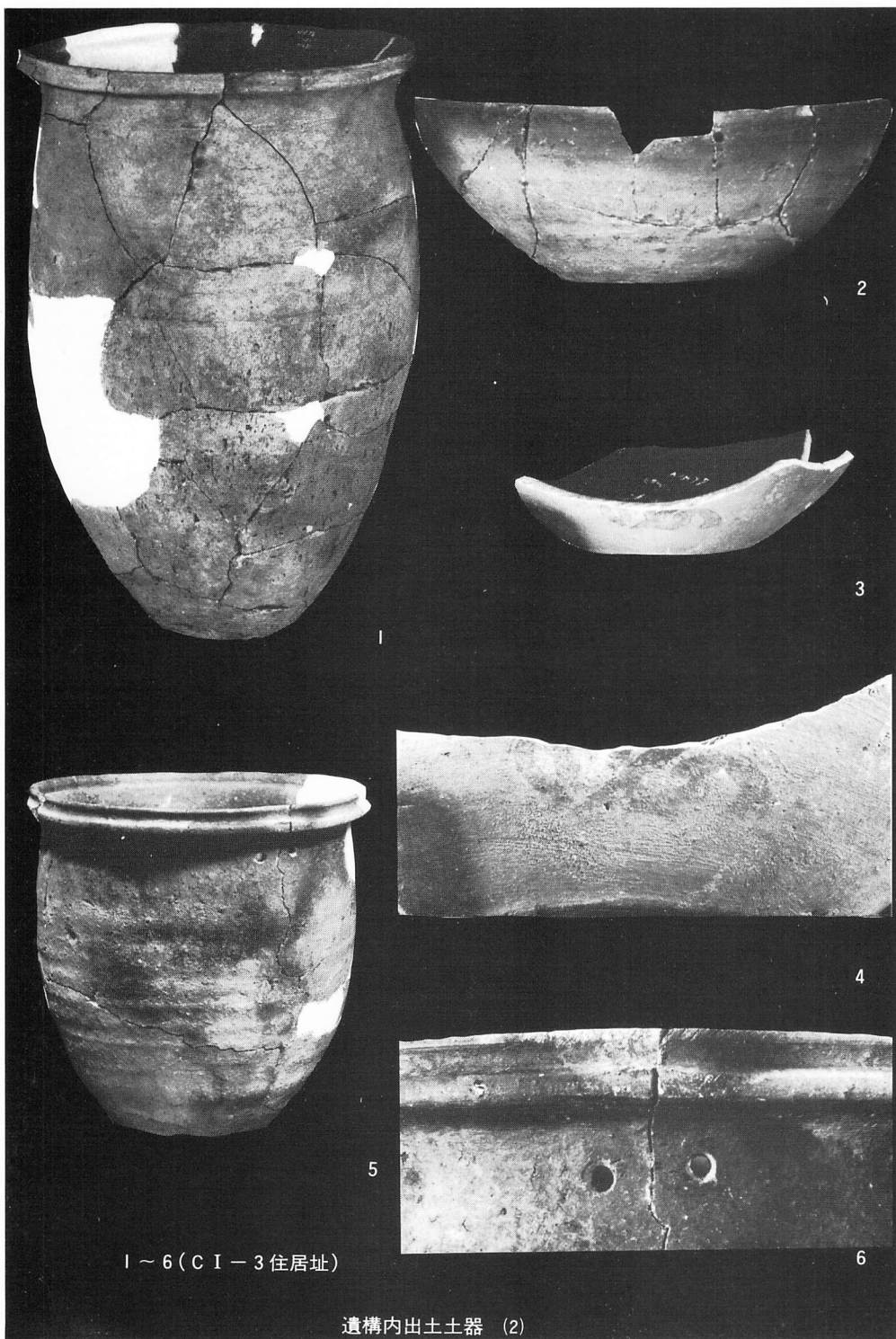
写真図版20



a · b . A II - 201埋設土器遺構(断面)
写真図版21



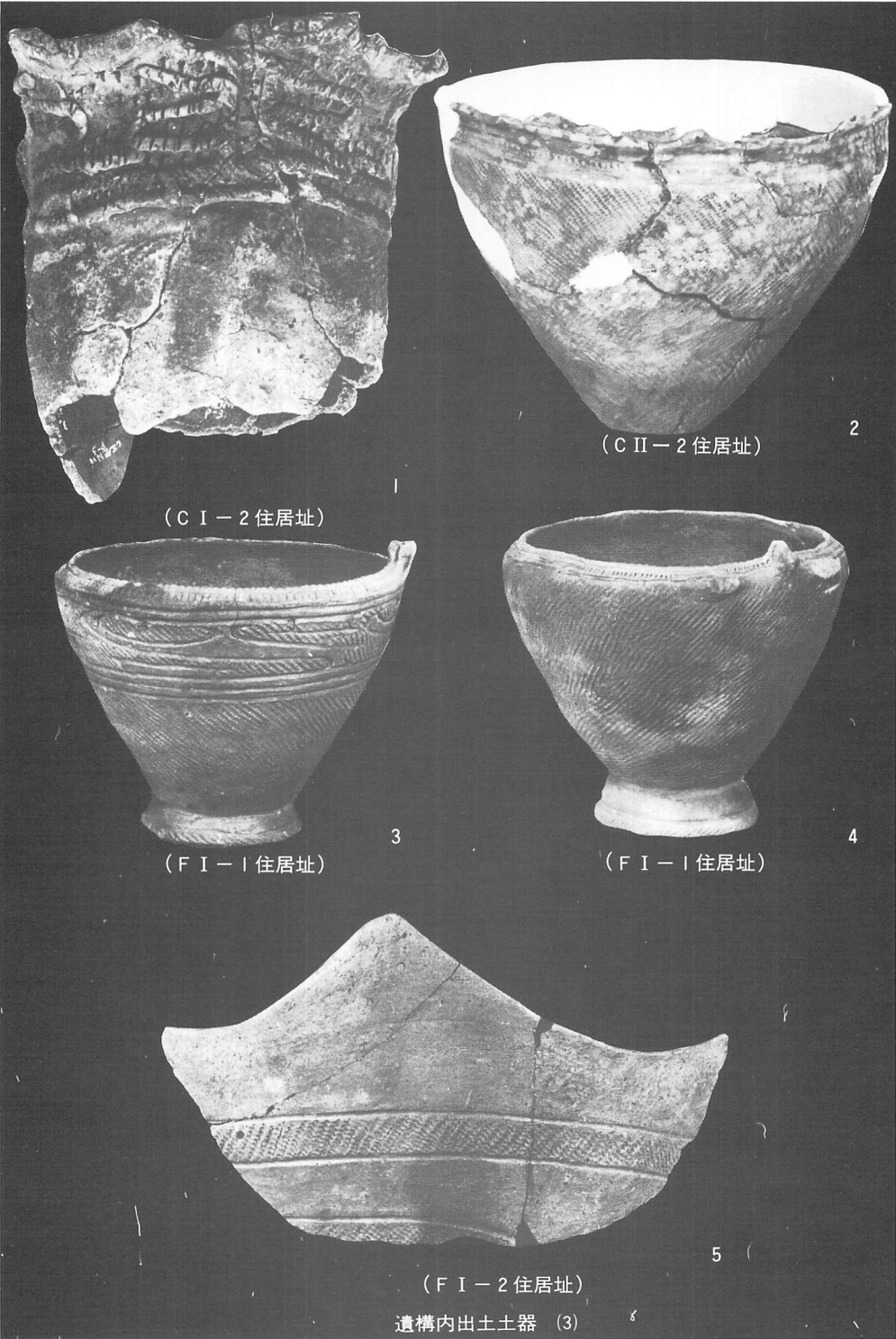
写真図版22



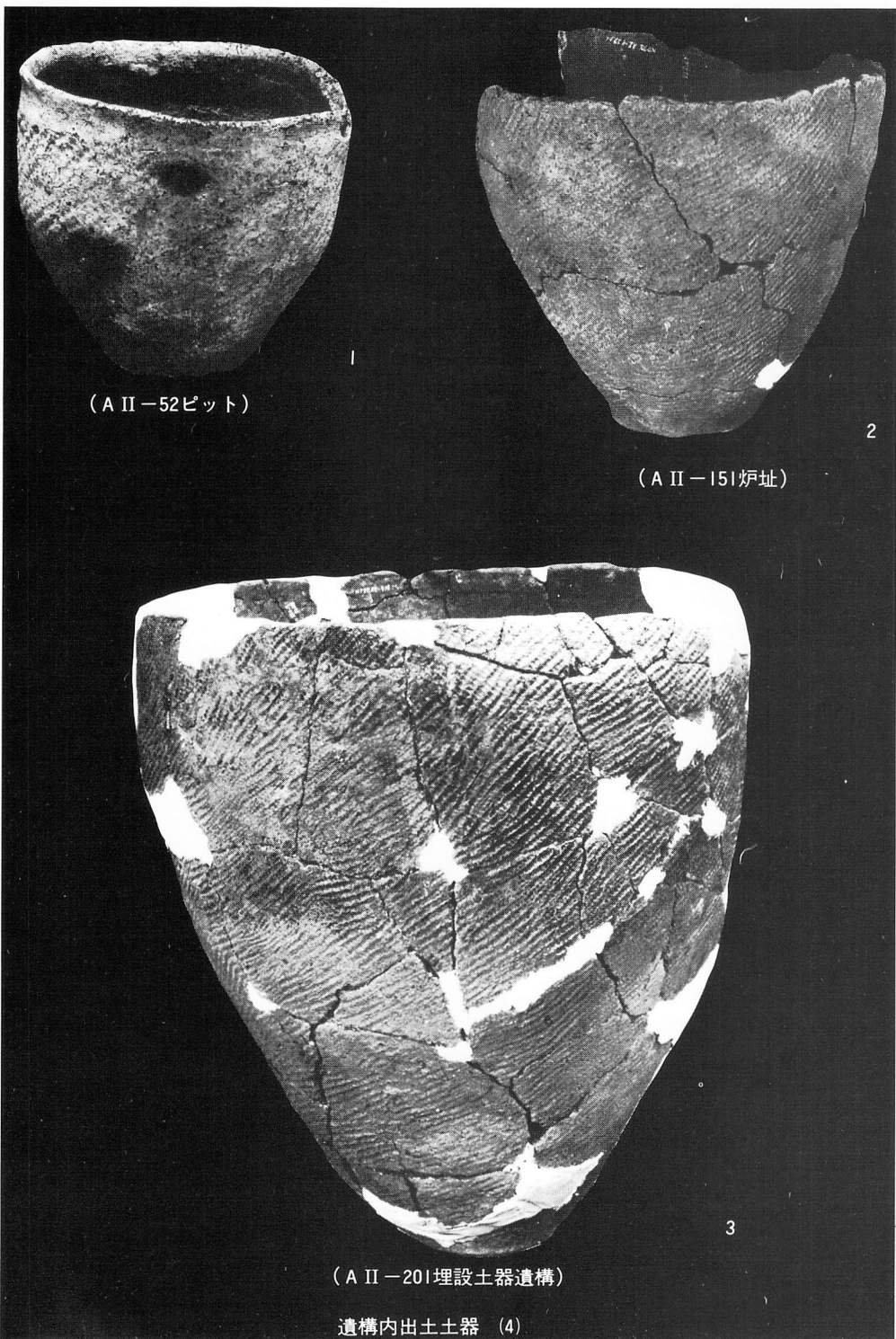
1 ~ 6 (C I - 3 住居址)

遺構内出土土器 (2)

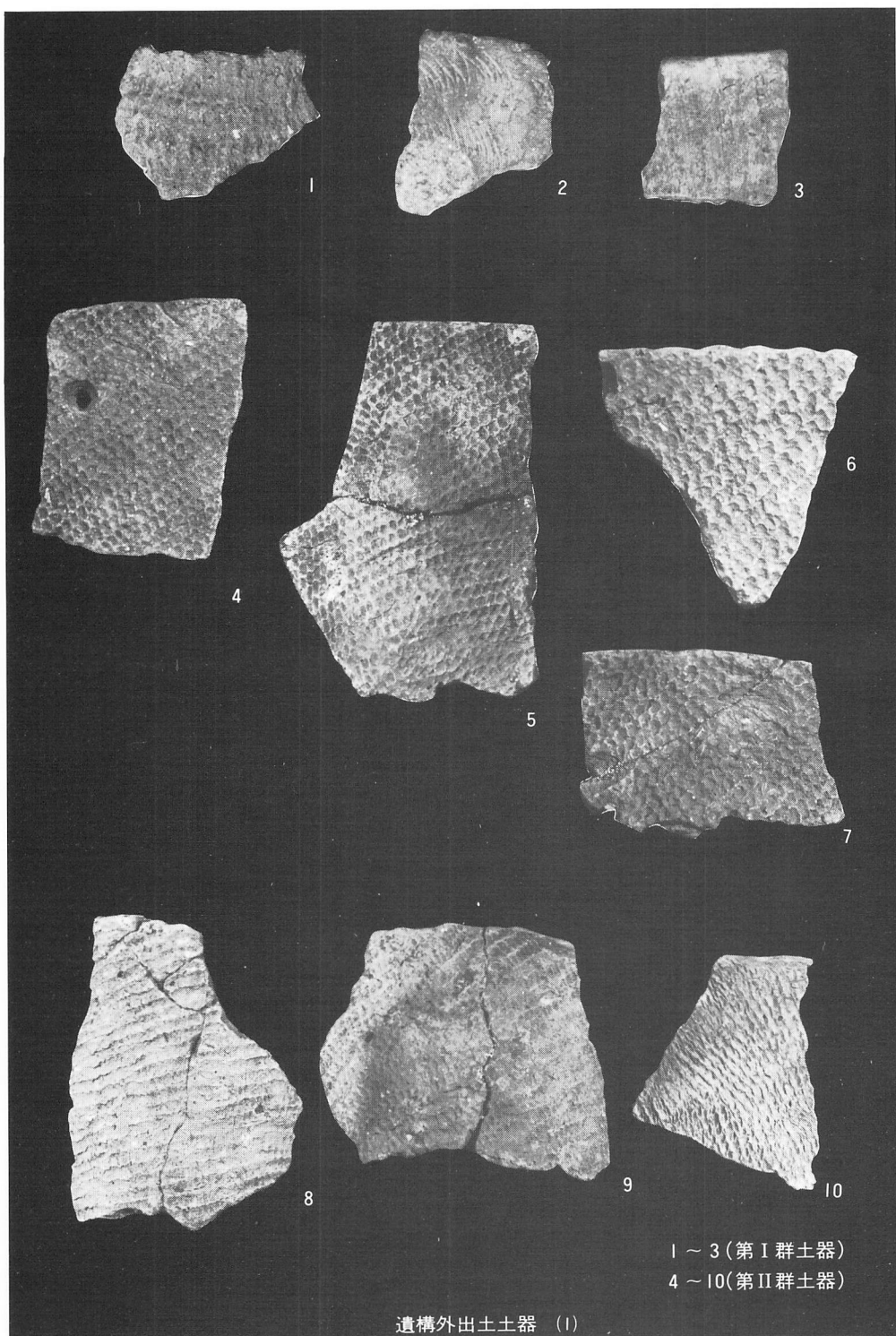
写真図版23



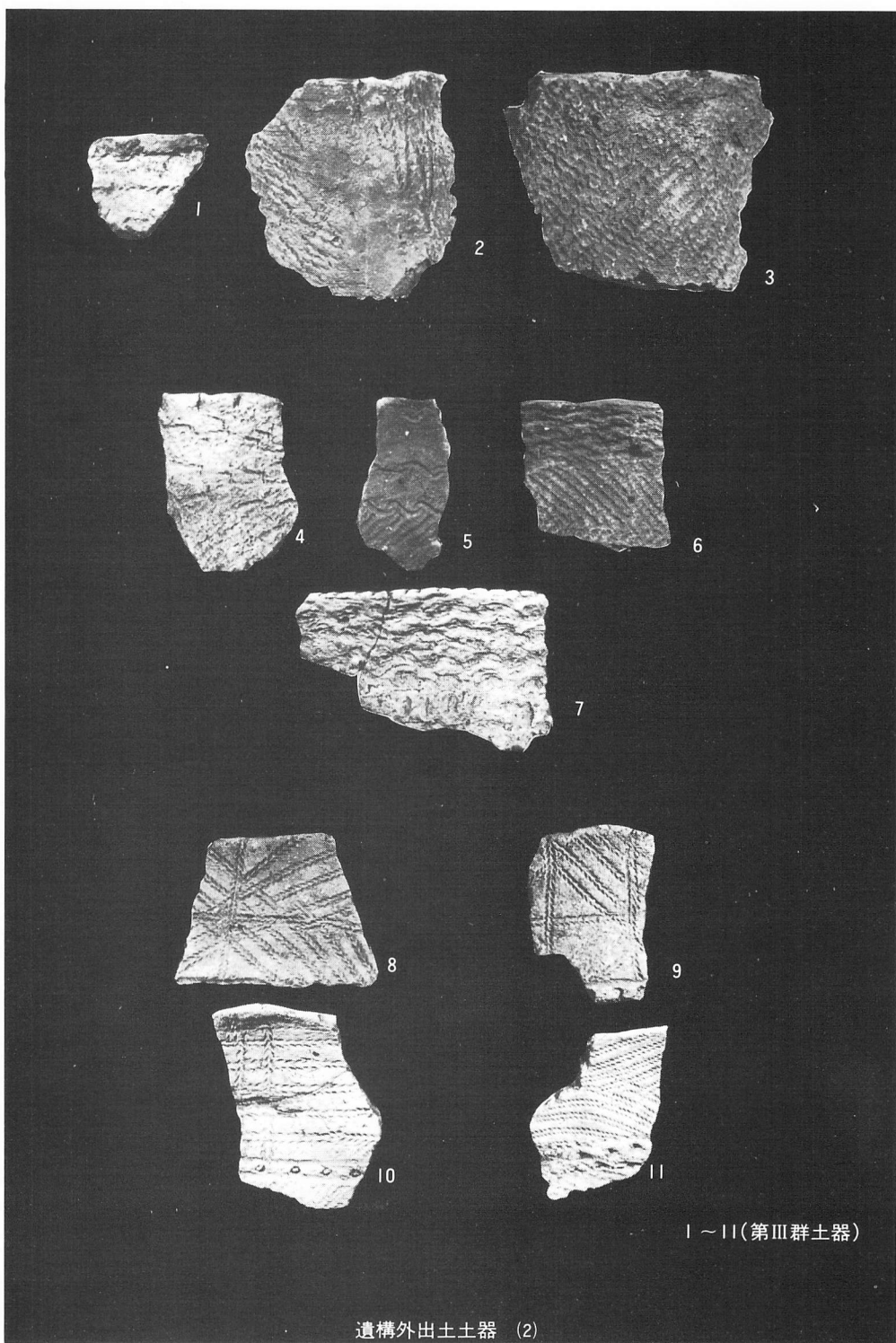
写真図版24



写真図版25



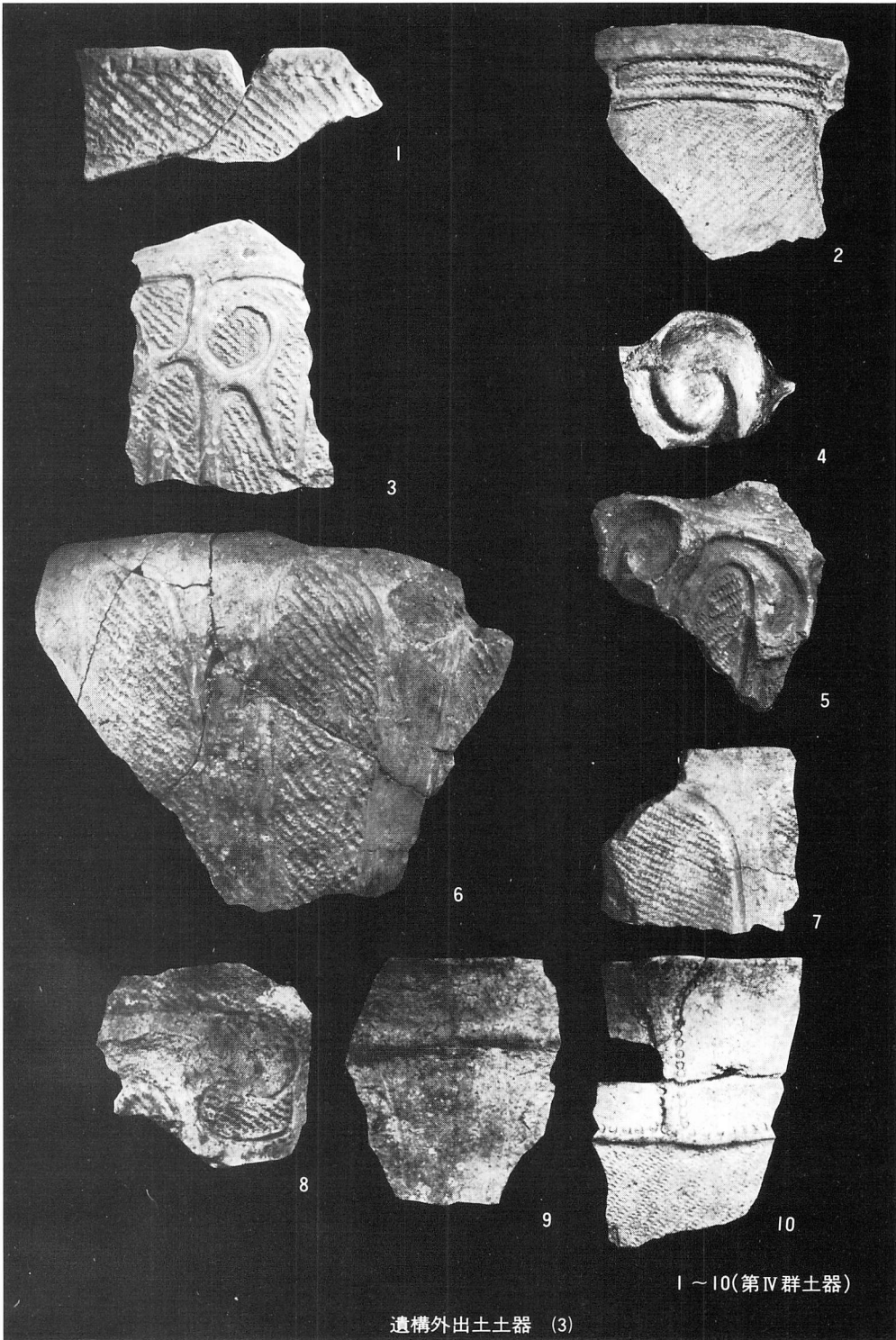
写真図版26



1~11(第III群土器)

遺構外出土土器 (2)

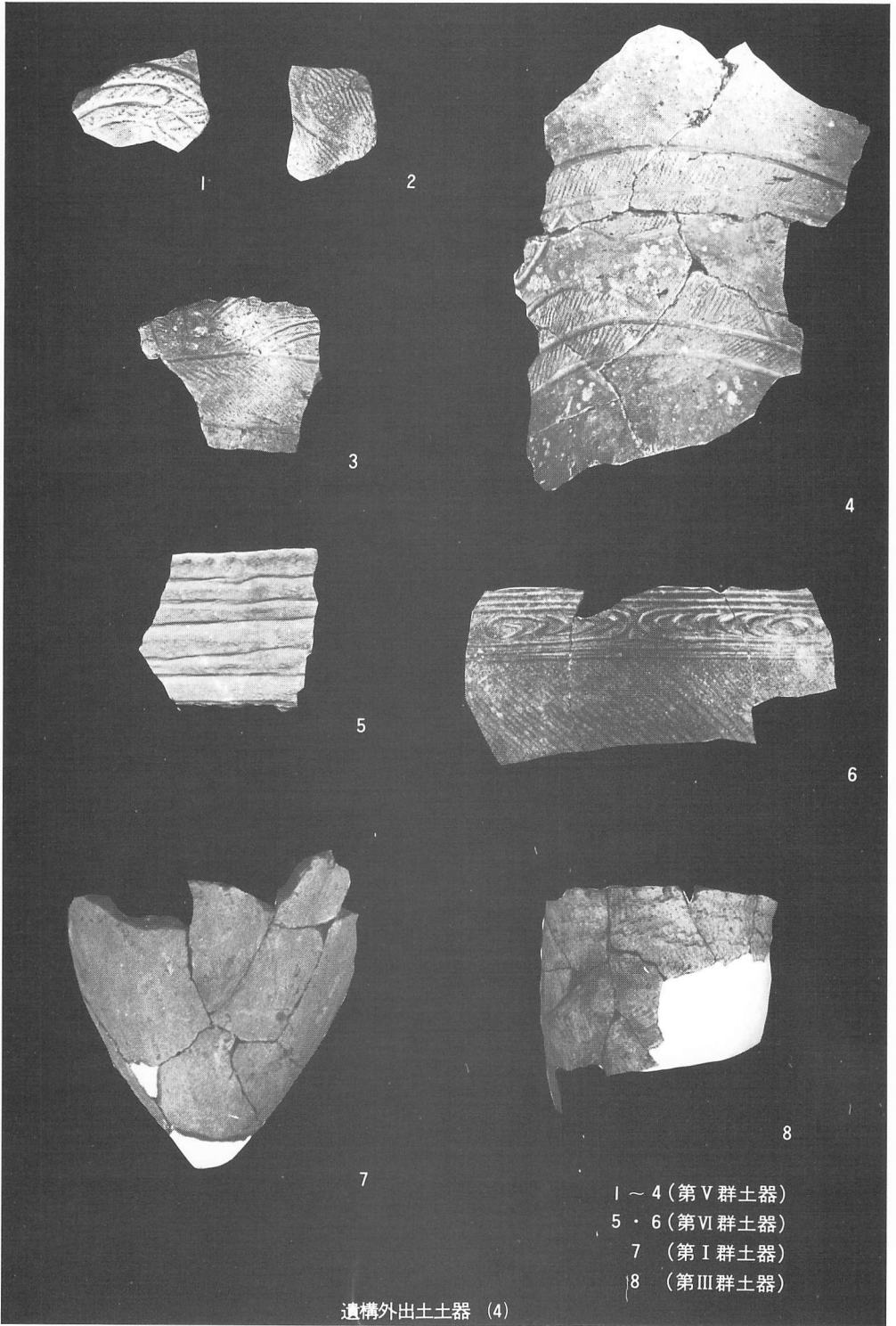
写真図版27



1~10(第IV群土器)

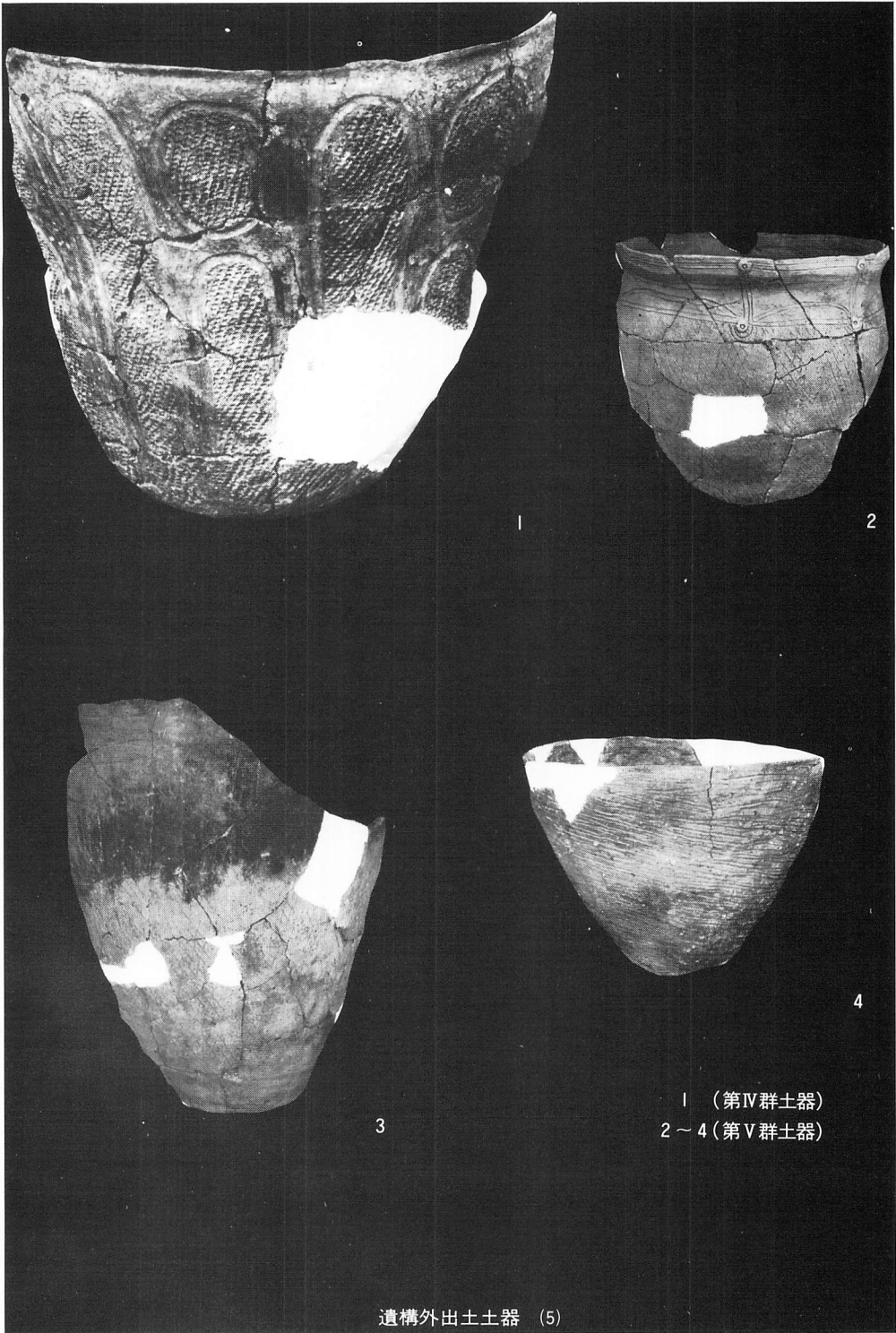
遺構外出土土器 (3)

写真図版28

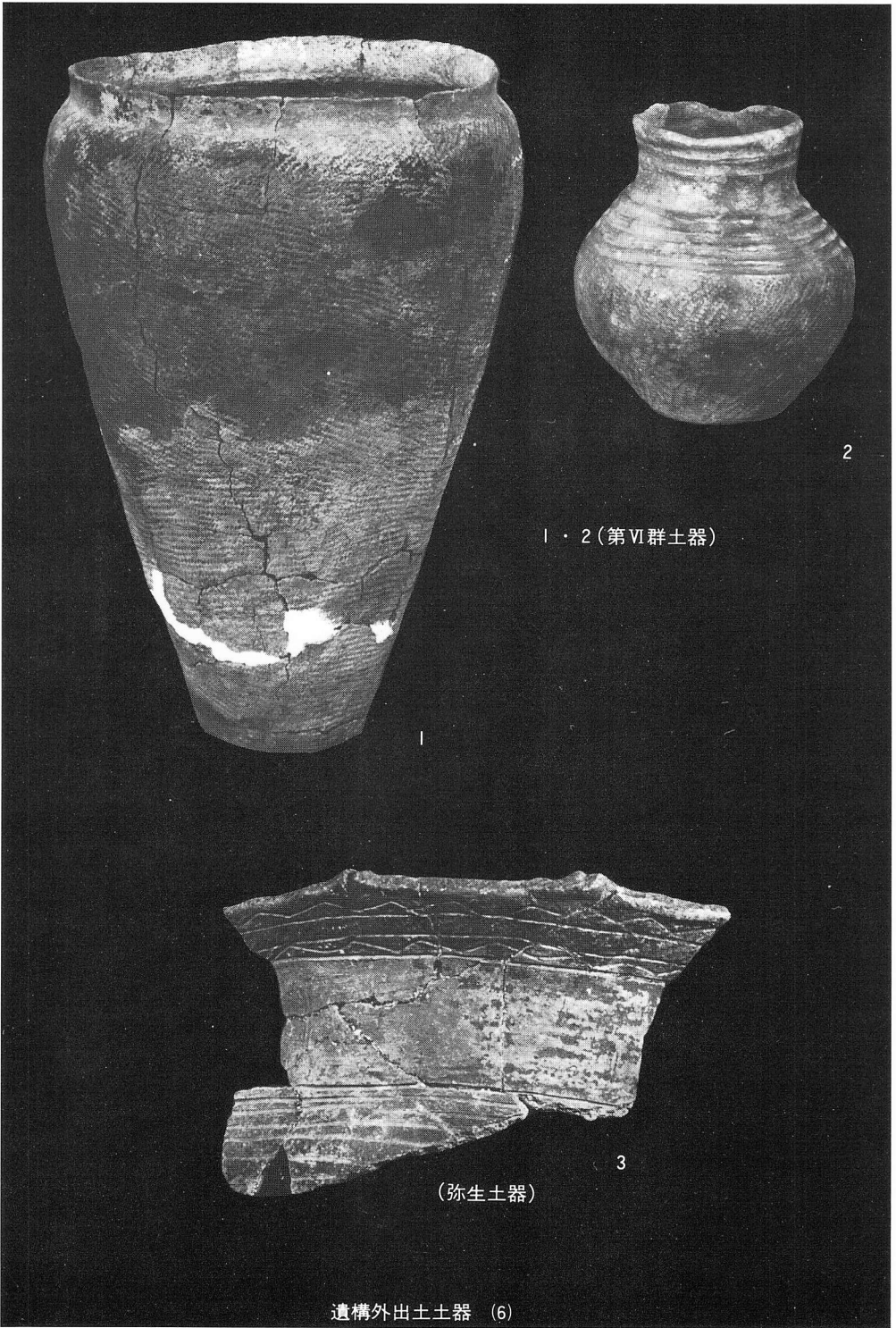


遺構外出土土器 (4)

写真図版29



写真図版30

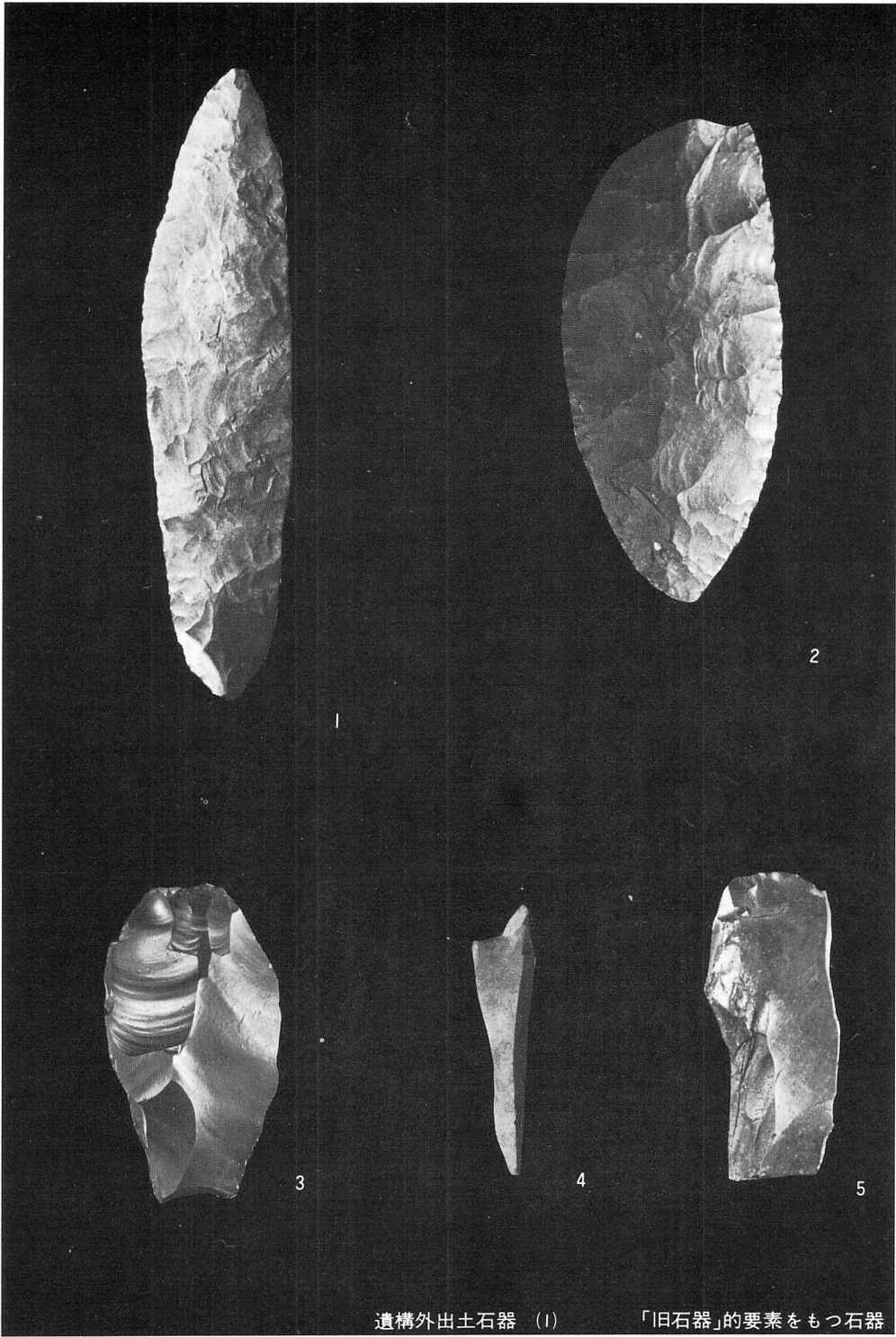


1・2 (第VI群土器)

(弥生土器)

遺構外出土土器 (6)

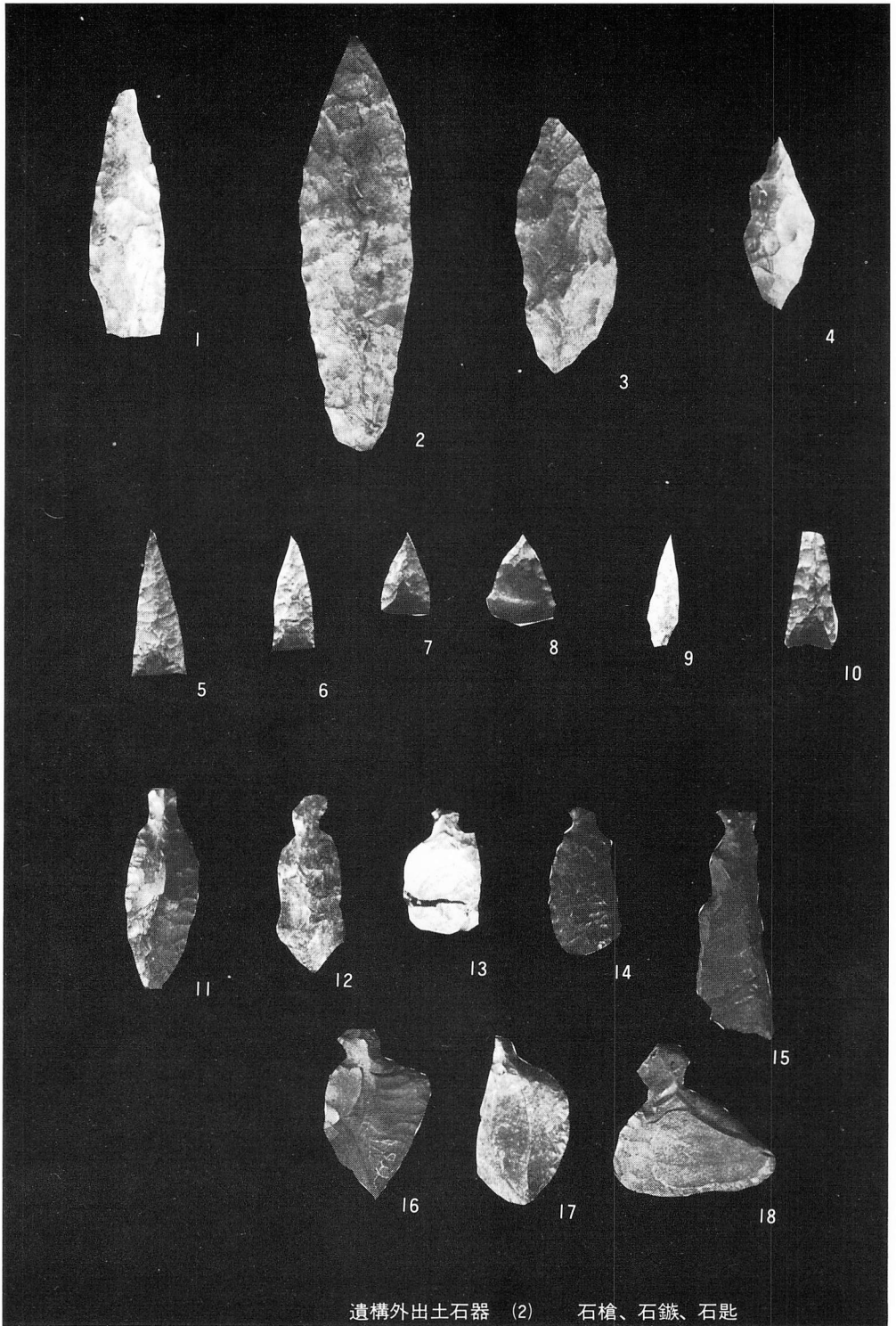
写真図版31



遺構外出土石器 (I)

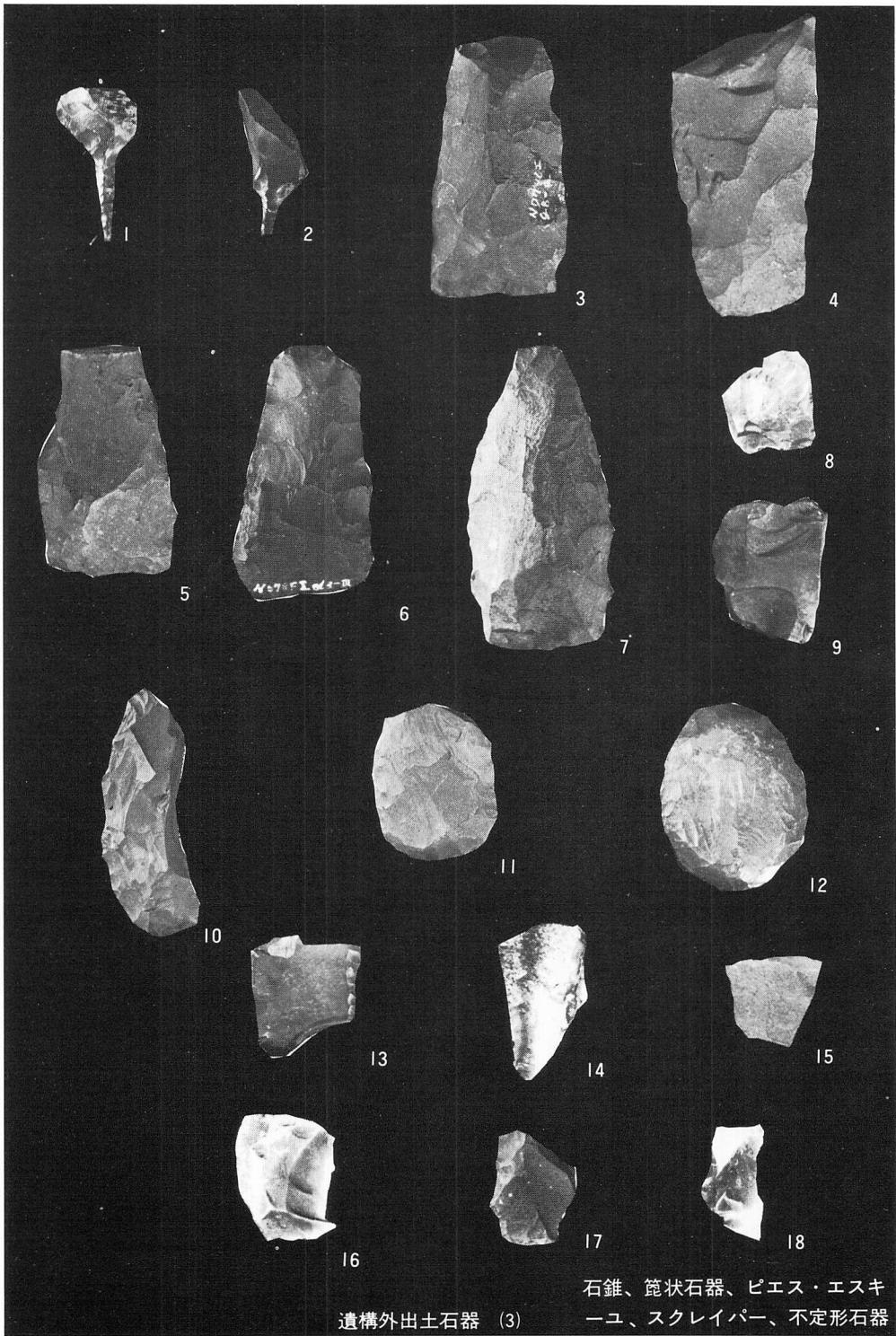
「旧石器」的要素をもつ石器

写真図版32

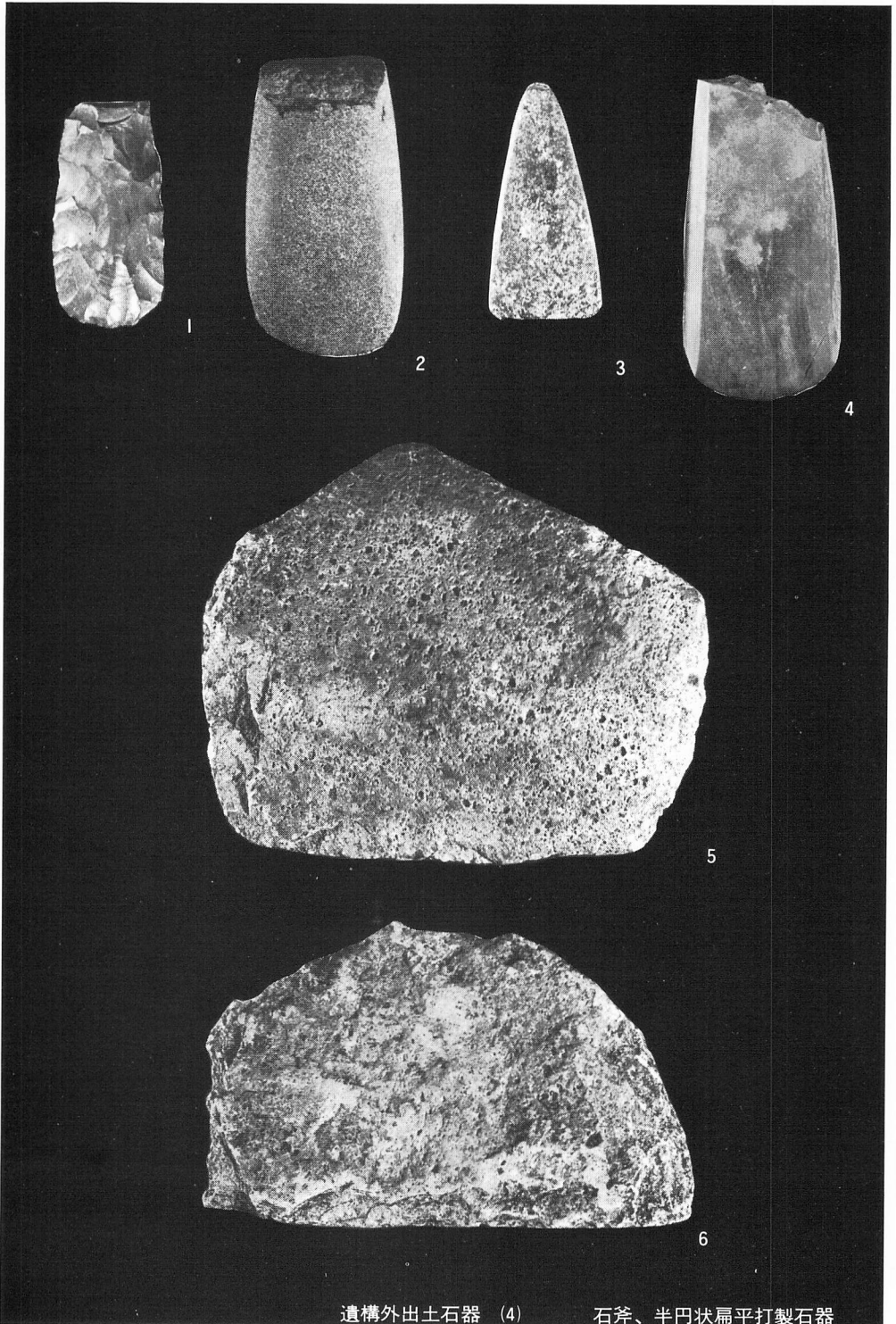


遺構外出土石器 (2) 石槍、石鏃、石匙

写真図版33



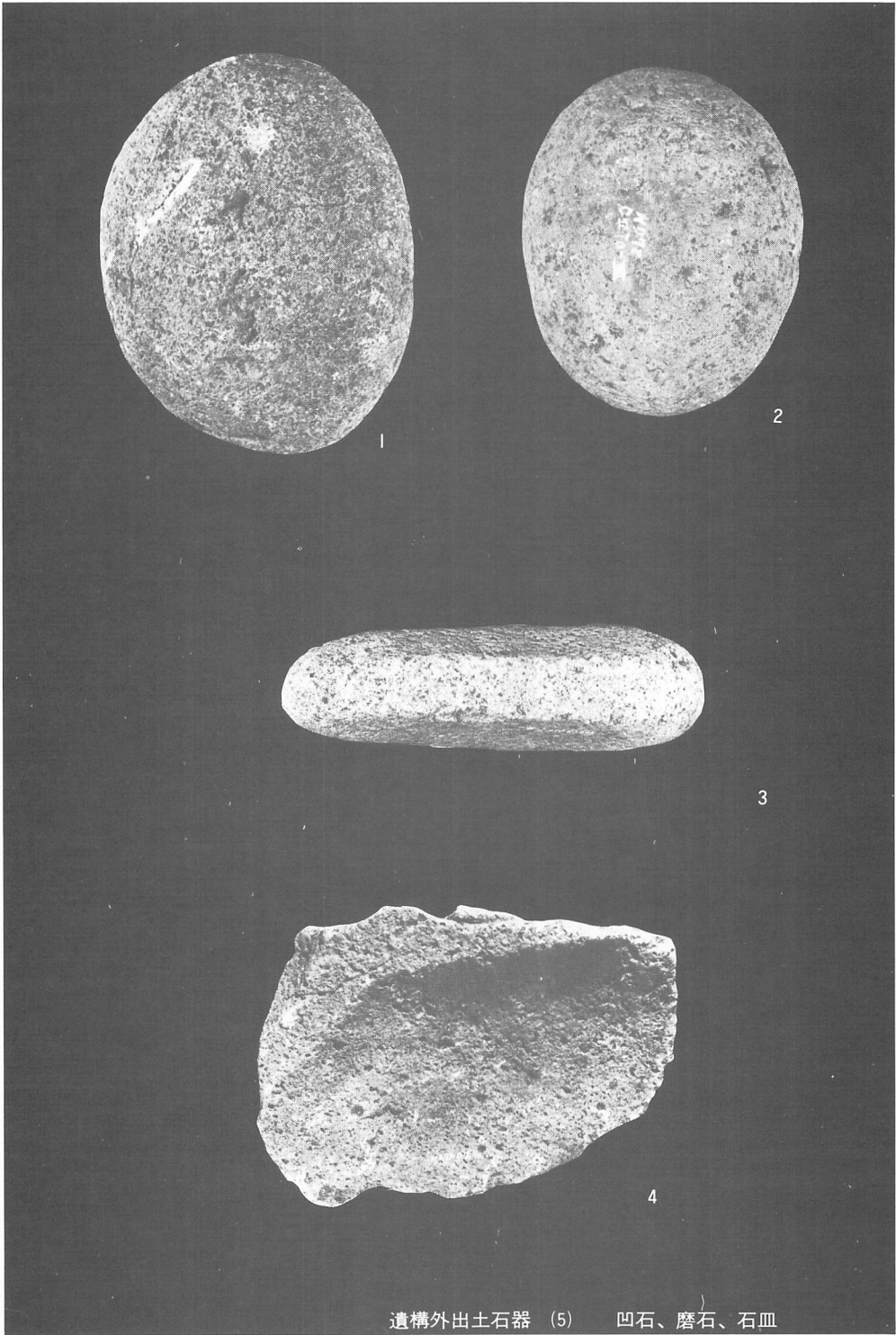
写真図版34



遺構外出土石器 (4)

石斧、半円状扁平打製石器

写真図版35



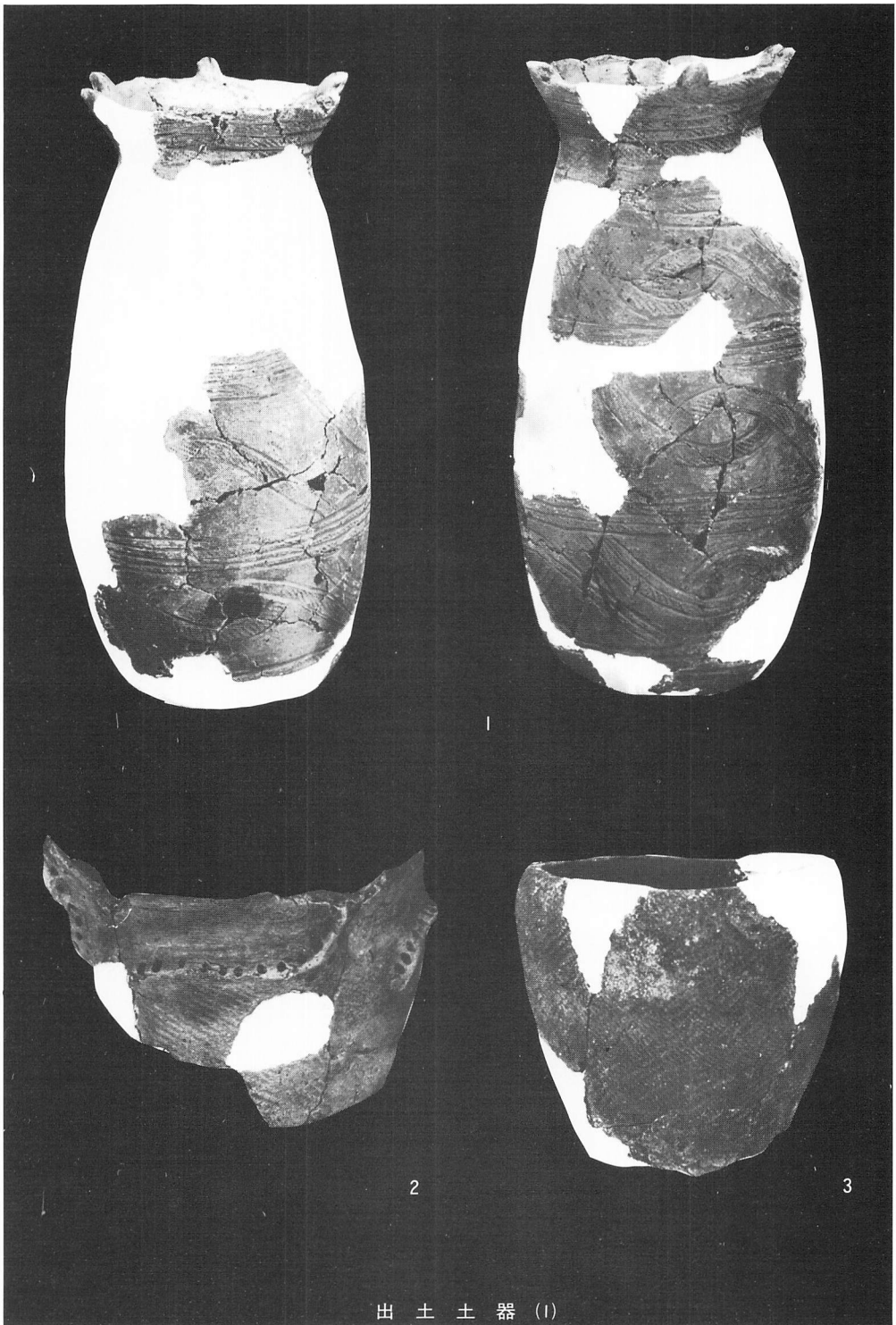
遺構外出土石器 (5) 凹石、磨石、石皿

写真図版36

崩石遺跡

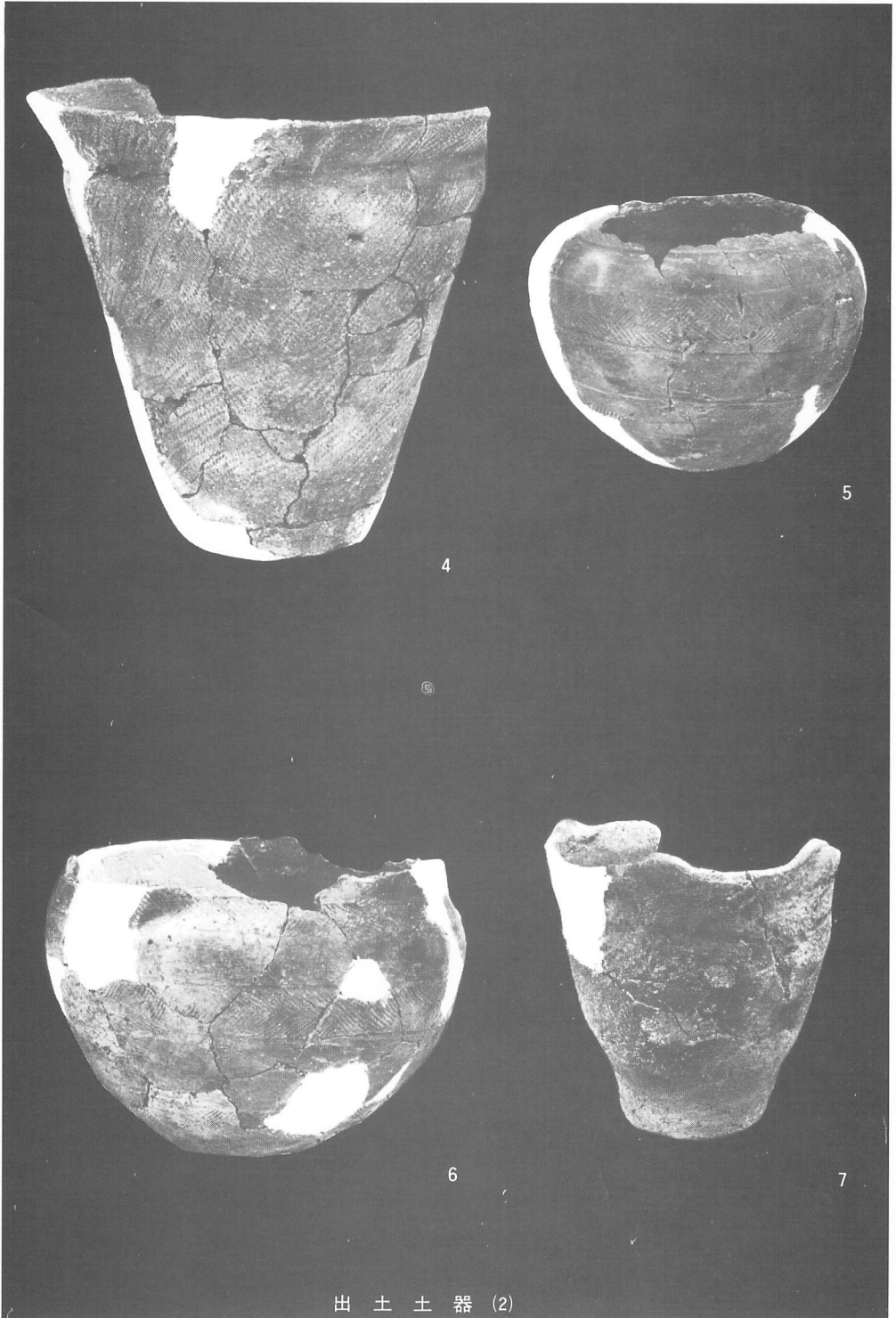


遺跡全景(完掘状況)
写真図版 1



出土土器 (I)

写真図版 2



出土土器 (2)

写真図版 3

岩手県埋文センター文化財報告書第11集

東北縦貫自動車道関連

野駄遺跡・寄木遺跡・崩石遺跡

昭和55年2月25日印刷

昭和55年2月29日発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市向中野字向中野39番1号

TEL (0196) 35-6622

印刷 川口印刷工業株式会社
